10)、土師器甕3(7・8)・内面黒色坏2片、個体分が出土した。金属器は紡錘車軸と思われる棒状鉄製品(12)、石製品は擦石(18)が出土した。10はミニチュアである。以上の出土量であるが覆土から出土した破片が多い。

時期　5～6段階頃と思われる。

33号住居址(図44、PL232)

ⅡA2層上面で検出された。53号掘立柱建物址、264号土坑に切られる。覆土は黒褐色土主体の自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、黒褐色土を埋め戻しその上面を床としてたたきしめ、平坦に構築している。南壁中央部に小ピットがあり、出入り口施設に係わるものと思われる。カマドは袖石の抜き取り痕と思われる小ピット2基が認められるたにすぎなかった。

遺物　出土土器の全体量はわずかで、須恵器坏7以上(2・3)・蓋1(1)・甕1・長頸瓶、土師器甕5(5)・小形甕1・内面黒色坏2(4)個体分が出土した。

時期　6～7段階頃と思われる。

34号住居址(図45、PL232・251・252・255)

ⅡA2層上面で検出された。35・36号住居址を切り、36号掘立柱建物址、31・34・41号溝址に切られる。覆土はⅡA2ブロックの混じる黒褐色土を主体としたもので人為埋没と思われる。床はカマド周辺に掘り方が認められるものの、本址中央より西半分では35号住居址覆土の表面をそのまま利用していた。全体にたたきしめによる堅緻で平坦な床面である。ピットは4基確認され、P1～4は柱穴と判断される。P1・2は覆土中に平石が検出され礎石か柱の補強に利用されたものと判断される。このほか南壁中央付近にテラス状の屋内への張り出しが認められたが、テラス面が特に堅緻というわけではなかった。カマドは箱形に

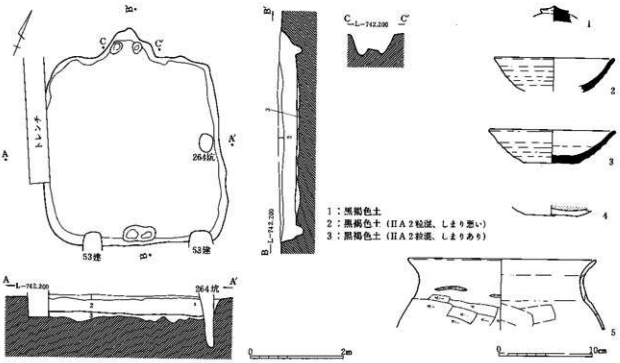


図44　33号住居址

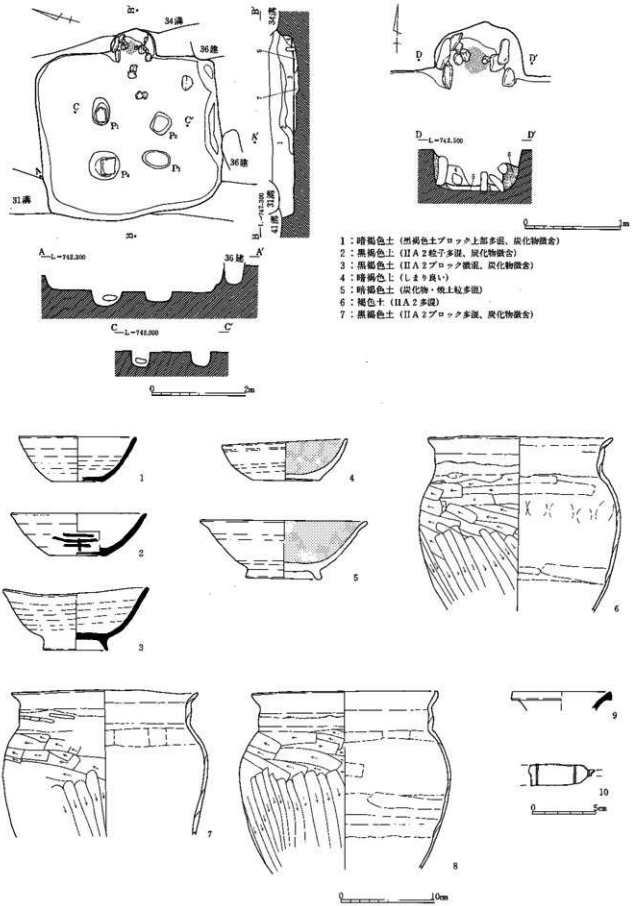

34溝
36建
31溝
A L=742.300
C L=742.000
D L=742.500
1：暗褐色土（黒褐色土ブロック上部多混、炭化物微含）
2：黒褐色土（ⅡＡ２粒子多混、炭化物微含）
3：黒褐色土（ⅡＡ２ブロック微混、炭化物微含）
4：暗褐色土（しまり良い）
5：暗褐色土（炭化物・焼土粒多混）
6：褐色土（ⅡＡ２多混）
7：黒褐色土（ⅡＡ２ブロック多混、炭化物微含）

図45　34号住居址

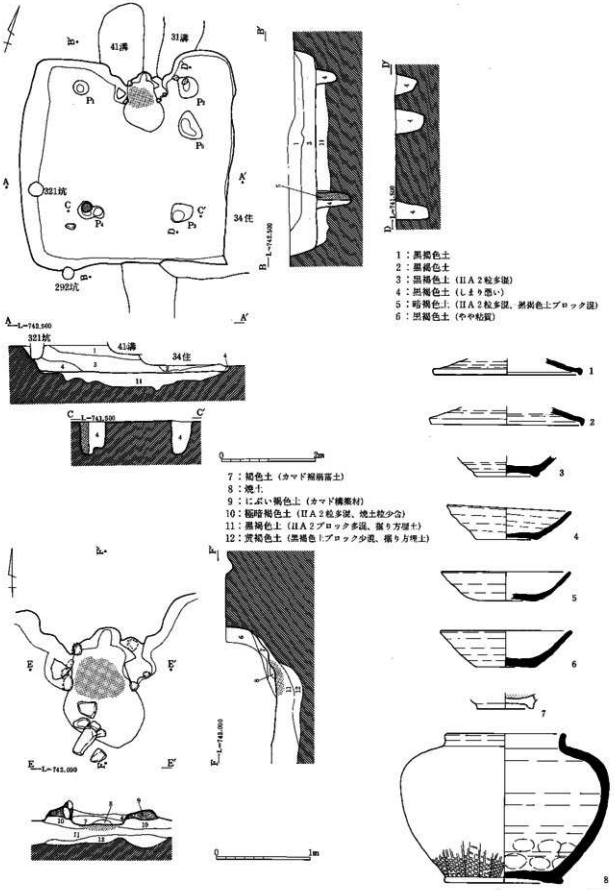

41溝
31溝
P1
321坑
34住
292坑
A L=743.500
A'
43溝
C L=743.500
C'
1：黒褐色土
2：黒褐色土
3：黒褐色土（ⅡＡ２粒多混）
4：黒褐色土（しまり悪い）
5：暗褐色土（ⅡＡ２粒多混、淡褐色土ブロック混）
6：黒褐色土（やや粘質）
7：褐色土（カマド崩壊部土）
8：焼土
9：にぶい褐色土（カマド構築材）
10：極暗褐色土（ⅡＡ２粒多混、焼土粒少含）
11：黒褐色土（ⅡＡ２ブロック多混、掘り方埋土）
12：黄褐色土（黒褐色土ブロック少混、掘り方埋土）
E L=743.000
E'
0 2m
0 1m
0 10cm

図46　35号住居址

張り出すもので、両側に礫を配する。支脚石が火床内に2本検出されている。

遺物　遺物の出土量は、須恵器坏8（1・2）・碗1（3）・甕1・壺瓶類小片2、土師器甕6以上（6～8）・小形甕1・内面黒色坏4（4）・碗1（5）・皿1、灰釉陶器長頸瓶1（9）個体分が出土した。金属器は板状の不明鉄製品（10）が出土している。その大半は南東隅から集中して出土し（2・3・4・5・6・8）、一部カマド内から出土した（8）。5はP1から出土した。2には「上」の墨書が書されるが判読できない。

時期　甕・坏の形態から8段階頃と思われる。

35号住居址（図46、PL.233・252）

ⅡA2層上面で検出された。34号住居址、31・41号溝址、292・321号土坑に切られ、36号住居址を切る。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、ⅡA2ブロックを混入する、黒褐色土を埋め戻しその上面を平坦にして床面を構築する。全体にさほど堅緻ではなかった。ピットは5基確認されP1～4が柱穴と判断される。P4は断面で柱痕が確認されている。カマドは煙道部を含めて、屋内に張り出す形をしているのが特徴である。袖は鈍い黄褐色土の構築材を用いて整形され、その芯材として礫を利用していることが確認された。

遺物　遺物の出土量はあまり多くない。須恵器高台坏1（3）・坏11以上（4～6）・蓋3（1・2）・甕小片1・中形甕小片1・広口甕小片1・短頸壺（8）、内面黒色坏1・碗皿不明（7）個体分が出土している。その大半は覆土中から出土し3のみ床面から出土している。8は生焼けで下方に叩きが施されて、その後に高台が付けられている。7号住居址・41号溝址と接合している。

時期　所属時期は不明瞭で34号住居址よりも古い。

36号住居址（図47、PL.233）

ⅡA2層上面で検出された。34・35号住居址、31・41号溝址、293号土坑に切られる。本址の残存は極め

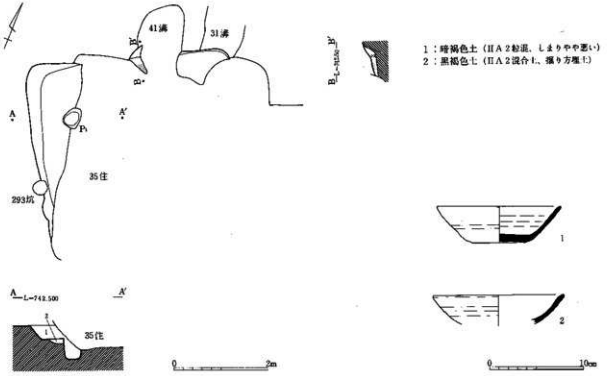


図47　36号住居址

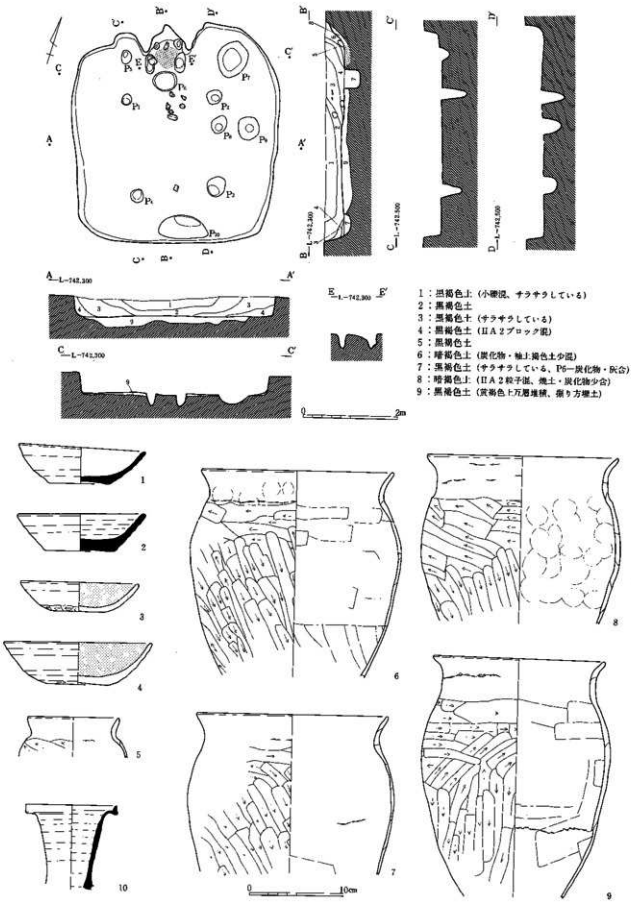

1：暗褐色土（小礫混、サラサラしている）
2：黒褐色土
3：黒褐色土（サラサラしている）
4：黒褐色土（ⅡＡ２ブロック混）
5：黒褐色土
6：暗褐色土（炭化物・地土褐色土少混）
7：黒褐色土（サラサラしている、P5一炭化物・灰合）
8：暗褐色土（ⅡＡ２粒子混、地土・炭化物少合）
9：黒褐色土（黄褐色土万層堆積、掘り方埋土）
0
2m
0
10cm

図48　40号住居址（1）

て悪い。覆土は残りが悪く埋没状況は把握できなかった。床は残存した部分から判断して、荒ぼり後、ⅡA2ブロックの混じる黒褐色土を埋め戻し床面を構築したものと思われる。カマドは、切り合う遺構の破壊をまぬがれた火床の一部が検出されている。

遺物　出土土器の全体量はわずかで、須恵器坏4（1・2）・甕小片1・長頸瓶小片1、土師器甕1個体分が覆土中から出土している。

時期　所産時期は不明瞭で35号住居址よりも古い。

37～39号住居址　欠番

40号住居址（図48・49、PL233・252）

ⅡA2層上面で検出された。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、ⅡA2ブロックと黒褐色土を交互に埋め戻し、その上面をⅡA2ブロック混じりの黒褐色土で最後に埋めたたきしめ平坦な床面を構築していた。ピットは10基確認された。P1～4は小規模であるがその深さ、位置から柱穴と判断される。P6は、灰、炭化物、土器片などがみられることからカマドに伴う施設と判断される。P10は出入り口に伴う施設の可能性があろう。カマドは袖が地山の掘り残しの状態で検出され、内側に対になった礫が、袖先には袖石抜き取り痕と思われる小ピットが2基確認されている。

遺物　遺物の出土量は、須恵器坏10（1・2）・蓋1片・中形甕1・長頸瓶8（10）、土師器甕6（6～9・11）・小形甕1（5）・ロクロ甕1（12）・小形ロクロ甕1・内面黒色坏2（3・4）・灰釉陶器ミニチュア長頸瓶1（13）個体分が出土した。鉄滓11gが、住居址のほぼ全体から出土している。9はカマド内、6・7はP1・P2間付近からつぶれて出土1・4はP7から2はP4から、13はP10西脇から出土している。3は猿投産で胎土は粗雑で灰白色を呈する。酸化焼成され、灰釉陶器の初現期の所産と思われる。

時期　6段階頃の所産と思われる。

41号住居址（図50、PL233・253）

ⅡA2層上面で検出された。西側は用地外にかかるためるため調査に至っていない。覆土は黒褐色土を主体としたし自然堆積と思われる。床はⅡA2ブロック主体の土を埋めた後、黒褐色土、ⅡA2ブロックを交互に埋め戻し、その上面を床面としていた。全体にたたかれ平坦で堅緻であった。ピットは4基確認され柱穴と判断される。柱穴のあった位置の掘り方が特にひろがるといった状況が認められなかったことから、床面構築後、柱の位置が決定されたと判断される。周溝はカマドを除いて全周していたと推測され幅約20cm、深さ10cm前後で検出された。カマドは鈍い褐色土を構築材として袖を整形し、芯材として拳大の礫を使用していたことが観察される。火床中央に支脚石の抜き取り痕、両袖内側に袖石の抜き取り痕が検出されている。

図49　40号住居址（2）

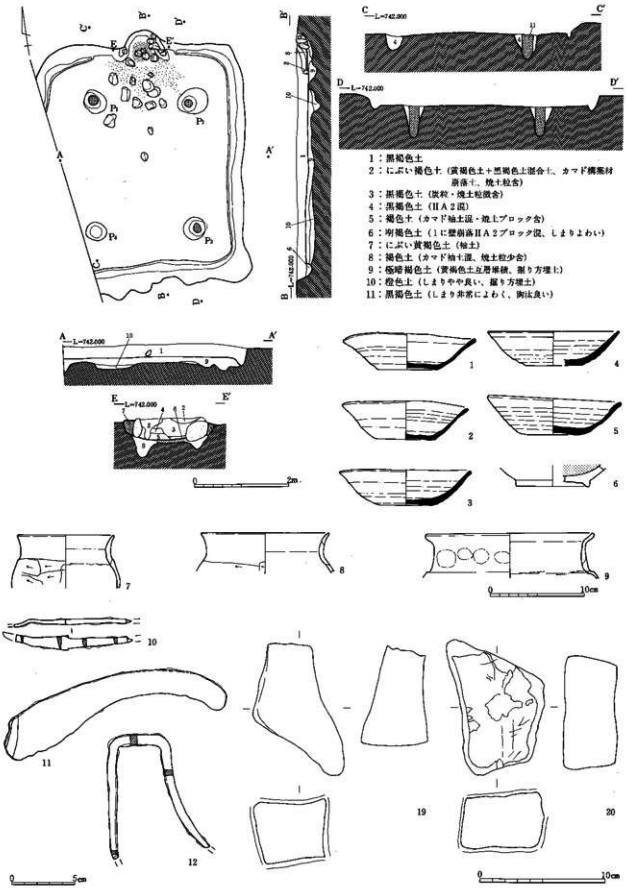

1：黒褐色土
2：にぶい褐色土（黄褐色土＋黒褐色土混合土、カマド構築材崩落土、焼土粒含）
3：黒褐色土（炭粒・焼土粒微含）
4：黒褐色土（ⅡＡ２層）
5：褐色土（カマド袖土混・焼土ブロック含）
6：明褐色土（１に壁崩落ⅡＡ２ブロック混、しまりよわい）
7：にぶい黄褐色土（袖土）
8：褐色土（カマド袖土混、焼土粒少含）
9：極暗褐色土（黄褐色土主用埋積、掘り方埋土）
10：橙色土（しまりやや良い、掘り方埋土）
11：黒褐色土（しまり非常によわく、胸床良い）
0　2m
0　10cm
0　5cm
0　10cm

図50　41号住居址

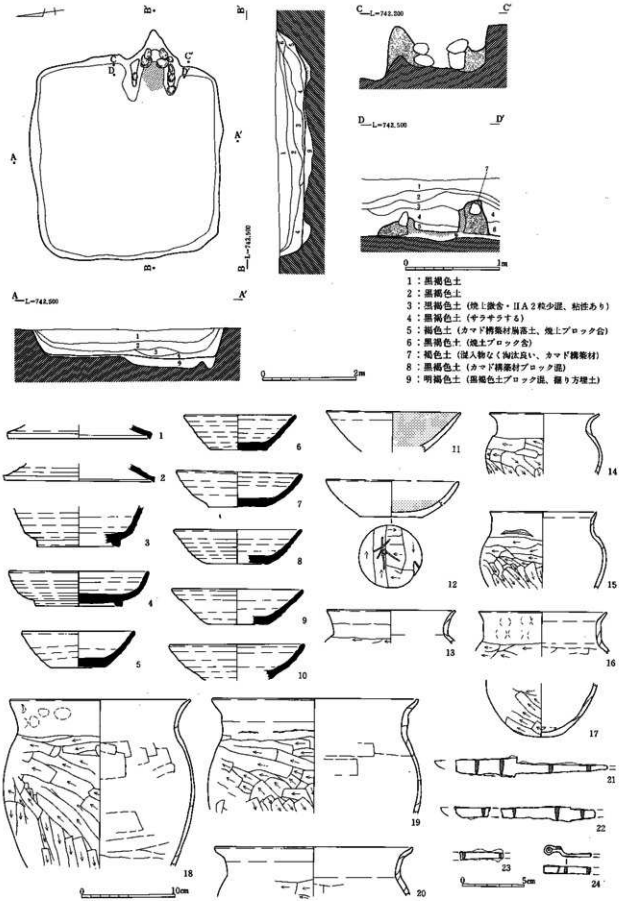

A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
m
m'
A L=742.500
B L=742.500
C L=742.500
D L=742.500
0 2m
0 5cm
0 10cm
1：黒褐色土
2：黒褐色土
3：黒褐色土（焼土微含・ⅡＡ２粒少混、粘性あり）
4：黒褐色土（サラサラする）
5：褐色土（カマド構築材崩落土、焼土ブロック台）
6：黒褐色土（焼土ブロック含）
7：褐色土（混入物なく沟状良い、カマド構築材）
8：黒褐色土（カマド構築材ブロック混）
9：明褐色土（黒褐色土ブロック混、裾り方埋土）

図51　42号住居址

遺物　遺物の出土量は、須恵器坏24（1～5）・甕1片・長頸瓶1・ミニチュア壺瓶類1、土師器甕2（9）・小形甕3（7・8）・内面黒色坏1・碗1（6）・坏碗不明1個体分が出土した。金属器は刀子（10）・鎌（11）・鎹（12）・鉄滓30g。石製品は砥石2（19・20）が出土している。鉄器・砥石は床直から出土し、坏類は須恵器が大半である。

時期　6段階頃の所産と思われる。

42号住居址（図51、PL233・252・253）

ⅡA2層上面で検出された。533～536号土坑を切る。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、黒褐色土の混じるⅡA2ブロックが埋め戻され、その上面をたたき床面を構築していた。柱穴は存在せず、遺構の周りも丹念に検出したが認められなかった。カマドは安山岩礫を配し、構築材の暗褐色土を貼り、袖を整形していた。左袖の大半は破壊されていた。

遺物　遺物の出土量は、須恵器高台坏5（3・4）・坏57以上（5～10）・蓋12（1・2）・中形甕2片・長頸瓶2・ミニチュア壺瓶類1、土師器甕9（18～20）・小形甕5（13～17）・内面黒色坏8（11・12）個体分が出土した。金属器は刀子3（21～23）・毛抜き状鉄製品1（24）が出土した。12には外底部に「本」が刻書されている。

時期　本址は5～6段階頃の所産と思われる。

43号住居址（図52、PL233・253）

ⅡA2層上面で検出された。現代の用水路により中央部を帯状に攪乱される。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床面は軟弱で、若干の掘り方が認められたが、掘り方埋土は攪乱されたⅡA2ブロック主体で上面を特にたたいた痕跡は認められなかった。ピットが1基確認されたが用途不明である。カマドは検出されなかった。

遺物　遺物の出土は短刀1（1）のみ出土した。1は直刀で平造りされ、側面には幅広い棒樋がみられる。

時期　時期は不明である。

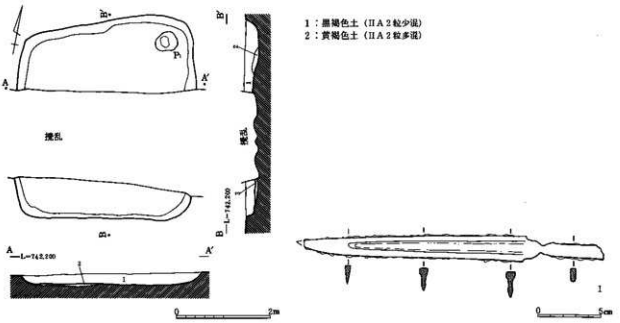


図52　43号住居址

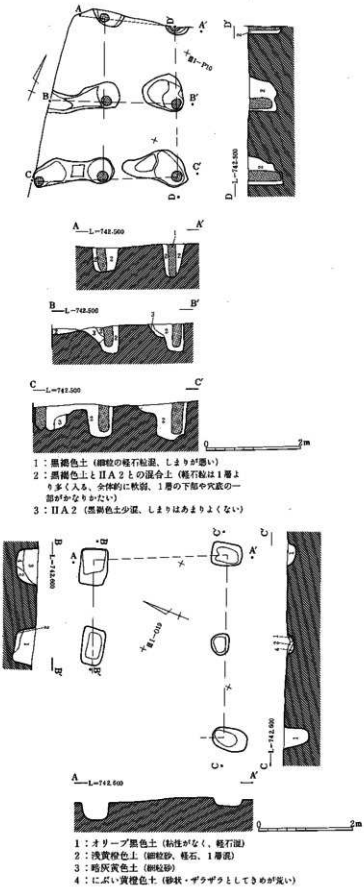


図53　１・２号掘立柱建物址

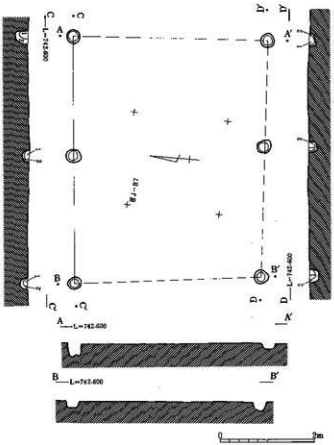
イ　掘立柱建物址

１号掘立柱建物址（図53、PL234）

ⅡＡ１層で検出された。西側が用地外にかかるため全容は確認されなかった。推定で、平面形は２間×２間の溝持ち、南北棟、総柱式であったと思われる。現状で規模は桁行3.2ｍ、梁行2.9ｍで、面積9.88ｍ²をはかる。主軸はＮ－23°－Ｗを指す。柱間は東西列0.9～1.6ｍ、南北列1.5～1.6ｍをはかる。３列の溝が並んでいたと思れる。深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18ｃｍほどで、掘り方底面まで届くものは少ない。

２号掘立柱建物址（図53、PL234）

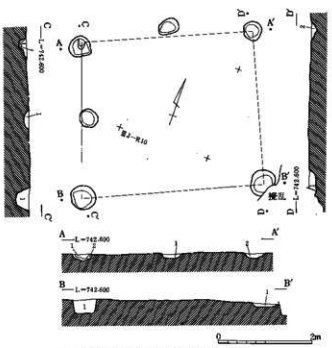
ⅡＡ２層で検出された。平面形は１間×２間の東西棟、側柱式である。規模は桁行3.9ｍ、梁行2.7ｍで、面積10.63ｍ²をはかる。主軸はＥ－24°－Ｎを指す。柱間は東西列2.7ｍ、南北列1.9～2.0ｍをは深さは不揃いである。



1：黒褐色土（粘性がない）
2：にぶい黄橙土（細粒砂、粘性がない、種石をわずかに含む）

3号掘立柱建物址（図54、PL234）

ⅡA2層で検出された。平面形は1間×2間の東西棟、側柱式である。規模は桁行5.3m、梁行4.0mで、面積20.61m²をはかる。主軸はE−4°−Nを指す。柱間は東西列3.9m、南北列2.3〜2.8mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、深さはほぼ一定である。

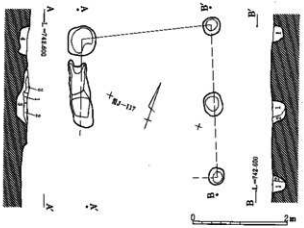


1：黒褐色土（種石などの混入物はめだたない）
2：明褐色土（ブロック状に黒褐色土混）

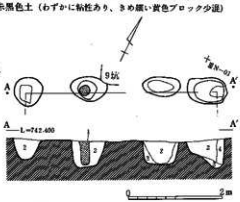
図54　3・4号掘立柱建物址

4号掘立柱建物址（図54、PL234）

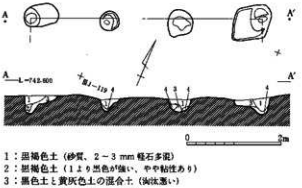
ⅡA2層で検出された。平面形は2間×2間の東西棟、側柱式と判断される。規模は桁行3.8m、梁行3.3mで、面積12.20m²をはかる。主軸はE−15°−Nを指す。柱間は東西列1.8〜1.9m、南北列1.6〜1.7mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。深さはほぼ一定である。



1：黒褐色土（やや粘質）
2：明黄褐色土（ⅡＡ２と１層の黒褐色土混）
3：暗黄灰色土（２層が一部ブロック状、しまりない）
4：赤黒色土（わずかに粘性あり、きめ細い黄色ブロック少混）



1：黒褐色土（粘性はない、軽石混）
2：黒色土（粘性はない、１～５ mm 軽石混）
3：浅黄橙色土（細粒砂）
4：明褐色土（細粒砂、地山と思われる白っぽい土を混入）



1：黒褐色土（砂質、２～３ mm 軽石多混）
2：黒褐色土（１より黒色が強い、やや粘性あり）
3：黒色土と黄灰色土の混合土（強粘質）
4：黄灰色土（ⅡＡ２に比べ軟質）

図55　５・６・７号掘立柱建物址

５号掘立柱建物址（図55、PL234）

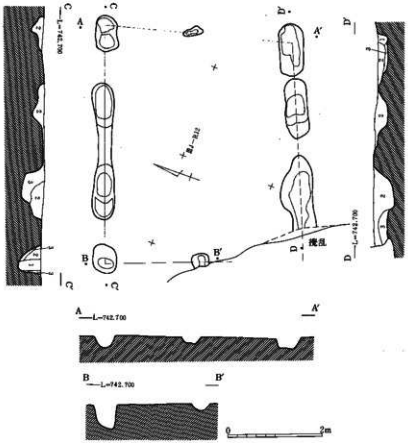
ⅡＡ２層で検出された。平面形は１間×２間の溝持ち、南北棟、側柱式と推察される。規模は桁行3.2ｍ、梁行2.8ｍで、面積8.71ｍ²をはかる。主軸はＥ―22°―Ｎを指す。柱間は東西列1.5～1.7ｍ、南北列2.7～2.8ｍをはかる。柱穴は円形を基本とし、溝は、本来なら側柱式の柱穴とつながっていたと思われる。深さはほぼ一定である。

６号掘立柱建物址（図55、PL234）

ⅡＡ２層で検出された。南側が「田ぎり地形」により破壊されたと推察される。周囲の掘立柱建物址の状況から、平面形は２間×３間の東西棟、側柱式であったことが想定される。推定で主軸はＷ―25°―Ｓを指す。柱間は東西列1.2～1.6ｍをはかる。柱穴は楕円不整形を呈す。深さはほぼ一定である。

７号掘立柱建物址（図55、PL234）

ⅡＡ２層で検出された。南側が「田ぎり地形」により破壊されたと推察される。周囲の掘立柱建物址の状況から、平面形は２間×３間の東西棟、側柱式であったことが想定される。推定で主軸はＥ―21°―Ｎを指す。柱間は東西列1.6～1.7ｍをはかる。柱穴は不整形を呈し、深さはほぼ一定である。

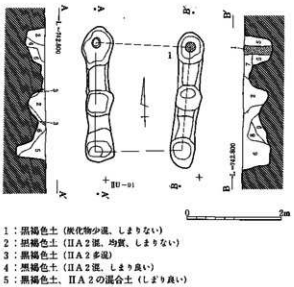


1：黒褐色土（ⅡＡ２がわずか混一混、しまりが悪く全体に均一な土、柱痕？）
2：黒褐色土とⅡＡ２のブロック状混合土（ⅡＡ２黄褐色土系、赤褐色土系が主、軽石混）
3：明褐色土（黒褐色土ブロック少混、白色系ⅡＡ２が薄す）

8号掘立柱建物址（図56、PL234）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は２間×３間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行5.0ｍ、梁行3.9ｍで、面積19.61ｍ²をはかる。主軸はＥ−20°−Ｎを指す。柱間は東西列1.9〜2.2ｍ、南北列1.5〜1.8ｍをはかる。溝は断面から、両列ともにつながっていた可能性が高い。深さは東に向かうにつれ浅くなる。

遺物　出土土器は、須恵器甕１片が出土した。



1：黒褐色土（炭化物少混、しまりない）
2：紫褐色土（ⅡＡ２微、均質、しまりない）
3：黒褐色土（ⅡＡ２多混）
4：黒褐色土（ⅡＡ２微、しまり良い）
5：黒褐色土、ⅡＡ２の混合土（しまり良い）
6：黒色土（ⅡＡ２混）
7：黒褐色土（ⅡＡ２多混）
8：黄褐色土（黒色土ブロック状混）
9：白褐色土（黒色土ブロック状混）

9号掘立柱建物址（図56、PL235）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は１間×２間の溝持ち、南北棟、側柱式である。規模は桁行2.3ｍ、梁行1.8ｍで、面積4.49ｍ²をはかる。主軸はＮ−2°−Ｅを指す。柱間は東西列1.8〜2.0ｍ、南北列2.3〜2.4ｍをはかる。溝の深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18ｃｍほどで、掘り方底面まで届く。

遺物　出土土器は、須恵器坏１(1)が出土している。

図56　8・9号掘立柱建物址

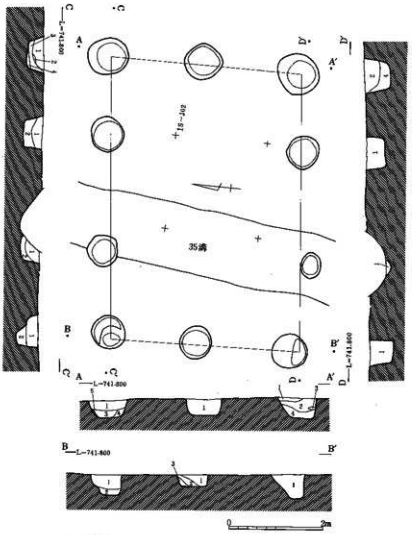
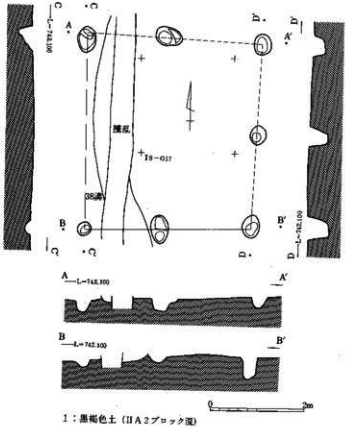


図57　10号掘立柱建物址

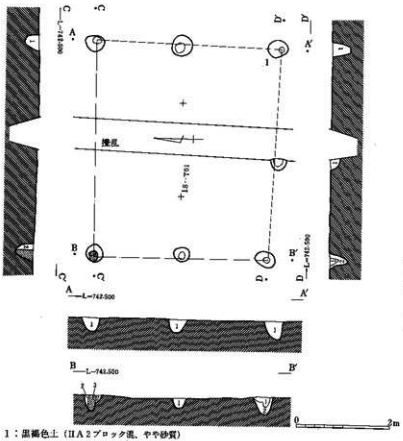
10号掘立柱建物址（図57、PL235）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は２間×３間の東西棟、側柱式である。規模は桁行6.1ｍ、梁行4.1ｍで、面積24.34ｍ²をはかる。主軸はＥ―4'―Ｎを指す。柱間は東西列1.7～2.5ｍ、南北列1.9～2.2ｍをはかる。柱穴は円形を基本とし、深さはほぼ一定である。



11号掘立柱建物址（図58、PL235）

ⅡA２層で検出された。平面形は２間×２間の南北棟、側柱式である。規模は桁行4.2m、梁行3.6mで、面積14.78m²をはかる。主軸はN—1°—Eを指す。柱間は東西列1.6～2.0m、南北列3.9～4.2mをはかる。柱穴は楕円形を基本とし、深さは不揃いであった。



12号掘立柱建物址（図58、PL235）

ⅡA２層で検出された。中央部で撹乱を受ける。平面形は２間×２間の東西棟、側柱式であったと推察される。規模は桁行4.6m、梁行3.7mで、面積17.48m²をはかる。主軸はE—1°—Sを指す。柱間は東西列2.2～4.4.m、南北列1.8～2.2mをはかる。柱穴は円形を基本とし、掘り方は、四隅が深い。確認された柱痕は径16cmほどである。

遺物　出土土器は、須恵器坏５片・土師器甕４片・内面黒色坏１（１）個体分が出土した。

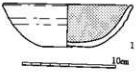


図58　11・12号掘立柱建物址

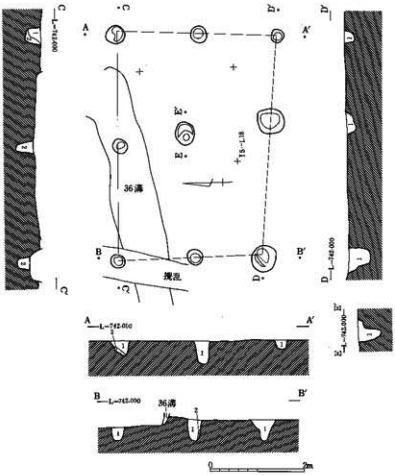
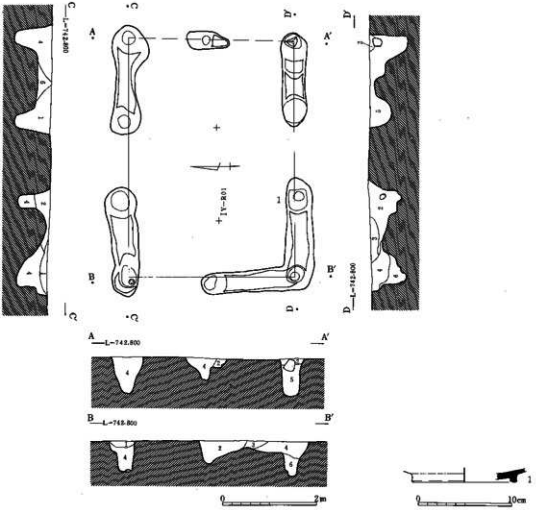


図59　13号掘立柱建物址

13号掘立柱建物址（図59、PL235）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は２間×２間の東西棟、総柱式である。規模は桁行4.9ｍ、梁行3.1ｍで、面積15.33 m²をはかる。主軸はＥ－２°－Ｓを指す。柱間は東西列1.9～2.8ｍ、南北列1.4～1.6ｍをはかる。柱穴は円形を基本とし、規模、深さともに不揃いである。



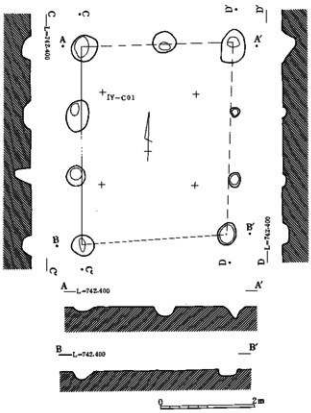
1：黒褐色土（ⅡＡ２粒混、砂質、しまりない）
2：黒褐色土（ⅡＡ２粒混、砂質、粘質）
3：暗褐色土（ⅡＡ２混）
4：暗褐色土（砂質、軽石粒多混）
5：黒褐色土（砂質、暗褐色土、ⅡＡ２混）
6：黄褐色土（しまりない）

図60　14号掘立柱建物址

14号掘立柱建物址（図60、PL235）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は２間×３間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行5.2ｍ、梁行3.6ｍで、面積18.07ｍ²をはかる。主軸はＥ－１°－Ｓを指す。柱間は東西列1.7～1.8ｍ、南北列1.6～1.8ｍをはかる。溝は南西部でＬ字状を呈す。断面形は平坦なものと、立ち上がるものの２種が認められる。深さはほぼ一定である。

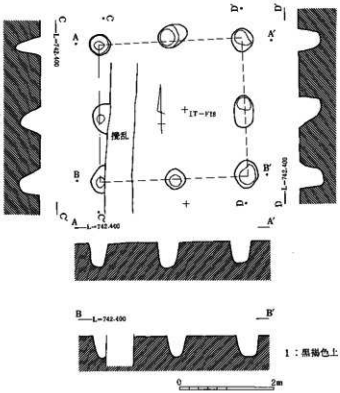
遺物　出土土器は、須恵器高台坏１（1）が出土している。



1：黒褐色土（粘りがよわくサラサラとしている、ⅡA2粒子1%、軽石粒1%混）

15号掘立柱建物址（図61、PL235）

ⅡA2層で検出された。北面と対を成す柱穴が認められないものの、平面形は2間×3間の南北棟、側柱式が想定される。規模は桁行4.1m、梁行3.3mで、面積13.60m²をはかる。主軸はN－1°－Wを指す。柱間は東西列1.2～1.5m、南北列1.5～3.3mをはかる。柱穴は円形を基本とし、規模、深さともに不揃いである。

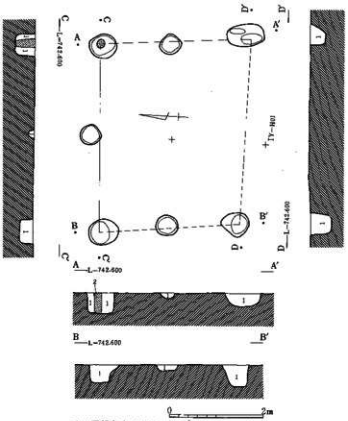


1：黒褐色土（ⅡA2粒子3%混、軽石粒1%混、サラサラしてしまう思い）

16号掘立柱建物址（図61、PL236）

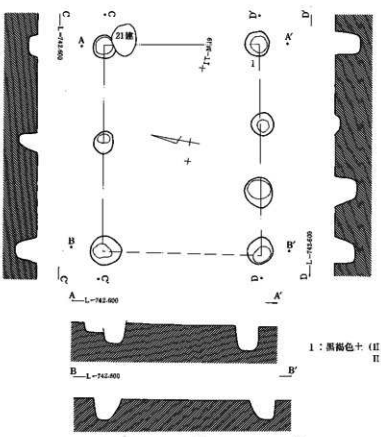
ⅡA2層で検出された。平面形は2間×2間の南北棟、側柱式である。規模は桁行3.1m、梁行3.0mで、面積9.18m²をはかる。主軸はN－0°－Eを指す。柱間は東西列1.3～1.6m、南北列1.5～1.6mをはかる。柱穴は円形を基本とし、歪んだものもある。深さはほぼ一定である。

図61　15・16号掘立柱建物址



17号掘立柱建物址（図62、PL236）

ⅡＡ２層で検出された。北面と対を成す柱穴が認められないものの、平面形は２間×２間の東西棟、側柱式が想定される。規模は桁行4.0ｍ、梁行3.1ｍで、面積12.18ｍ²をはかる。主軸はＥ－３°－Ｎを指す。柱間は東西列2.0～4.0ｍ、南北列1.5～1.6ｍをはかる。柱穴は円形を基本とし、歪んだものもある。深さは四隅間の柱穴が浅いが、ほぼ一定である。



18号掘立柱建物址（図62、PL236）

ⅡＡ２層で検出された。南面と対を成す柱穴が認められず不規則であるが、平面形は１間×２間の東西棟、側柱式と判断される。規模は桁行4.4ｍ、梁行3.3ｍで、面積14.52ｍ²をはかる。主軸はＥ－９°－Ｎを指す。柱間は東西列1.3～2.4ｍ、南北列3.3ｍをはかる。柱穴は円形を基本とし、深さはほぼ一定である。

遺物　出土土器は、須恵器高台坏１(1)・内面黒色坏1片が出土した。

図62　17・18号掘立柱建物址

19号掘立柱建物址（図63、PL236）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は２間×３間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行4.8ｍ、梁行3.7ｍで、面積18.48ｍ²をはかる。主軸はＥ－２°－Ｎを指す。柱間は東西列1.6～2.1ｍ、南北列1.4～1.7ｍをはかる。溝は５列あり、東西方向の溝は断面に段を持たない、平坦な底を呈す。深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径24ｃｍほどで、掘り方は底面より沈む。

遺物　出土土器は、須恵器坏６（１・２）・長頸瓶１、土師器甕１個体分が出土している。

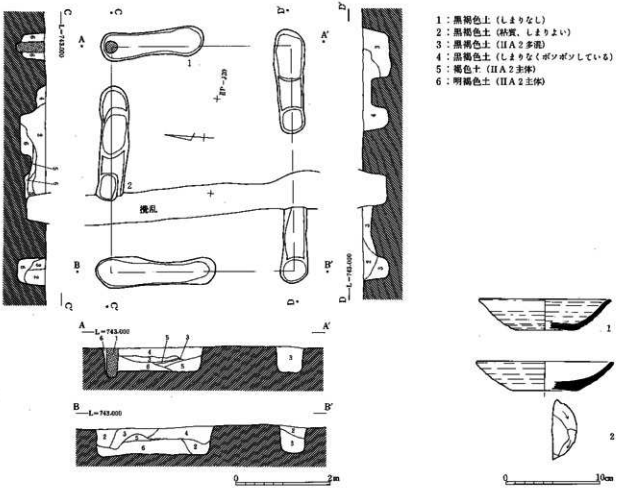
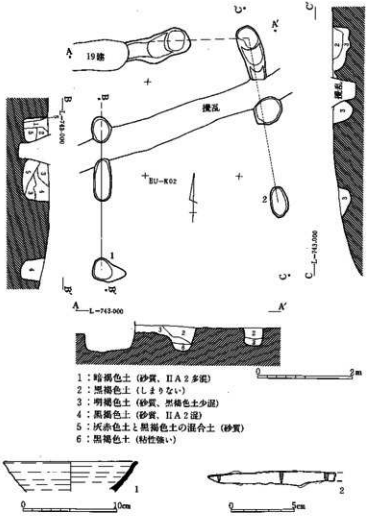


図63　19号掘立柱建物址



20号掘立柱建物址（図64、PL236）

ⅡA２層で検出された。19号掘立柱建物址に切られる。平面形は２間×３間の溝持ち、南北棟、側柱式であったと思われる。規模は桁行4.6m、梁行3.2m で、面積16.35m²をはかる。主軸はN－3°－Wを指す。柱間は東西列1.1～1.8m、南北列1.5～3.9mをはかる。実際には南面側にも溝があったと推測され、主軸が異なるものの19号掘立柱建物址に類似した形状を示していたと推察される。

遺物　出土土器は、須恵器坏10(1)、土師器甕６・内面黒色坏１片が出土し、金属器は刀子1(2)が出土した。

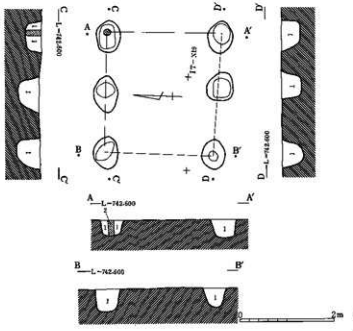
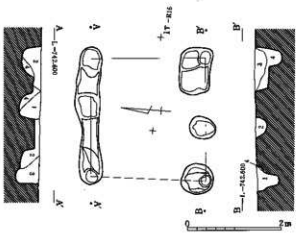


図64　20・21号掘立柱建物址

21号掘立柱建物址（図64、PL236）

ⅡA２層で検出された。平面形は１間×２間の東西棟、側柱式である。規模は桁行2.6m、梁行2.3mで、面積6.03m²をはかる。主軸はE－1°－Sを指す。柱間は東西列2.3～2.4m、南北列1.2～1.4mをはかる。柱穴は円形を基本とし、深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径15cmほどである。

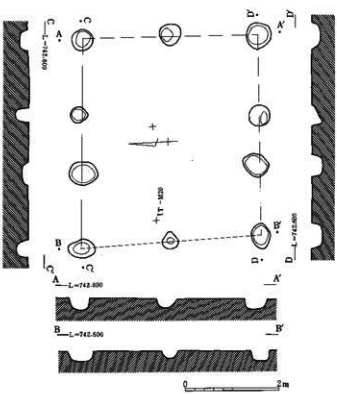
遺物　出土土器は、土師器甕１片が出土した。



1：黒褐色土（砂質、掘法よい）
2：明褐色土（黒褐色土少混）
3：黒褐色土（粘質、黒色土・ⅡＡ２混）
4：明褐色土（黒褐色土少混）

22号掘立柱建物址（図65、PL236）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は１間×２間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行2.6ｍ、梁行2.4ｍで、面積6.19ｍ²をはかる。主軸はＥ－５°－Ｎを指す。柱間は東西列2.4～2.5ｍ、南北列1.0～1.5ｍをはかる。南面は実際には繋っていたと推測される。深さは一部を除いてほぼ一定である。



1：黒褐色土（ⅡＡ２粒子１％混、ザラザラとしている）

図65　22・23号掘立柱建物址

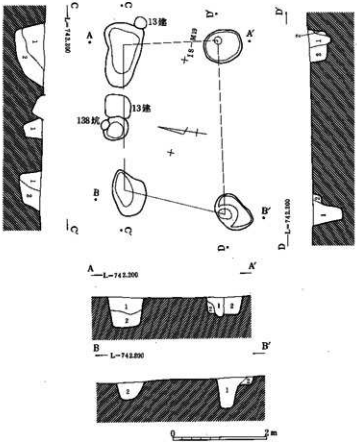
23号掘立柱建物址（図65、PL236）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は２間×３間の東西棟、側柱式である。規模は桁行4.5ｍ、梁行3.8ｍで、面積16.63ｍ²をはかる。主軸はＥ－２°－Ｓを指す。柱間は東西列1.8～1.9ｍ、南北列1.0～1.8ｍをはかる。柱穴は円形を基本とし、歪んだものもある。深さはほぼ一定である。

1：黒褐色土（ⅡＡ２・軽石粒多混、しまりない）
2：黒褐色土（粘質、しまり良い）
3：明褐色土（砂質、しまり良い）
4：黒色土（粘質、しまり良い）
5：黒褐色土（砂質、ⅡＡ２粒混、しまり悪い）
6：黒色土
7：明褐色土と黒褐色土の混合土（しまり良い）
8：明褐色土（砂質、暗褐色土少混、しまりない）

24号掘立柱建物址（図66、PL237）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は１間×２間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行2.5ｍ、梁行2.3ｍで、面積5.85ｍ²をはかる。主軸はＥ－１°－Ｓを指す。柱間は東西列2.3～2.5ｍ、南北列1.1～1.4ｍをはかる。２列の溝はその断面形が非対称的で、深さはほぼ一定である。



1：黒褐色土（粗砂砂、ⅡＡ２粒混、しまり悪い）
2：黒褐色土と明褐色土の混合土

25号掘立柱建物址（図66、PL237）

ⅡＡ２層で検出された。北面と対を成す柱穴が認められないものの、平面形は１間×２間の東西棟、側柱式である。規模は桁行3.7ｍ、梁行2.1ｍで、面積7.35ｍ²をはかる。主軸はＥ－10°－Ｎを指す。柱間は東西列1.4～3.7ｍ、南北列2.0～2.1ｍをはかる。柱穴は不整形であるが、深さはほぼ一定である。

遺物　出土土器は、須恵器甕２片が出土している。

図66　24・25号掘立柱建物址

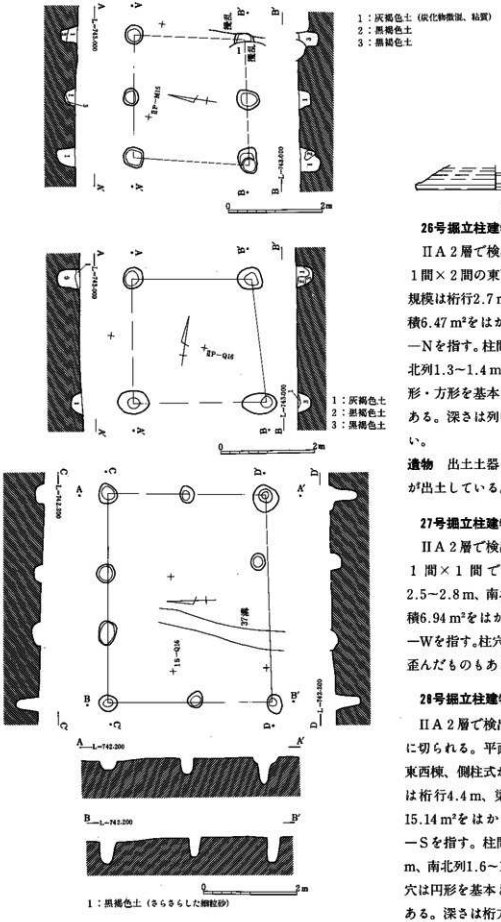


図67　26・27・28号掘立柱建物址

26号掘立柱建物址（図67、PL237）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は１間×２間の東西棟、側柱式である。規模は桁行2.7ｍ、梁行2.5ｍで、面積6.47ｍ²をはかる。主軸はＥ－９°－Ｎを指す。柱間は東西列2.5ｍ、南北列1.3～1.4ｍをはかる。柱穴は円形・方形を基本とし、歪んだものもある。深さは列中間のものがやや浅い。

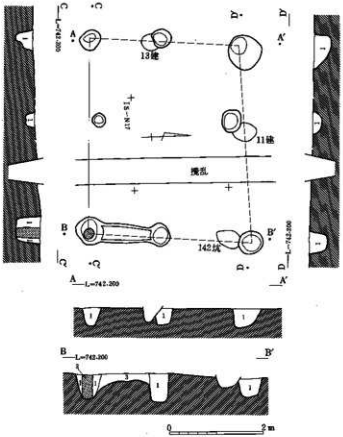
遺物　出土土器は、須恵蓋１（1）片が出土している。

27号掘立柱建物址（図67、PL237）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は１間×１間で、規模は東西列2.5～2.8ｍ、南北列2.6～2.7ｍ、面積6.94ｍ²をはかる。主軸はＮ－９°－Ｗを指す。柱穴は円形を基本とし、歪んだものもある。

28号掘立柱建物址（図67、PL237）

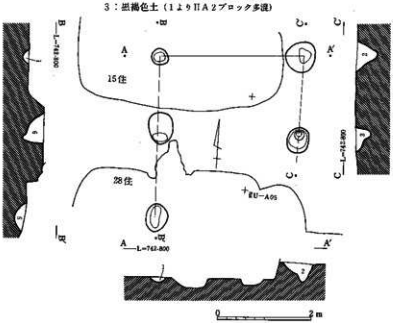
ⅡＡ２層で検出された。37号溝址に切られる。平面形は２間×３間の東西棟、側柱式が想定される。規模は桁行4.4ｍ、梁行3.3ｍで、面積15.14ｍ²をはかる。主軸はＥ－１°－Ｓを指す。柱間は東西列1.3～4.4ｍ、南北列1.6～1.8ｍをはかる。柱穴は円形を基本とし、歪んだものもある。深さは桁方向の中間にある柱穴が浅い。



1：黒褐色土（ⅡＡ２ブロック少混）
2：黒褐色土（ⅡＡ２粒・軽石粒１％混、粒子の細かいさらさらした細粒砂）
3：出褐色土（１よりⅡＡ２ブロック多混）

29号掘立柱建物址（図68、PL237）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は２間×２間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行4.2ｍ、梁行3.2ｍで、面積13.57㎡をはかる。主軸はＮ－０°－Ｅを指す。柱間は東西列1.6～2.6ｍ、南北列1.5～1.7ｍをはかる。柱穴は円形を基本とし、深さは溝部で深いほかほぼ一定である。確認された柱痕は径24ｃｍほどである。



1：黒褐色土（ⅡＡ２粒多混、ⅡＡ２ブロック混）
2：黒褐色土（ⅡＡ２ブロック混、しまり悪い）
3：出褐色土（砂質）
5：出褐色土（ⅡＡ２粒多混。炭化物微混）
6：黒褐色土（上部に炭化物微混）

30号掘立柱建物址（図68、PL237）

ⅡＡ２層で検出された。15号・28号住居址に切られる。平面形は１間×２間の、南北棟、側柱式が妥当と判断される。推定で規模は桁行3.4ｍ、梁行3.0ｍで、面積10.2㎡をはかる。主軸はＮ－２°－Ｅを指す。柱間は東西列3.1ｍ、南北列1.7ｍをはかる。柱穴は円形を基本とし、歪んだものもある。

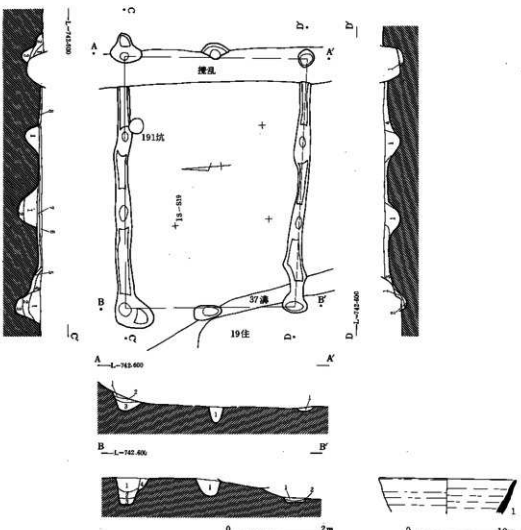
遺物　出土土器は須恵器甕２片が出土している。

図68　29・30号掘立柱建物址

31号掘立柱建物址 (図69、PL237)

ⅡＡ２層で検出された。平面形は２間×３間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行5.3ｍ、梁行3.6ｍで、面積19.60ｍ²をはかる。主軸はＥ－４°－Ｓを指す。柱間は東西列1.7～2.0ｍ、南北列1.7～1.9ｍをはかる。溝の幅は狭くかつ浅いもので、各柱穴の配置は溝幅が狭い割に深い。検出面が低いと考えたにしても、３間の溝による繋りは特異である。

遺物　出土土器は、須恵器高台坏１（1）片が出土している。



1：暗褐色土（ⅡＡ２粒多混、ⅡＡ２ブロック混）
2：黄褐色土（しまり悪い）
3：黄褐色土と暗褐色土混合土
4：黄褐色土（斑点状に黒褐色土混）
5：黒褐色土（ⅡＡ２混）
6：暗褐色土
7：黄褐色土（黒褐色土混）
8：明赤褐土（軽石混）

図69　31号掘立柱建物址

32号掘立柱建物址 (図70、PL238)

ⅡA２層で検出された。平面形は２間×３間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行4.5ｍ、梁行2.8ｍで、面積12.36ｍ²をはかる。主軸はE－25°－Nを指す。柱間は東西列1.3～1.6ｍ、南北列1.3～1.5ｍをはかる。南西側の柱穴は実際には溝によりつながっていたと思われる。深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18cmほどで、掘り方底面まで届く。

遺物　出土遺物は須恵器坏５（1・2）、土師器甕７片が出土した。金属器は刀子１（3）、石製品は紡錘車１(21) が出土している。

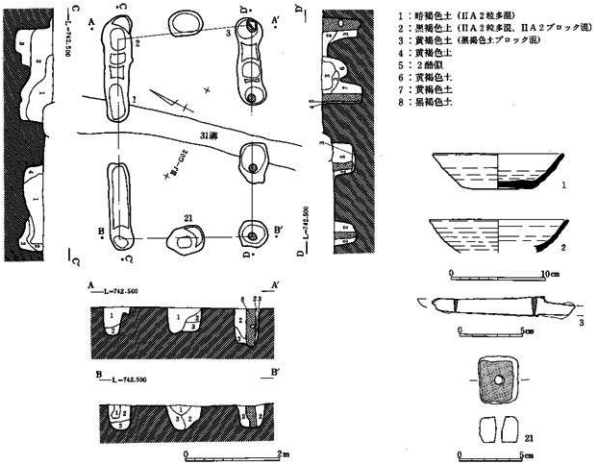
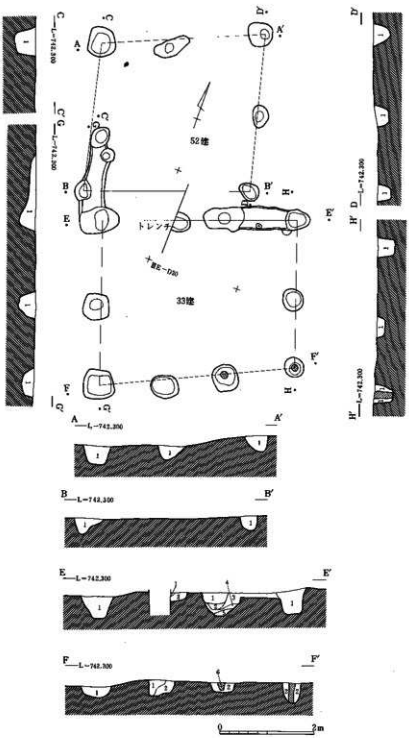


図70　32号掘立柱建物址



1：黒褐色土（ⅡＡ２粒密度、しまり悪い）
2：黄褐色土（黒褐色土、ブロック混）
3：黒褐色土（ⅡＡ２粒多混、ⅡＡ２ブロック混、
　　粗石φ１cm微在）
4：黄褐色土
5：黒褐色土（ⅡＡ２ブロックφ２～３cm散在）
6：黒褐色土（混入物なし、しまり悪い）

図71　33・52号掘立柱建物址

33・52号掘立柱建物址(Bd71、PL238)

ⅡＡ２層で検出された。西面の溝持ち部が北に伸びるため全体に柱穴の配列が明確にならず、西面溝持ち部で２棟の掘立柱建物址が切り合うと想定したが確信はない。また、その前後関係は検出・断面観察からも確認できなかった。

33号は平面形は２間×２間の溝持ち、南北棟、側柱式が想定される。規模は桁行3.4ｍ、梁行2.4ｍで、面積9.57ｍ²をはかる。主軸はＮ－20°－Ｗを指す。柱間は東西列1.5～3.4ｍ、南北列0.9～1.5ｍをはかる。柱穴は円形を基本とし、歪んだものもある。確認された柱痕は径18cmほどで、掘り方底面まで届く。

52号掘立柱建物址は、２間×２間の、南北棟、側柱式が想定される。規模は桁行3.6ｍ、梁行3.2ｍで、面積11.36ｍ²をはかる。主軸はＮ－18°－Ｗを指す。柱間は東西列1.6～1.9ｍ、南北列1.4～3.2ｍをはかる。柱穴の形は不整円形を呈し、深さはほぼ一定である。

遺物　出土土器は土師器内黒坏１片が出土している。

34号掘立柱建物址（図72、PL238）

ⅡＡ２層上面で検出された。調査が２年次にわたったこともあり、またＬ字状の溝持ち部分の他に柱穴状の落ち込みが切り合って確認されたため、その配置は明確になりえなかった。図上で２棟分の配置を考えたが、確証がないため１棟として扱った。このうち東西棟が想定されるものは、２×２間の溝持ち、総柱式などが推測される。規模は桁行3.4ｍ、梁行2.9ｍで、面積9.86 m²をはかる。主軸はＥ―12°―Ｎを指す。柱間は東西列1.2～2.0ｍ、南北列1.2～1.8ｍをはかる。柱穴は円形を基本とし、溝も含め深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径24 cmほどである。

遺物　出土土器は須恵器長頸瓶１片。土師器甕１片、内黒坏１片が出土している。

35号掘立柱建物址　欠番

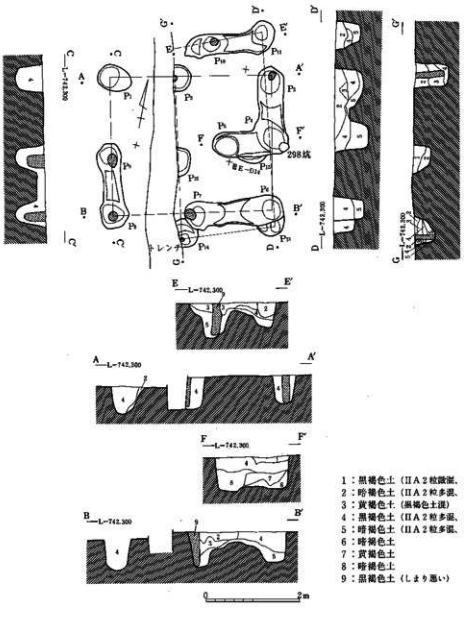
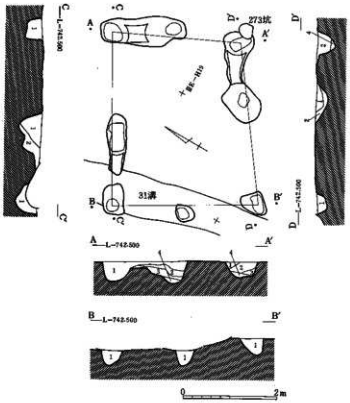


図72　34号掘立柱建物址

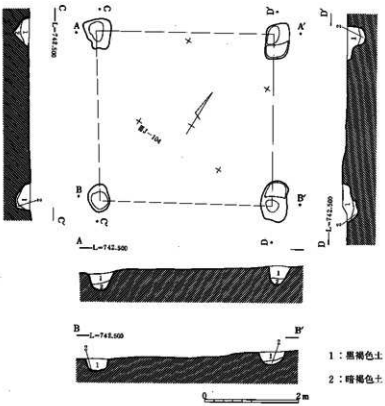


1：黒褐色土（しまりやや悪い）
2：黒褐色土（ⅡA2ブロック少混）
3：黒褐色土（ⅡA2粒多混）
4：黒褐色土（ⅡA2ブロック混）

36号掘立柱建物址（図73、PL238）

ⅡA2層で検出された。平面形は2間×2間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行3.7m、梁行2.6mで、面積9.86m²をはかる。主軸はE−30°−Nを指す。柱間は東西列1.3〜2.3m、南北列1.3〜1.4mをはかる。柱穴は不整形を基本とする。南西部の柱穴は実際には溝によって繋っていたと推測される。深さはほぼ一定である。

遺物　出土土器は須恵器高台坏碗不明1片が出土している。



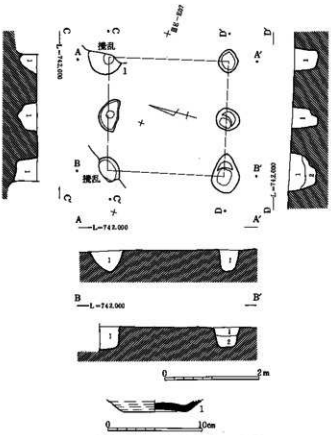
1：黒褐色土（ⅡA2粒・ⅡA2ブロック少混、しまりわるい）
2：暗褐色土（ⅡA2多混）

37号掘立柱建物址（図73、PL238）

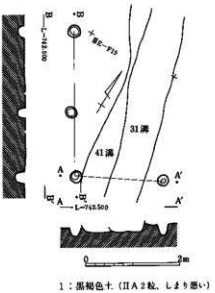
ⅡA2層で検出された。平面形は1間×1間で規模は東西列3.6〜3.7m、南北列3.7〜3.8m、面積13.67m²をはかる。主軸はN−30°−Wを指す。柱穴は方形を基本とし、歪んだものもある。深さはほぼ一定である。

遺物　出土土器は土師器内黒坏1片が出土している。

図73　36・37号掘立柱建物址



1：黒褐色土（ⅡＡ２粒多混、しまりやや悪い）
2：黒褐色土（掏法よく混入物はとんどなし）



1：黒褐色土（ⅡＡ２粒、しまり悪い）

図74　38・39号掘立柱建物址

38号掘立柱建物址（図74、PL238）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は１間×２間の東西棟、側柱式である。規模は桁行2.5ｍ、梁行2.4ｍで、面積6.18ｍ²をはかる。主軸はＮ―75°―Ｅを指す。柱間は南北列1.2～1.4ｍ、東西列2.5ｍをはかる。柱穴は円形を基本とし、歪んだものもある。深さはほぼ一定である。

遺物　出土土器は須恵器坏２（1）片が出土している。

39号掘立柱建物址（図74）

ⅡＡ２層で検出された。31・41号溝址に切られるため部分的に確認された。平面形は１間×２間の南北棟、側柱式が想定される。規模は桁行3.0ｍ、梁行1.9ｍで、面積5.7ｍ²をはかる。主軸はＮ―27°―Ｗを指す。柱間は南北列1.4～1.8ｍをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、深さはほぼ一定である。

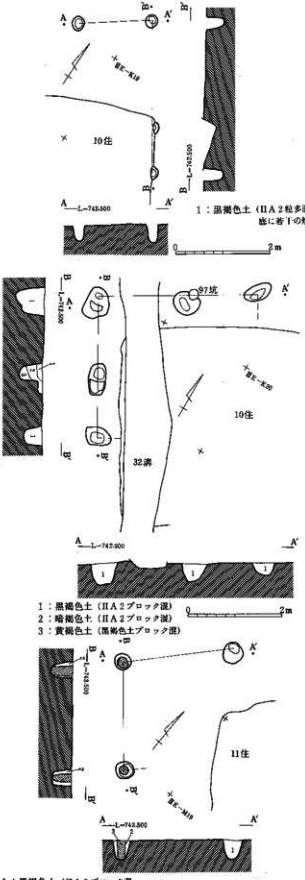


図75　40・41・42号掘立柱建物址

40号掘立柱建物址（図75）

ⅡＡ２層で検出された。10号住居址に切られるため全容は不明である。推定で、平面形は１間×２間の南北棟、側柱式である。規模は桁行3.3ｍ、梁行1.5ｍで、面積4.9ｍ²をはかる。主軸はＥ－58°－Ｓを指す。柱間は、南北列9.6～2.3ｍをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、深さはほぼ一定である。

遺物　出土土器は土師器甕４片が出土している。

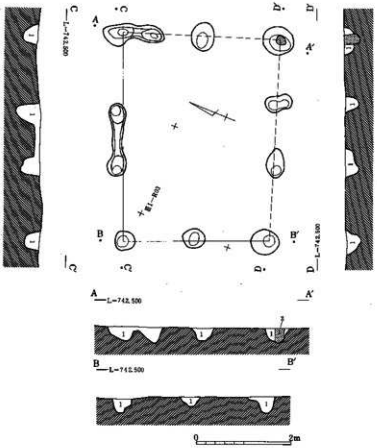
41号掘立柱建物址（図75）

ⅡＡ２層で検出された。10号住居址に切られるため全容は不明である。平面形は２間×２間の東西棟、が想定される。推定規模は桁行3.4ｍ、梁行3.0ｍで、面積10.0ｍ²をはかる。主軸はＮ－28°－Ｗを指す。柱間は東西列1.6～1.8ｍ、南北列1.4～1.6ｍをはかる。柱穴の形は不整形を呈し、深さは北東部で浅い。

42号掘立柱建物址（図75）

ⅡＡ２層上面で検出された。11号住居址に切られるため全容は不明である。平面形は１間×１間が想定される。主軸はＮ－37°－Ｗを指す。柱間は東西列2.2ｍ、南北列2.4ｍをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18ｃｍほどで、掘り方底面まで届く。

遺物　出土土器は土師器甕２片が出土している。



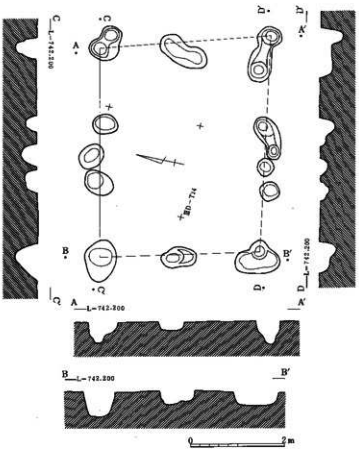
1：黒褐色土（ⅡＡ２ブロック、粗礫少混）
2：黒褐色土（しまりなくサラサラしている）

図76　43号掘立柱建物址

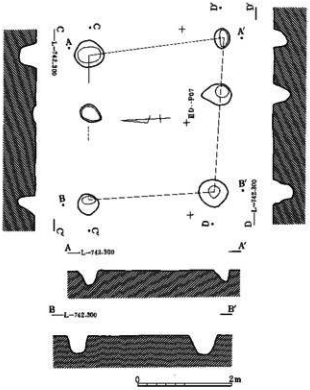
43号掘立柱建物址（図76、PL238）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は２間×３間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行4.4ｍ、梁行3.1ｍで、面積14.21 m²をはかる。主軸はＥ－23°－Ｎを指す。柱間は東西列1.5～1.8ｍ、南北列1.3～1.4ｍをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18 cmほどで、掘り方底面より沈むものも認められる。

遺物　出土土器は土師器甕１片が出土している。



1：黒褐色土（ⅡA2ブロック少混、しまりない）



1：黒褐色土（ⅡA2ブロック少混）

図77　44・46号掘立柱建物址

44号掘立柱建物址（図77、PL239）

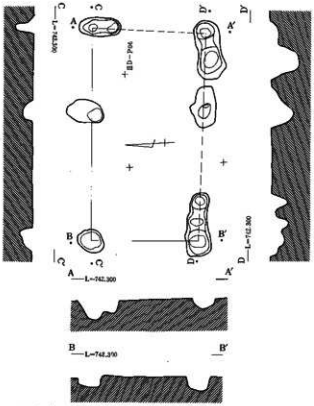
ⅡA2層で検出された。平面形は2間×3間の東西棟、側柱式である。南面北面中央に柱穴を伴う。規模は桁行4.7m、梁行3.4mで、面積15.82m²をはかる。主軸はE−12°−Nを指す。柱間は東西列1.2〜2.0m、南北列1.6〜2.1mをはかる。柱穴の形は円形・楕円形を基本とし、歪んだものもある。深さはほぼ一定である。部分的に柱穴の連結したものが認められる。確認された柱痕は径18cmほどで、掘り方底面まで届くものは少ない。

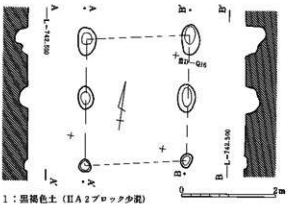
遺物　出土土器は須恵器坏2片。土師器甕1片が出土している。

45号掘立柱建物址　欠番

46号掘立柱建物址（図77、PL239）

ⅡA2層で検出された。平面形は1間×2間の東西棟、側柱式である。規模は桁行3.2m、梁行2.7mで、面積8.60m²をはかる。主軸はE−3°−Sを指す。柱間は東西列2.7〜2.8m、南北列1.0〜2.1mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。深さはほぼ一定である。





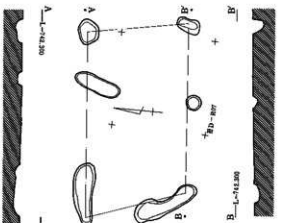


図78　47・48・49号掘立柱建物址

47号掘立柱建物址（図78、PL239）

ⅡA 2層で検出された。平面形は1間×2間の東西棟、側柱式である。規模は桁行4.4 m、梁行2.2 mで、面積10.20 m²をはかる。主軸はE－3°－Sを指す。柱間は東西列2.2～2.4 m、南北列0.3～2.6 mをはかる。柱穴の形は不整形を基本とした楕円形を呈し、補助穴がつながった柱穴も確認された。深さはほぼ一定である。

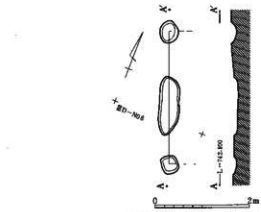
48号掘立柱建物址（図78、PL239）

ⅡA 2層で検出された。平面形は2間×1間の南北棟、側柱式である。規模は桁行2.7 m、梁行2.1 mで、面積5.78 m²をはかる。主軸はN－6°－Wを指す。柱間は東西列2.1 m、南北列1.2～1.5 mをはかる。柱穴の形は円・楕円形を基本とし、深さは南側で浅い。

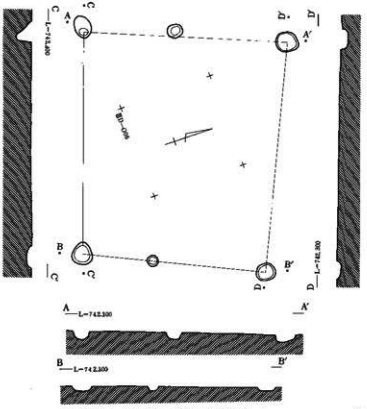
遺物　出土土器は須恵器長頸瓶1片が出土している。

49号掘立柱建物址（図78、PL239）

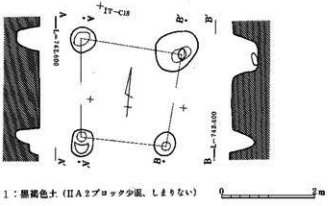
ⅡA 2層で検出された。平面形は1間×2間の滞持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行3.6 m、梁行2.1 mで、面積8.19 m²をはかる。主軸はE－5°－Nを指す。柱間は東西列2.3～1.9 m、南北列1.0～2.2 mをはかる。柱穴の形は統一的でなく、不整形である。深さは浅くほぼ一定である。



１：黒褐色土（サラサし、しまりない）



１：黒褐色土（ⅡＡ２ブロック少混、サラサラし、しまりない）



１：黒褐色土（ⅡＡ２ブロック少混、しまりない）

図79　50・51・53号掘立柱建物址

50号掘立柱建物址（図79、PL239）

ⅡＡ２層で検出された。周辺はピット状の落ち込みが集中して認められ、柱の建て替えなどが考慮されるため、３基のピット状の落ち込みであるが掘立柱建物址とした。東西棟の建物址が推定される。南北2.8ｍをはかる。深さは浅くほぼ一定である。

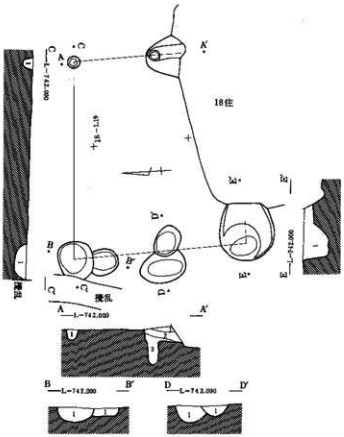
51号掘立柱建物址（図79、PL239）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は１間×２間の東西棟、側柱式である。規模は桁行4.9ｍ、梁行4.3ｍで、面積20.11ｍ²をはかる。主軸はＥ－26°－Ｓを指す。柱間は東西列4.8～4.9ｍ、南北列1.5～2.4ｍをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、列中の柱穴は規模が小さい。深さはほぼ一定である。

52号掘立柱建物址　33号掘立柱建物址と併記した。

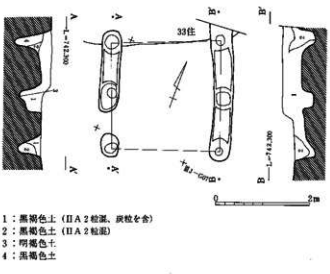
53号掘立柱建物址（図79）

ⅡＡ２層で検出された。平面形は１間×１間で規模は、面積4.03ｍ²をはかる。主軸はＮ－75°－Ｅを指す。柱間は東西1.8－2.2ｍ、南北2.1ｍをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、規模が不揃いである。深さはほぼ一定である。



54号掘立柱建物址（図80）

ⅡＡ２層で検出された。18号住居址に切られるため全容は不明である。断面から切り合う部分は溝持ち部であったことが観察される。西面には切り合うピットが認められ、本址に伴うと判断した。平面形は１間×２間の東西棟、側柱式が想定される。規模は桁行5.6ｍ、梁行3.7ｍで、面積20.06ｍ²をはかる。主軸はＥ－４°－Ｓを指す。柱間は南北列1.7～2.0ｍをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、規模は不揃いである。深さは溝持ち部で深い。



55号掘立柱建物址（図80、PL239）

ⅡＡ２層で検出された。33号住居址に切られる。平面形は１間×２間の溝持ち、側柱式である。規模は桁行2.5ｍ、梁行2.4ｍで、面積6.18ｍ²をはかる。主軸はＮ－75°－Ｅを指す。柱間は東西列2.3ｍ、南北列2.3ｍをはかる。深さはほぼ一定である。

図80　54・55号掘立柱建物址

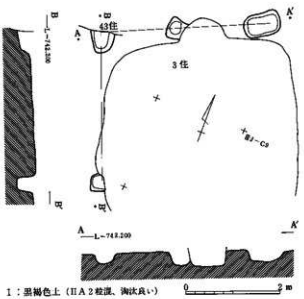


図81　56号掘立柱建物址

56号掘立柱建物址（図81）

ⅡＡ２層で検出された。３号住居址に切られ全容は不明である。推定で平面形が１間×２間の東西棟、側柱式が想定される。柱間は東西列3.8ｍ、南北列1.5～1.8ｍをはかる。柱穴の形は方形を呈し、深さはほぼ一定である。

1～7・10・11・15～17・22～24・27・28・35・39・41・45～47・49～56号掘立柱建物址からは遺物の出土は認められない。

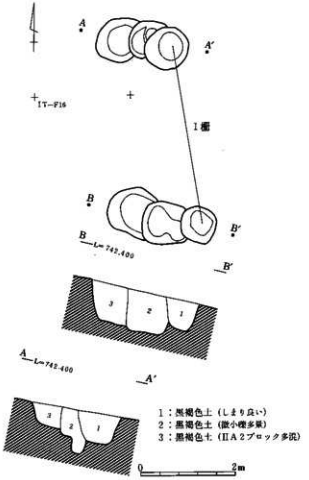


図82　柵址

ウ　柵址

１号柵址（図82）

２基のピットで構成される、本来なら柵列とはいい難いが基本となる2基のピットが対になって３回立て替えられており何らかの意図があったピットと思われる。ピット間は約1.8ｍをはかる。

エ　溝址（図83～85、PL242～244）

本地区で検出された溝址は41本である。このうち30本は現水田耕作のための配水施設・暗渠配水と判断し、残り11本についてここで扱う。すべてⅡA２層上面で検出され、39号溝址が１段階の17号住居址に切られていた他は、本地区で検出された住居址・掘立柱建物址を切っていた。

19号溝址（図83、PL242）

東側で田切り地形に切られるため全容は不明である。全長約７ m、幅約0.7 m、深さ20 cm 前後をはかる。断面はたらい状を呈し、底はほぼ平坦である。

31・41号溝址（図83、PL242）

31号溝址に切られる短いものが41号溝址である。41号溝址はやや浅い地形の窪み状を呈すが調査時に従い溝址とした。31号溝址は全長約40 m、幅約１ m、深さ80 cm 前後をはかり、底で比高差30 cm をもって南に傾斜する。41号溝址は全長約９ m、幅約１ m、深さ20 cm 前後をはかる。両者とも断面はたらい状を呈す。

32号溝址（図83、PL242）

全長約40 m、幅約0.8 m、深さ40 cm 前後をはかる。断面はたらい状を呈し、底は平坦でなく、比高差10 cm をもって南に傾斜する。

33号溝址（図83、PL243）

全長約12 m、幅約１ m、深さ25～35 cm 前後をはかる。断面はたらい状を呈し、底は平坦でなく、比高差10 cm をもって東に傾斜する。

35・36号溝址（図84、PL244）

両者ともにトレンチ調査段階でⅠB層上面から落ち込んでいたためかなり時期的に新しいものである。35号溝址は全長約30 m、幅約１～1.5 m、深さ15～40 cm 前後をはかり、断面は擂り鉢状を呈し、底は平坦ではなく凹凸があり、比高差はほとんどない。36号溝址は全長約60 m、幅約0.2～1.45 m、深さ10～35 cm 前後をはかり、断面はU字状を呈し、底はほぼ平坦で、比高差55 cm をもって南に傾斜する。

37・38号溝址（図85、PL243）

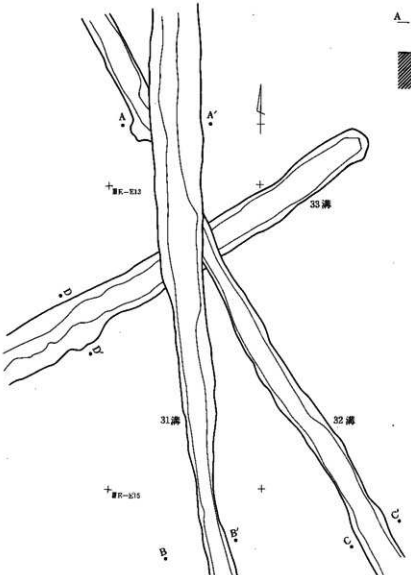
一帯は検出面より上層が耕作による攪乱が著しく、両者とも掘り込み面は確認できなかった。37号溝址は、全長約20 m、幅約0.3～１ m、深さ15～35 cm 前後をはかる。38号溝址は全長約20 m、幅約0.6～1.2 m、深さ15～40 cm 前後をはかる。ともに断面は擂り鉢状で、比高差５ cm をもって南に傾斜をみる。

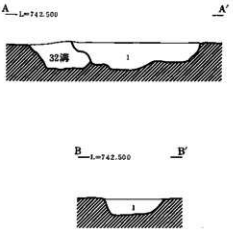
39号溝址

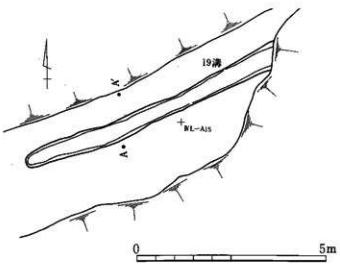
遺憾であるが断面実測図が紛失し、詳細は不明となった。全長約80 m、幅約1.5 m と思われる。１段階の17号住居址に切られることから、それより古い段階の溝址と判断される。調査時の所見より、断面は擂り鉢状を呈し、深さ30 cm 前後で、底は緩やかに東に傾斜する。

40号溝址

全長約1.3 m、幅約0.3 m、深さ10 cm ほどで溝址としては不明瞭な点が多い。


A
A′
33溝
31溝
32溝
B
B′
C
C′


A
L=742.500
A′
32溝
1
B
L=742.500
B′
1
1：黒褐色土（小礫微混，ⅡＡ２部分的に混）
C
L=742.500
C′
1
2
1：黒褐色土（小礫微混，しまり悪い）
2：明褐色土（ⅡＡ２ブロック多混）
D
L=742.500
D′
1
2
1：黒色土（ⅡＡ２粒多混）
2：黒褐色土（ⅡＡ２粒多混）


19溝
A
A′
0
5m

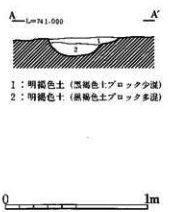

A
L=741.000
A′
1
2
1：明褐色土（黒褐色土ブロック少混）
2：明褐色土（黒褐色土ブロック多混）
0
1m

図83　溝址（１）

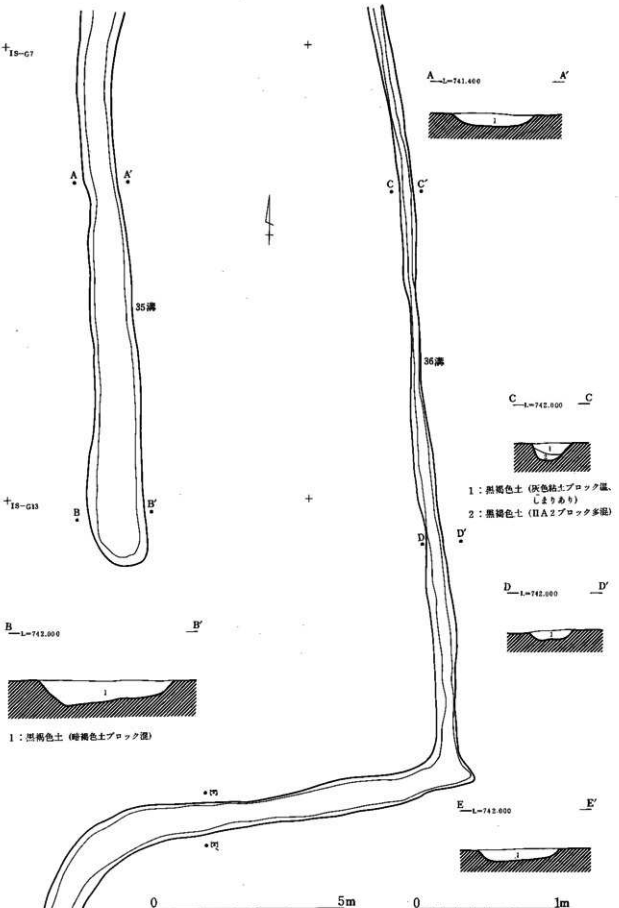

I8-G7
A
A'
35溝
I8-G13
B
B'
B
L=742.000
B'
1：黒褐色土（暗褐色土ブロック混）
C
C'
36溝
D
D'
C
L=742.000
C'
1：黒褐色土（灰色粘土ブロック混、しまりあり）
2：黒褐色土（ⅡA2ブロック多混）
D
L=742.000
D'
A
L=741.400
A'
E
L=742.000
E'
0
5m
0
1m

図84 溝址（2）

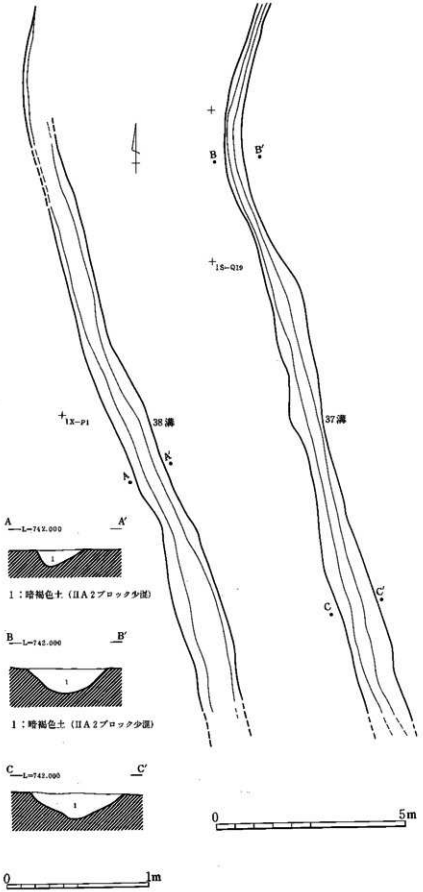

B
B′
1S-Q19
1X-P1
38溝
37溝
K
L
C
C′
A
A′
L=742.000
1
1：暗褐色土（ⅡＡ２ブロック少混）
B
B′
L=742.000
1
1：暗褐色土（ⅡＡ２ブロック少混）
C
C′
L=742.000
1
0
5m
0
1m

図85　溝址（３）

オ　土坑（図86・87、PL240・241）

検出された土坑は294基である。B地区の分類に従ったものが図87である。全体に小ピット状のもので、ほぼ円形を呈するもので占められる。その分布はやや散在的に集落内に認められるが、よくみると集落を区切る柵列状に見えるものや、2単位で存在するようにみえるものなど興味ある分布を示している。

ここでは、焼土をともなったもの、やや形状が大振りのものだけ取り上げておく。

81号土坑（図86、PL240）

本址はⅣA－23グリッドに位置する。50 cm×46 cm の楕円形を呈し、深さ22 cm をはかる。覆土は2分層され、1層中に焼土の包含量が著しかった。遺物は出土していない。

116号土坑（図86、PL240）

本址はⅡP－16グリッドに位置する。138 cm×90 cm の不整形を呈し、深さ15 cm をはかる。覆土中に焼土が認められた。

120号土坑（図86）

本址はⅡP－11・16グリッドに位置する。152 cm×166 cm の円形を呈し、深さ11 cm をはかる。本址と似た形状のものに163・540号土坑がある。本址が集落のはずれにあるのに比べ、両者は住居址に近いところにある点が異なる。出土遺物はない。

遺物は極わずかで図化できたものはほとんどなく、121・177号土坑の須恵器坏と黒色処理坏のみである。

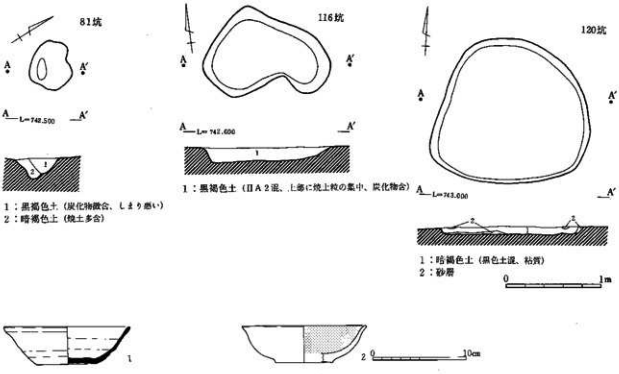


図86　土坑

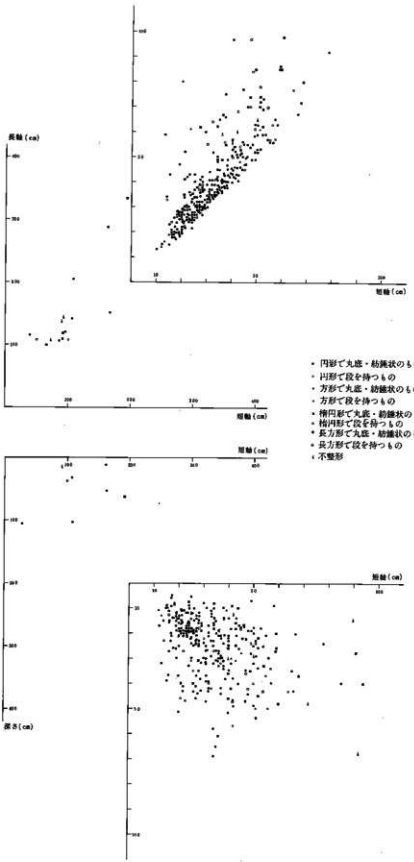


図87　土坑の長短軸・深さの相関

カ 遺構外出土遺物

古代の遺物（図88、1・2はⅠ、Ⅱグリット。3～16はⅢ、Ⅳ、グリット。17～22はZ遺物である。）。 出土遺物は須恵器坏9（1・3～5・17）、蓋1。土師器内面黒色坏4（6～8）、坏・碗不明1（18）、鉢1（2）固体分が図化されている。金属器は刀子1（9）、鉄鏃1（10）、紡錘車1（11）、棒状の鉄製品5（12～14・20・21）、釘3（15・16・22）、そのほか不明鉄製品1、鉄滓160g、青銅製品1（19）、が出土している。17は群馬からの搬入品。

中世以降の遺物（図89、続土出土中のグリッド遺物）。出土遺物は山茶碗1（1）、カワラケ4（2～5）、龍泉窯系の青磁で蓮弁文碗3（6・7）、同系の青磁で飛雲文碗1（8）、同系の青磁で蓮弁文小鉢1（9）、河南産の白磁碗1（10）産地・器種不明な青磁2片、大窯期の緑菊皿1（11）、常滑の甕1（12）、須恵質の捏ね鉢又は擂鉢1（13）、天目茶碗4片、珠洲大甕1片、錆釉の擂鉢2個体分出土している。鉄製品はキセル2（14・15）、銭は9枚出土し、16は開元通宝（唐・621年）、17は皇宋通宝（北宗・1039年）、18は政和通宝（北宗・1111年）、19は

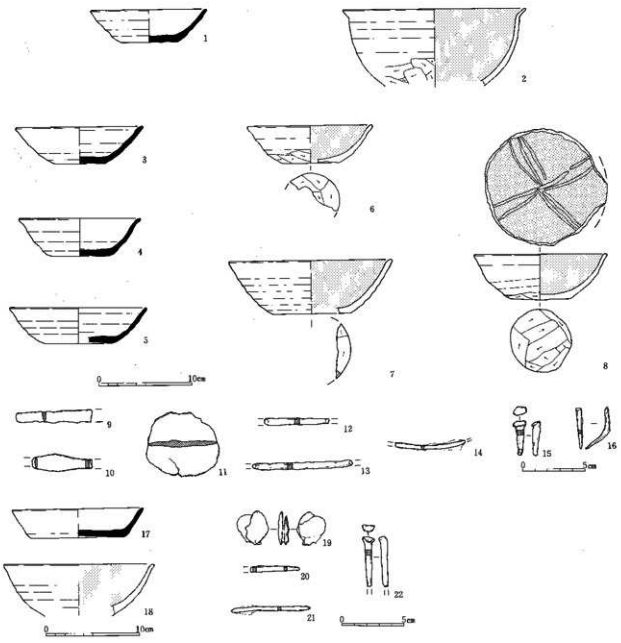


図88 遺構外出土遺物（1）

洪武通宝（明・1368年）、20～24は寛永通宝（1668年。19は島屋文、裏正字文）、25は宋元通宝（北宋・960年）である。石製品は茶臼（上臼）1片（22）が出土している。10は12世紀前半、12は12世紀代、6～8は13世紀～14世紀前半、珠洲大甕片は鎌倉時代。平安時代末(12世紀)から中世にかけての遺構は本地区では検出されてはいないが、特に12世紀から13世紀頃の遺物がⅢ・Ⅳ地区に集中して検出されていることから削平を受けているものの遺構のあった可能性が高い。

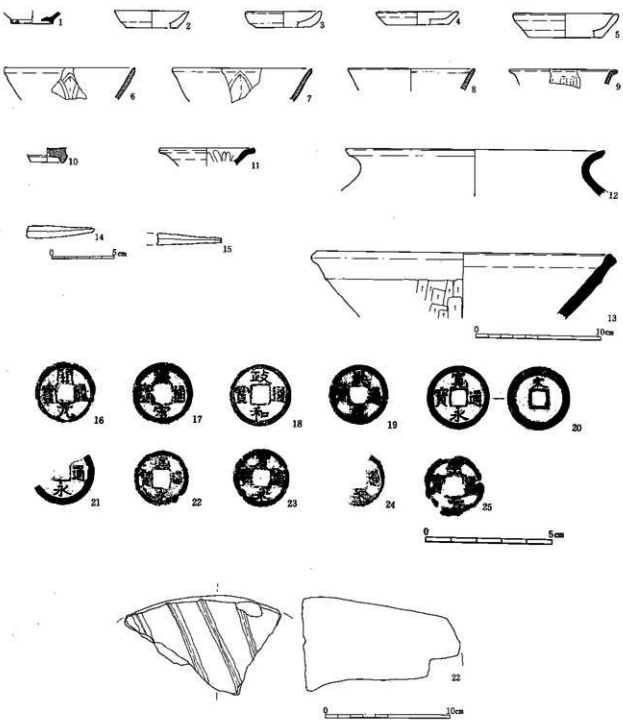


図89　遺構外出土遺物（2）

5　分析

(1)　古墳時代末から平安時代の遺物

ア．はじめに
イ．奈良時代から平安時代土器の研究史
ウ．土器分類
エ．各段階の特徴
オ．年代観について
カ．まとめ

ア　はじめに

栗毛坂遺跡群において検出された遺構は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であり、特に古墳時代から平安時代の良好な集落が検出された。これらの住居址から出土した遺物のうち、特に奈良時代～平安時代にかけての住居址出土遺物を主体的に扱って、古代集落の変遷や遺構の性格を考えるための時期の設定を試みると共に、整理途中で気付いた点について記した。

段階設定についての方法は、土師器の坏・碗・甕・羽釜・須恵器坏類を遺構の重複関係を考慮しつつ、その形態および成・整形技法から分類を行った。これらの食器・煮沸具は該期の各段階において主体を占めるものであり、住居址から普遍的に出土する可能性が高いことから、住居址の所属時期の判断に最も有効と考えたためである。特に各段階の形態変化を鋭敏に反映する土師器の甕と土師質の坏・小皿を中軸に据え、前記した器種の共伴関係や変容の特徴などを補足しながら各段階の土器様相をみてみたい。また、一部の段階については資料不足のため西祢ぶた・北山寺遺跡の資料を使用した。

イ　奈良時代から平安時代土器の研究史

県内における奈良時代から平安時代の土器群についての研究が詳細に検討されるようになったのは、1970年代の高速道路および圃場整備事業など大規模開発にともないそれに対応した調査組織が組まれるようになり大規模発掘調査が増大してからである。研究の先行者は笹澤浩・川上元・岡田正彦らで、同氏らは当該期の土器群の編年研究を行った。以後松本平を中心に編年研究が続行された。1987から1989年長野自動車道予定地内の吉田川西遺跡の整理をきっかけに原明芳は西弘海・宇野隆夫らの成果に刺激され「信濃における食器の系譜ー古代から中世へー」(1987)・「松本平における平安時代の食膳具」(1987)・「吉田川西遺跡」(1989)を発表した。そして、笹澤は長野県史(1988)において古墳時代から該期の土器編年研究の成果を公表した。現在の分野で両氏は中核を成している。

1980年頃から佐久地方においても大規模開発にともなう調査が実施される状況となるにつれ、当地方における該期を中心とする土器群が問題意識をもって捉えられるようになる。1980年花岡弘の小諸市周防畑遺跡の研究は該期の問題提示した最初であろう。以後小山岳夫の佐久市若宮遺跡(1984)・御代田町野火付遺跡(1985)の研究、1987年に堤隆は御代田町前田遺跡の研究によって古墳時代末から平安時代初期の土器様相を1時期四半世紀の幅をもって明らかにした。1988年高村博文の『廻沢・葛石遺跡』報文「佐久地方の平安時代土器試論」は原の研究成果に基づき佐久地方の平安時代(9～11世紀)土器様相を初めて4段階6期に詳細区分を表した。堤氏は「十二遺跡」(1988)「根岸遺跡」(1989)の研究において前田遺跡の成果をもとに9～10世紀初頭の区分を着実に行っている。

ウ　土器分類

食器について（図1）

食器（坏・高台坏・碗・皿・盤など）に使用される焼き物は段階によって異なり、おのおのの出現・消長やその増減から段階の区分および傾向を把握することができる。

1段階では須恵器がその中心で坏・高台坏が製作され全体の約7割を占め、土師器は非ロクロ坏で約3割である。土師器は群馬県方面からの搬入品が目立つ。須恵器は6段階以降碗・皿が新たに認められるようになる。

4段階からは土師器のほとんどがロクロ整形されミガキが施され黒色処理されるようになる。器種は坏の他に碗・皿・盤など新器種が生産されるようになり、その生産量は9段階にピークに達し、17段階まで徐々に減少してゆく。

10段階では須恵器が認められなくなる。新たにロクロ整形のままの土師器（土師質）が普遍的に認められるようになる。器種は坏・碗・皿・小皿・小碗などで、この土師質の量は段階が下るにしたがいその量を増し17段階では全体の9割に達する。以後、須恵器・土師器の順を追って記す。

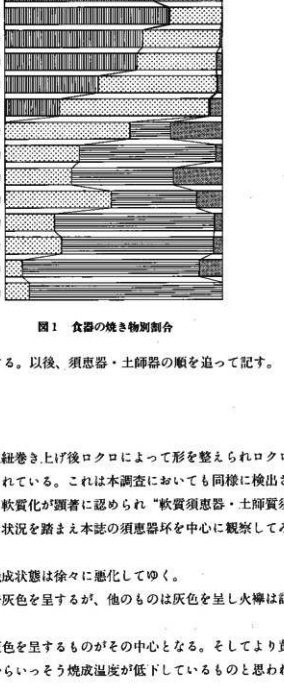


図1　食器の焼き物別割合

須恵器食器

坏A・Bの焼成変化について

須恵器坏の成形は従来からの研究成果によって、粘土紐巻き上げ後ロクロによって形を整えられロクロ台からはヘラおよび糸によって切り離されることが知られている。これは本調査においても同様に検出されている。生地の焼成について県内では9世紀中頃より軟質化が顕著に認められ“軟質須恵器・土師質須恵器”などと呼ばれたり分類されてきている。こうした状況を踏まえ本誌の須恵器坏を中心に観察してみる。

4段階　本段階までの焼成は良好で、5段階以降その焼成状態は徐々に悪化してゆく。

5段階　本段階では約半数余りは火襷痕も明瞭に残り暗灰色を呈するが、他のものは灰色を呈し火襷は認められず焼成温度が低下している。

6段階　前段階に比べ火襷痕の残る割合はより減少し灰色を呈するものがその中心となる。そしてより黄色味を強く呈するもの(煤切れ直後の状況)が増加することからいっそう焼成温度が低下しているものと思われる。

7段階　焼成良好なものはほとんど認められなくなる。これは焼成段階において焼成開始から煤切れ状態(約650℃で煤が燃えつきる)以上の温度に至らない低火度還元状態のもので、なおかつ、口縁部周辺が酸化状態を示しているものがある。

8段階　灰色～灰白（黄）色を呈するものがほとんどである。前段階のように煤切れ状態までには至らず表面に煤が吸着した状態のものが多く、一部が酸化状態になったものが認められる。

9段階　8段階と同様な状況である。

坏の分類（図2・6）

本遺跡から検出された坏はその整形・器形・法量などの相違によってA・Bに2大別した後、それぞれを更に細分しAをA1・A2・A3の3形態に、BをB1・B2の2形態にそれぞれ小分類することにした。

AとBの相違はおもに口径と底径の比と高さの違いによる。外観はAは逆台形を呈し、Bは扁平な長方形を呈する。

坏A・Bの小分類

A1：おもな特徴は坏のロクロ台から切り離す方法が回転ヘラキリ手法を取るため、底部が丸底を呈することである。

A2：切り離し方法が糸切り手法であることから底部が平坦を呈する。

A3：A2に近似するが、口径と底径の比率が小さいものである。

BもAと同内容で分類した。

高台坏の分類（図2・6）

箱形または逆台形の体部を呈し、胴部は直線的に立ち上がり、高台を付けた形態で蓋とセットをなす。法量を中心にA・Bの2形態に分類した。

A：口径に比べ底径が大きく、器高が低い。高台は角高台を呈する。1段階では大きく、3段階以降小形化し、外底部に回転糸切り痕を残すものが認められる。6段階以降腰部の張りは明瞭であるが稜をもつような観さは認められなくなる。内面においても同様である。高台径の小さなものが認められる。

B：Aに比べ器高が高い。検出例がわづかで全体像は明らかにならなかった。6段階頃からは腰部径・高台径が小さくなり、腰の張りが不明瞭になる。平安時代を特徴づける形態で、群馬県で検出される高台坏または碗の影響を受けているものと思われる。

土師器食器

奈良時代後半（4段階）から12世紀初め（17段階）までの土師器の食器は2回の大きな成・整形変化が認められる。4段階まではミガキが施されたあと黒色処理されている坏が、手づくね成形からロクロ整形に変わり新たに碗・皿がつくられるようになる（註1）。10段階以降は黒色処理されたものは減少し新たにロクロ整形後未処理の土師質の食器が中心に生産されるようになることから、土師器を黒色処理の食器と土師質の食器とに大別した。このロクロ整形される双方の土師器は、須恵器の整形と大きく異なる点が認め

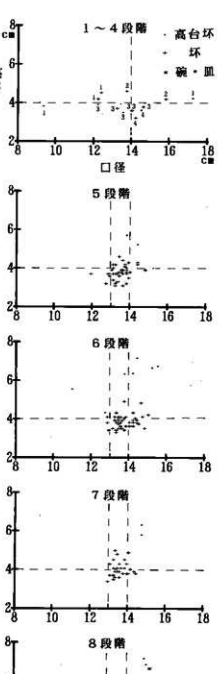


図2　須恵器の法量

られる。それは内外面のロクロ痕の違いにある。概観すると須恵器坏の内外面には同様のロクロ痕を呈するが、土師器の内面にはロクロ痕は認められるものの外面のロクロ痕に比べその凹凸は小さい。特に土師質にはほとんど認められずヌタがそのロクロ痕の痕跡を表す程度である。13段階の土師質坏の内底部にコテを当て仕上げているものが認められる（図23・6・7・8）。このようなことから土師器は須恵器とは異なり意図的に内面の凹凸の無い滑らかな面をつくっているものと思われる。

黒色処理の食器

土師器は古墳時代後半より黒色処理された坏や高坏が普遍的に製作されるが、その占める割合はあまり多くはない。本誌において検出された奈良時代の住居址はわずかで、出土遺物も同様であったことから該期の土器様相は不明瞭な点が多い。

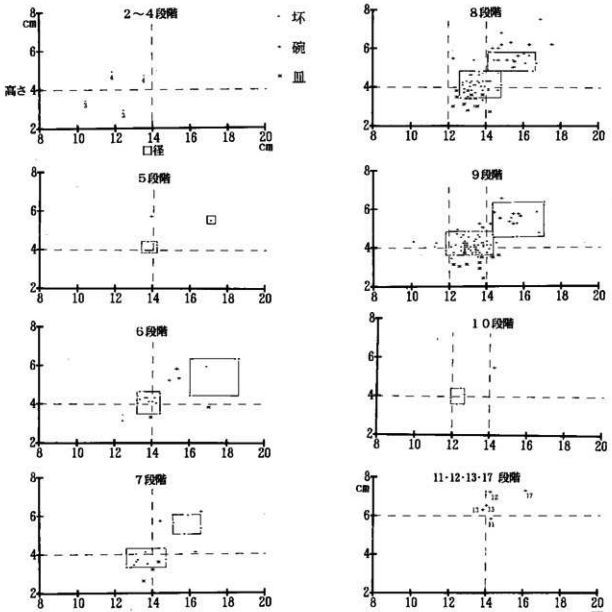


図3　黒色処理の食器の法量

3段階までの坏は手づくね成形され、内面はミガキが施され（口縁端部外面付近に施す場合がある）黒色処理される。4段階以降の食器はすべてロクロ整形に変わり、ミガキは内面を中心に統一した手法で施される（6段階の鉢鉢・6～9段階の大形盤にはミガキも黒色処理も施されない）。その生産量は8・9段階にピークに達する。8段階以降外面にもミガキが施され黒色処理されているものが出現するが、大量生産される8・9段階においても2％程度で、10段階以降は検出量が少ないこともあり認められない場合が多い。

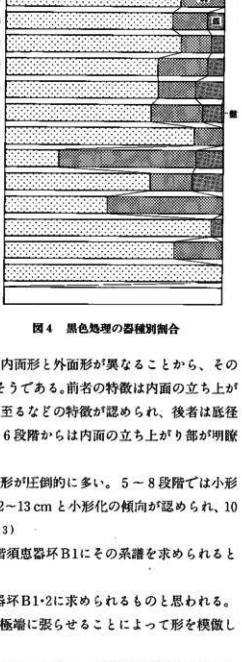


図4　黒色処理の器種別割合

分　類（図3～5・6）

坏A1　非ロクロで、体部は内湾して口縁端部に至る。内外底部は丸底を呈する。内底部から口縁部には横ミガキが施された後黒色処理されている。系譜は1・2段階須恵器坏A1に求められるものと思われ、3段階から認められた。3点（図13―10・11、15―13）のみである。

坏A2　ロクロ整形され外底部は平坦で、すべてに内面へラミガキ後黒色処理されている。4段階から認められた。当初は内面形と外面形が異なることから、その系譜を3段階の土師器非ロクロ坏Aと須恵器坏A1・2に求められそうである。前者の特徴は内面の立ち上がり部が不明瞭で丸底状の底部から緩やかに内湾しながら口縁部に至るなどの特徴が認められ、後者は底径が大きく器高が高いなど外形全体のプロポーションが近似する。6段階からは内面の立ち上がり部が明瞭となり内面形と外面形は同形を呈するようになる。（図6）

法量は当初から大・小形の2種類が存在する（註2）。量的には小形が圧倒的に多い。5～8段階では小形は口径13～14 cm、器高4 cm前後であるが9段階になると口径12～13 cmと小形化の傾向が認められ、10段階にいたっては12～13 cmの小形化したものばかりとなる。（図3）

坏B1：整形はA1と同様で、口径と底径の比が小さく、2・3段階須恵器坏B1にその系譜を求められると考える。

坏B2：整形はA2と同様である。祖形はB1と1～3段階の須恵器坏B1・2に求められるものと思われる。8段階以降には底径は小さくA2と大差はないが、器高が低く腰を極端に張らせることによって形を模倣しようとしているものが認められる。

碗：5段階から認められるが普遍的に存在するのは6段階に入ってからである。12段階以降器高が高くなり所謂“深碗”タイプに変化してゆく。5～9段階を通して碗の占める割合は1.5～2割である。

皿：皿の検出状況は碗と同様で普遍的に存在するようになるのは6段階に入ってからである。5～9段階を通して皿の占める割合は1割に満たない。法量は坏A同様9段階になると小形化および底径が小さくなる傾向が認められる。

ミガキについて（図5・表1）

坏・碗・皿・盤などの土師器の食器には3段階以降17段階まで内面にミガキが施され黒色処理されている（一部に内外面にミガキが施されたものもある）。4段階以降の食器はロクロ整形されミガキは統一した手法で施さ

れる。内底部中心より口縁部に向かい放射状の縦ミガキが施され、胴部から口縁端部にかけては5回位持ち替え横ミガキがされる。縦ミガキと横ミガキの順番は特に決まっていないようである。そうした中に特異ではあるが縦ミガキの代わりに横ミガキが施される例がごくわずか認められる(栗毛坂B地区31住-5、22住-10、120住-19・32、137住-13、特極遺構5-2、北山寺2住-1)。

4から7段階にかけてはミガキ残しがないようにていねいに施されるが、8～9段階ではミガキが雑でミガキ残しのあるものが目立つ。特に器種の割合から生産量の多い坏にその傾向があるようで、9段階では30%に達する。そうした中縦ミガキが4～6条と簡略化され暗文風に施されたものがあらわれる。これは横ミガキも雑で口縁付近の狭い範囲のみ施され(図5)、9段階以降特に顕著にあらわれる。8～9段階に黒色処理の食器が食器全体の7割を占め、大量生産のピークを迎えることによる手抜きの製品であろうと考える。

10段階以降検出された遺構数や食器の占める割合は土師質が中心になり黒色処理された食器は激減してゆく。こうした中で暗文風に施された縦ミガキの間に螺旋状の暗文を施したもの(図20－5)や縦ミガキが波状風に施されたもの(図21－5)・縦ミガキを花弁状に施した(図23－4)ものなど遊び心のあるものが散見できる(註3)。

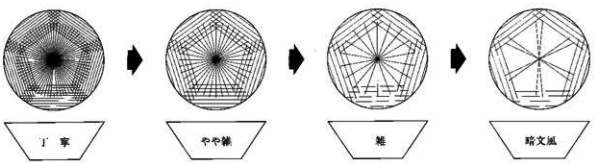


図5　ミガキの模式図

表1　ミガキの割合

	杯				碗				皿			
	丁寧	やや雑	雑	暗文風	丁寧	やや雑	雑	暗文風	丁寧	やや雑	雑	暗文風
4段階	100.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5段階	100.0	—	—	—	100.0	—	—	—	—	—	—	—
6段階	92.0	8.0	—	—	100.0	—	—	—	100.0	—	—	—
7段階	89.0	11.0	—	—	100.0	—	—	—	100.0	—	—	—
8段階	79.0	5.5	12.5	3	100.0	—	—	—	100.0	—	—	—
9段階	59.1	15.0	15.7	10.2	75.0	15.6	3.1	6.3	85.0	5.0	—	10.0
10段階	—	17.0	17.0	66.0	50.0	—	—	50.0	—	—	—	—
11段階	—	—	—	—	40.0	—	—	60.0	—	—	—	—
12段階	100.0	—	—	—	—	—	—	100.0	—	—	—	—
13段階	100.0	—	—	—	—	—	—	100.0	—	—	—	—
14段階	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
15段階	100.0	—	—	—	100.0	—	—	—	—	—	—	—
16段階	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
17段階	—	—	—	—	—	100.0	—	—	—	—	—	—

(数値は%)

土師質の食器（図7・6）

土師質はロクロ整形・酸化焼成された土師器の範疇に属する土器で、黒色処理の食器類の最盛期である9段階に出現する。

土師質坏A

9段階に登場するが検出量は極めて少ない。出現当初プロポーション・法量は黒色処理坏A2と特に違いは認められない。しかし、13段階へ至るにしたがい器高はきわだった変化はないものの口径が徐々に1 cmづつ小さくなって行く傾向を示す。

9段階	口径13.8 cm、	底径3.7 cm	12段階	口径10.2～10.8 cm、	底径3.1～4.2 cm
10段階	口径12.3～13.9 cm、	底径3.7～4.5 cm	13段階	口径 9.3～10.2 cm、	底径3.4～4.7 cm
11段階	口径10.4～12.2 cm、	底径3.2～4.1 cm			

土師質小皿

14段階から登場し、15～16段階へと徐々に口径・器高が小さくなる傾向を示す。17段階に至っては底径が極端に大きくなり、プロポーションを異にする。

14段階	口径 9.3～10.1 cm、	底径2.1～2.3 cm	16段階	口径 7.4～ 8.4 cm、	底径1.9～2.0 cm
15段階	口径 8.5～ 9.1 cm、	底径2.1～2.3 cm	17段階	口径 9.5 cm	底径1.6 cm

土師質坏B

坏A は13段階でほぼ終わり（14段階でもわずかに残る）新たに14段階から土師質小皿と共伴して登場する。14段階では底径が小さく15段階以降底径が広くなるものが増加しつつ、小皿と土師器の主体をなしてゆく。口径は約14 cm前後とその法量に変化は特に認められない。

土師器甕（図8）

土師器甕II～IVの成・整形について

甕II～IVの成形方法は基本的には変わらない。粘土紐巻き上げによる成形で、胴部内面は板状工具によるナデ、口縁部は横ナデ、胴部外面はヘラケズリ整形によって仕上げられている。

胴部の成形は粘土紐づくりで底部より約3分の1が積み上げられ内面を板状工具による上方向の縦または斜めナデにより内面形および器面が調整され、ある時間をおかれた後上部を再度紐づくりによって継ぎ足してゆく。これらの技法は内面下半部に明瞭な粘土接合部が認められ、その接合によって下方のナデが消されていることから胴部を大きく2度に分けて作り上げられたことが分かる。

口縁部は指で抓（つま）んで成形し、横ナデによって仕上げられている。IIIからは頸部が直立、口縁部が外反し「コ」の字状を呈するようになると同内面に板状工具を当て直立した頸部が作られ、口縁部外面の上下部と肩部の屈折部には棒状の工具を当て明瞭な屈折を表現している。ヘラケズリは肩部から頸部境まで横および斜め方向が正位の状態で右回りに削られている。しかし例外的に左回りに削られているものも認められる（B地区44号住居址～25、以下B-120住-58、C-22住-9、C-40住-90）。肩部から底部にかけては逆位（口縁部を下）の状態で肩部から底部方向へ縦のヘラケズリが施されているが、やはり例外的に底部から肩部方向にヘラケズリされているものも認められる（B-05住-8、B-127-11、C-25住-13）。別に肩部ヘラケズリが左回り方向に施されているものは胴部内面の横ナデ・口頸部の横ナデなどの方向も逆であることから左利きの製作者によるものと思われる。

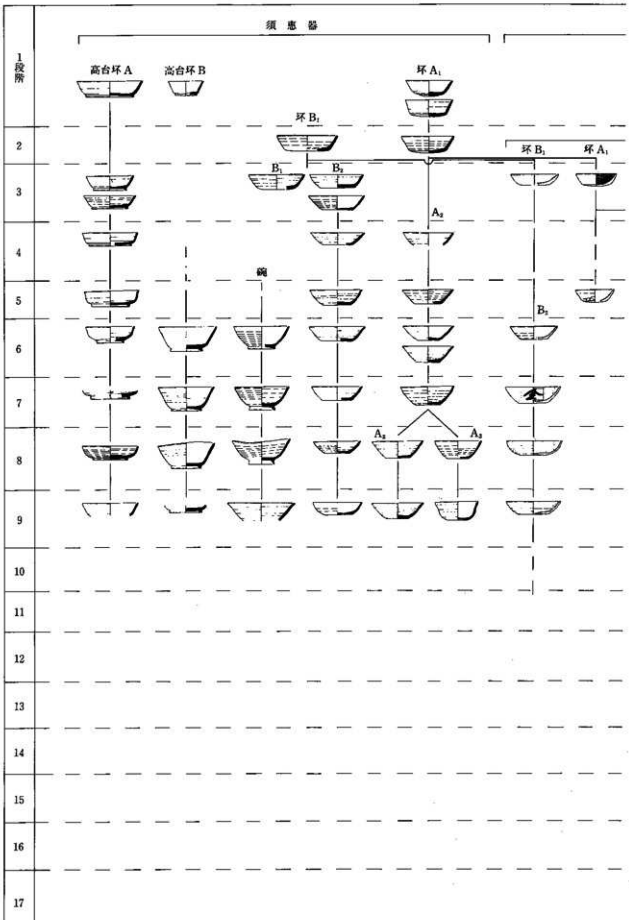
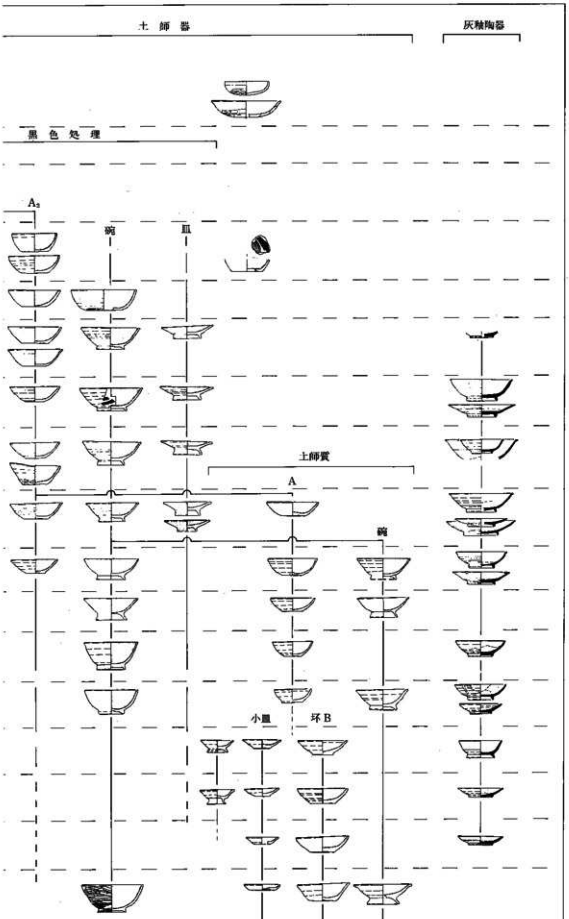

須恵器
1
段階
高台坏A
高台坏B
坏A1
坏B1
2
坏B1
坏A1
3
B1
B2
A2
4
碗
5
B2
6
7
8
A2
A2
9
10
11
12
13
14
15
16
17

図6　食器の分類と変遷


土 師 器
灰釉陶器
黒 色 処 理
A₂
碗
皿
上師質
A
碗
小皿
坏B

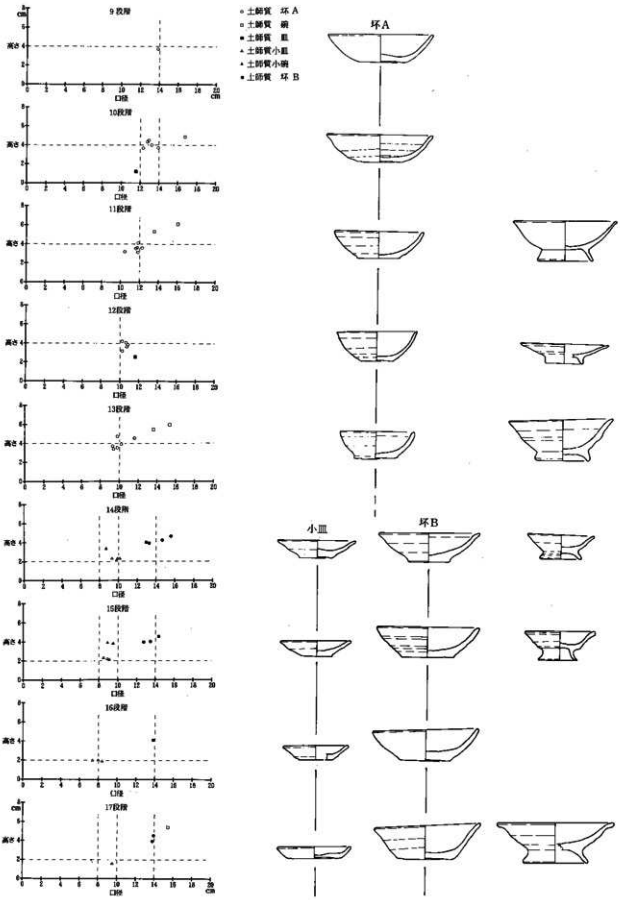

土師質　坏 A
土師質　碗
土師質　皿
土師質小皿
土師質小碗
土師質　坏 B
9段階
10段階
11段階
12段階
13段階
14段階
15段階
16段階
17段階
高さ
口径
cm
坏A
小皿
坏B

図７　土師質の法量

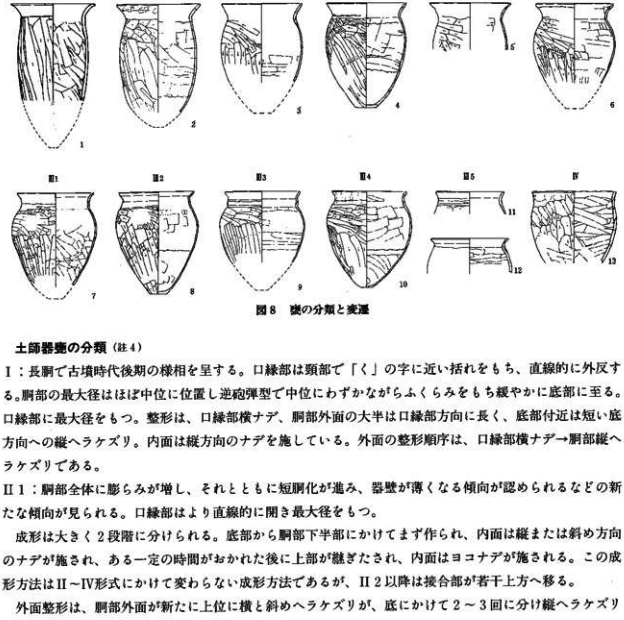


図8　甕の分類と変遷

土師器甕の分類（註4）

Ⅰ：長胴で古墳時代後期の様相を呈する。口縁部は頸部で「く」の字に近い括れをもち、直線的に外反する。胴部の最大径はほぼ中位に位置し逆砲弾型で中位にわずかながらふくらみをもち緩やかに底部に至る。口縁部に最大径をもつ。整形は、口縁部横ナデ、胴部外面の大半は口縁部方向に長く、底部付近は短い底方向への縦ヘラケズリ。内面は縦方向のナデを施している。外面の整形順序は、口縁部横ナデ→胴部縦ヘラケズリである。

Ⅱ1：胴部全体に膨らみが増し、それとともに短胴化が進み、器壁が薄くなる傾向が認められるなどの新たな傾向が見られる。口縁部はより直線的に開き最大径をもつ。

成形は大きく2段階に分けられる。底部から胴部下半部にかけてまず作られ、内面は縦または斜め方向のナデが施され、ある一定の時間がおかれた後に上部が継ぎたされ、内面はヨコナデが施される。この成形方法はⅡ～Ⅳ形式にかけて変わらない成形方法であるが、Ⅱ2以降は接合部が若干上方へ移る。

外面整形は、胴部外面が新たに上位に横と斜めヘラケズリが、底にかけて2～3回に分け縦ヘラケズリが短く施される。

Ⅱ2・3：短胴化・胴部の膨らみ・器壁の薄くなる傾向がほぼ終る。口縁部は「く」の字状に鋭く直線的に開く。胴部の最大径がやや上位に移り、口径とほぼ同じになる。

整形は前段階と同様であるが、胴部外面へラケズリが細かく施されるようになる。内面は下半部に明瞭な粘土接合痕がみられ、胴部を2度に分けて作り上げられたことが分かる。その下方は底部からの立上がり部分に板状工具による強い横ナデ、その上方は接合部まで縦ナデが施されている。接合部上方は、板状工具の横ナデでが施され口縁部付近では一層強く施されている。

Ⅱ4：前段階と同様だが、頸部のくびれが不明瞭になり、口縁部は若干立ち上がりながら緩やかに開く。

Ⅱ5：口縁部はさらに緩やかに外反して立つようになり、端部が内側に折り返されるものがみられる。胴部の最大形はいっそう上位に移り緩やかなカーブで底部に至る。整形は、前段階と同様であるが口縁部の横ナデがやや雑になり、成形段階の指頭痕を残すものがみられるようになる。

Ⅲ1：口縁部はほぼ直立し、上部がわずかに屈曲・外反し、頸部と口縁部の区別がされるようになる。これは外面より内面で顕著に認められるが、外反したままのものも多く認められる。胴部の最大径は肩部に

移り、張りをもつものが顕著になる。前段階まで緩やかに底部に至っていたものが直線的に至るようになる。

Ⅲ2：口頸部は「コ」の字状を呈するようになる。丸かった口縁端部外面にはにぶい突帯状の面をもつものが含まれるようになる。頸部は内傾しているものが多く、頸部と口縁部ははっきりするが胴部と頸部の区別が不明瞭なものが多い。肩の張りは顕著で最大径を示す。整形は頸部と口縁部・胴部の屈曲部及び口縁端部の突帯状部に工具を使用するものがみられ、頸部の横ナデは簡略化され指頭痕を残す。

Ⅲ3：典型的な「コ」の字状の頸部を有するもので屈曲部は極めて強く工具によって作られている。頸部は直立しているが、横ナデはほとんど施されていない。施されたものは弱く、指頭痕を残している。胴部は張りが強く直線的に底部に至る。整形は頸部付近の横ヘラケズリが顕著である。

Ⅲ4：「コ」の字状口縁の退化がはじまる。頸部は意識されているものの、屈曲部は鈍くなり頸部が短く、器厚になる傾向がある。また、わずかではあるが短胴化が認められる。整形は前段階と同様。

Ⅲ5：「コ」の字状口縁は痕跡的。屈曲部が不明瞭になり頸部が一層短くなる。また、頸部が退化し口縁部のみとなるものも認められる。整形は前段階と同様。

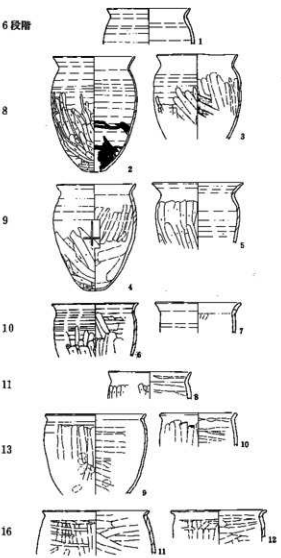


図9　ロクロ甕の変遷

Ⅳ：検出例は1点のみでⅠ～Ⅲの形態変化の流れを汲むものであるかは不明である。肩部から口縁部にかけてわずかに内傾し、口縁端部はわずかに外反する。肩部から底部にかけてはⅢに類似するものと思われる。整形はⅢと同様で、胎土も類似する。

ロクロ甕

ロクロ整形された酸化焼成の甕である。法量的には大・中・小の3タイプが認められる。東信地方では在地の甕がいわゆる“武蔵型の甕”であるのに対し、平安時代前半に登場するこのような甕を“北信濃系の甕”もしくは“北信系の甕”と呼称され、系譜は石川・富山・新潟県西部方面に求められ、調整方法の変化を示しながら当地方へ波及して来たものである。胎土は在地の土器と際立った違いはなく地元で製作されたものと思われる。

成形は粘土紐巻き上げ後ロクロ整形、調整は大形は内底部から体部下位かけて縦方向のヘラナデが施され、ものによっては口縁部付近まで縦又は横ナデが行われる。外面胴部中頃から底部にかけてヘラケズリが施される。中・小形甕は巻き上げ後ロクロ整形されカキ目を施すが段階が下るにしたがい施されなくなる傾向を示す。一部には大形と同様外面胴部にヘラケズリされるものが認められるが外底部には施されず回転糸切り痕を残す。

北信地方では北陸地方の成形方法であるロクロ整形後タタキが胴部下半にみられるが当地方では認められていない。

ロクロ甕の初現は小形甕が6段階に認められ8段階にいたって普遍的に認められるようになるが、7段階までに出土したものは小片が多く出土状況からそれらが住居址に共伴するかは不明である。

8段階　在地の土器に対する割合は大形が7.4%、小形・中形は30.4%、総体的には12%を示す。大形は砲弾型で丸底のプロポーションを呈し、薄手に整えられ体部上位に最大径をもち緩やかに底部ないし頸部に至る。口縁部は直線的に開き端部は丸く仕上げられている。

9段階　在地の土器に対する割合は大形が18%、中形・小形はほぼ同数、総体的には30%を示し特に小形の量が目立つ。プロポーションは前段階と同様だが5のように口縁部に最大径をもち端部は面取りされ、肩部が張り直線的に底部に至るものが認められる。また全体的に器厚になる傾向がある。

10段階　本段階では頸部径が大きくなるため肩の張りは不明瞭になり最大径は口縁部に移る。小形よりさらに小さなタイプが認められる。出土量はいっそう増加する傾向にある。

11段階　前段階のプロポーションとさほど変化は認められない。ヘラケズリが体部全体に施されるようになる。

12段階　資料は検出されなかった。

13段階　本段階では破片が多く全体像の分かるものは認められない。

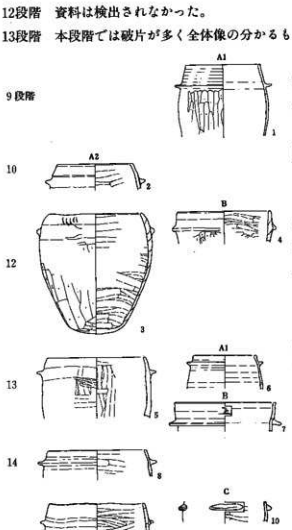


図10　羽釜の分類と変遷

ロクロ調整は体部上方から口縁部にかけてのわずかな部分に施されるが不明瞭である。ヘラケズリ・ヘラナデが顕著となり全体にやや不格好な感がある。口径が大きく短胴化したものが出現する。中・小形甕は頸部が不明瞭で緩やかに外反して口縁端部に至る。口縁部はいっそう短くなる。カキ目ないし回転ヘラナデ調整は認められない。

14・15段階　資料は検出されなかった。

16段階　本段階では器形の系統は13段階にさかのぼると思われるがほとんどロクロ整形された痕跡は認められない。胎土は粗雑で焼成も悪く破片数はあるものの全体像はつかみえなっかった。小形甕はその量がわずかで、10段階に登場したさらに小さなタイプの甕は14段階までは認められた。

羽　釜

当地方における羽釜はその研究が浅く今回の調査においてもそれを確定できるほどの資料は検出されなかった。

9段階　体部の最大径を胴部上半に有し、最大径部から口縁端部にかけ強く内傾し、ロクロ整形が顕著で、口縁端部は面取りがされている(A1)。以下の段階に認められる羽釜はヨコナデ調整が基本である(A2)ことから群馬県産のものと思われる。

10段階　羽釜A2は9段階と同様胴部上半に最大径を有する。最大径部分から口縁端部にかけ強く内湾し、底部

へ緩やかにしぼられる。口縁端部は面取りがされている。9段階に比べ器厚である。調整にはロクロは使用されずヨコナデが施されている。

11段階　資料は検出されなかった。

12段階　羽釜A2(3)は全体のプロポーションは10段階とさほど大差は認められないが口縁端部から鍔にかけて若干短くなり、口縁端部は丸い。そのほか体部がわずかに開きながら直立するタイプが認められる(B)。鍔の端部は丸いものと面取りされたものがある。羽釜A・Bとも全体に胎土が10段階に比べ粗雑化し以後同様な状況を示す。

13段階　羽釜A2(5)は胴部上半の張りは弱く、口縁端部への内湾は極わずかとなり胴部下半は寸胴に近くなる。口縁端部から鍔にかけていっそう短くなる。羽釜Bは前段階とプロポーションとさほど変化は認められない。そのほかに9段階と同様ロクロ整形(A1)が施されるものが認められる(6)。胎土も他のものとは異なることからやはり群馬県産のものと思われる。

14段階　羽釜A2は前段階とプロポーションとさほど変化は認められない。

15段階　羽釜A2は前段階のプロポーションとさほど変化は認められないが、鍔が矮小化する傾向が認められる。新たに鍔が全周せず4か所で跡切れる羽釜Cが認められる。整形はA・Bと同様である。

16段階　羽釜A2のみ検出された。いっそう器厚になり整形は雑で焼成も低火度である。鍔はほとんど役に立たないほど矮小化している。

エ　各段階の特徴

以上土師器・須恵器の食器と煮沸具を限定して分類を行ったが、その形態変化は土師質坏と土師器甕以外では完全に捉えることができなかった。ここでは形態変化がほぼ捉えられた土師器甕と土師質坏を段階設定の中軸に据え、他の土器との共伴関係およびその特徴を考慮しながらそれぞれの段階を最も特徴づけると思われる住居址を中心に、不足する器種は同段階と思われる住居址出土のものを加えて構成した。各段階の個々の遺物は文末に住居址番号を対照表で示した。

第1段階（図11）

本段階は（B-15・27・39・C-17住）4軒であり、遺物量および器種はわずかであった。

須恵器は蓋・坏・高台坏などがある。蓋（1・2）は口径20cmの大形で内面に明瞭な“かえり”がつく。つまみは中央がくぼむいわゆる“環状つまみ”が付くもので群馬県における一大特徴で、当地からの搬入

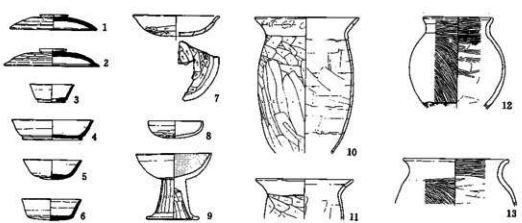


図11　1段階

品である。8世紀第1四半期が生産の盛期と考えられている。坏A1（5・6）は底径が大きく器高も高い。ロクロ台からの切り離しは回転ヘラキリが使用され5は未調整6は手持ちヘラケズリが施されている。高台坏は口径20 cmの大形と口径11 cmの小形が2種類2点が出土している。

土師器坏の出土はわずかであり、2形式が認められる。8は比較的薄手・丸底で器高は低く口縁部が内湾ぎみに直立し、胎土は緻密、調整は外底部に手持ちヘラケズリが施されている。7は丸底で器高は低く口縁部が外反する大形の坏で調整は外底部に手持ちヘラケズリが施されている。双方とも群馬県内で一般的に認められるもので8世紀前半中に比定されている。7はこの時期頃に限定されて認められる器形である。高坏は器厚で受部は丸底、内湾しながら口縁部に至り、ミガキが施され黒色処理されている。

甕類は長胴形と球胴形があり、長胴形II1（10・11）はこの段階から古墳時代の長胴形と異なり短胴化が進み胴部上位に横ヘラケズリが施されるようになる。球胴形（12・13）は器厚で古墳時代から引き続き認められる。口縁部は大きく外反するものと頸部が直立し口縁部が大きく外反するものとの2タイプがあり、口縁部には横ミガキが胴部外面には縦または斜めの長いミガキが施されている。

第2段階（図12）

本段階は（B-06・28・32住）3軒である。この3軒は1軒の住居址が2度にわたる拡張を行ったものであるため遺物構成に不明瞭な点があり、遺物量はわずかである。

須恵器坏は1段階とその様相には変化は認められないが新たに坏B1（8）が認められる。8は回転ヘラキリ後未調整で、坏A1（4・7）は回転ヘラキリ後手持ちヘラケズリが施され7は外底部が平坦化している。蓋には“かえり”を有するものは認められない。土師器甕はII2がみられる。9のように口縁端部がわずかに内傾するものも認められる。球胴甕は前段階のタイプは認められず、13のように調整は長胴甕と同様に胴部外面にはヘラケズリが施され薄く仕上げられ、口縁部は短く直立するもので1点出土している。このような甕は当地方ではほとんど認められないが、群馬県における球胴甕には同様な調整が施されている。

第3段階（図13）

本段階は（B-05・09住）2軒である。須恵器坏・高台坏の外底部は回転ヘラケズリまたはナデ・手持ちヘラケズリ・ナデによって仕上げられているが、3・5には回転糸切り痕が認められる。4は回転ヘラキリで1点のみ小片であったことからこの段階より糸切りによる切り離しが行われ始めたものと思われる。

土師器坏A1・B1がみられ双方とも非ロクロで内面にはミガキが施されたのち黒色処理されている。外底部は丸底を呈している。甕はII3が認められる。

4段階（図14）

本段階に相当するのは3軒である。土師器坏（5・6）は本段階からロクロ整形のもの（A2）が認められるようになり、すべて内底部から放射状、胴部から口縁部にかけては横方向のヘラミガキが施されたのち黒色処理されている。底径は大きく器高が高い。外底部は平坦で、内面は立ち上がり部が不明瞭で小さな丸底状を呈し、緩やかに内湾しながら口縁部に至るため外面形と内面形は異なり、外面形は須恵器坏A1に内面形は黒色処理坏A1に類似する。7は“甲斐型”坏を模倣したもので胎土は在地のものに類似し内面は黒色処理されている。碗の量はわずかで小片であるため図化できない。皿は認められない。

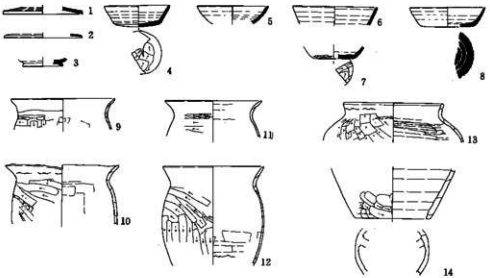


図12　2段階

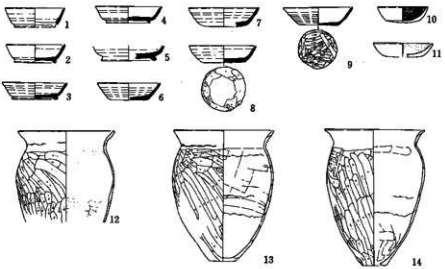


図13　3段階

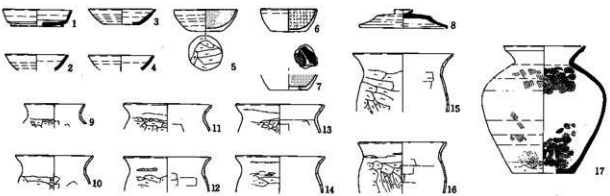


図14　4段階

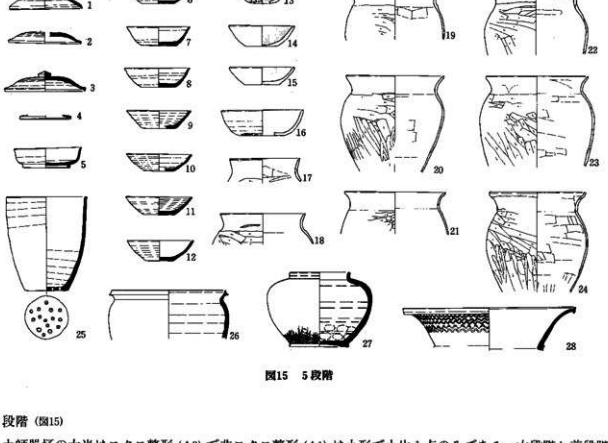


図15　5段階

5段階（図15）

土師器坏の大半はロクロ整形（A2）で非ロクロ整形（A1）は小形で小片1点のみである。本段階か前段階頃にその生産はロクロ整形（A2）に変わるものと思われる。坏A2は前段階と同じく小さな丸底状の内底部から緩やかに口縁に至る。全体のプロポーションは須恵器坏A2に類似するようになる。16のように金属器を模倣したものがみられる。甕はII5が中心で21のように口頸部上位が外傾し屈折部をわずかにみとめられるものが登場する。つまり土師器甕の「コ」の字状化の萌芽期と思われる。その他須恵器高台坏A・蓋（1～4）・短頸壺（27）・広口鉢（26）・甑（25）・甕（28）があり、4は東濃地方からの搬入品、27は胴部下方にタタキが認められる。

6段階（図16）

土師器坏A2は前段階とは異なり内面底部は平底になり外面形と同じプロポーションをもつようになる。法量は須恵器坏A2と類似するがそのプロポーションは土師器が立ち上がり部分から体部にかけ内湾して立ち上がるものが多いのに対し須恵器はそのほとんどが底部から直線的に口縁部に至る。そのほかわずかではあるが坏B2（27～29）が認められる。碗・皿の高台は角高台である。皿は本段階より普遍的に認められるようになる。甕はII5（59～62）・III1（63・64）の両者で構成され、大・中（58）・小形（56）がある。そのほか鉢（51）・鉄鉢（52）・大形盤（53・54）ロクロ甕（65）・台付甕（57）・小形ハケ目甕（55）がある。51の内面にはミガキが施された後黒色処理されている。鉄鉢・大形盤はロクロ整形のままである。大形のロクロ甕は本段階から認められるがわずかで普遍的に認められるようになるのは8段階以降である。

須恵器坏A2は浅いものが多く18のように深いものもわずかにある。高台坏Aは口径と底径の比率は小さく腰部の張りは明瞭であったがこの段階より張りはあるものの稜をもたなかったり、高台径の小さな5が認められる。また新たに口径と底径の比率が大きく、器高が高く、腰部が不明瞭なB形態が普遍的にみられるようになる。そのほか須恵器碗（26）・短頸壺（67）・広口鉢（68）・長頸瓶・4耳壺（69）・甕（70）・広口甕

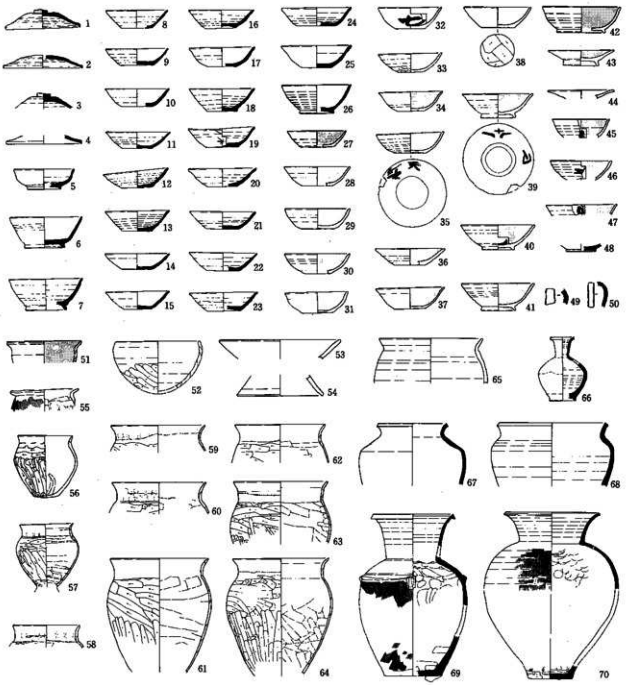


図16　6段階

などが共伴する。66はミニチュアの長頸瓶で猿投産と思われる。

灰釉陶器は黒笹14号窯式に対比される皿・把手付き瓶がある。

この頃より墨書・刻書されたものが目立つようになる。

第7段階（図17）

土師器は食器類の坏・碗・皿のすべてにミガキ後黒色処理が施されている。ミガキは内底部から胴部にかけては中央から放射状にみがかれ、胴部中央付近から口縁端部にかけ横ミガキが施されるのが一般的であるが、19のように内底部に横ミガキが施されるようなミガキ方法の異なるものが例外的に認められる。

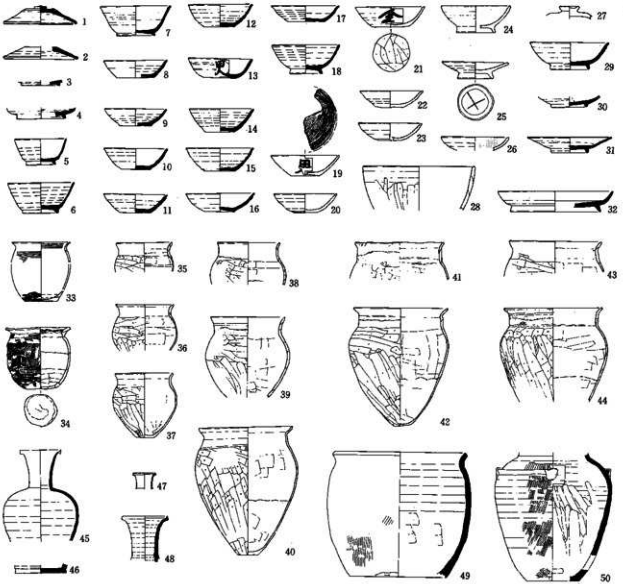


図17　7段階

そのほか鉢 (28)・蓋 (27) などがある。34のハケ目小形甕は胴部上方に縦、下方に横のハケ目が施され、胎土は白色であることから搬入品と思われるが産地は不明である。この甕は近年県内と群馬県から多く見出されるほか、西方ほど多くの出土例がある。平安時代前半に県外から搬入される土器は灰釉陶器があり、用途からすると土器そのものに商品価値をもつものであったのに対し、この甕自体には商品価値はなかったように思われる。そうするとこの甕は産地に加え、内容物の検討が必要になると考える。

須恵器は坏A2・高台坏A (3・4)・B (5・6)・盤 (32)・長頸瓶 (45・48)・ミニチュア長頸瓶 (47)・四耳壺 (50)・甕・広口甕 (49)・灰釉陶器は黒笹90号窯式に対比される碗・皿がある。47のミニチュア長頸瓶は猿投産と思われる。46は瓶類と思われると共に美濃産であろう。

第8段階 (図18)

黒色処理の食器は須恵器の食器の量を上回るようになる。坏A2・B2 (18・19)・碗・皿・片口鉢(34)などで、坏A2の相似形を示す。新たに内外面にミガキが施され黒色処理された食器(33)がみられるようになる。調整ではミガキのやや雑なものが目立つようになる。甕はⅢ3で口頸部は典型的な「コ」の字状を呈し、口

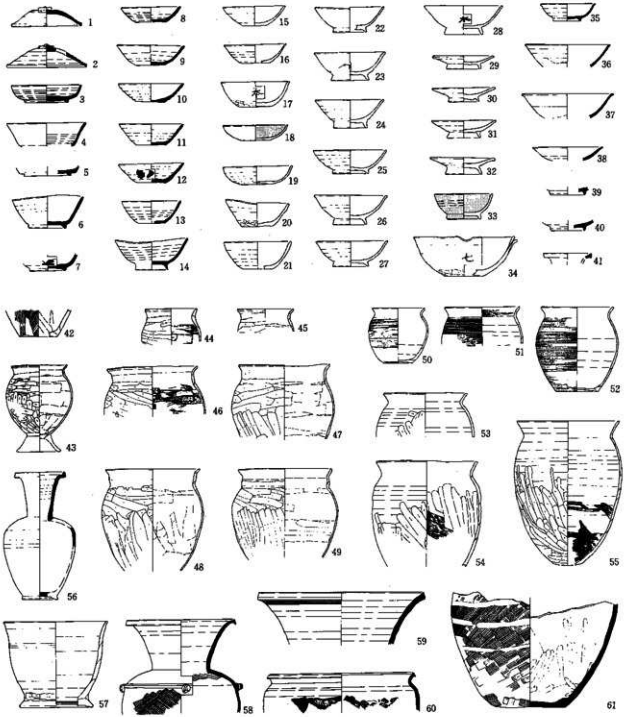


図18　8段階

縁端部は面取りされている。大きさには大・中・小形がある。44の小形甕は口頸部が器厚で9段階の様相を示す。前段階でみられたロクロ整形の甕は普遍的認められるようになる。小・中形には胴部外面にカキ目が施され器面が調整されている。42はハケ目の甕で中・南信地方からの搬入品であり栗毛坂遺跡群から小片がわずかに出土しているにすぎず全体像は不明である。57はロクロ整形酸化焼成の甑で群馬産と思われる。内面下方は面取りされ3条の沈線がめぐり、サナの受部は表面が剝離し荒れている。須恵器は坏A2・高台坏A・B・碗・皿・長頸瓶・甕が前段階に引き続き認められる。坏A2は口径13cm以下の小形品がみられるようになる。またA3が新たに出現する。灰釉陶器は光ケ丘窯式の東濃産である。

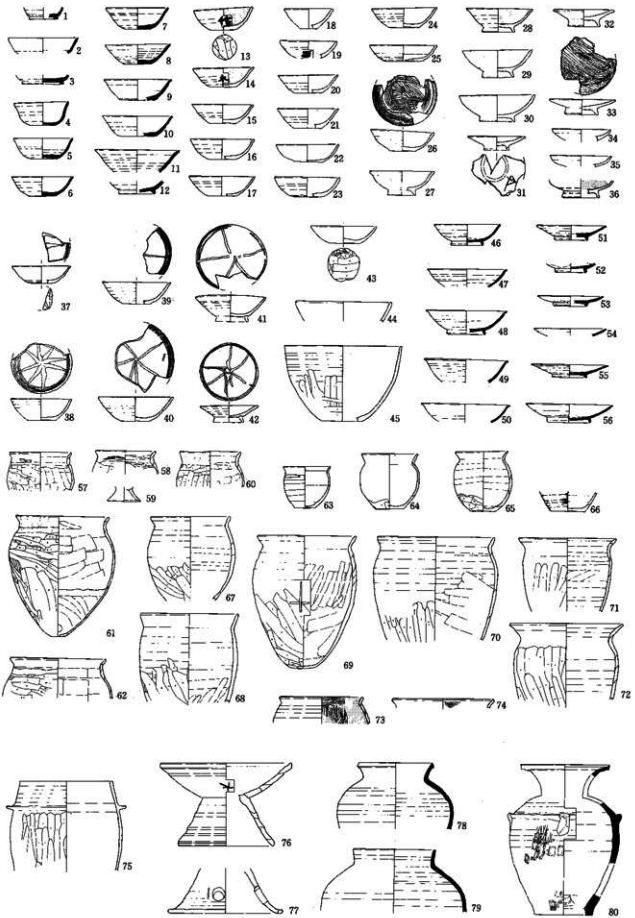


図19 9段階

図20　10段階

第9段階（図19）

土師器は黒色処理された食器が全体の7割を占め隆盛期である。従来の器種のほかに盤(34～36)がみられる。ミガキは37～42のように縦ミガキが暗文風に施されるものが目立つ。また、新たにロクロ整形後未処理の土師質の坏A(43)が極わずかではあるが登場する。これは黒色処理の坏A2と同様の形態を示す。そのほかロクロ整形酸化焼成の大型盤76・77があり脚部には透かしが入るものがある。甕Ⅲ4（61・62）の口頸部は「コ」の字が退化し始める。小形甕(57～60)には口頸部の器厚化が目立つ。ロクロ甕には71・72のように口縁部に最大径をもつタイプがみられる。小形甕にはより小さなタイプもみられる(63)。また、小・中形甕にはカキ目が施されないものが増加する。その他の煮沸具には新たに羽釜が出現する。後の段階で普遍的に認められる羽釜は横ナデ整形されるが、75は鍔から口縁端部にかけ明瞭なロクロ整形が施されることから群馬県産と考えられる。そのほか内面をミガキ黒色処理されたロクロ甕（73・74）が認められる。

須恵器坏は整形が雑で低火度還元焼成され土師器よりもその温度は低い。器種は前段階と同様なものがある。貯蔵具は食器に比べ焼成は良好で短頸壺（78・79）・四耳壺（80）・甕があるが、80は酸化焼成されている。本段階をもって須恵器は消失する。灰釉陶器は光ケ丘1号～大原2号窯式の東濃産である。

第10段階（図20）

本段階以降住居址の検出数は激減し各段階2～3軒程度であった。そして各住居址から検出される遺物数は前段階に比べ少ない傾向にあり、土器の器形変化や共伴関係を把握できない部分が生じた。

土師器の食器類はミガキや黒色処理をしないロクロ整形後未処理の土師質の食器類（7～14）が確実に出土するようになる。黒色処理の食器類は縦ミガキが省略されるものが目立つ。1～3本の単位で4～6方向の放射状に暗文とも呼べそうなミガキが認められる。特に5は2本単位の4方向の縦ミガキの間に螺旋状の暗文が施されたり、12のように縦ミガキが「∞」の字を組み合わせたような暗文など、縦ミガキは既にミガキ本来の意図はなく模様（暗文）と化している。しかしすべてが同様の傾向を示すわけではない。坏A2は前段階までみられた口径13cm前後の口径をもつ坏は認められず12cm前後の口径をもつ坏のみとなり小形化が認められ、大形の坏はほとんどみられなくなる(図3)。碗はほぼ同法量を示す。皿はほとんどみられなくなる。土師質の食器は黒色処理坏A2と同器形・同法量を示すが、12・13のようにミガキは施さ

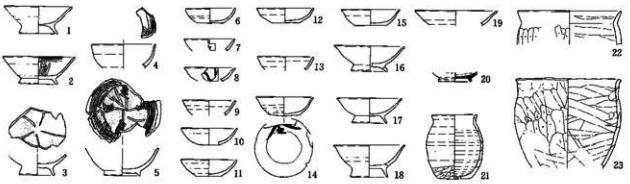


図21 11段階

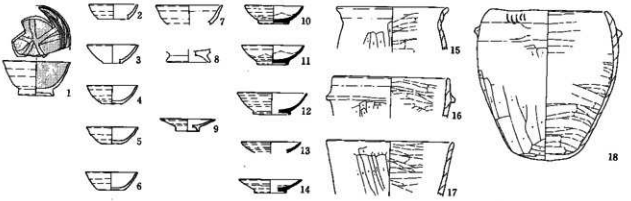


図22 12段階

れるが黒色処理されない双方の要因をもつものがこの時期にのみ認められる。甕はⅢ5（19・20）で頸部はほとんど退化してしまう。ロクロ甕は器厚化し頸部はあまり絞られなくなり口縁部に最大径が移る。羽釜A2（26）は鍔から口縁端部にかけての整形は横ナデされる。灰釉陶器（15～17）は大原2号窯式に相当する。

第11段階（図21）

土師器の食器類は土師質の食器63％が黒色処理の食器34％を上回るようになる（図1）。土師質坏Aは小形化の傾向がある。黒色処理の食器はミガキに雑なものが多く3～5のように縦ミガキが暗文風を呈するものが多くみられる。碗には“深碗”タイプ（4・5）がみられるようになる。また、黒色処理碗・土師質碗関係なく碗の高台に高いものが認められる。甕は前段階までみられた所謂“武蔵型”は認められなくなり、その量も激減する。23の下半部は前段階の面影を残すものの肩部から口縁部にかけてはわずかに内傾して直立し、口縁端部はわずかに外反する程度である。ロクロ甕が多く22の様にいっそう器厚になる。小形甕はカキ目が施されず頸部は緩やかに外反するようになる。

第12段階（図22）

土師器の黒色処理の食器の量は減少傾向にある。碗は“深碗”タイプ（1）が中心となる。土師質坏は小形化がいっそう進行する。碗（7・8）には器厚化が認められる。甕・羽釜などの煮沸具は全般に胎土に砂粒が多く混入し粗悪化する。甕については段階を通じて検出される特定の器種は見出せない。ロクロ甕は存在するだろうが検出されなかった。羽釜は10段階A2と同様のプロポーションを示すが鍔から口縁端部にかけ若干短くなり端部は丸く、器厚化が認められる。18の外底部はヘラケズリされる。新たに胴部から口縁

端部にかけて直線的に若干開きながら直立するB (16) が認められる。

灰釉陶器 (10~14) は虎渓山1号窯式に相当する。

第13段階 (図23)

土師器の食器は前段階と同様の傾向を示す。6～8の土師質坏Aの内底部にはロクロ整形の仕上げに"コテ"が当てられている。片口鉢は従来のものとは異なり口縁部がやや内湾し端部は丸く器高が高い(13)。ロクロ甕にはわずかではあるが小・中形が認められる。口縁部は短くなり頸部の屈折に鋭さがなく外反して立ち上がる (19・20)。大形は小・中形とは異なり、21・22などのように口径が大きくなり短胴化するが形態的に11段階の22の系譜をひくものと思われる。しかし整形の特徴であるロクロ整形は肩部から口縁端部にかけて不明瞭ではあるが施される。羽釜にはA1 (23)・A2 (24)・B (25) が認められる。26は口縁端部に鍔が付く形態で尾張・三河方面で使用される甕に類似することからその方面からの搬入品と思われる。灰釉陶器は虎渓山1号窯式に相当するものが中心で丸石2窯式 (16) がわずかに認められる。

第14段階 (図24)

土師器の黒色処理の食器量は減少傾向にある。坏・碗・皿が共伴する。土師質の坏Aは小片が中心で本段階をもって認められなくなる。新たに小皿 (1～6)・坏B (13~16)・小碗 (7) が共伴して登場する。坏Bは口径約14 cm 前後をはかり底径が比較的小さく直線的に口縁部にいたる。小碗は小皿と同様の口径を示し高い高台が付く。ほかに碗・皿が共伴するが特に全段階と変化は認められない。25の鉢は内外面ともに削られ口縁部は内湾し、端部は丸くつくられているが黒色処理はされていない。煮沸具ではロクロ小形甕・羽釜A2がある。ロクロ甕の底部 (13段階22のような) と思われる粘土盤状の底部のみが検出され、その外面には荒砂が一面に付着し「砂底」を呈している。

第15段階 (図25)

土師質の食器には小皿・小碗・坏・碗・皿が認められる。小皿は本段階以降16段階にかけ小形化してゆく。坏には前段階に比べ底径の広いもの (11) が多くなる。そのほかに小皿と同じ位の最大径をもつ無頸壺状の土器 (9) が認められる。煮沸具は羽釜のみ検出された。羽釜はA2・Bのほか鍔が全周せず4か所に分けて取り付けられたCの形態 (23・24) が認められるが全体像は不明である。灰釉陶器は皿 (18)・短頸壺 (19) があり丸石2号様式に相当する。

第16段階 (図26)

土師質の食器には前段階と同様小皿・小碗・坏・碗・皿が認められる。甕はロクロ整形の小形甕 (14) がわずかに認められる。15～17は口縁端部にかけロクロ整形されず横ナデされている。整形方法は異なるが器形の系譜を13段階の21・22の甕に求められると思われることから、本誌ではとりあえずロクロ甕として扱う。羽釜は器厚で胎土は粗悪なうえ低火度焼成されていることからもろく破片は多いものの全体像は不明である。上部は小さく簡略化された鍔が付き口縁端部まではいっそう短くなる。灰釉陶器の皿 (13) は丸石2号様式に相当する。

第17段階 (図27)

本誌で継続して確認される最後の段階で北山寺3号住居址のみがこれに相当する。内外面黒色処理の碗、土師質の小皿・坏・碗・鉢がある。特に小皿は前段階までのものとは異なり口径に対し底径が大きく、器

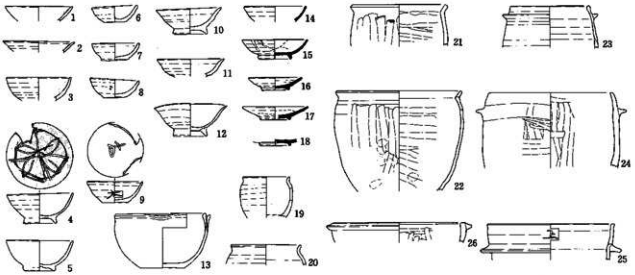


図23　13段階

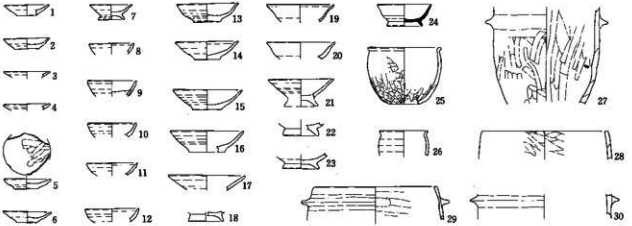


図24　14段階

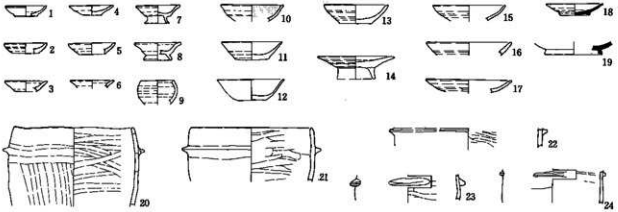


図25　15段階

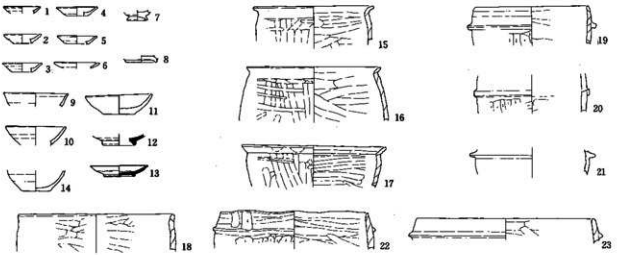


図26　16段階

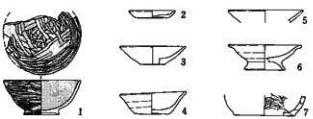


図27　17段階

高はいっそう低くなる。このプロポーションは後の中世の土師質小皿で通称“カワラケ”のタイプに相当するものと思われる。

オ　年代観について

設定した段階の土器群に実年代を与えることは非常に困難であり、当遺跡で検出されたものおよびその他の遺跡で検出されたものなどからは実年代を推定し得る資料はない。従来より県内で刊行されてきた該期を対象とした報文には土器編年が示され年代基準が設けられてきたが、実年代を知りうる木管・漆塗文書などの紀念銘をもった資料は皆無に等しい。飛鳥・藤原京の土器編年や灰釉陶器の窯式資料の援用であったり、古銭などのかなり制約を受けた資料からその基準が得られているが現状である。当遺跡からは皇朝十二銭のひとつの隆平永寶(796年初鋳)が１枚がC地区24号住居址から、B地区では遺構外から神功開寶(765年初鋳)が１枚検出されているのみであるが、その制約から段階に比定される年代とほぼ1世紀近い時間差が認められ、土器の上限を決めうる資料としてのみ効果をもつにすぎない。

やはり本誌においても上記の現状と同様直接的に年代を求めることはできない。しかし、間接的ではあるが基本的にできうるかぎりの好条件を備えた資料を用いて幾つかの序列段階に対し年代の想定を試みたい。

第１段階

本段階の土器様相の中でメルクマールとなるのは須恵器坏（5・6）・高台坏（3・4）・蓋（1・2）・土師器坏（7）などである。松本市南栗遺跡SB626号住居址からは「美濃国」刻印の須恵器蓋が検出されている。これは岐阜市老洞１号窯と朝倉窯で生産されたことが知られその操業は８世紀第１四半期とされている。

本段階の土器様相はSB626号住居址に近似する。蓋（1・2）は口径20 cmの大型で内面に明瞭な“かえり”がつく。“つまみ”は中央がくぼむいわゆる“環状つまみ”が付くもので群馬県では8世紀第1四半期における須恵器蓋の一大特徴である。土師器坏（7）もやはり群馬県からの搬入品で群馬県内の8世紀前半中に限って認められる形態である。

第8段階

御代田町根岸遺跡H—13号住居址からは「饒益神寶」(859年初鋳)が出土することから9世紀後半を上限とする年代が想定される。その土器様相は本段階の様相と近似することから9世紀後半に位置づけておきたい。

第17段階

本段階に相当する北山寺遺跡2号住居址出土の小皿（2）は、群馬県前橋市鳥羽遺跡SK—322土坑出土の皿形土器に類似する。SK—322土坑は遺構内に浅間山B軽石が底から15～20 cm上位で確認されており遺構構築から降下までの期間は極めて短く、B軽石の降下年代を天仁元年(1108年)を定点に近接する年代観が与えられ、12世紀第1四半期として考えられていることから本段階を12世紀第1四半期とした。

カ　まとめ

以上8世紀初めから12世紀にいたる古代の土器様相について述べてきたが、佐久地方の土器の様相は県内において独自な傾向を示す。端的には当地方の在地の土器は北関東系(群馬県)の甕と県内食器の系統とによって構成されていることである。食器は主に県内系統の傾向を示すが、古墳時代後期から奈良時代初めにかけては群馬県からの搬入品が多く、9世紀代を中心にみとめられる須恵器の高台坏Bは群馬県の影響が多分にあるように思える。また、煮沸具である甕は古墳時代後期に当地方の在地の甕と共伴するようになり、8紀前半中には在地の甕に変わり10世紀初めまで在地の土器として使用されるようになる。10世紀以降も群馬県産と思われる羽釜が搬入することからも群馬系(関東系)文化要素を多分にもち、また、影響下にあったものと考えられる。

土器の変容からみると、9世紀前半（4～5段階）には碗・皿の器種が確立し、坏・高台坏とともに須恵器・土師器（黒色処理）が生産され、9段階をもってそのピークを迎え、以後須恵器の生産は消滅する。

10世紀始め須恵器の生産は終わり、黒色処理の食器生産も減少傾向に向かうと、新たに土師質の食器が生産されるようになるが、その量は9段階までの須恵器・黒色処理の食器に比べ多いものではない。また坏には大小の規格化された法量分化はなく14段階に向けその法量はしだいに小さくなってゆき、古墳時代以降食器の中心となっていた坏は食事に不適当なものと化して行く。これに対し碗などの器種がそれに代わるような気配は認められなかった。

14段階からは新たに土師質の小皿・坏Bが生産されるようになる。この2者の器形変化は17段階に、後の中世土師質土器（カワラケ）を思わせる器形へと変化する。

土師器の甕は1段階から9段階にかけて（7～10世紀初め）はいわゆる“武蔵型”が在地の土器として普遍的に使用され9段階以降羽釜・ロクロ甕がその中心になるが、12～13段階（11世紀前後）頃に胎土が粗雑化した粗悪品となってゆく。

このようなことから8世紀以降須恵器・黒色処理の食器は10世紀初めをもって消滅または減少し、それ以降従来の器形（坏）の用途が徐々に変質してゆき、11世紀前半（14段階）頃新たな食器構成（土師質の小皿・坏B）が表れてくる。つまり10世紀初め頃までは「律令的食器様相」、11世紀前半に「中世的土器様相」が始まり12世紀初め頃ほぼ祖形が確立し、その間は“移行期”もしくは“模索の時期”と考えられる。

また後述する集落変遷にもその構造に、10世紀初め頃に大きな画期が認められる。

註１　センター報文の『吉田川西遺跡』・『松本市内その１　総論編』では、内面黒色処理の食器を黒色土器Ａ、内外面黒色処理の食器を黒色土器Ｂとしている。
註２　西　弘海　1982年　「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』
註３　10段階以降遺構数の激在と黒色処理土器の減少から、図７・22～27でも認められるように検出されない場合が多いため、表１では11段階以降ミガキの状況は不明瞭であり捉えにくい。
註４　県内では堤氏（1987）、群馬県では桜岡氏（1987）において甕の器形変化を表わされている。本変遷においても同様な傾向が捉えられる。

参考文献

一宮市史編纂室　1974　「清郷遺跡」『新編一宮市史資料編４』「一宮市史」
川上　元　1987　「土師什器の展開と終焉」「中部高地の考古学１」
小平和夫　1990　「古代の土器」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４－松本市内　その１－　総論編」
　　㈶長野県埋蔵文化財センター
小林真寿　1989　「所謂「北信型の甕」を考える」「佐久考古通信」49号
小山岳夫　1984　「若宮遺跡」　佐久市教育委員会
小山岳夫　1985　「野火付遺跡」　御代田町教育委員会
斉藤孝正　1989　「灰釉陶器窯の一様相」「美濃の古陶　NO.３」　美濃古窯研究会
桜岡正信　1987　「古墳時代（中期）－奈良、平安時代の遺物」「上野国分僧寺・尼寺中間地域」
　　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
笹澤　浩　1975　「十二ノ后遺跡」「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－諏訪市内　その４－」
　　奈良平安時代の土器編年
笹澤　浩　1988　「古代の土器」「長野県史　考古資料編　全１巻(4)」　長野県史刊行会
高村博文　1989　「佐久地方の古代土器模相について－坏・椀の変化を中心として－」「佐久考古通信」47・48号
高村博文　1988　「佐久地方の平安時代土器編年試論」「佐久市廃沢・馬石」佐久埋蔵文化財調査センター・教育委員会
堤　隆　1987　「前田遺跡における奈良・平安時代の土器様相」「前田遺跡」　御代田町教育委員会
堤　隆　1988　「十二遺跡における土器様相」「十二遺跡」　御代田町教育委員会
堤　隆　1989　「根岸遺跡における土器様相」「根岸遺跡」　御代田町教育委員会
中沢　悟　1981　「出土土器の分類と編年」「清里・陣馬遺跡」　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
西　弘海　1982　「土器様式の成立とその背景」「考古学論考」
花岡　弘　1983　「曽根城遺跡」　小諸市教育委員会
原　明芳　1987　「信濃における食器の系譜－古代から中世へ－」「文化財信濃」14－３
原　明芳　1987　「松本平における平安時代の食器具－変化とその背景の予察－」「信濃」39－４
原　明芳　1989　「吉田川西遺跡における食器の変容」「吉田川西遺跡」　㈶長野県埋蔵センター
若尾正成　1987　「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」「美濃の古陶　NO.１」　美濃古窯研究会
綿貫邦男　1988　「鳥羽遺跡出土の土器序列について（私案）」「鳥羽遺跡Ⅰ･J･K区」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

表2　段階別住居址一覧

実年代	段階	代表住居址	栗毛坂B地区	計	栗毛坂C地区	計	他の遺跡	灰釉陶器
	0		106.107.108.112.115.117.128.130.157.158.	10				
700	1	B-15.39	15.27.39	3	17	1		
	2	B-06.28.	06.28.32(3軒入れ子)	2				
	3	B-05.09	05.09	3				
800	4	B-04	04	1	23.36	2		
	5	B-150	16.19.33.37.41.111.124.126.150	9	01.08.21.32.35	5		
	6	C-12	14.21.31.36.42.104.119.125.	8	02.07.12.16.22.26.27.28.30.33.40	11		黒笹14
	7	C-25	11.18.23.25.43.142.146.148.152	9	03.09.11.14.25.29.31.41	8	DBW-03	黒笹90
900	8	C-18.34	10.24.45.103.105.129.133.135.139.141.143.144.	12	04.05.10.13.15.18.20.34.42	9	DBW-01.02	光ケ丘1
	9	B-44.120	03.12.13.22.29.30.40.44.116.120.122.127.132.134.136.137	16	24.19	2	DHN-04 DNN-03.06	光ケ丘1・大原2
	10	B-110	102.110	2			DHN-03 DNN-01.05	大原2
	11	B-109.151	109.151	2			DNN-02	
1000	12	DNN-04 B-118	118	1			DNN-04	虎渓山1
	13	B-149	114?.149.156	3				虎渓山1
	14	B-101.145	101.140.145	3			DKM-01.04	
	15	B-138.C-06	35.121.138	3	06	1		丸石2
1100	16	DKY-01					DKY-01	
	17	DKY-02					DKY-02.03	
	不　明		07.34.123.131.147.154		43			
	特殊遺構		20.25.26.134					

B・C＝栗毛坂遺跡群B・C地区，DKY＝北山寺，DHN＝東称ぶた，DNN＝西称ぶた，DKM＝厩巻，DBW＝桜杷坂

図版使用の土器一覧

図8　甕分類変遷図

Ⅰ　B地区－ 108住（1）
Ⅱ1　B地区－ 27住（2）
Ⅱ2　B地区－ 6住（3）
Ⅱ3　B地区－ 5住（4）
Ⅱ4　B地区－ 4住（5）
Ⅱ5　B地区－ 150住（6）
Ⅲ1　C地区－ 28住（7）
Ⅲ2　C地区－ 3住（8）
Ⅲ3　C地区－ 34住（9）
Ⅲ4　B地区－ 137住（10）
Ⅲ5　B地区－ 110住(11, 12)
Ⅳ　B地区－ 151住（13）
（B・C地区は栗毛坂遺跡群）

図9　ロクロ甕変遷図

6段階　C地区－　40住（1）
8段階　C地区－　15住（2）18住（3）
9段階　B地区－　136住（4）03住（5）
10段階　西弥ぶた－　1住（6）
B地区－　102住（7）
11段階　B地区－　151住（18）
13段階　B地区－　149住（9，10）
16段階　北山寺－　1住（11，12）
（B・C地区は栗毛坂遺跡群）

図10　羽釜変遷図

9段階　B地区－　3住（1）
10段階　B地区－ 102住（2）
12段階　B地区－ 118住（3，4）
13段階　B地区－ 149住（5，6，7）
14段階　B地区－ 101住（8）
15段階　B地区－ 138住（9）
C地区－　6住（10）
16段階　北山寺－　2住（11，12）
（B・C地区は栗毛坂遺跡群）

図11～27

1段階　B地区－　15住（3．4．13）、27住（10．11）、39住（1．2．5．6．8．9．12）
C地区－　17住（7）
2段階　B地区－　6住（1～4．6．7．9～14）、28住（5．8）
3段階　B地区－　5住（15～8．12～14）、9住（2～4．9～11）
4段階　B地区－　4住（1～7．9．10～13．15．16）
C地区－　23住（8．14．17）
5段階　B地区－　19住（1．6．10．16）、33住（9．11．12．15．22）、150住（2～5．7．8．13．14．17～21．23～26．28）
6段階　B地区－　14住(7．10～16．18．21～25．31～36．39．40．43．45～47．57．58．62．69．70)、21住(26．42．53．54)、36住（38．52）、104住（67）、119住（27）
C地区－　12住(3～5．8．9．17．19．20．28～30．37．41．44．48～50．55．59．60．63．68)、16住(1．2．6)、22住（61）、27住（51．56）、28住（64）、40住（65．66）
7段階　B地区－　11住（49）、18住（10～12．14～16．20．22～25．34．36．41．44．46．48）、142住（32．38）、146住（50）、148住（37．39．42．45）、152住（17．18）、特5号（13．19．27．28．30．31）
C地区－　3住（1．3．40）、9住（2．7）、11住（5．6．26．33．47）、14住（4）、25住（8．9．21．29．35．43）
8段階　B地区－　10住（10～12．15．17．23．24．34．36．53．57）、105住（1．6．7．48．56）、135住（60）
C地区－　15住（5．18．33．55．43）、18住（8．9．16．19～22．25～32．35．37～41．44～47．50～52．54．61）、20住（2．4．42．58．59）、34住（13．14．49）、42住（3）
9段階　B地区－　3住（72．75）、22住（45）、40住（47．48．55）、44住（4．6．7．11～17．28．37．39～42．46．52．60．63．66．70．79）120住（1．2．3．5．8～10．18～27．29．32～35．38．43．44．53．54．56～59．74．80）、132住（64．73．76～78）、134住（65）、136住（67～69）、137住（61．62）、43溝（36）
C地区－　19住（31．71）
10段階　B地区－　102住（1．5．25．26）、110住（2～4．6．9～11．15～20．22．24）
西弥ぶた－　1住（7．8．12～14．21．23）
11段階　B地区－　109住（1～3．11～16．20）、151住（4～10．17～19．21～23）
12段階　B地区－　118住（2．7．8．12．13．15～18）
西弥ぶた－　4住（1．3．4．5．6．9～11．14）
13段階　B地区－　149住（1～26）
14段階　B地区－　101住（3．4．21～24．29）、145住（1．2．5～20．25～28．30）
15段階　B地区－　35住（4．7．10．12．15）、138住（1．8）
C地区－　6住（2．3．6．13．16～19．21～24）
16段階　B地区－　153住（2）
北山寺－　1住（1．7．8．10～12．15～17．21）、02住（3～6．9．13～14．18～20．22．23）
17段階　北山寺－　3住（1～7）

（B・C地区は栗毛坂遺跡群）

(2) 栗毛坂遺跡群の文字関係資料

ア はじめに

今回の調査ではB地区、C地区を含めた栗毛坂遺跡群から合計196点の文字関係資料が出土した。その内訳は、墨書土器174点・ヘラ描土器16点・刻書土器5点・転用硯1点である。これは1987年に小山岳夫氏が集成（佐久市教育委員会「高師町・西大久保」）した佐久地方の墨書土器の4倍近くにも相当し、今後とも当地の古代史解明、集落復元に当たって、きわめて重要な資料となり得るものである。本文では主として墨書土器の分析を進め、ヘラ描土器、刻書土器もこれに加えた。

なお、墨書土器・ヘラ描土器・刻書土器については次のように定める。

墨書土器：文字、記号、絵画などが墨書された土器。朱墨、漆などによるものも通常これに含める。（今回の調査では確認されていない。）

ヘラ描土器：土器焼成前にヘラなどによって器面に文字、記号、絵画などが刻まれた土器。

刻書土器：土器焼成後に文字、記号、絵画などが器面に刻まれた土器。

イ 墨書土器

1） 概観（図1）

上記したように、栗毛坂遺跡群では合計174点の墨書土器が出土した。その内容は図1に示したとおりである。特定文字への集中傾向が強く、ほとんど遺構出土であり、時期的にも6段階から9段階にわたる。確認された文字は、『天』、『臭』、『七』など30種以上にのぼり、『上林』・『八十』など複数字句のものも見られる。墨書部位は当然ながら土器体部外面に書かれたものがもっとも多く、底部外面に墨書されたものが1点見られるが、土器内面に書かれたものは皆無である。また土器の種類は多数の内黒土器と少数の須恵器で全体の98.3%を占め、わずかに土師質土器がみられる程度で、灰釉陶器に墨書された例はない。器種としては坏、碗がもっとも多く、皿、高台坏と続き、盤、甕類にはわずかにヘラ描きされたものが存在するが墨書されたものは見つかっていない。墨書の向きについては不明なものが多いが、字形や運筆方向などから判断し、正位がほぼ半数となり、のこりは逆位と不明が二分する。

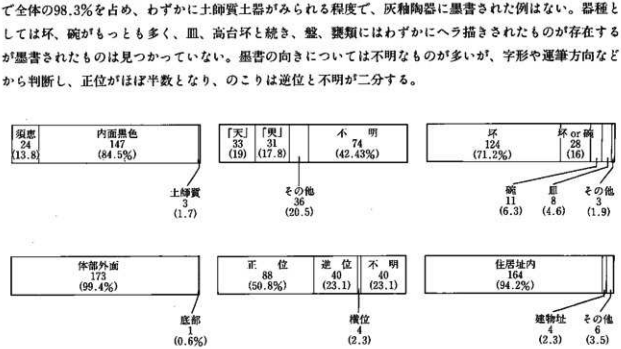


図1 墨書が施される器種と部位

2） 文字の分類（PL.255・256）

出土した174点の墨書土器のうち約4割は判読不能であり、残りの約100点については判読、あるいは字

B−10住−13
B−10住−14
B−11住−5
B−14住−17
B−14住−20
B−14住−22
B−14住−22
B−14住−26
B−14住−25
B−24住−8
B−30住−4
B−30住−10
B−30住−7
B−31住−7
B−31住−7
B−44住−6
B−44住−7
B−45住−8
B−45住−9
B−105住−13
B−105住−17
B−105住−16
B−109住−7
B−119住−4
B127住−5
B−132住−10
B−133住−21
B−133住−26
B−135住−3
B−139住−4
B−142住−3
B−148住−8
B−143掘−2
B−65溝−1
C−9住−16
C−14住−9
C−15住−5
C−18住−14
C−20住−14
C−25住−3
C−34住−2
0
5cm

図2　墨書の種類

句の確認ができた。それらの文字はわずかな例外を除けばほとんど単字句で、その意味を分類することには無理があるが、墨書のおおまかな傾向をつかむため、あえて分類を試みた。なおこの分類には便宜上ヘラ描、刻書も含める。

1　地　　名　『林』、『上林』、『上木』、『田』
2　人　　名　『忠』、『成』、『作』、『芳』
3　数　　量　『二』、『七』、『十』、『八十』、『万』、『大』、『中』
4　そ の 他　『而』、『天』、『肖』、『木』、『令』、『央』、『財』、『本』、『上』、『巾』、『古』
5　不明文字　『臾』　他

1　地名の、『田』は、御代田町野火付遺跡（御代田町教育委員会1985）の『大田』などと同様なものであろうが、後述する『臾』の可能性もある。『林』、『上林』、『上木』はすべて『上林』の変形と捉えることもできるが、残念ながら佐久地方の郷名、荘園名とのかかわりを予想させるものは出土していない。

2　人名については出土品すべてが単字句のため人名として断定できないが、どれも人名として多用される文字であるためここに含めた。

3　数量および大・小を表わす文字は、富士見町足場遺跡（長野県教育委員会1974）の『八十』、塩尻市吉田川西遺跡（長野県教育委員会1989）の『万』の出土例と同じように本遺跡群でも確認された。一個の坏にその両数字が墨書された例が出土している。また、『七』、『十』、『大』はヘラ描土器にもあり、これらは容量・サイズを表したものと考えたい。

4　その他本遺跡を代表する字句のひとつ『天』をはじめ多くのものが分類された中から、しっかりした文字で、分類不能のものを集めてみると松本市下神遺跡（長野県教育委員会1990）の『而』などと同様、呪符、吉祥句文字が含まれている可能性もある。

5　不明文字として、解釈不能の「読めない文字」を集めたが、単に字がくずれた末の産物とは考えられず、むしろ明らかに作られた文字や記号、呪符と思われるものが多数見られる。『天』とならんで本遺跡群から多出した『臾』は、田と人を分けて記した例も一点発見されており、本来的には人名としての意味を持っていたとも考えられるが、多数を占めるのでここに含めた。

以上、分類ごとのに概略を記したが、本遺跡群の墨書土器は人名・地名などの固有名詞を表したと考えられるものよりも、その他、不明文字に分類される呪符・吉祥句・記号と思われるものが多数を占めている。単字句の文字については、人名・固有名詞の短縮としてとらえられることが多いが、その短縮される人名、固有名詞はほとんど明らかになっていない。本遺跡群を代表する『天』・『臾』もそのような字句の短縮のなかで発生したことが十分予想される。しかし『臾』が示すように本来的な意味よりもむしろ、記号・吉祥句、あるいは呪符としての機能が優先されていたと考えたい。

3）　時期別分類

図3に墨書土器数量変化と竪穴住居址数の変化を示した。本遺跡群における墨書土器の初見は5段階からで、集落内の住居数の急増と一致する。またその衰退とともに11段階を最後に墨書土器は見られなくなる。以下、時期ごとに現れた墨書を示す。

5段階　『七』
6段階　『七』、『天、本』、『八十、万』、『肖』、『中』、『天』、『忠』、『肖、光』、『臾』、『二』、『名』
7段階　『央』、『天』、『七』、『中』、『財』、『臾』、『乏』、『中』、『全』
8段階　『天』、『上木』、『芳』、『木』、『尺』、

『而』、『臾』、『开』、『乞』、『仁』、『全』、『西』

9段階　『天』、『臾』、『九』、『作』、『木』

10段階　墨書なし

11段階　『令』

最初の5段階と最後の11段階を除けば、各期をとおして見られる字句は『天』と『臾』のみである。住居址の減少とともに墨書される字句も少なくなるが墨書土器最多期は、9段階となる。これは後にふれる土器投棄の結果であり、10段階の中断の後に現れる『令』はやや系譜を異にするようである。

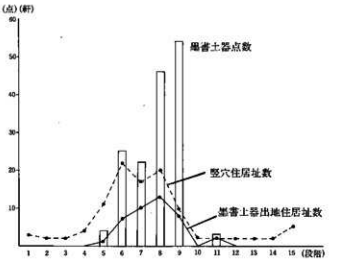


図3　墨書土器出土点数

ウ　『臾』・『天』をめぐって

土器に墨書された文字は、単なる容器管理のために具体的な施設名・人名・地名を記したものと、その集落内でのみ意味を持つ吉祥句や不可解な呪符を記したものとに分けられるという。この両者の差異は時間的変遷のなかでも看取され、前者は奈良時代から平安時代初期の限られた識字層によって書かれたもの、後者は平安時代中期以降に出現し、同一字句が集落内の多くの人々によって墨書されるという状況に一致するとされている。

先に述べたとおり、今回の調査で本遺跡群から出土した墨書土器のなかで大きな割合をしめる『天』・『臾』の土器は、不明確なものまで含めると『天』で33個体、『臾』は31個体におよぶ。これらの字句は今のところ隣接する佐久地方の諸遺跡からは発見されておらず、管見にふれたものとしては県内では中野市岩舟遺跡（註1）から『天』が1例、松本市北栗遺跡（長野県教育委員会1990）から『臾』に酷似した『臾』が2例知られているに過ぎない。

本遺跡群を代表する字句とも言える『天』、『臾』はさきに吉祥句、呪語の類としてとらえたがここで再び若干の考察を加えてみたい。

『臾』の墨書

別表1～4に示したとおり、10軒の住居址および3基の土坑などから31個体が出土している。特にB地区12号住居跡から11個体と集中して出土しており、これは全『臾』の35%に相当する。B地区12号住居址の墨書土器の中には図に示すとおり同一人物による執筆と考えられるものもあるが、複数の書き手の存在が予想され出土状況もやや特異である。

『臾』が墨書される土器は他の墨書土器と同様、内黒土器、須恵器の小形品に限られており、内黒土器坏が全体の80%を占める。もっとも日常的な器種への墨書といえよう。墨書方向は正位8個体・逆位23個体となっており、横位や底部への墨書はみられない。分布状況をみるとC地区からは全く出土しておらずB地区が主体のようである。時期的には6段階から9段階にわたるが最後の9段階に集中する。

『天』の墨書

総数32個体が12軒の住居址と1軒の建物址から出土している。特にB地区120号住居址と同133号住居址に際立った集中をみせ、120号住居址では11個体、133号住居址では7個体が確認されている。これは『天』の全出土量のそれぞれ34%、21%に相当する。とくに120号住居址の例は『臾』のB地区12号住居址にきわめて類似した出土状況を呈しており、集落内での墨書土器の性格について示唆的である。

図4　『臾』一覧

墨書される土器としては、内黒土器と須恵器の小形品のみであり内黒土器の坏が全体の91%を占め、残りは、内黒土器の碗、皿、須恵器坏の順となる。墨書方向としては一例を除いてすべて正位であり、『臾』の墨書などに比べきわめて統一的な感が強い。分布状況をみるとB地区に広く分布しているがC地区にはまったく分布していない。

時期的には『臾』と同じく、6段階から9段階までであり、最後の9段階に集中する。ところで『臾』の墨書土器には見られない『天』の特徴のひとつにヘラ描土器、刻書土器の存在が挙げられる。B地区30号住居址の例は上部を欠損しているため不安がのこるものの、ほかはすべて明瞭に読み取れるものである。

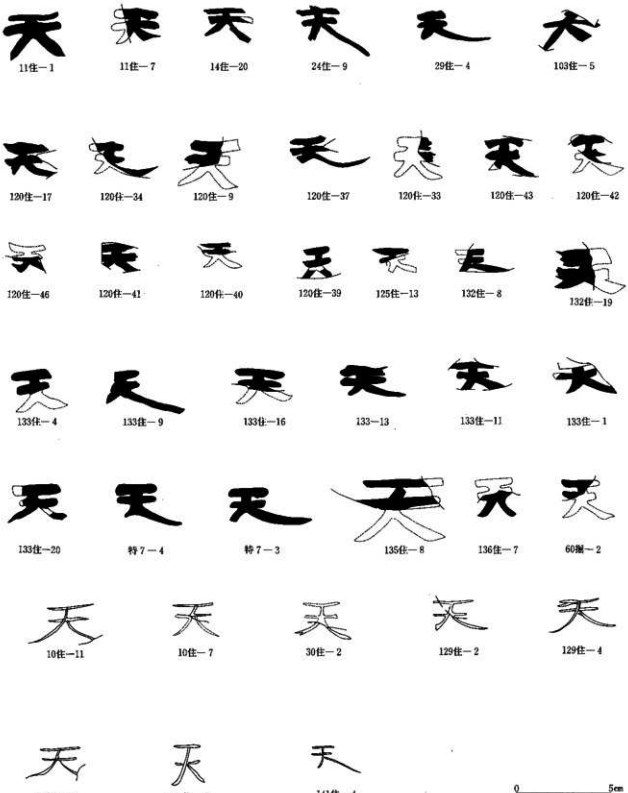


図5　『天』一覧

これらも墨書『天』と同様、内黒土器と須恵器にみられ、器種も同一である。刻書『天』は別としてもヘラ描土器は特注品と考えられ、単なる土器生産段階での目印というより、墨書土器のもつ特殊な意味、性格を最初から付加されたものと考えたい。したがって『天』はその背景にヘラ描特注品を発注することのできる集団または個人、あるいは土器製作にかかわる人々を取り込んだ集団を予想させる。

墨書土器を多出する住居址

『天』・『奥』の墨書土器が特定の住居址から多出していることは先に記したが、ここで再度住居址との状況にふれておきたい。

B地区12号住居址

広さ南北6.8m、東西6.0mで栗毛坂遺跡中の住居址としてはやや大形の住居址である。床面精査により、45号住居址の拡張が本址であることが判明した。遺物は覆土中から大量に出土したが小片が多く、床面、カマドなどに特殊な施設はみられず、12号住居址廃絶後、いわゆる土器投棄施設として扱われたようである。問題の墨書土器は22点出土し、明確でないものも含めると11点が『奥』である。これに対し『天』は1点出土したのみである。『奥』、『天』以外に判読可能な墨書土器は出土していない。遺物から8～9段階に比定されるが、土器投棄施設とすれば9段階としたい。

B地区120号住居址

広さ南北8.0m、東西7.5mで栗毛坂遺跡の住居の中では大形の住居址である。特殊な施設は確認されなかったが遺物は検出段階から多量に出土し、特に小片が覆土上層に多く見られ炭・焼土の分布する面も存在した。やはり住居址廃絶後、大量に土器が投棄され、さらに火が燃やされた状況が明らかである。

墨書土器は22点出土し、うち11点が『天』と判読され『天』以外に判読可能な墨書土器は出土していない。つまりこの住居址からは『天』しか確認されていないのである。時期は9段階に比定される。

B地区133号住居址

広さ南北3.5m、東西3.7mの一般的な規模の住居址である。床下に用途不明の小ピットを一基確認した以外に施設は存在しない。遺物は覆土下層から完形に近い遺物が比較的多く出土した。墨書土器は10点出土し、うち7点が『天』、1点が『奥』と判読され、残りは『开』、『上木』が各1点ある。時期的には8段階の住居址である。133号住居址の例はおくとしても、12号住居址と120号住居址の類似性は明らかである。また120号住居址の廃絶後のありかたも注目されよう。廃絶住居が土器捨て場として利用されることはしばしば目にすることであるが、同じく土器廃棄施設として機能した二軒の廃絶住居に本遺跡群を代表する二種類の墨書土器がわずか1例の例外を除いて、極めて明確に分別されて同時期に投棄されている。

これは、異なる二つの集団がかつて栗毛坂遺跡群内に存在しており、同一集落内で互いに交流を行いつつも、同化することなく、明確な一線を保って共存していたことを示すものと考えたい。では、この二つの集団は時間的な変遷のなかでどのように推移したのか。次に『天』と『奥』の墨書土器の分布状況を時間的変化のなかでみてみたい。

『天』・『奥』の時期別分布（図6・7）

6段階　B地区に『天』が3軒。そのうち2軒はやや大形の住居址である。

7段階　B地区に『天』が1軒。『奥』が2軒。『奥』の25住は特殊遺構であるが一応示した。『奥』が『天』よりも後発であることが明らかである。

8段階　『天』が4軒、『奥』が2軒であるが、ヘラ描『天』・刻書『天』をふくめれば『天』は7軒となる。『天』はほぼ遺跡全体に拡がり『奥』も遺跡中央に占地する。

9段階　『天』が5軒、『奥』が4軒。本遺跡の最盛期。

10段階　『天』、『奥』とも確認されていない。

エ　墨書土器と集落の時間的変遷

先に述べたとおり、墨書土器は大きく二つのタイプに分類されるが、本遺跡の『天』・『奥』は有力戸を中心として結合する集団の紐帯としての墨書土器であり、集団の象徴としての吉祥句的な、あるいは呪符

図6　『天』・『臭』の時期別分布（1）（1：1,500）

図7 『天』・『兄』の時期別分布（2）（1：1,500）

的な字句であろう。また川江秀孝氏の指摘（註２）のように祭祀的な意味も付加されていたことも予想される。

『男』・『天』の墨書土器を中心に栗毛坂遺跡群の文字関係資料について述べてきたが最後に本遺跡群の古代集落の変遷を物語風にふれてまとめとしたい。

当初、栗毛坂遺跡群内には明確な字句の墨書土器を持った集団は存在していなかった。５段階にいたって急激に住居址数が増加するなかでＢ地区、Ｃ地区ともに墨書土器を持つ人々が現れる。Ｂ地区にはまず『天』が、やや遅れて『男』のグループが定着した。両集団とも住居を増やしながら発展して行くが、その住居数よりも特注品としてのヘラ描『天』土器の存在が示すように『天』の集団の優位性となる。しばらく二つの集団は共存の道を歩むが、ほぼ時を同じくして両集団とも解体・移動を余儀なくされる。その時点でそれぞれの集団の中核となったＢ地区12号住居址・120号住居址への土器の投棄が行われた。また特定の墨書土器を持たなかったＣ地区の人々もこの例外ではなくＢ地区よりも早い段階で解体してしまった。もはや栗毛坂遺跡群内には集団の紐帯としての墨書土器を持つ人々は存在せず、Ｃ地区は廃村となり、Ｂ地区もわずかに残ったひとびとが１～２軒の住居址をのこすのみとなる。いかなる理由のもとに彼らは移動しなければならなかったのか。墨書土器を中心とする文字関係資料からは知り得ないが、それは一種の計画村落としての栗毛坂のムラの消滅であるとともに、墨書土器を、集団の紐帯としての文字を必要としない新たな体制への進展、確立をも意味するのであろう。

註１　金原　正　1989　『墨書土器』『吉田川西遺跡』長野県埋蔵文化財センター
註２　浜松市教育委員会　1980　『伊場遺跡遺物編２』

表1　栗毛坂遺跡群の文字関係資料（1）

墨　書

遺構番号	実測番号	種類	器種	部位	書き方	内外	文　字	段階	備　考
B地区出土の墨書									
10住－3	2	須	坏	体	逆	外	仁	8	
〃　－14	28	黒	皿	〃	正	〃	面	〃	
11住－1	8	須	蓋	〃	逆	〃	犬	〃	
〃　－4	1	黒	坏	〃	?	〃	?	7	
〃　－5	6	〃	〃	〃	正	〃	中	〃	
〃　－7	11	〃	皿	〃	〃	〃	天	〃	
12住－11	40	〃	杯	〃	逆	〃	臾	〃	
〃　－15	41	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
〃　－19	43	〃	〃	〃	正	〃	?	〃	
〃　－21	15	〃	坏	〃	逆	〃	臾	9	
〃　－29	115	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
〃　－35	39	〃	〃	〃	正	〃	〃	〃	
〃　－36	42	〃	〃	〃	横、逆？	〃	臾・？	〃	
〃　－37	105	〃	〃	〃	正	〃	臾	〃	
〃　－38	48	〃	〃	〃	逆	〃	〃	〃	
〃　－39	47	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
〃　－40	45	〃	坏or碗	〃	逆	〃	〃	〃	
〃　－41	46	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
〃　－42	25	〃	〃	〃	?	〃	?	〃	
〃　－43	50	〃	坏	〃	〃	〃	?	〃	
〃　－44	104	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	
〃　－45	44	〃	〃	〃	逆	〃	臾	〃	
〃　－46	108	〃	坏or碗	〃	正	〃	〃	〃	
〃　－47	109	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	天か
〃　－48	107	〃	〃	〃	逆	〃	?	〃	臾か
〃　－49	110	〃	〃	〃	?	〃	?	〃	
〃　－50	106	〃	〃	〃	逆	〃	?	〃	臾か
〃　－51	49	〃	〃	〃	?	〃	?	〃	
〃　－52	51	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	
〃　－59	61	〃	碗	〃	〃	〃	?	〃	
〃　－無	111	須	〃	〃	逆	〃	臾	〃	
13住－4	18	黒	坏	〃	横	〃	?	〃	臾か
14住－17	23	〃	〃	〃	正	〃	七	〃	
〃　－20	24	〃	〃	〃	正・逆	〃	本・天・？	〃	3字書され1字は不明
〃　－22	25	〃	碗	〃	正・逆	〃	万・今	〃	
〃　－23	22	〃	〃	〃	?	〃	?	6	
〃　－25	37	〃	坏or碗	〃	逆	〃	祀	〃	?
〃　－26	36	〃	〃	〃	横	〃	?	〃	肖か
〃　－27	38	〃	〃	〃	逆	〃	?	〃	
〃　－28	39	〃	〃	〃	?	〃	?	〃	
〃　－29	40	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	
18住－7	24	須	坏	〃	正	〃	?	7	七か
〃　－12	25	黒	〃	〃	?	〃	?	7	
24住－3	10	須	〃	〃	〃	〃	?	8	
〃　－8	12	黒	碗	底	―	〃	忠	〃	

種類＝須恵器→須、黒色処理→黒、土師質→土、部位＝体部→体、襲類＝土師器→土

表2　栗毛坂遺跡群の文字関係資料（2）

遺構番号	実測番号	種類	器　種	部位	書き方	内外	文　字	段階	備　　考
24住－9	11	黒	皿	体	正	外	天	8	
25住－1	9	須	坏	〃	〃	〃	臾	7	特殊遺構5に変更
〃　－2	13	黒	〃	〃	〃	〃	臾	〃	
〃　－4	12	〃	坏or碗	〃	逆	〃	?	〃	臾か
26住－3	9	〃	坏	〃	〃	〃	臾	8	特殊遺構6に変更
〃　－7	7	〃	皿	〃	逆	〃	臾	〃	
29住－4	4	〃	碗	〃	正	〃	天	9	
30住－4	1	須	坏	〃	横	〃	面	〃	
〃　－7	16	黒	〃	〃	正	〃	?	〃	10と同一字か
〃　－10	5	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	全か
〃　－12	7	〃	碗	〃	逆	〃	臾	〃	
31住－7	6	〃	皿	〃	正	〃	光・肖	〃	
40住－3	3	須	坏	〃	〃	〃	?	〃	臾か
〃　－5	22	黒	坏or碗	〃	逆	〃	?	〃	臾か
44住－6	3	〃	坏	〃	正	〃	作	〃	
〃　－7	32	〃	坏	〃	〃	〃	木	〃	
〃　－13	33	〃	坏or碗	〃	?	〃	?	〃	
〃　－14	23	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	
45住－4	3	須	坏	〃	逆	〃	臾	8	
〃　－5	20	〃	〃	〃	?	〃	?	〃	
〃　－6	13	黒	坏or碗	〃	〃	〃	?	〃	
〃　－7	18	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	
〃　－8	15	〃	〃	〃	正	〃	金?	〃	「金」又「全」か
〃　－9	16	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	「八」又は「今」か
〃　－10	12	黒	〃	〃	正	〃	臾	〃	
〃　－11	17	〃	坏	〃	逆?	〃	?	〃	臾か
〃　－12	19	〃	坏or碗	〃	?	〃	?	〃	臾か
103住－5	12	〃	〃	〃	逆	〃	?	8	天か
105住－3	11	須	高台坏	〃	〃	〃	?	〃	天か
〃　－13	16	〃	坏	〃	〃	〃	?・林	〃	上林か
〃　－16	36	黒	碗	〃	横	〃	成	〃	
〃　－17	17	〃	坏or碗	〃	逆	〃	上林	〃	
109住－7	15	土	坏	〃	正	〃	令	11	
111住－3	4	須	〃	〃	〃	〃	?	〃	七か
〃　－4	1	〃	〃	〃	正	〃	?	5	七か
〃　－6	6	黒	坏or碗	〃	?	〃	?	〃	
〃　－7	7	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	
119住－4	9	須	坏	〃	横	〃	史	6	
120住－9	33	黒	坏or碗	〃	正	〃	?	〃	天か
〃　－17	30	〃	〃	〃	〃	〃	天	9	
〃　－33	37	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	天か
〃　－34	31	〃	〃	〃	〃	〃	天	〃	
〃　－35	36	〃	〃	〃	?	〃	?	〃	
〃　－36	32	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	
〃　－37	35	〃	坏	〃	正	〃	天	〃	
〃　－38	34	〃	碗	〃	〃	〃	?	〃	

種類＝須恵器→須、黒色処理→黒、土師質→土、部位＝体部→体、褒類＝土師器→土

表3　栗毛坂遺跡群の文字関係資料（3）

遺構番号	実測番号	種類	器　種	部位	書き方	内外	文　字	段階	備　　考
120住−39	45	黒	坏or碗	体	正	外	天	9	
〃　−40	44	〃	皿	〃	〃	〃	?	〃	天か
〃　−41	42	〃	坏or碗	〃	〃	〃	天	〃	
〃　−42	40	〃	〃	〃	〃	〃	天	〃	
〃　−43	38	〃	〃	〃	〃	〃	天	〃	
〃　−44	49	〃	〃	〃	正?	〃	?	〃	
〃　−45	48	〃	〃	〃	正	〃	?	〃	天か
〃　−46	41	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	天か
〃　−47	46	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	天か
〃　−48	39	〃	〃	〃	?	〃	?	〃	
〃　−49	43	〃	〃	〃	正	〃	?	〃	
〃　−50	47	〃	碗	〃	?	〃	?	〃	
125住−13	17	〃	皿	〃	逆	〃	?	〃	天か
〃　−14	16	〃	坏	〃	正	〃	?	6	
127住−5	11	〃	〃	〃	正	〃	財?	9	
132住−7	17	須	〃	〃	〃	〃	?	〃	
〃　−8	18	〃	〃	〃	正	〃	天	〃	
〃　−10	20	黒	坏	〃	正	〃	血又之	〃	148−8と同系の字か？
〃　−19	19	〃	坏or碗	〃	〃	〃	天	〃	
〃　−27	21	〃	〃	〃	?	〃	?	〃	
〃　−28	16	〃	〃	〃	?	〃	?	〃	
133住−1	25	須	高台坏	〃	正	〃	?	〃	天か
〃　−2	23	〃	〃	〃	?	〃	?	〃	
〃　−4	7	〃	坏	〃	正	〃	天	8	
〃　−9	8	〃	〃	〃	〃	〃	天	〃	
〃　−11	18	〃	〃	〃	〃	〃	天	〃	
〃　−13	17	黒	坏	〃	正	〃	天	〃	
〃　−14	20	〃	〃	〃	逆	〃	臭	〃	
〃　−16	14	〃	坏or碗	〃	正	〃	天	〃	
〃　−20	27	〃	坏	〃	〃	〃	天	〃	
〃　−21	21	〃	坏or碗	〃	逆	〃	开?	〃	
〃　−26	29	〃	皿	〃	正	〃	未	〃	上木か
134住−3	4	〃	碗	〃	〃	〃	天	〃	特殊遺構7に変更
〃　−4	3	〃	〃	〃	〃	〃	天	9	
135住−3	4	〃	坏or碗	〃	正	〃	犬?	〃	
〃　−4	8	〃	坏	〃	逆	〃	?	〃	
〃　−5	3	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	
〃　−8	2	〃	坏or碗	〃	正	〃	天	〃	
〃　−9	1	〃	皿	体〜底	?	〃	?	8	
136住−7	6	〃	坏	体	正	〃	?	9	天か
137住−4	17	〃	坏or碗	〃	正?	〃	?	〃	
〃　−11	16	〃	〃	〃	正	〃	?	〃	九か
139住−3	6	〃	坏	〃	〃	〃	?	〃	
〃　−4	1	〃	〃	〃	〃	〃	嘗	8	判読できない
141住−2	3	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	
〃　−5	5	〃	坏or碗	〃	逆	〃	?	〃	

種類＝須恵器→須、黒色処理→黒、土師質→土、部位＝体部→体、褒類＝土師器→土

表4　栗毛坂遺跡群の文字関係資料（4）

遺構番号	実測番号	種類	器　種	部位	書き方	内外	文　字	段階	備　　考
141住－6	4	黒	坏or碗	体	逆	外	?	〃	
142住－3	5	〃	坏	〃	斜?	〃	中	7	判読できない
148住－8	2	須	〃	〃	逆	〃	宅	〃	
151住－5	13	土	〃	〃	?	〃	?	11	
〃　－6	14	〃	〃	〃	逆	〃	?	〃	
152住－4	7	黒	〃	〃	?	〃	?	7	
30建－2	1	〃	〃	〃	?	〃	?		
60建－2	1	〃	皿	〃	正	〃	?		天か
135建－1	3	〃	坏	〃	?	〃	?		
143建－2	2	須	〃	〃	逆	〃	巾		
65溝－1	1	〃	〃	〃	正	〃	?		皮か
241坑－2	2	〃	〃	〃	逆	〃	?		臾か
250坑－1	1	黒	碗	〃	逆	〃	臾		
〃　－2	2	〃	坏or碗	〃	〃	〃	?		
251坑－2	1	〃	坏	〃	〃	〃	?		臾か
〃　－3	3	〃	坏or碗	〃	〃	〃	?		
グリッド－28	25	〃	坏	〃	正	〃	?		中か
〃　－26	24	黒	坏or碗	〃	横	〃	?		
〃　－無	13	〃	〃	〃	?	〃	?		
Z　－3	7	須	坏	〃	正	〃	?		臾か
－4	5	〃	〃	〃	逆	〃	臾		
〃　－7	8	黒	坏or碗	〃	?	〃	?		
〃　－8	6	黒	皿	〃	正	〃	?		臾か
C地区出土の墨書									
9住－12	7	須	坏	体	横	外	名	7	
〃　－16	8	黒	碗	〃	正	〃	二	〃	
12住－16	42	〃	坏or碗	〃	?	〃	?	6	
〃　－17	43	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	
12住－無	20	〃	〃	〃	?	〃	?	6	
〃　－無	21	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	
〃　－無	22	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	
14住－9	14	〃	〃	〃	正	〃	名	7	
〃　－12	15	〃	〃	〃	?	〃	?	〃	
15住－5	19	須	坏	〃	正	〃	芳	〃	
18住－4	50	黒	坏or碗	〃	正	〃	?	〃	
〃　－14	20	〃	碗	〃	〃	〃	木	8	
20住－14	11	〃	坏or碗	〃	正	〃	?	〃	尺か
〃　－16	38	〃	〃	〃	〃	〃	?	〃	木か
25住－3	2	〃	坏	〃	〃	〃	金?	7	全か
34住－2	4	須	〃	〃	逆	〃	土	8	判読できない

種類＝須恵器→須、黒色処理→黒、土師質→土、部位＝体部→体、鍔類＝土師器→土

表5　栗毛坂遺跡群の文字関係資料（5）

ヘラ書

遺構番号	実測番号	種類	器　種	部位	書き方	内外	文　字	段階	備　　考
B地区									
10住－7	17	須	坏	体	正	外	天	8	
〃　－10	15	黒	〃	〃	〃	〃	本	〃	
〃　－11	16	〃	坏or碗	〃	〃	〃	天	〃	
〃　－12	24	〃	碗	〃	〃	〃	?	〃	
〃　－15	23	〃	鉢	〃	〃	〃	七	〃	
12住－53	52	〃	坏or碗	〃	?	〃	?	9	
18住－14	3	〃	皿	底	—	〃	×	8	
30住－2	2	須	坏	体	正	〃	?	〃	天か
129住－2	4	黒	〃	〃	〃	〃	天	〃	
〃　－4	5	〃	〃	〃	〃	〃	天	〃	
132住－37	36	土	大形盤	〃	逆	〃	六?	9	「六」又「大」
133住－17	13	黒	坏or碗	〃	正	〃	天	8	
〃　－24	28	〃	皿	〃	横	〃	天	〃	
136住－14	16	土	甕	〃	逆	〃	十	9	
149住－9	17	土	坏	底 体	— 正	内 外	古 本	13	
〃　－25	25	〃	羽釜	〃	正	外	上	〃	
61坑－無	1	黒	坏or碗	〃	?	〃	?		
グリット－11	15	土	羽釜	〃	正	〃	大		
C地区									
14住－3	4	須	坏	底	—	外	×	7	

刻　書

遺構番号	実測番号	種類	器種	部位	書き方	内外	文　字	段階	備　　考
B地区									
22住－6	18	黒	坏or碗	体	横	外	?	9	
141住－4	6	〃	碗	〃	正	〃	天	8	
C地区									
12住－7	1	須	坏	体	横	外	木	6	
19住－13	24	黒	皿	〃	正	〃	?	9	
42住－12	15	〃	坏	底	—	〃	本	8	

種類＝須恵器→須、黒色処理→黒、土師質→土、部位＝体部→体、甕類＝土師器→土

(3)　遺構の分析

ここでは、今回調査した栗毛坂遺跡群の中でも立地条件・遺構の中核となる時期などの点で、性格を異にすると思われるＡ地区には触れず、おもに主体となったＢ・Ｃ地区の古墳～平安時代の遺構をその対象とし、概要を記す。

ア　竪穴住居址

１）時期別軒数推移

Ｂ・Ｃ地区で検出された竪穴住居址は、おもに出土遺物の様相から０～16段階にそれぞれ時期比定される。遺構の分布状況から明らかに分割される両地区の時期別軒数推移は、図１に示した通りになる。Ｂ地区においては、古墳時代以前（０～１）段階後住居軒数が一旦減り、５段階以降９段階をピークに増加をみせ、10段階以降極端に減少する。この傾向はＣ地区にも認められるが、Ｂ地区とはその増加減少の波が若干早いことが看取される。ちなみに、その後中世の段階を迎えるにあたり、Ｃ地区には同段階の遺構は認められない。このような違いは両者の集落の成立にかかわる相違である可能性が高いと思われる。

なお、その分布・消長については別項で触れる。

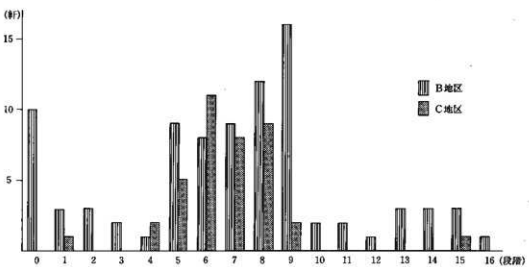


図１　住居址段階別軒数

２）規模・形状とその変遷

竪穴住居址の規模・形状については推定可能なものも含め図２に地区別の全様と、図３・４に段階別の様相を示した。数値の取り方は、カマドを通る竪穴住居址の中軸線上の床面の差し渡しを縦軸（主軸）に、それと直行する方向の床面の差し渡しを横軸にして計測した。規模についての類型は行なわないが、便宜的に１×１ｍ単位をグラフ内に示してある。形状についてもあえて細分せず、感覚的に方形・長方形としてある。以下、図を元に諸段階の動向を概略する。

Ｂ地区

１段階以前。規模はおおむね３別される。４×４ｍ前後・５×５ｍ前後・それ以上の規模のものである。形状は規模の小さいものには方形を呈するものが多いことが指摘できる。また長方形に近いものは５×５ｍ前後の住居址には主軸方向に長いことが認められる。

２～４段階。住居址軒数も少なく、６号住居址のように拡張を示すものも認められるためその傾向はつ

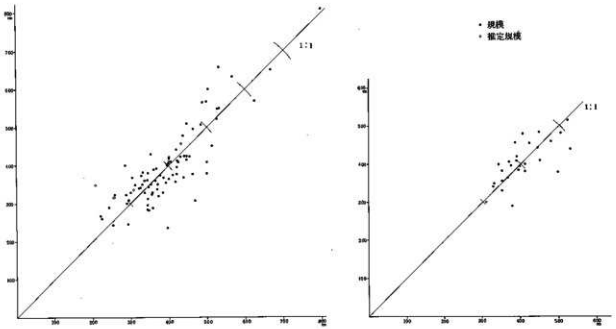


図2　住居址規模

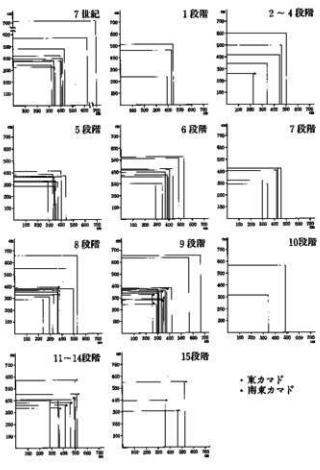


図3　住居址段階別規模（B地区）

かめない。形状が方形を示すようである。

5段階。軒数の増加が認められる段階であるが、一様に4×4m周辺およびそれ以下の規模にまとまる傾向が認められる。このため床面積は一様に減少し小型化する傾向である。形状は、直行軸方向にやや長い一群が存在するが、長方形と明瞭に分けられるものではない。

6段階。4×4m周辺の規模にまとまるものと、5×5mのやや規模の大きいものが出てくる。形状は、方形を呈するものが主体である。

7段階。対象となる軒数は減るが、3×3m・4×4m周辺に分かれるようである。

8段階。6段階に似て、4×4m以下の規模にまとまるものと、5×5mのやや規模の大きいものが出てくる。形状は小型のものは方形を呈する。

9段階。8段階の傾向を受け継ぎ、画一的な規模の住居址と規模の大きい少数の住居址で構成される。この段階に入り、カマド構築位置に新しい要素が入ってくる。それは、住居址隅寄りにカマドが構築されることで、このため長方形を呈する住居址が散見されるようになる。

10段階。住居址軒数が激減し、明瞭な傾向はつかめないが、9段階の名残りのように、規模

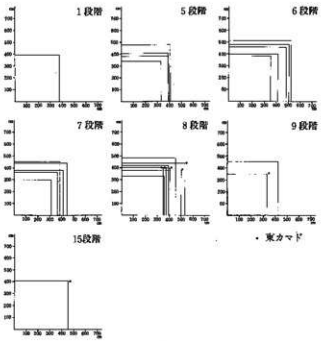


図4　住居址段階別規模（C地区）

に差は認められる。

11～15段階。形状が直行軸方向に長い横長の長方形を呈す傾向があり、前段階までと傾向を異にすることが看取される。これはカマドの構築位置にかかわる現象と並行関係にある。この段階以前のように壁中央・隅寄りに設置されていたカマドが、11段階に入り隅に設置されるものが増えてくる。住居址の隅にカマドを持つことは居住空間のあり方・認識の変化を示すものであり、伝統的な壁中央にカマドを持つという意識からの脱却を意味するのであろう。現実的に考えればカマドを隅に置くことで、それ以外の目的においての空間利用は可能となる。しかしながら、空間の拡大を単に図るためならば住居址を大きくすればよいと思われるから、実利的な面以外の要因が考えられるところである。

いずれにせよ、全段階の方形に近い、画一的な住居址と比べ規模的に偏在のない住居址が特徴的となる。

C地区

全容の分からないものが多いことを念頭に簡単にみてみる。5段階以降7段階を除いて、およそ4×4、5×5mの2者で構成されている。B地区で認められた、極端な規模の分離はない。ただし、4～5mに画一化されている点はB地区同様である。形状については規模の大きい住居址でやや長方形を呈す傾向がある。

以上のB・C区を通してみれば、諸段階の住居址は全体として、4×4m前後の画一的な規模の住居址が顕著になる5～10段階と、それ以前と以後に大きく分けることが可能といえよう。

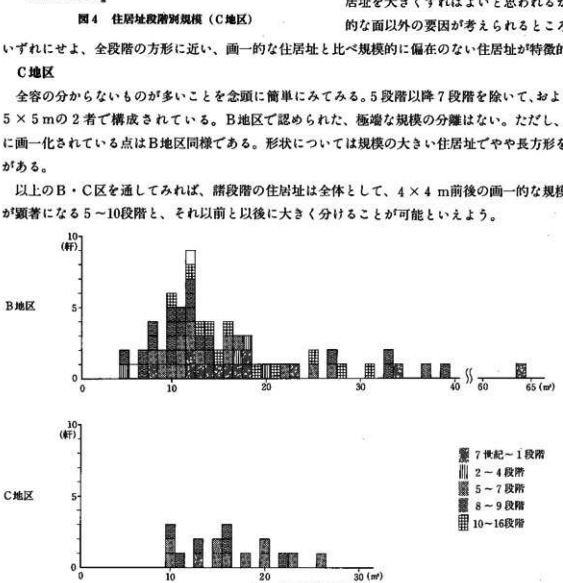


図5　住居址段階別面積

3）床面積

規模・形状に続き床面積についてみてみる。なお、面積算出は凡例で前述したようにプラニメーターを用い、周溝のあるものについては周溝部分を除いてある。

B地区においては、先にみた5～9段階における画一化の傾向は床面積にも認められ、一定の集中をみせる。たとえば5～9段階以前の住居址床面積は偏在をみせずにその分布は横広がりである。さらに同段階前後の各段階の住居址床面積に比べ居住空間の狭いほうへの偏りが看取され、小形化の傾向が読み取れる。また、このような画一的な小形のものと隔絶した大形の住居址が存在することも見逃せない。これをさらに細かくみれば、8～9段階で顕著に認められ、5～7段階のほうがその隔絶性に極端さがないようである。

一方、資料に限定があるものの、C地区においてはB地区のような集中は認められず、ゆとりのある分布を示している。画一的な小形のものと隔絶した大形住居址が存在しないことと関連があるのか、興味を引くところである。

4）主軸方向とその変遷

計測値は、竪穴住居址のカマドを通る中軸線を主軸として、座標北からの角度を示している。住居址の隅にカマドを持つものについては、長軸方向を主軸として扱った。これらを図示したものが図6である。このうち内円はB地区の住居址主軸を、外円はC地区のそれを表わしている。全体の概観は、北壁・東壁にカマドを持つもの（以下、北カマド・東カマドと記す）で占められる点が特長である。このことは、カマドを対面に住居址が向き合うとかいったことが認められないということを示唆するものである。ちなみに、発掘調査中季節毎の風向きが西および北西側から吹き抜けていたことも参考になるかもしれない。以下段階別にその特長を追ってみる。

B地区

0段階。この段階における中核的な存在である112号住居址に揃うかたちで、若干の開きはあるもののおおむね主軸は北方向に規制されていたことが窺える。また、住居址の分布が湯川側に偏る傾向を考えれば、住居址の主軸方向は湯川の段丘方向に沿った、地形的要因を考慮した様相として捉えることも可能かもしれない。

1段階。全段階の規制性と比較してかなりばらつきが認められる。特別な規制はなかったのであろう。また、住居址の分布が台地内に入り込んでいる点で、前段階の地形的要因の解釈に示唆的である。

2～4段階。東カマドである9号住居址とそのほか主軸が北西に振れるものの2者がある。

5～8段階。主軸方向は北に集中する傾向であり、8段階に入り東方向のものも出てくる。さらに、同じく北を向くといっても、7・8段階では振れのほとんどない群と、やや振れる群が認められる。しかしながら、短絡的にこの群が集団として捉えうるような住居址分布はみせていない。

9段階。8段階からの傾向を継承するが、東カマドを持つ住居址数が増大する。この東に主軸を持つ一群は台地部に散見されとくに集中するといったことはない。

10～16段階。徐々に東カマドが一般化し、北カマドが減少するといった傾向がある。また、主軸の振れは集中するといったものでもなく、かなり振れは大きい。とくに15・16段階においては顕著である。またこの段階は1段階以前と似て、湯川段丘崖寄りに偏る傾向が認められるが、1段階以前と比較して北に主軸を取らない点が特長である。

C地区

1～4段階。軒数が少なくその傾向はつかめない。

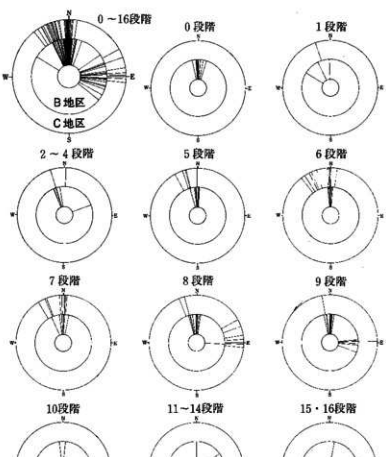


図6　住居址主軸

5～7段階。全体に北方向からほぼ振れない群と、20～40度西へ振れる群とに分かれる。前者はより北にまとまりをみせるのに比べ、後者はややまばらで規制も緩やかである。またその遺跡における分布も明らかに異なっていることが読み取れ、集団差であると判断される。

8段階。北方向からほぼ振れない群がなくなり、新たに東にカマドを持つ群が現われる。さらに東にカマドを持つ群も、主軸方向の振れぐあいから2群に分類が可能であり、カマドの位置が異なるという現象の裏にも、前段階までの集団との継続性を示しているといえる。換言すれば、カマドの位置の変更は集団が採用したものであり、集団差を示すものではないといえる。

9段階以降。9段階ではそれ以前の傾向を継承していること、15段階ではそれまでにない主軸方向を持つことが指摘できる。しかしながら、住居址軒数が少なくその傾向は読み取れない。

以上のことから次のことがいえよう。軸規制が考えられるのは0段階・5～9段階ごろであり、さらに8・9段階頃に東カマドが登場するが、カマドの位置という点ではそれ自体が集団差を表わすものでなく、時間差であると判断される。またC地区の軸の振れが集団差を表わすものとして捉えられる一方で、B地区の振れはそのような判断に合致しないようである。

5）構造・付属施設

柱穴

残存状況のしっかりした住居址を対象に柱穴については、その有無、カマドの位置、柱穴配置を基本に11分類される。これを地区別の時期別変遷を示したものが図7である。対象となった97軒の住居址のなかで半数以上の52軒の住居址が柱穴を持たない。さらに、カマドの位置を考慮しなければ、上屋構造を理解する点で5パターンが存在するといえよう。なお、以下の類型に入らないものでピットが柱穴の可能性があるものも数軒認められるが、これらは除外した。以下、順に概略を記す。

A・G類。おもに対面する壁際に2本の主柱穴を持つもの。B地区21・24号住居址などの断面観察から、柱は住居址の中央部で組み合っていたことが解るものと、C地区3号住居址のように断面観察からは真直に立ち上がっていた可能性のあるものも認められ一様ではない。このうち21号住居址内には4本の柱穴も認められ併存していたか作り替えをした可能性がある。G類のものは一様に独自な傾向があり、B地区29・118号住居址が挙げられる。東カマドを持つ29号住居址の柱穴位置は、他のものとは逆に主軸方向に直行せ

ず、平行な位置にある。明確でないため分類範疇に入れなかったが、B地区30号住居址も同様な形態になる可能性があり、主軸と直行する両壁にピットが認められ支柱穴的な要素も考えられる。南東隅にカマドを持つ118号住居址は2本の柱穴で構成される点では同類だが、位置的に両壁部に柱穴が穿たれているわけではない。現段階では上屋構造を推察・提示できないが2本という簡単な構造であっても、カマドの位置関係を含め実際にはかなり多様であった可能性を示唆していよう。時期的には6段階で出現し段階毎1軒単位で存在していたようである。カマドの設置位置の変化と伴に独自の対応を工夫した感がある。なお、C地区では1軒のみ認められたが全容の解る住居址が限られるため状況は不明瞭である。

B・H類。住居址の中央部に4本の主柱穴を持つもの。このうちB地区23号住居址のように礎石を持つものも含めた。0～4段階の住居址はほとんどこの系譜にのっている点が特長であろう。さらに住居址軒数が拡大する5段階以降においては、両地区ともにすべてではないが住居址の規模が大きいものに継承さ

類＼段階	0	1	2～4	5	6	7	8	9	10	11～14	15	計
A					1	1/1	1					3/1
B	8	1	5		3/4	2/2	2	1			1	23/6
C				1/1	1		1/1					3/2
D				1/1		1	1	1				3/2
E							1					1
F	2	1		7/3	2/3	2/2	5	6	2	2		29/8
G								1		1		2
H							2			2		2/2
I							2					2
J								1				1
K			1		1		1/1	5		3	2/1	12/3

B地区／C地区

図7　住居址主柱穴

れている傾向が看取される。上屋を支えるのに適した形態であったのであろう。10段階以降は全体の軒数が減るとはいえ、柱穴のない住居址と反比例的に減少傾向になる。この類の中でも、Ｂ地区112・115・117などは柱が壁に寄り、とくに115号住居址で著しく、逆にＣ地区34号住居址などのように極端に柱間が狭くなるものなども認められる。なお、４号住居址にみられる柱穴位置を変えることで居住空間を変化させるような例もある。

Ｃ類。カマド対面壁側に４本柱穴が偏るもの。８・９段階に増加する東カマドを持つ住居址には採用されない点が興味深い。東カマドを採用するといった変化の中で継承すべき利点を持ち得なかった経緯があるのであろうか。５段階以降に出現するが、軒数は１軒毎と少数である。カマド部の両側の空間を意図的に作り出した形態と推察されるが、検出された各住居址におけるこの空間についてとくに貯蔵穴が穿たれる確率が高いような傾向もなく、また遺物の出土が顕著であったことなど、この空間の利用に関して推測させる所見は得られなかった。

Ｄ・Ｊ類。Ｃ類とは逆にカマド壁側に柱穴が偏るもの。その変遷はＣ類とほぼ同様で、５段階以降に出現し、軒数は１軒毎と少数である。東カマドに採用されたもの一軒であった。Ｃ類と反対の形態をみせるとはいえ、実際にはＣ類同様カマド周辺とくに全面の両空間を広げるために用いられたと判断したい。

また、Ｃ地区34号住居址はカマドが住居址内にせりだした特異な形態であるが、住居址の所属する段階を考えればカマドの位置はかなり一般的でない。しかしながら柱穴をカマドと同一線上に配置することでカマド前の空間利用を広げた意図が窺われる例である。

Ｅ・Ｉ類。４本の柱穴がカマドに対して中央から左右にずれ、壁際まで偏ったもの。軒数は少なく、またＣ地区にのみ認められた形態である。この形態の特長は同時にカマドも柱穴のズレ方向によっていくことが認められ、カマドの住居址内における空間位置を限定させていく意図が推察されることである。伝統的なカマド位置である壁中央部からの脱却は、単に居住区間の必要に迫られた変化だけでなく、そのような実用効率的な思考を実践するようになった現われと評価される。この後柱穴を持たない住居址が主流となる傾向やカマドの位置が住居址隅に移動していくことなどに継承されることは論を待たず、過渡的な形態であることが理解される。

Ｆ・Ｋ類。柱穴のないもの。この形態は、地区を問わず継承されていったものである。とくに10段階以降、他の類が減少および認められなくなるため主流となる。

以上、各類をみてきたが全体の概観としては、伝統的なＢ・Ｆ・Ｈ・Ｋ類に対して住居址の増加・集落の拡大期には多様な形態が出現する。しかしながらこれら新たな形態は集落における中核にはならずあくまで少数派的であった。そしてこれらの試みは、カマドを中心とした居住空間利用の変更を意識しており、実利的でやがてＩ類のような伝統的な居住空間利用の意識、換言すればカマドの位置に対する古い概念から脱却する方向を見出すことになったと現段階では評価したい。

また、このように考えるならばＩ類がＣ地区のみに認められることは、単なる集団の嗜好と判断されるものではないであろう。それを生み出す背景が、Ｂ地区とは異なって成立していたことが推察されるのである。

上屋構造の点で、無柱穴のものは竪穴住居址壁外に直接垂木を配した合掌形の形式も考えられる（宮本1986・望月1990）ことから、礎石や壁外ピットの存在が推測されるが今回の調査では明瞭に確認できなかった。例えば、Ｂ地区132・Ｃ地区３号住居址など住居址周囲にピットが認められる例もあるが、判断し難い。Ａ・Ｇ類については上屋構造について御代田市根岸遺跡で考察されている（堀1988）。同類の本遺跡のものについてもおよそ、無柱穴同様に竪穴住居址壁外に直接垂木を配した合掌形の形式が推測され、垂木を支える棟木を両端で支えた柱であったろうと想定される。

形態＼段階		0	1	2～4	5	6	7	8	9	10	11～14	15	
A					1	2/2	1	2	1/1 (1)				3/7 (1)
B		2		2		1/1		1/1 (1)	1				7/2 (1)
C				1	1	1	1						3/1
D		1							1				1/1
E		1											1
F						1	1	1					2/1

B地区／C地区・東カマド

図8　住居址出入口

出入り口

出入り口にかかわると思われるピットなどを有する住居址は、29軒で全体の約2割にあたった。これらを6形態に分け段階別に表にしたのが図8である。このほか、平石のような礫がカマド対面壁際床面上に認められたものが2軒（B地区11・101号住居址）あることを付け加えておく。以下、概要を記す。

A類。壁際に2基以上の小ピットが並ぶもの。C地区1・3号住居址などが代表例。東カマドのC地区18号住居址を除いて、北カマドの対面壁際中央に認められる。5段階から出現し、C地区で多く検出されている。

B類。壁際にやや大きめのピットが一基認められるもの。B地区14・112・120号住居址などがある。古い段階から少数ながら9段階まで認められる。北カマドの対面壁際中央に認められる。B地区に多い。

C類。壁際にやや大きめのピットが一基認められ、さらにその中に小ピットが確認されるもの。B地区6・37号住居址などがある。北カマドの対面壁際中央に認められる。

D類。壁面が小さく張り出すもの。B地区130・C地区19号住居址などがある。北カマドの対面壁際中央に認められる。

E類。壁面が小さく張り出し、その中に小ピットが認められるもの。B地区108号住居址のみである。

F類。壁面が小さく張り出しピット状になるもの。B地区10・23・C地区16号住居址がそれにあたる。北カマドの対面壁際中央に認められる。

以上、分類別にみてきたがこの分類は大きく3分されよう。壁を張り出させるもの、単に小ピットが認められるものである。その点から見れば、B地区の傾向は住居址内部を広く掘り込むものに偏り、C地区は小ピットで構成されるものが多いといえよう。さらに、壁を張り出させるものは主流ではなかったようである。またこのようなピット等は東カマドを持つ住居址には、わずかに認められるに過ぎず、東カマドを取り入れた段階では採用されなくなってくる傾向が看取される。さらにC地区18号住居址を除いてカマドを意識したように対面壁際中央に認められることは逆に、C地区18号住居址においてはカマドを意識しない傾向が認められることにもなろう。先に述べた柱穴形態の評価を応援する資料ともいえよう。

資料の絶対数が少なく、これらの分類に入らない住居址はどう考えたらよいのかという問題は残る。しかしながら、これら諸形態が10段階以降認められない点だけは、大きな変革として捉えておく必要があろう。

周溝・テラス

周溝が検出された住居址はＢ地区で15軒、Ｃ地区で７軒である。まず地区別・段階別にみてゆく。

Ｂ地区―０段階６軒、２段階１軒、６段階１軒、８段階６軒、９段階１軒

Ｃ地区―５段階１軒、６段階１軒、７段階２軒、８段階２軒、９段階１軒

Ｂ地区で特異なのは、８段階における増加および住居址規模にある。０段階を除き、２・６・９の各段階の住居址はいずれも住居址規模は他と比べ大きく、軒数も少ない。これに比べ８段階の住居址は45号住居址を除いて平均的なものといえる。さらに８段階の周溝は、それ以前のものと比較して部分的なものは少なく３壁面～４壁面に構築されている傾向が読み取れる。確かに調査段階で確認できなかったものもあろうが、あまりにはっきりした登場である。短絡的に結び付けるのは危険であるが、墨書土器の出土住居址は中核的な「天」「奥」に限れば、８段階においてはここで取り上げた周溝を持つ住居址がすべて対応する。偶然とするのには無理があろうから、遺構・遺物に現われたこれらの状況は、集落の変遷にかかわる事象と判断してもあながち検討はずれではなかろう。周溝は、何らかの要因で採用されたものと理解できる。

一方、Ｃ地区においてはＢ地区と比べ規模の大きな住居址に認められる傾向があることを指摘できるに留まる。

なお、今回の調査では、間仕切り的なものや、周溝内ピットなどの検出はされなかった。先の考えが受け入れられるとしても周溝本来の機能復元が現段階では不可能である。

テラス・およびテラス状の張り出し部を持つものとして、Ｂ地区16・29・108・149・Ｃ地区１号住居址がある。このうち108号住居址は傾斜面に立地するため壁崩落の可能性が高い。また16・149号住居址のテラス部は、住居址形状を極端に損なうものでないことから張り出し部とはいえない。16号住居址のものは貯蔵穴上に位置することから棚的機能が想定できよう。

貯蔵穴・灰溜め

カマドの脇を主に、焼土・炭・灰が覆土中に認められるピットを灰溜めとした場合、Ｂ地区で８軒、Ｃ地区で３軒が認められた。両地区あわせて、５段階以降に一軒程度が認められるに過ぎないが、段階別の住居址軒数と比較するならば、比率的に10段階以降のほうが高いといえる。ほとんどがカマドの右横に位置するが、灰溜めがカマド前に位置するものが３軒ある。位置的にカマド横にあるものが土器片を含むことがあるので貯蔵穴的な様相も指摘されるが、先例は残滓を燃焼部からとりだしやすい位置にある。しかしながらカマド前の空間利用といった点では不便な位置でもある。何か上へ被せるなどの工夫無しには常時ピットは開口していることになろう。このため類例が少ないのかも知れない。

カマドの脇に存在するピットおよび住居址隅に存在する遺物を伴うピットを貯蔵穴とした場合、Ｂ地区で24軒、Ｃ地区で３軒が認められた。段階的には、１段階以前・９段階に多く認められる。灰溜同様、カマドの右横に位置するものが多いが、近接して位置するＢ地区10・24・36・37・44号住居址は、左横に貯蔵穴を持っている。またＢ地区22号住居址では、灰溜に似てカマド前に土器片を含んだ不整形なピットが認められている。

このほか特異なピットとして、Ｂ地区145号住居址Ｐ２がある。床面を浅く掘り込んで、内に褐色土を貼り込んだもので、焼土等が認められ、鉄滓の出土もみたことから小鍛冶的な機能も推測したいが、内面に坩堝のような状況は観察できなかった。

また住居址床面にかなり大きめのピットを数基以上持つＢ地区138・151号住居址のようなものも認められる。居住空間の利用法といった点では、他と異なるものである。

カマド

カマドについてはすでに住居址の規模・形状・主軸方位・柱穴などの項でおもに構築位置に関連して触れてきている。これらをまとめれば、段階が新しくなるにつれ東カマドが採用されるようになり、さらに居住空間の意識に関して変革がもたらされ、カマドの住居址内における位置が中央から隅へと移動する傾向の中で、住居址の形状も変化してゆくということになろう。

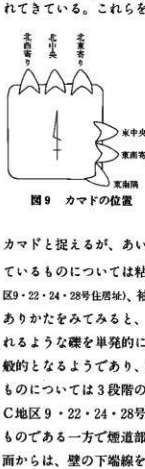


図9　カマドの位置

以上のことから、ここではおもにカマドの諸属性について概観しておくことにする。

カマドはその構築材からみて、粘土カマドと石組カマドの2者に分類されるが、明確に礫を組んだものと袖粘土と小振りな礫を構築材として使用してるものもある。さらにカマドの破壊が進行した結果、残存状況が悪く、袖石の抜き取り痕の確認されるものも多い。これらのものについては石組カマドと捉えるが、あいまいな点も多いことは否めない。また、明らかに礫を部分的に芯材として利用しているものについては粘土カマドの範疇に入れた。このほか、土器を煙道部に使用するもの（B地区3、C地区9・22・24・28号住居址）、袖の補強材として使用するもの（B地区36号住居址）なども検出された。段階的にそのありかたをみてみると、3段階までは粘土カマドでしめられ、3・4段階にB地区4・9号住居址にみられるような礫を単発的に芯材として用いるものが認められるようになり、5段階以降は石組のカマドが一般的となるようであり、粘土カマドが古い構築法であったことが認められる。また煙道部に甕を使用するものについては3段階のB地区5号住居址のものが粘土カマドであり、6段階以降のB地区3号住居址、C地区9・22・24・28号住居址のカマドは石組カマドであることから、石組・粘土という差異の時期的なものである一方で煙道部に甕を使用する方式は一つの嗜好として捉えられるものなのであろう。機能的な面からは、壁の下端線を基準に火床の位置について以下の5段階に分け全体をみてみた。

1、壁の下端線より内。2、やや内。3、中央。4、やや外。5、外。

なお、「やや」というのは線上に3分の1程度かかる状態である。結果は全体として1～3のものが多いが、細かくみると3が明確に認められるのが5段階以降でほぼ同時に4・5が各段階に1～2軒ずつみえてくる。それでも1～2には軒数としては及ばない。さらに、7段階以降、東カマドが取り入れられると、とくにC地区においては1が少なくなり、B地区でも12段階以降1がほとんど認められなくなり、3が主流を占めるようになる。このことは5段階以降カマドの燃焼部を住居内よりなるべく外へ出す傾向が認められることを示唆している。ここでも起居空間を広げる意識が働いていることが認められよう。

また燃焼部の平面形に目を遣ると、A、箱形。B、亜円形。C、紡錘形。以上の3者に大きく分かれるが、1については張り出し状になり、2・3は張り出すものとそうでないもの（B'・C'とする）に細分される。全体に張り出すものは火床が4～5に位置し、AはB地区36号住居址が、B'はB地区10号住居址が、C'はB地区3号住居址が、それぞれ代表的なものである。なお、Cが全体の7割がたを占めるために傾向はつかみにくい、段階的にみてもBが3段階以降認められ、少ないわりにはC地区においてはA・Bが多少B地区に比べ数が多いといったことが指摘できるに過ぎない。火床の位置と深い関係にある燃焼部の形は、形そのものに大きな変化は認められなかったにせよ、徐々に変化していったことが窺われるのである。

燃焼部と煙り出し部（煙道部）のつながれ方については、感覚的ではあるが、1―なだらかなもの・2―低い立ち上がりの後緩やかにほぼ平に伸びるもの・3―途中に段を持って立ちあがるもの・4―立ちあがりの角度が急なもの、の4分類が可能である。このうち2についてはB地区29・130号住居址がこれにあた

り平面的には長い煙道部を持つものになる。1・3・4についてはほぼ軒数が均衡していてとくに偏るといったことはない。段階別にみると11段階以降、4が多くみられるようになるほかはこれといった指摘はできない。なお、煙道部に甕を利用したものについては立ち上がりは緩やかである。4については箱形など張り出す形状のカマドにおいて顕著に認められ、奥壁部を持つ形状になる。このように奥壁を持ち周囲を囲むため燃焼率は高くなる。このため煙道部が短くなるため、壁外に張り出すことは一般に指摘されるところであろう。

カマド構築に際しては、住居址荒掘り段階で位置が意識されて掘り込まれている傾向が看取され、袖石の固定に際してはその部分を特に掘り下げる場合（B地区18号住居址など）とタライ状に掘り込む場合（B地区10号住居址など）が認められる。またおもに10段階以前において、カマドの袖を意識して地山を掘り残し、その基礎を作り出すもの（B地区115号住居址・C地区40号住居址など）も数軒であるが検出されており、カマドを中心とした住居址構築という当時の意識が読み取れる。構築材については、粘土カマドはもとより、石組カマドの一部で基本土層ⅡA2層中の、やや粘質の淘汰のよい土（主に明褐色を呈する）が「粘土」として、袖などに利用されている。この「粘土」は、おそらく荒掘り段階に得られたものであろう。そのほか、少数であるが石組カマドの一部にⅡA1層を基調とした黒色土～黒褐色土を利用したものも認められたが、明瞭なものが少ないため調査時に確認されなかったものもあると思われる。カマド掘り方と貼床との関係については、貼床構築後カマド整形に入るためか、床面の上面の土がカマド部では異なって観察される場合が一般であった。

床面・掘り方（貼床）

床面。調査中に堅緻であると確認されたものをみると壁際を除いたほぼ全面に及ぶもの、カマド前に部分的に認められたもの、カマド前より対面の壁際および住居址中央まで認められたものなどがあげられるとともに、中央部のみが堅緻であったものもある。C地区25号住居址のような住居址中央部をのぞいてその周囲が堅緻であったものはこれしかない。いずれにせよ、全体として一般的な傾向を示している。

柱穴・出入り口部との関係からみると、B地区10号住居址がよい資料となる。ややカマド寄りの4本の主柱穴とカマド対面にある張り出し状のピット（出入り口部）持つ住居址で、堅緻面はカマドと出入り口部をつないで帯状にかつ柱の内側、中央部のみに認められている。この堅緻面は明らかに通路的な、常時、人が踏み歩いた状況が考えられ、柱と壁に挟まれた両側は寝間・作業場などの空間として存在していた可能性が推測される。

掘り方。今回検出された住居址の8割ほどをしめて、いわゆる貼床が確認された。段階別にみても貼床の認められない段階はなく、普遍的なものであったようである。住居址各についてはふれえないものの、ここで概略をまとめておきたい。

貼床については、その目的を床面の沈み込みの防止や、除湿などのためと一般に説明されてる。住居址の掘り込まれている底の地山は台地部で軽石粒で構成されたものであり、水分浸透はかなりよいと判断される。実際調査中、北方の現水田の水が地山を通り床面を抜くと遺構内で湧き出るといった状態のところもあった。沖積段丘上の湯川寄りでは、崖際で湯川層の砂礫が、平坦部では北寄りでⅡA1層土がこれにあたる。特長として崖際の砂礫層に達している部分の住居址は明確な掘り方を持たない傾向があり、部分的に覆土と異なる貼床状の土が観察された程度である。

掘り方埋土についてはそのほとんどすべてが、ⅡA2層土とⅡA1層土の混合により構成され、その比はⅡA2層土の方が多く、両者がブロック状および帯状に堆積していた。とくに床面として機能する部分は両者が互いに重なりあって数cmの厚さで面を構成し、かなり堅緻である。敲きしめが徹底して行なわれ

たのであろう。

掘り方については、類型化し、代表的なものについて図10に示した。以下類型ごとに概要を記すが、C地区は残存状況が比較的悪いため、おもにB地区について扱うことにする。

A類。中央部が高く、その周辺が低いもの。極端に段差を持つものをおもに、緩やかな傾斜を示すものも入れた。全体の25%がこれに入る。中央部が部分的にそのまま床面となるものと、浅く貼床が施されるものがある。0・3～9・15段階にみられ、遺跡内の分布状況はとくに偏りはない。図に示したB125号住居址は、高まりの隅に柱穴が穿たれている例であるが、同様なものに23・130号住居址がある。柱穴位置を意識していたことは確かだろうが、柱穴のための形態でないことは他の類にも柱穴があることで肯定されよう。また、135号住居址は住居址形状が横長のためか高い部分が横に広がっている例である。

A'類。掘り込み全体の中で高い部分が一部に偏るもの。B地区で3軒が認められた。B141号住居址の場合はカマド方面が高く、柱穴は高低差を気にしていないことが見て取れる。C42号住居址は中央部よりはずれた部分が高い。

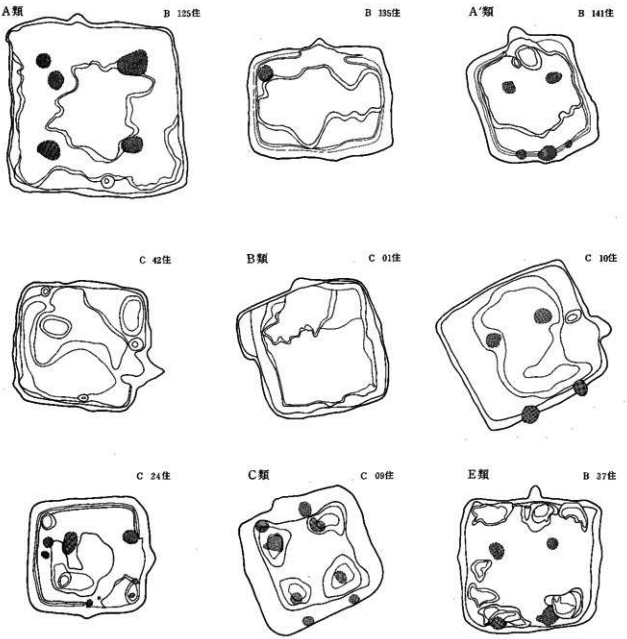


図10　掘り方の類型

B類。A類とは逆に中央部が低く周辺部が高いもの。B地区では2軒と少なく、C地区に4軒ある。C24は部分的で床下土坑的である。C10号住居址の場合は、人が行き交うのが頻繁であったろう場所があえて深く掘り込まれている。地山を利用するよりも貼床を施した方がより有効性があったのであろうか。

B'類。床下に拡張を示すような住居址が入っているもの。B地区に8軒認められる。

C類。全体に柱穴部分の掘り込みが深いもの。B地区150号・C地区9・20号住居址がある。この場合は明らかに柱の構築を意識した掘り方である。先にもふれたようにこのようなものは例外的であるが、住居址としては規模も今回調査した中ではやや大きめで、カマドもしっかりしたものであるという点で共通する。

D類。全体が均一に掘られているもの。随意であるため凹凸があるものも多い。全体のほぼ30%をしめる。段階別にみても、0～14段階まで1～2軒が認められ一般的な形態であったようであるが、その分布のあり方に指摘できることがある。湯川高位段丘上は先にも指摘したように、掘り方のほとんどないようなものが多く、深めのものでもその多くがこのD類に入る。このためA・B類のような意図的に段差をつける形態はD類を基準とする場合、台地部に多いといった傾向になる。このような現象は掘り方形態がひとつには立地条件に対応したものであることを示唆するものとして判断される。

E類。部分的に掘り方を持つもの。とくに壁周辺に認められるものが多く、不連続のピット状を呈するものもある。全体のほぼ25%を占める。

以上、掘り方の主体はA・D・E類の3者で占められる。このうちD類は占地による形態のあり方の相違が認められたが、一方E類が存在する点でこれを傾向として指摘できるにすぎない。さらに段階的占地のあり方からみて、掘り方を明瞭に持たないものの多くなる10段階以降の住居址軒数を全軒数と比較考慮すれば、占地だけでない時間軸の中で捉えられるものといえそうである。またA・B類のあり方は分類は可能であるもののその意図については不明瞭な点ばかりで、段階的にも、占地の関係からも、これといった指摘は出来ない。さらに住居址内施設との関わりにおいても柱穴にみられたように明確な有機的関係はないことがいえるようである。掘り方形態が単に任意的なものなのか、他に要因があるのか、現段階では明らかにできなかった。

6）廃絶・埋没

住居址廃絶に関しては先ずカマドにかかわる廃棄があげられる。石組カマドについてみれば、検出された住居址の多くに袖石の抜き取り痕、支脚石抜き取り痕が検出され、また量的には少ないものの袖石として利用されていた礫がカマド前付近に散見する住居址などもあり、住居址廃絶時にカマドを破壊したようすを知ることができる。また顕著な破壊行為が認められないカマドでは、B地区14・139号住居址にみられる燃焼部内に土器を詰め込むなどの行為が認められることがあり、B地区139・14号住居址のように支脚石が残存しているものもある。支脚石の残存するものはB地区で6軒、C地区では1軒しかなく、住居址内より支脚石と判断される礫が認められたのは10号住居址など数軒に過ぎないことから、廃絶に際し支脚石は抜き取る習慣があったものと判断される。また土器を燃焼部内に詰め込む例は、明確なものでB地区6、C地区3例と少ない。しかしながら、住居址内における遺物の出土がカマド周辺に多い傾向がありさらに増えるものなのかもしれない。

これらの状況を段階別にみても指摘できるような傾向はなく、石組カマドの採用とともに各段階で数軒ずつ散発的に認められるに過ぎない。さらに石組の残りのかなりよいものは両地区あわせ29軒認められるが、段階別にみてもある段階に集中するといった傾向はない。

周溝、柱穴の廃絶時の状況について明らかにできる資料はない。観察できるものとしては土層堆積のあ

り方がある。住居内覆土と比較して明瞭な差異はないものがほとんどで、柱穴に関しては柱痕が観察されたものもあるが両地区あわせ7軒と数少ない。あくまでも推測となるが、柱が抜き取られて廃絶する場合と柱を残したままの場合を考えたとき、柱痕の形成が後者の場合とすれば集落内に長い間放置されていたことになろう。このことを逆にみれば柱痕が検出されないということは集落内に放置したままの住居址を残さないことが一般であって、その理由は建て替えに際し住居址の占地すべき空間はある領域に納まっていたからといえる面もある。しかしながら、B地区のように0～2・9段階のような遺跡内における住居址の占地が移動してゆく場合においては、建て替えなどはその理由に成りえない。きれいさっぱりとかたづけて移動したのであろうか。

周溝について、土層からはこれといった指摘は出来ない。埋没状況も、壁面の崩落などがみられ、一様に住居址との覆土の差異は明瞭でなかった。おそらく周溝に伴う施設も壊されたあと廃絶したことが推測されるに留まる。

埋没に関しては、人為的な堆積をしめすものがB地区22、C地区11軒認められた。これらのうち住居址の拡張に伴うものがB地区で8軒認められていることから、B地区16軒が本来の数量である。また人為的な埋没と自然な埋没が重なった住居址もあるが調査段階で確認された明瞭なものは少ない。

各段階別にみると、B地区は1段階の27号住居址から13段階114号住居址まで認められる。5段階に5軒と多い他は散見する程度である。C地区は各段階2軒程度が観察されている。遺物の量的な数値出しはしていないが、概観としてこれらの住居址から出土する遺物量は少ない傾向がある。廃絶時の意識の違いなのか明確には知れない。なぜなら自然埋没にせよ廃絶するという意味では変化がないからである。しかしながら視点を変えれば、出土する遺物の多くは廃絶後に入り込んだもので、人為的に埋めてしまったため、後に遺物が入り込まないことになったともいえる。そうであれば、積極的に住居址廃絶後の窪地をつくりたくなったか、ここには必要ないと判断されたからといえることにもなる。分布状況をみてみればB地区台地上の22号～37号住居址を結ぶ東西に分布する住居址のうち人為的埋没を示す16・22・23・24・37の各住居址はほぼ等間隔に並び、各住居址の段階は異なるとはいえ、一帯が埋め戻す必要性のある場として、集落内に位置づいていたことを示していると評価されよう。

ちなみに、住居址廃絶後の窪地利用は「土器捨て場」的様相をみせるB地区24・120号住居址、覆土中位に窪地利用による炭化物層の認められたB地区120・130号住居址など大形のものに多い。そのほか、C地区9・14号住居址のように床面にカマド袖石とするには量的に判断し難い礫の投入が認められるものがあるが、その性格はつまびらかでない。

イ　掘立柱建物址

B・C地区において、今回の調査で検出された掘立柱建物址は中世以降と判断される11棟を除いても147棟にもおよび、掘立柱建物址としての認定に難があると思われるものや、全容が不明のものについて推定で認定したものなどを考慮しても、住居址軒数と均衡する数量であることはいえる。地区別の内訳は、B地区93棟、C地区54棟で、竪穴住居との軒数比は各地区1.2・1.3倍と掘立柱建物址の数量がまさる。また、佐久地方および本遺跡の特色である溝持ち（布堀）の掘立柱建物址の全体数に対する割合は両地区ともに35％前後とほぼ同比率であり、かなり普及した形態であったことが指摘される。

掘立柱建物址の機能については、倉庫と住居の2者をめぐって様々な検討がなされてきている。とくに関東地方においては、関西地方と異なり竪穴住居址と併存しているために問題となる部分が多い。一般的には、総柱式のものが倉庫に、側柱式のものが住居・倉庫として扱われる。本遺跡では、住居址と拮抗する数の掘立柱建物址が認められ、そのうち総柱式のものは10棟しかない。この点を考慮すれば、側柱式の

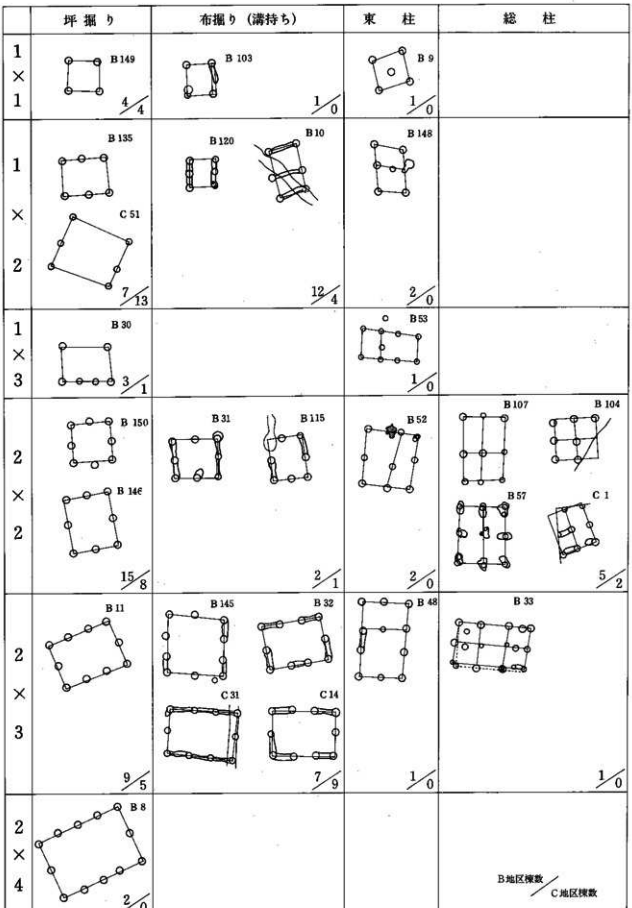


図11　掘立柱建物址諸形態

なかに倉庫としての性格をもったものがかなり存在していたことが想定されるが、それを差し引いても、住居・作業場としての掘立柱建物址も多かったことは想像に難くない。

1）分類

規模的には1×1間から3×5間までが認められ、柱の配置から側柱式、総柱式に大きく2分される。さらに、側柱式の場合は柱穴形態から坪掘り、溝持ちの2者に分類できる。これに束柱的な様相を呈するものを加えてまとめたのが図11である。なお、ここには0段階に伴うと判断される規模の大きい2×3間総柱式125・126号、3×5間の庇を持つ143・144号掘立柱建物址はあえて入れていない。なお、これら諸形態の軒数については、推測によるものも含まれている。

全体としては、1×2間・2×2間・2×3間が一般的であり、総柱式は2×2間を主体とし、2×2間の溝持ちの掘立柱建物址は極端に少ないことが読み取れる。以下、規模ごとにみてみる。

1×1間……量的には少ないものの、他の掘立柱建物址と組んで存在していることが分布からいえる。このため、少数派として短絡的に排除できないものである。面積的には、B地区36号・C地区37号掘立柱建物址のように規模の大きなものも認められさらに細分されよう。また、B地区9号掘立柱建物址のように中央に柱穴をもち束柱を想起させるものが1棟確認されている。このような状況から、倉庫としての機能が想定される。

1×2間……軒数は多い。B地区では溝持ちが多く、C地区では逆に少ない傾向がある。その分布のあり方は、散見するものと群を成すものに分けられ、群を成すものはB地区10号住居址北西側・B地区120号住居址西側などがあげられる。C地区については田切り地形より北側で、全体としては東西横並びで分布するが、数の少ない溝持ちのものが16号住居址周辺にまとまっている。このように溝持ちの掘立柱建物址がまとまりを持つ傾向は、120号住居址西側のものにも認められる。形状は方形・長方形を呈するものが認められる。このうち、方形のものは一様に面積が小さい傾向がある。

ところで、この溝持ちの掘立柱建物址の性格は、面積的にほぼ一定の大きさを持っていることが指摘でき、かつ遺跡でみられる一般の住居址よりは面積的には小振りであるところから、居住のためのものとは捉え難いと判断される。このことは、束柱をもつB地区148号掘立柱建物址などが倉庫的機能を持つものと想定されることなどからもいえよう。さらに、120号住居址と同様の規模をもつ120号住居址の廻りには、このての倉庫に変わって総柱式の建物址が集まっていることは対照的かつ示唆的である。

坪掘りで構成されるものについては、溝持ちのものと比べ面積的にやや大きめのものが認められるが、柱の配置からみて一般的には溝持ち同様に倉庫的な性格が想定されよう。

1×3間……軒数は少なく、2×3間のものと比較して小振りである。面積的には1×2間などと大差ない。形状は長方形を呈する。

2×2間……軒数は多いが、溝持ちのものが極端に少ないのが特長である。総柱式の掘立柱建物址が7棟認められた。形状は方形・長方形を呈するものがあり、面積的に1×2間より大きいものが多く、長方形のものはその傾向が強い。さらにB地区31・119号掘立柱建物址のように2×3間のものと比較してもそれに劣らないものもある。規模からみても、柱配置からいっても居住のためのものである可能性が高い。住居址との関係は、部分的ではあるが対応関係にあることが指摘される。

掘立柱建物址　118・119・146・150・151号

竪穴住居址　　116・125・136・139・141号など

なお、B地区52号掘立柱建物址は形は総柱式であるが、北面に焼土が存在し、焼土脇の柱穴がこれを意識して築かれている。このため中央の柱穴は棟木を支える束柱と判断したほうが妥当であろう。焼土が火

災を考えるとかなり危ない位置にあるが、平地式の住居・作業場と考えられる資料である。

2×3間……総柱式が1棟あり、他は側柱式である。1×2間の同様溝持ちは半数を占める。溝持ちのものについてはそのあり方が多様であり、一定の傾向はつかめない。また1×2間のB地区10号掘立柱建物址などは溝のあり方が側面に廻らないものであり、この例からも溝を配す理由については不明な点が多い。形状は長方形を呈するものが多いが、B地区145号掘立柱建物址のように方形に近いものもある。また、49号掘立柱建物址のような内部施設を持つものは作業場的な性格を示す資料として評価されよう。

2×4間……規模が大きく周辺の遺構と比べても不釣り合いで、柱痕が方形を呈す点でも、特異なものである。調査区外方向に、これに伴う大形の住居址の存在が推定される。

平面の形状から掘立柱建物址をみてきたが、遺構の性格として時期決定がもともとしにくいことや、住居址との関係における棲み分けのことなどの点で不明な部分が多く、生活の場・作業場などの利用の点でも明確にできないなどの問題点が指摘される。このため、住居的な性格が想定されるものがかなりあるが、集落の人口などの問題に直接にかかわるため即断はできない。

以上のような問題の解決の糸口として、住居址と掘立柱建物址のセット関係について若干提示しておくことにする。扱う遺構は、B地区県道寄りの住居址と掘立柱建物址である。住居址8軒、掘立柱建物址10棟で構成される。このうち遺構のまとまりよりはずれる9号住居址・8号掘立柱建物址を除き、さらに同段階の間における拡張を示す住居址2軒（28・32号住居址）を外すと、住居址5軒、掘立柱建物址9棟になる。

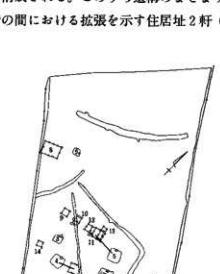


図12　住居址と掘立柱建物址の関係

9棟の掘立柱建物址の内訳は、1×1間が2棟・1×2間が1棟・2×2間が1棟・1×3間が1棟・2×3間が4棟である。2×3間とそれ以外のものとに分けると、住居址と対応することが明白になる。住居址については段階的に9段階の3号住居址と2～4段階のものとに分かれ、規模的にも3号住居址は例外的なものといえよう。これらを前提に掘立柱建物址をみてくると、2×3間のものは残り4軒の住居址に一定の間隔を持って配置していることが看取される。住居址4・5・6・7号に対して、掘立柱建物址11・15・16・17号である(図12)。そしてさらに規模の小さな掘立柱建物址が1軒ずつ付随した状況が読み取れることになる。規模の小さな掘立柱建物址は前述したように倉庫の性格が考えられ、2×3間の掘立柱建物址は住居・作業場と判断される。以上のことから、住居址1軒に対し、倉庫1棟、住居・作業場1棟の掘立柱建物址がセットであることが理解される。この場合、掘立柱建物址と住居址の居住者は別である可能性は少ないであろうから、集落内における人口は、以上の場合については掘立柱建物址の棟数に左右されないことになる。しかしながら、この例はすべての段階に適応するものでないことは住居址・掘立柱建物址の軒数を考えれば理解されるところであり、逆に何らかの変化が時間軸の中であったことを示すと評価されよう。

溝持ちのものについては、B地区10号・14号、総柱式のC地区1号建物址のような溝持ち部の意味といった構造的な部分や、0段階に帰属する114号建物址のような時期的な部分での問題が指摘される。特に前者については調査中においても壁材の存在を考慮して、土層断面の観察を試みたがそれを裏付ける所見は得られず、先の例を考えればその構造について認識を新たにする必要があるようである。ここでは建設的な所見は述べられないが、課題として取り上げておきたい。

2）主軸

主軸を計測するに際しては棟方向をあてたが、矩形を呈するものも多く認められ、計測者の任意性が入っていることを記しておく(図13)。B地区においては、全体として座標軸方向に集中するが左右に振れるものも多い。C地区は、座標軸方向に集中するものと西・北に傾くものに分かれる。基本的には住居址の主軸方向と同様であるが、両者ともに住居址の主軸よりは振れは少ない。いずれにせよ、住居址と同じく軸規制は働いていたことが指摘されるが、このことは掘立柱建物址の存在した段階は、住居址の軸規制の認められる時期にほぼあたることを意味する。

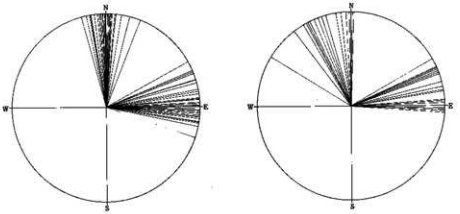


図13　掘立柱建物址主軸

ウ　土坑

ここでは先に、個別遺構の説明のところで触れ得なかった点につき補足するとともに、今回の調査区内における土坑の分布について簡単にまとめて、以下に記す。

遺構数量・分類については前記した通りである。その分類を元に表にしたのが図14である。円形丸底のものが多いが、規模の大きなもので底がタライ状のものもここに入っている。全体にピット状のものなど規模の小さいものが多いことから、細かな分類を行なっていないためである。このため実測図については、これを補足するため規模の大きいものについてはなるべく掲載するように努めた。

このほか、出土遺物・覆土内の様相などの属性からみると、以下のようなものがある。なお、以下の土坑については、すでに個別に取りあげてある。

・焼土を大量に覆土内に持つもの―B地区693号土坑

・焼土が混入しているピット状のもの―B地区553・554号土坑、C地区81・116号土坑

・鉄滓が出土したもの―B地区250・277号土坑

・鉄製品が出土したもの―B地区520号土坑

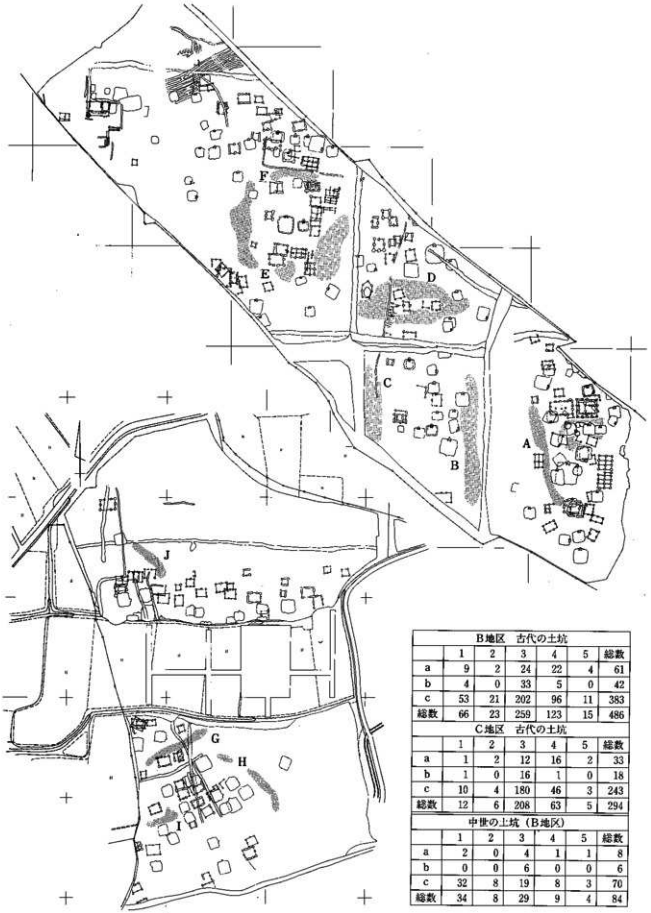
・墨書土器が出土したもの―B地区241・250・251号土坑

このほか土器片（須恵器・土師器・灰釉陶器）が出土したものについては、以下のとおりである。このうち何基かについては既に個別に掲載・記述してある。

B地区―62・63・118・133・229・238・240・241・245・250・251・252・268・273・292・501・515号土坑

C地区―100・102・120・121・177・185・195・232・270・297・509号土坑

以上、ここで扱った土坑、実測図に掲載した土坑については冒頭の遺構配置図に番号をつけた。



B地区　古代の土坑						
	1	2	3	4	5	総数
a	9	2	24	22	4	61
b	4	0	33	5	0	42
c	53	21	202	96	11	383
総数	66	23	259	123	15	486

C地区　古代の土坑						
	1	2	3	4	5	総数
a	1	2	12	16	2	33
b	1	0	16	1	0	18
c	10	4	180	46	3	243
総数	12	6	208	63	5	294

中世の土坑（B地区）						
	1	2	3	4	5	総数
a	2	0	4	1	1	8
b	0	0	6	0	0	6
c	32	8	19	8	3	70
総数	34	8	29	9	4	84

図14　土坑分布と形態別基数

土坑の分布（図14）

B・C両地区ともに、検出された土坑は大きく2分することが可能である。土坑の大半を占めるピット状・柱穴状の大きさを持つものと、これら以外の規模の大きな土坑とにである。これら2者の土坑の遺跡内における分布を俯瞰してみると、一定のまとまりとして捉えることが可能で、住居址などの諸遺構と結び付いて、集落形成の機能・役割を持ったものとして位置付けられるようである。以下、これらの一定のまとまりとして捉えられるものを群別し、概要を記す。

A群―B地区湯川高位段丘上の西側、斜面部と平坦部の境に認められる規模の大きな円形・方形の土坑によって構成される。103号掘立柱建物址周辺から104号掘立柱建物址付近まで南北に並んで検出された。503号～521号土坑がこれにあたる。住居址（102・110号）との切りあい関係から9段階以前にはあったものと推定される。

B群―B地区台地上の東端、湯川高位段丘との境に認められる規模の大きな楕円形を主にした土坑によって構成される。地形に沿って南北に並んで検出された。578号～625号土坑がこれに当たる。

C群―B地区台地上の東側、145号掘立柱建物址の西に認められるピット状の土坑によって構成される。南北に広がりをみせる。

D群―B地区台地上の東側、65号溝址の北に認められるピット状の土坑によって構成される。東西に広がる。

E群―B地区台地上、43号溝址の西に認められるピット状の土坑によって構成される。ところどころに空白域を持ちながらも、北側を除いて12号住居址を中心にコの字状に分布する。

F群―E群の北側、40号住居址周辺に認められる規模の大きな楕円形・長方形を主にした土坑によって構成される。

G群―C地区台地上、田切り地形南側、41・42号住居址南に認められるピット状の土坑によって構成される。東西に広がる。

H群―C地区台地上、田切り地形南側、7・11・12号住居址東に認められるピット状の土坑によって構成される。南北に広がる。

I群―C地区台地上、田切り地形南側、43号掘立柱建物址南に認められるピット状の土坑によって構成される。東西に広がる。

J群―C地区台地上、田切り地形北側、28号掘立柱建物址北東に認められるピット状の土坑によって構成される。

以上、10群が指摘できる。このうちピットで構成される各群は、その配置のあり方・周辺の遺構の状況から集落内における境を示すものとして考えられる。とくにE群のものはその傾向が強く、さらにF群と組み合って、その中にある諸遺構と関連をもって解釈されるものと評価されよう。F群の性格については現段階で指摘できないが、49号掘立柱建物址のような内部に付属施設を持つ建物址や、40号住居址のような明確なカマドを持たない住居址、789号土坑（特殊遺構5）などと結び付けて把握されるものと思われる。また、A群については9段階以前としたものの、各遺構が個々に存在していた可能性もあり、逆に一帯がこの手の土坑を構築し、機能する場として意識されていたと考えることもできよう。

このほか、狭い範囲内に群として取り上げられる土坑がないわけでない。さらにC地区1号柵列にみられるような2基のピットを単位とした配置をみせるものがある。例えば、C地区14・19・20号掘立柱建物址周辺のもの、B地区130号住居址南側のものなど、他にも散見されるがここでは指摘だけに留めたい。

参考文献

1．松村恵二　1983　「古代細倉をめぐる諸問題」『文化論叢』同朋舎
2．宮本長二郎　1986　「住居」『岩波講座日本考古学４集落祭祀』岩波書店
3．望月　映　1990　「三の宮遺跡」御長野県埋蔵文化財センター
4．堤　　隆　1989　「根岸遺跡」御代田町教育委員会
5．中田　英　1981　「古代東国集落における掘立柱建物の一考察―溝もち掘立柱建物遺構の整構造の復元について―」『神奈川考古12』

(4)　集落変遷

ここでは前項に従い台地上のB・C地区の集落変遷について述べることにする（図1～6）。

おもに出土土器の様相から段階設定された各段階の住居址は、おおむね25年の存続期間を持つことになる。一般にいわれる住居址耐久年数と比較しても大差なく、一定の期間としては妥当といえよう。しかしながら、実際の分布状況からは住居址の近接により同一時期に存在したといい難いものもあり、建て替えのズレなどを想定させるものもある。集落の範囲については、調査区自体が田切り地形の方向に対して横断する形をとるために、佐久地方特有の田切り地形によって区切られた集落のあり方といった点で、全体像がつかめたとはいい難い。部分的にその範囲が押え切れるところもあるが、集落が調査区外に広がっている可能性は高いといえる。

ア　概観

栗毛坂遺跡群は、冒頭で述べたようにその範囲は広い。このため、遺跡範囲自体が田切り地形によって区分される一方で、遺跡内にも埋没した旧田切り地形が存在する。今回の調査でも、B・C地区の間には埋没した田切り地形が認められ、両地区を分ける結果となった。実際、この田切り地形は集落の境として機能していただろうことは想像に難くない。先にも触れたが、調査区がこの田切り地形方向を横断するため、火砕流台地に存在することに関しては同じでもB・C両地区は、集落としては別であるといえよう。遺構の継続時期、遺構・遺物のあり方といった点で異なった傾向を両者が示すことは既に触れた通りである。このため、段階ごとに概要を記していくにあたり、まず両地区を分けることにした。

また各地区は、遺構の時期・遺構の占地・遺構の密度・遺構の配置などを考慮するとさらに分別が可能であることが解る。この細分されたものを地点と仮称し以下記述に際し用いる。なお、地点分けの境界の位置付けを簡単に述べておく（図1・5）。

A－B　湯川高位段丘と台地部の境

B－C　古墳～平安時代の遺構密度の低いところ

C－D　台地部における窪地の境、低地部分のD地点は中世遺構の遺構のみが存在する。

D－E　台地部における窪地の境、微高地上の台地部E地点は本遺跡における、2～4段階の遺構が唯一認められるところ

F－G　田切り地形

イ　段階別変遷

0段階以前

住居址はB地区湯川の段丘寄りに認められる。A地点にまず、113号・159号住居址がそれぞれ時期を違えて、単独で存在する。これらは、同段丘上に単独で居住していたのか、広範囲に住居が散在していたのか明らかでない。また、崖下の低位段丘A地区との関係も考えられるところである。0段階になり、住居址は10軒と急激に増加し、A地点にみられる112号住居址のような大形の住居址を中心に集落はまとまっていたと判断される。その配置はA地点では大形の112号住居址を「コ」の字状に囲むように小形の住居址が認められる一方で、B地点では湯川高位段丘と台地部の境付近に南北に住居址がほぼ等間隔にかつ北を向いて並び、集落の境を区分する63号溝址が、これらの住居址の西側に同方向に走る。A地区概観のところで触れたように、おそらく眼下に広がる、佐久地方最大規模の田切り地形といえる湯川周辺の水田開発・経営を背景に集落は成立していたことが推測される。さらに112号住居址をめぐっては、今回の調査で得ら

れたものとしては最大規模の掘立柱建物址が４棟付随していたことが、その位置・規模から判断される。この４棟の掘立柱建物址は、総柱式と、側柱式の２棟ずつに分かれ、それらは互いに近接しているため、おそらく２度にわたる建て替えがあったと思われる。この居住域という点ではあまり広くないこの地に、このような規模の遺構が認められることは、生産域としてＡ地区が意識されていたことは想像に難くない。

１段階

Ｂ地区に３軒、Ｃ地区に１軒が認められる。なお、Ｃ地区の17号住居址は、遺物も少なくその構造も住居址としての認定が不確かである。Ｂ地区の３軒は、先の段階に比べ明確に台地部の奥に入り込む点が指摘され、さらに全段階にみられた軸規制は全くなく、各住居址は半円状に配置され、集落規模は自然村落の様相を呈し、小さいものとなる。さらに、周辺の遺構のあり方・その覆土の性格からこの段階に１～３号畑址が伴う可能性が高い。前段階に拡大した湯川高位段丘上には住居址は認められない。このように前段階とは明らかに隔絶をもつ段階である。とくに生産域としての湯川方面への意識の低下、全段階の隆盛を誇った集落の廃絶の理由は、どこに求められるのであろうか。一つには洪水などの自然的要因が考えられるが、この極端ともいえる変化は、社会的背景をもった、複雑な要因と揺めて考える必要があろう。時期的にみてこの段階は律令体制の成立・発展期にあたり、社会的な変革期でもある。土地の所有に関しては、班田制のもと私的所有を認めないことを前提とするなど今まであった体制の変更を求められた時期である。詳細は明らかでないが、前段階の集落が地域的発展の結実したものとすれば、本段階はその解体・崩壊後の現象として捉えることが妥当と思われる。本段階から１世紀間にわたって、Ａ地点には住居址が認められず、眼下に広がる湯川の生産域は台地上の居住者とは深くかかわりをもたない土地に変わっていた可能性が指摘される。

そうであった場合、本段階に伴う畑址はどのように評価されるのであろうか。検出された３筆は、３号畑址が、０段階に伴う63号溝址との前後関係について明確でなかったものの、重なり合う点で本段階に位置すると判断できよう。１・２号については、検出時の所見からかなり広範囲に渡っていたことが推察されるが、本段階に伴うという明確な根拠はない。63号溝址を境に畑地が西に広がっていた景観も考えられなくはなく、前段階に伴うともいえなくはないからだ。いずれにせよ、畑作が台地部で展開したことは想像され、本段階の居住者がかかわりをもっていたことに変わりはない。しかし、１・２号畑址の属する集団がどちらであるのか、それによって解釈が異なってくる。前段階に入るなら地域的発展の一例として、本段階に入るなら、律令体制下における班田を補う開発例として位置付けられる。

２～４段階

Ｂ地区―住居址はすべてＥ地点のみに認められ、各段階１～２軒で構成される。Ｃ・Ｄ地点においては、この段階に小規模な氾濫堆積が認められ、畑址もこれにより埋まってしまう。このため一時期荒れ地となっていたことが想像され、これにより本段階の居住者が両地点を避け微高地上の本地点に占地したことがいえるであろう。この段階の住居址と掘立柱建物址との関係については前述した通り、住居址１軒につき掘立柱建物址が大小２棟ずつで集落単位を構成していたことが明らかとなっている。

Ｃ地区―Ｆ・Ｇ地点に１軒ずつ認められる。

５段階

Ｂ地区―住居址の軒数が増大し、その占地場所は伝統的なＡ地点と、一時期荒れ地となっていたＢ地点に戻る。このあり方から、各住居址はＡ・Ｃ地点の２群に分けられ、各群は規模の小さい住居址と平均的な規模の住居址で構成される。

Ｃ地区―Ｂ地区同様住居址軒数が増える。Ｆ地点で１軒、Ｇ地点で４軒が認められた。このうちＧ地点の４軒は規模の小さい住居址とやや大きめの住居址で構成され、両者が結び付いた２軒が集落の基本的な

単位であったことが指摘できる。

6段階

B地区―A・C地点では、前段階の傾向を継承する。そして新たにB地点にやや大形の125号住居址が入ってくる。さらにこの住居址とC地点の14号住居址からは墨書土器「天」が出土している。

C地区―前段階よりさらに集落の拡大が認められる。G地点においては前段階を継承し大小2軒の住居址単位がその配置からもかなり明確化する。それに伴って土坑H群が配置され境を作ったことが考えられる。F地点においては規模の小さい住居址4軒とやや大きめの住居址2軒で構成され、G地点のあり方と比べて、小さい住居址については建て替えがあった可能性が示唆されよう。

7段階

B地区―C地点においては、5・6段階に認められた「く」の字状の配置が崩れ、やや集まった形となる。A・B地点においては変化はない。全体として住居址規模が小振りになる傾向が認められる。墨書土器「臾」が出土をみせる。

C地区―住居址軒数的にみて極端な変化はないものの、全体として住居址規模が縮小化の傾向を示す。さらに、F地点北西隅に周辺の住居址と主軸方向の異なった41号住居址が入ってくる。このため土坑G群が築かれ、それに対したのかI群が認められることにになる。集落の全体を区画するとかいったことでなく、住居址規模的にも大差ない一集団・住居址間でこのような境を構築する背景には、単に居住範囲を確定したいといったことの他に、土地に対する意識変化、土地の私有概念が一般的になりつつあることを示すと解釈するのは強引であろうか。

8段階

B地区―それまでの住居址の分布が大きく変化する。C地点に多く、B地点に少ない傾向であったものが逆転し、B地点に多く認められるようになる。さらに、大形の住居址（45号）1軒に対し比較的規模を同じくする住居址が多数となり、5・6段階の様相が7段階を経て転換したことを知ることができる。この段階か、次の段階には土坑C群・E群が存在したものと思われる。また、A地点では新たな様相として東壁にカマドを持つ住居址が登場する。

C地区―B地区にみられた東カマドの住居址が散見され、G地点の遺構配置がそれまでにない南北縦方向に並ぶ。土坑G群に区切られた場所では継続的に1軒の住居址が認められるが、カマド方向は東を採用する。また、B地区のような大形の住居址は見当たらない。

以上、8段階は集落変遷の画期にあたり、新たな様相が認められる。5・6段階の様相が、一旦弛緩するかのようにみえる7段階のあと、新たな緊張が生れた段階と評価されよう。

9段階

B地区―前段階の拡大・継承といえる。前段階の大形住居址（12号）は建てなおされ、周囲に小形・画一的な住居址が配置する。さらに、掘立柱建物址群のあいだの遺構空白域を挟んで東側、B地点には同様の規模を持つ住居址（120号）が存在する。120号住居址の南には南北に住居址が配置しC地点とは対照的なものとなる。また12号住居址を囲む土坑E群に対し、120号住居址南には土坑D群が存在する。いずれも大形の住居址とそれ以外の住居址を分けるが如く分布する点で同様である。またB地点の土坑F群は、集落のまとまりの北端に位置することになる。

この12号・120号住居址は2つの集団の中核的存在であることは予想されるところである。規模的に類似し、併存する他の住居址の数もほぼ一定である。さらに、周辺に掘立柱建物址が配置し、他の住居址はやや離れ存在することが看取されるなど似た点が多い。前述した墨書土器の分析によれば両者から出土したものはそれぞれ「臾」・「天」の2者のほとんどを占め、この様相を集団差を反映するものと判断されてい

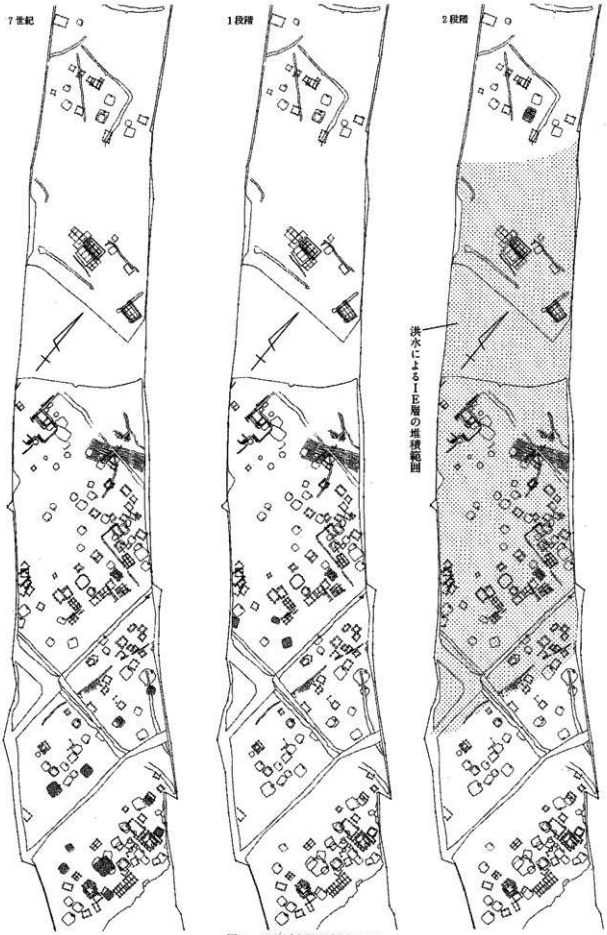


図1　B地区段階別変遷（1）

図2 B地区段階別変遷（2）

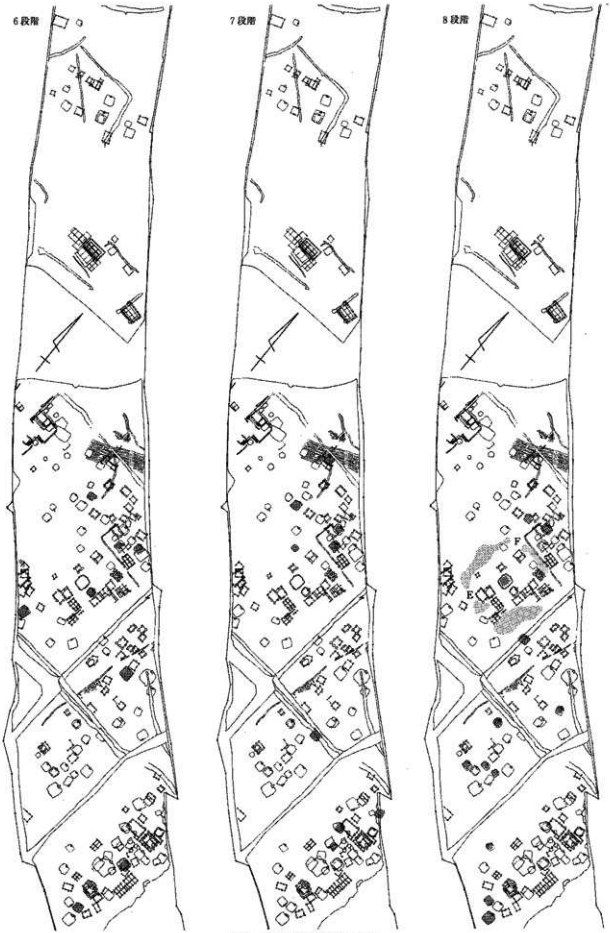
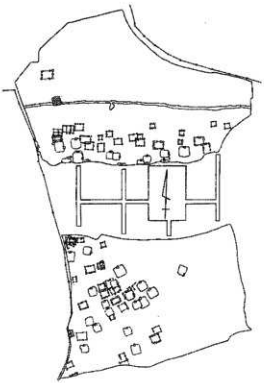
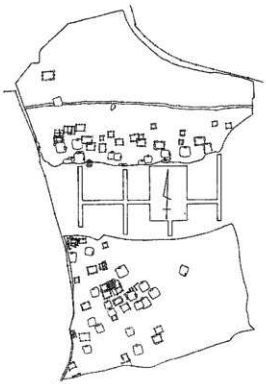


図3　B地区段階別変遷（3）

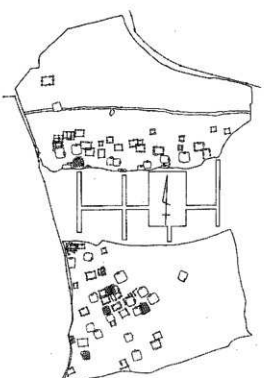
図4　B地区段階別変遷（4）



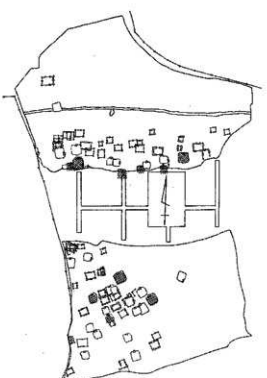
1段階



4段階

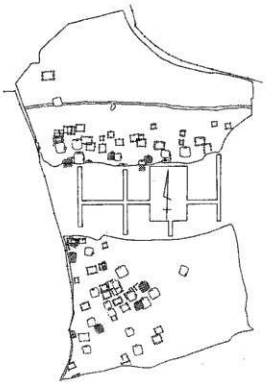


5段階

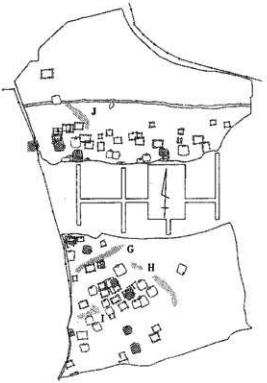


6段階

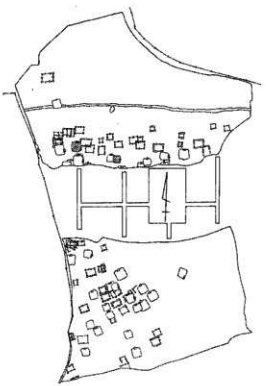
図5　C地区段階別変遷（1）



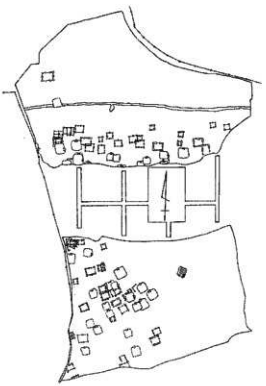
7段階



8段階



9段階



15段階

図6　C地区段階別変遷（2）

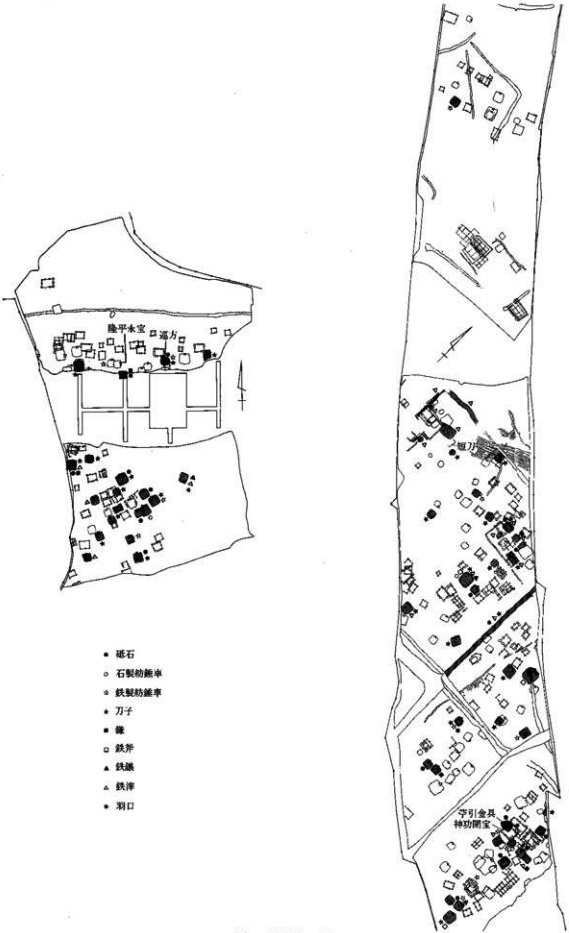


図７　鉄器等の分布

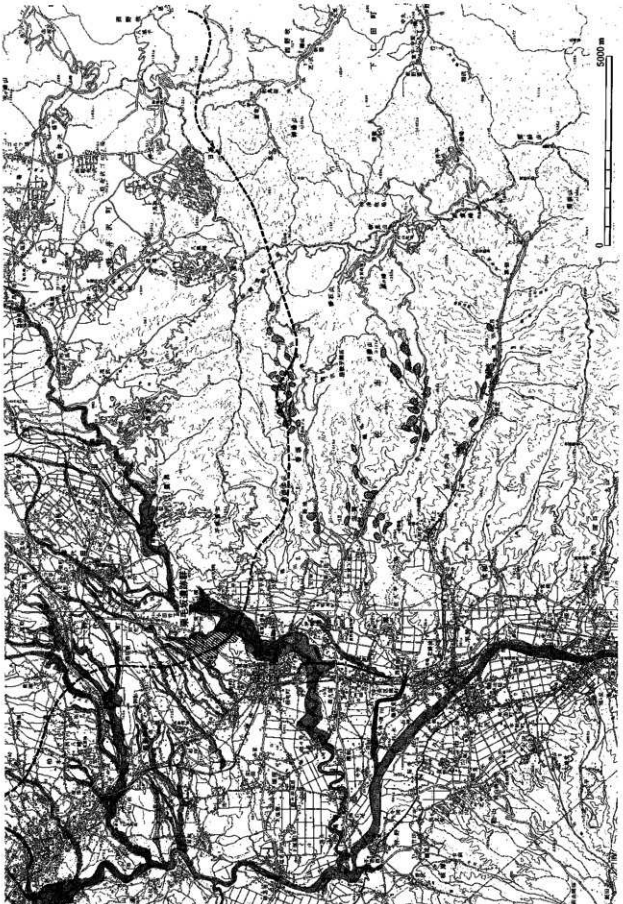


図 8　田切り地形と山岡部道跡

る。

ところで、他の住居址が配置している付近には、それに見合う数の掘立柱建物址は認められず、集中化するといった傾向を指摘した。先に触れた2～4段階の掘立柱建物址が住居址単位で掘立柱建物址とセットになっていたことを比較すると、明らかな差異がある。掘立柱建物址の時期的な変遷は確定し難く、その細かな変遷を提示できないが、この差異と検出された掘立柱建物址と住居址総数を考えれば、ある段階で掘立柱建物址が個人の管理から集団のものへと移行していったことがいえるであろう。その移行していく段階がいつなのか明確でないが9段階時には明らかに移行を済ましていることがいえる。このような掘立柱建物址のあり方は個別・独立から集団・規制と状況が変化したことを意味するもので、実際には、格差が生まれ総数に現れてくると判断できる。でなければ、総数がもっと多くなければならなくなってしまう。そしてこれらの現象には集団の背景にそれを指向する意志が認められると推察される。

このほか、A地点に1軒、E地点に1軒の住居址が認められている。

C地区－B地区のような変遷はたどらず、F地点に2軒認められるに過ぎない。その後15段階に1軒認められるが単独であり、この段階をもってC地区の集落は消滅するといってよい。

10～16段階

9段階でピークを迎えたB地区の集落もこの段階に来て、極端に小規模化する。各段階は1～2軒の住居址単位で構成され、カマドが東に作られるなどの構造的な変化は方向性をもつが住居址相互間には指摘できるような傾向はない。また、そのことこそ特長であるといえよう。住居址の占地は集落の出現期のように湯川高位段丘上に集中し、細かくみるとほぼ同じところを回るように変遷していることが観察される。そして、眼下には湯川の沖積地がその風景を違えず広がっている。

中世以降

B地区で掘立柱建物址と竪穴住居址（竪穴状遺構）をおもな構成員として、その分布域から3群が認められる。概観については前述した如くでここでは触れない。また区画性をもった溝が登場し調査区を横断する。とくに交差する43号・65号溝址は、43号溝址のほうが古く、両者は単独で存在していたことが調査段階で確認された。さらに、64号溝址は65号溝址を切るためにこれも方形の区画になりえない。それでも地形傾斜を無視したこれらの溝に評価される点はあるはずである。今後の課題である。

以上、住居址を中心として段階別の遺構変遷をみてきた。先にも触れたが、掘立柱建物址については明確に各段階に比定することは困難で、包括的な傾向を指し示すのみとなった。同じようなことは土坑にもいえる。「(3)　遺構の分析」でも触れ得なかったが、特殊遺構としたものについては作業場的なものなども認められるとはいえ、集落内における諸遺構との有機的な関係については不明な部分が多いこともあり、課題として残されている。

ここで集落変遷から導き出されるいくつかの指摘をしておきたい。

生産基盤と集落

今回検出された栗毛坂遺跡群の集落の生産基盤について考えてみる。栗毛坂遺跡群の立地する標高は700mを越え、現在県内でも寒冷な地で、古代の稲作には向かない土地柄である。また、台地は佐久地方特有の田切り地形によって刻まれ、その低地部分に水田が営まれたとされ、とくに田切り地形の幅の広がる、栗毛坂遺跡群より南東方向に弥生時代の人々は住み着いたと一般に解釈されている。その点では、最大の田切り地形ともいえる湯川の縁辺段丘付近に古墳時代の遺構が認められたことは、これをうらづけているといえよう。おそらく湯川の氾濫源に生産の主体があったのであろう。ところが、それ以降急速に集落は台地内に広がりをみせ、新たな占地・展開を示すようになる。この場合、可能性として考えられる新たな開拓場所は今回の調査でも確認された埋没田切り地形、その内の水田開発・台地上における畑作経営など

であったと推測できる（図8）。

埋没田切り地形内の水田開発については、何らそれを指し示す証拠が周辺の調査や今回の調査からも得られた訳ではない。ただ、仮に開墾の手が伸びたにせよ、台地傾斜に合わせ北に向かうにつれその幅を狭くしていく田切り地形の地形的特長を考えれば、台地部に新たに集落が展開するという現象は、以前には生産の場として、周辺は開墾のなかった地域であったことを意味し、今回発見された集落の人々が、新たなる開拓農民であったことを示唆する。

畑作の点ではどうであろうか、今回の調査で発見された、畑址は確認された範囲以上に広がりを持っていたことは確かで、これを覆った砂層の広がりが認められずに検出ができなかった部分がかなりあると考えられる。時期的には1段階に帰属するとしたが、時期的な問題もさることながら、この段階で畑址が普及していたことがほぼ明らかとなり、検出時の状況に左右されるということはいいえても、これ以降畑址が台地上になかったとはいい難くなった。当地の気候的な特質から考えて生産基盤のなかで一定の位置を占めていたことは充分に考えられる。とくに、台地上に集落が大きく展開する段階に畑作が無視されていたと考えるほうが妥当性に欠け、先にもあげた田切り地形の特長を考えれば、B地区における大形住居址を生み出す背景にある生産力・富の基盤として畑作経営が存在した可能性は高い。そして、集落の展開という点では新たな開拓農民であったことは、水田開発の場合と同じである。

生産にかかわる遺物としての鉄製品（鎌・斧・紡錘車など）、石製品（砥石・紡錘車など）、土製品（羽口）については、小鍛冶が集落内で行なわれていた点は古代の一般的な集落風景と大差ないといえるものの、遺構出土分布状況などからも、とりあげて有意味な指摘はできないようである（図7）。

遺構と集落

遺構についての分析・変遷については前述してきた。そのなかで掘立柱建物址について住居址のあり方と絡め、1～4段階と集落の拡大する5段階以降とでは、掘立柱建物址の具体的な機能について明確にできないものの集落構成要素として異なった位置付けがなされることは先に述べた通りである。とくにそのことはB地区においては顕著であり、大形の住居址の存在とともに集中する傾向が認められた。その点C地区では極端な集中化はみせない。このことは明らかに大形住居址が存在する・しないといったこととかかわっているといえる。さらに、8段階でC地区の集落が終息するのにくらべ、B地区では二つの文字の異なる墨書土器の多出した大形住居址が登場してくるが、同じ文字の墨書土器が出土した住居址の変遷・継続性から、集落の継続のなかで大形住居址が生れてきたと捉えることができる。そして、土坑の配置状況、画一的な他の住居址との規模的な差異などからも、突出した存在として大形住居址を位置付けねばなるまい。これらの状況からいえることは、富を蓄積した富裕者が成長していった過程として遺構の変遷が意味づけられるといったことである。

その一方で、C地区15号住居址からは、六位以下の下級官人が使用するものとされる銅製の帯金具(巡方)が出土しているにもかかわらず、大形住居址の登場をみないままに集落が終息することは、先にも触れた掘立柱建物址の配置や墨書土器のあり方や、土坑の配置などの点で明らかにB地区とは異なる様相を呈することも指摘できることから、富裕者が成長せずに集落は消滅したといえる。そして、この兆しは、住居址の規模・カマドの位置・柱穴配置などの遺構の形態、さらに段階ごとの住居址群のありかたにも現われている。たとえば、C地区においてはカマド位置や柱穴配置の変化がB地区よりもひと足早いことがあげられる。とくにカマド位置の変化は、単に効率的な変化というよりは、伝統的な意識の変化を伴っていると考えられることから、B地区がよりその変化に遅れた理由は富の蓄積による変化を嫌う一定の保守的な傾向・規制をすでに内在していたと評価でき、C地区ではそのような流れの中になかったといえるからである。

集落の性格

先に生産の問題から、集落の性格を開拓者によるものとして捉えた。それではその背景はどうなのであろうか。C地区から出土した銅製の帯金具（巡方）が９世紀初頭以後使用されなかった（井原1989）ことを考えれば、C地区においては官位をもった地方の有力者の手になる開拓が行なわれた可能性が指摘できる。B地区においては、推察する資料がないもののおそらくは同様な背景を持っていたのであろう。そして、生産力の発展に成功したB地区においては、新たな富裕者・有力者が生れることになった。しかしながらこのような開拓は長くは持たず、集落は消滅してしまう。そしてその要因は、住居址の覆土観察からみても突発的な自然災害によるものではなく、生産関係の失敗、集落の荒廃といった、開拓というものの持つ経営の不安定さなどが一つにはあったといえよう。何らかの理由で開拓を止めたのである。

以上のことから、集落が営まれた頃が、生産域の拡大を嗜好した時代であり、B・C地区に認められる相違は、この流れのなかで人々が対決したという諸事例の相違であると評価されよう。そして、開拓者の背後にある意志とは無関係に、新たな階層が生み出されたことを本遺跡の集落は示唆していると判断したい。そして、その新たな階層の上位者・富裕者は開拓を止め移動したのか、没落したのか、その存在を推定するような遺構・遺物は認められないまま、１～２軒の住居址が台地内から撤退するかのように古くから生産域として利用されてきた湯川の氾濫源を望む段丘上に占地するようになる。

本集落は権力による「計画村落」的、中央と結び付いた「初期荘園」的というよりは、律令体制の根幹である土地制度ならびに税制の実質的変化にともなって生れた地方における有力者・農民による新規開発事業の不安定な継続性を示す一例として位置付けておくのがもっとも妥当である。

最後になるが、９世紀から10世紀にかけて山間地へ人々が入り込んでくることは、佐久地方でも県内各地と同様である（図８）。このことと本集落の関連については集落規模などの点でそれぞれが異なるとはいえ、新たな土地への進出といった点で両者は共通する。しかしその背景には社会状況による複雑な要因が存在していただろう。これらを遺跡からどのように解明していくか、ここでは短絡的に文献史学の成果に追従することはせずに、今後の課題としてあげておきたい（註１）。

注１　例えば、掘立柱建物址は山間地の小規模集落にはほとんどみられず、掘立柱建物址が居住施設の機能として一般化しているのならば山間地の小規模集落にも存在しておかしくない。

注２　C地区にみられる規模の異なる２軒の竪穴住居址による集落における「単位」的存在、そして２組４軒で一つのまとまりをみせることなど、集落の構造を理解するについて良好な資料が今回得られている。他の遺構との関連の中でどのように把握されるものか今後の課題である。

参考文献

井原今朝男　1990『平安時代の生活と村落』『長野県史　通史編』１
小笠原好彦　1984『東日本における掘立柱建物集落の展開』『考古学論叢』
佐久市教育委員会　1984『佐久市遺跡分布詳細報告書』
佐久考古学会　1990『赤い土器を追う』
高橋一夫　1979『計画村落について』『古代を考える』20
長野県教育委員会　1990『下神遺跡』・『総論編』（長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書６・４）
松村恵二　1977『竪穴住居址の分析と集落の復元的考察』『山田水呑遺跡報告書』
御代田町教育委員会　1989『根岸遺跡』

6 まとめ

以上のように栗毛坂遺跡群は縄文時代～中世にかけての複合遺跡であることが判明し、遺構の立地は各時代によって占有場所が異なることが注視され、生産適用地及び自然環境・社会的背景に起因して占地し集落が営まれたことが言えよう。以下、各時代を追ってまとめにかえる。

(1) 縄文時代

縄文時代はA地区の低位段丘面とそこを望むB地区南端部付近で遺構・遺物が検出された。

A地区は報文してきたように半円形を呈した低位段丘上に立地し、縄文時代早期後半から古墳時代後期まで生活・生産の場として利用され、それ以降背後の台地縁辺部の崩落により崖錐地形へと大きく変容し、現在は棚田として利用されている。遺構は早期後半～前期初頭に位置づく可能性の高い集石群が検出された。また、製作址は確認されなかったが、黒曜石製の小形石器の製作にかかわった場と解される地区が検出され、その製品および未製品660点，剥片約6,000点，石核・原石は約500点にのぼった。近年の調査によって腰巻・前田・大井城・長土呂などの遺跡から「陥し穴」が発見され始め、台地部が狩猟の場として利用されていたことが確認され、当地区との密接なかかわりが示唆できそうである。以後A地区では短期的ではあるが早期から晩期までの全期に渡る遺物が出土し、縄文時代を通して長く利用されていたようである。

B地区の南端付近からは後期初頭（粟名寺式）の墓址的性格をもった土坑1基が検出された。遺物については僅かではあるが台地全面から中期～後期にかけての土器が検出され、その大半はB地区中央から南東端にかけて出土した。

今回の調査では住居址は検出されなかったが、検出された遺構・遺物から推察すると該期には湯川を中心に人々がこの付近を生活の場としていただろうと推測される。

(2) 弥生～古墳時代前期

弥生時代については、検出された遺構はわずかであった。集落経営が始まるのは後期末からでB地区南端部とその崖下のA地区に限られ古墳時代前期前葉にかけ7軒の住居が営まれた。佐久地方で検出される該期の集落域は南部では千曲川と滑津川の沖積地を中心に展開する。北部の千曲川右岸は浅間山山麓南端部は、田切り地形が発達する地域でその田切り地形が終息して広がる広範囲な平坦地の微高地と湯川の河岸段丘上に展開する。これらの集落域はそのほとんどが水稲栽培が可能と推測される付近にのみ展開している。本遺跡は後者の湯川の段丘上に形成された小規模な集落で、「方形板刃先」着装用の切り込みを持つ着柄鋤なども検出され、対岸の腰巻遺跡と同様、眼前に広がる湯川の低位段丘(氾濫原)をその主な生産域として寄生した集落であろうと思われる。該期の特徴についての詳細は腰巻遺跡(第17節)の報文を参照されたい。該期の集落は短期的で、この後集落が形成されるまでには約300年間の空白期間を経た7世紀初頭まで待たなければならない。

(3) 古墳時代後期～平安時代

該期に相当する遺構は竪穴住居址約150軒・掘立柱建物址約140棟が検出された。そのなかでも特に注目されるのが掘立柱建物址の建て方であろうと思われる。信濃ではその掘り方は、柱に対し柱穴一つを掘る「坪掘」が一般的であるが、当地方では複数の柱穴を柱筋だけ溝状に掘る「布掘」の掘り方により柱を据える「溝持ち」の形態を持った掘立柱建物址がかなり多い。本遺跡群の場合奈良・平安時代所産の総体の3割余りに達する。このような掘り方は畿内を中心に北陸・東海・関東地方に見られるが、県内の他地域

ではこのような類例はない。

土器については、以前から知られていることではあるが「武蔵甕」と呼ばれる煮沸具である土師器甕の存在である。奈良時代から平安時代前半にかけての土師器の甕は関東地方において一般的に広く使用される甕で、当地方においても同様に使用される在地の甕である。その形態は関東地方でも地域差が多少認められ特に群馬地方で使用される形態に類似する。当地方において７世紀代後半頃から徐々に使用され始めることが認められ、奈良時代の始め頃には在地の甕に替わり使用されるようになるものと思われる。また同時期頃から土師器坏が、奈良時代から平安時代前半にかけては須恵器が多く群馬から搬入される。このような状況は、群馬を中心とした北関東との深い関わりを想定せざるを得ない。当時の搬入土器は美濃須衛窯の製品が、平安時代に入っては灰釉陶器が商品として県外から搬入され、その経路に乗って、中・南信地方からの土器の搬入も予想されたが、搬入はほとんどみられず、遺跡群全体で土師器甕の小片が数点出土したのみで、逆に奈良時代中頃から平安時代始めにかけては当地方の土師器甕が中信地方（松本・南安曇地方）の住居址において多用されていることが知られ、当地方ばかりではなく中信地方までこうした煮沸具を使用する文化が直接ないし間接的に東から波及していたようである。

竪穴住居址・掘立柱建物址を主体に居住占有地や土地利用の状況を概観すると４回に分けて推移したことが認められた。最初は７世紀代、２度目は８世紀初め頃、３度目は９世紀初め頃、４回目は10世紀前半頃である。

まず、７世紀初頭頃にＢ地区南端部とその崖下のＡ地区に集落が営まれ始め、112号住居址のような８ｍ級の住居址に、大きな掘り方を持つ２棟の総柱の倉庫（125・126掘立柱建物址）や庇を持つ143・144号掘立柱建物址など規模の大きな建物群が併設され、眼下の広範な湯川の沉澱原に水稲の生産城を求めていたものと思われる。このような傾向は前段階の弥生時代末から古墳時代前期の様相と類似する。

２度目は、７世紀末から８世紀始めにかけて、台地の縁辺および崖下のＡ地区における居住地は認められなくなり、新たに台地内に営まれ、水稲のほか新たに畑作が広範に行われるようになる（Ｂ地区）。15・27・39号住居址の３軒がまとまり畑作が行われる。ところが、程なく洪水が当地域に起こり住居・畑はその洪水によって一瞬にして埋まってしまった。このため人々は高台に移り住居を構える。これがＢ地区西端の２～４段階（奈良時代）に相当する集落であろうと思われる。しかし、Ｂ地区南端部までは洪水が達しておらず該期の遺物が出土したことから８世紀初め以降も引き続き生産城などに利用されたものと推測される。Ｃ地区では17号住居址が１軒検出されたのみであった。

３度目は、平安時代に入ると洪水の跡地に再度住居が建てられ台地内の再開発が開始されたものと思われる。Ｂ地区南側では２～３個の小規模な集落が、Ｃ地区では川を挟み大きく２つの集落が営まれた。住居址は東西南北に沿って掘り込まれて建てられ、掘立柱建物址と対を成しながら営まれている。Ｃ地区北側の集落では竪穴住居址と掘立柱建物址が一定の間隔をもち整然と配され、計画的に集落が構成されている。９世紀の終わり頃には12・120号住居址のように大形の住居址が現れ複数の掘立柱建物址をもち一定の屋敷を構えるようになる。その周辺には小形住居址が取り巻くような光景が認められる。このような大形住居は、台地内の再開発を担ってきた同規模の住居により構成される集落の中から、新たに富みをもつ有力な農民層が現れたものと思われる。

最後は、前段階において大形住居を中心に形成された集落はそれほど時を経ずして10世紀前半頃突如として姿を消してしまい、１～２・３軒の住居が散在するだけとなる。なおかつ、それまで竪穴住居址とほぼ同様に検出されていた掘立柱建物址は併用されず姿を消す。この掘立柱建物址が排除されるようになったことは、従来からの生産手段、生産物の収納・転換、租税の徴収方法など様々な側面から考察を要する。Ｂ地区南端部では２～３軒の住居址が約100年にわたり継続して営まれていた様子がうかがえる。Ｃ地区で

は1世紀以上もの時間を経過した後、1軒の住居址が出現するものの継続されることなく姿を消してゆく。また、近年調査を終了した前田遺跡や継続中の長土呂遺跡群では、集落規模は当遺跡に比べかなり大きく、当遺跡にやや先行して集落が形成され、同様に終焉してゆくことが看取されている。この傾向は県内においても多く確認されており、この時期の特徴と思われる。

また、7世紀後半からは水田ばかりではなく、新たに台地上に集落域が拡大される。この要因は生産性の向上や開拓技術の進歩ばかりであるとは考えにくく、従来以上に生産物を得る必要性に迫られ始めたものと思われる。この時期は律令制による中央集権国家への移行期にもあたることから、中央権力の地方への浸透やそれとかかわる在地有力者層の再編と農民支配の強化を要因とする動向と捉えることができよう。そして奈良時代以降9世紀代までは計画集落的様相を示すことは律令体制下の集落のあり方を示しているが、10世紀初め頃より集落は解体していき、それ以後はそれまで営まれた以上の広範な地域に小規模集落が営まれる。東祢ぶた・西祢ぶた・丸山・北山寺・腰巻遺跡などは特徴的で、現在でも居住しないと思われるような山間部や小規模な段丘上にまで住居が築かれている。この転機となる10世紀初め頃は、初期荘園の成立や在地農民が自己の田畑を切り開くなど、個人による土地の所有や開墾などが問題となるなど、中央の土地政策が揺らぎ始める時期である。902年に初めて荘園整理令が施行されたことはこの転機を象徴するものであるが、このような状況は、従来の国家的土地・人民支配の体制が崩壊していく過程で、中央権力から離れた在地勢力・個人による自主的な開発や新たな農民支配の形成に向かう過渡的な社会の様相を反映しているものと捉えることができよう。前述の小規模集落の散在はこのような古代末期の過渡期の村落形態の一面であるが、荘園制の展開過程で在地勢力に取り込まれた農民層が新たな集落を一定規模で営むような村落形態も少なくなかったであろうが、今のところそれを裏づけるような調査例はなく、中世のように現在の集落に近接した場所を想定することも可能ではないかと推測する。

(4) 中世

中世の遺構はB地区中央に約100mの間隔をおきに3か所(1～3群)の屋敷を呈した遺構集中区が検出された。時代の確定できる1群は13～14世紀前半に比定されることから鎌倉時代に位置付けられるものであった。7号住居址は長方形の竪穴状遺構の周囲に掘立柱建物址が廻るもので、竪穴状遺構・井戸が近接し溝によって囲まれる。この1群の真西約100mに位置する2群は、3軒の竪穴状の住居址・掘立柱建物址1棟を中心に掘立柱建物址・井戸・柵列6本・11本の溝を伴う一群である。その北約100mの3群は、7・19号掘立柱建物址を中心に9棟の掘立柱建物址と竪穴状の住居址・井戸が集中する一群で、東25mには45号掘立柱建物址が位置する。内4棟は3～4面の庇を廻らす比較的大きなものであり4回の建替えが行われた。2・3群は時期を特定する遺物はほとんど検出されていないが、建物の構造から2群は1群に近似した時期が、3群はやや下り14～15世紀ではないかと推測される。また、B地区を大きく区画する2・43・64・65(61)号溝のうち2・43号溝は1群と同時存在が想定された。

以上、13～15世紀ごろの3群のタイプの異なった屋敷構成と、それに伴う土地区画された溝の存在は中世前半の佐久地方の土地利用や開発を考える上で大きな問題提起ができたと思われる。時期的には未だ不確定な部分を多く残したが、15～16世紀の城跡に伴う調査例はあるものの当該期の調査例は皆無であった当地方にとって中世前半の一資料となれば幸いで、不明な点は今後の調査・分析・考察によって明らかにして頂けることを切望する。

表1　B・C地区竪穴住居址一覧

No.	位置		形態規模					カマド				柱		掘り方		ピット	その他の施設	時期
	地区	グリッド	平面形	主軸	規模	床面積	深さ	床面	位置	材	形	火床	埋没	数	柱間	平面形	深さ			
1	B	ⅧL−15	長方	N−8°−W	718/516	38.38	30	732.600	なし				自			F		2		中世
2	B	ⅧL−15	方	N−2°−E	470/440	19.45	31	733.52	なし				自			F				中世
3	B	ⅧX−10	長方	N−13°−W	246/292	7.18	34	735.953	北・東寄り	石	C'	5	自			E	130〜138	5		9
4	B	ⅧX−15	方	N−9°−W	414/446	17.84	44	735.740	北・東寄り	石	B	1	自	4	184〜248	D	77〜105	8	東柱4	4
5	B	ⅧT−22	方	N−21°−W	495/464	17.72	48	736.277	北中央	粘	B	1	自	4	216〜256	A	130〜169	4		3
6	B	ⅧY−2	長方	N−18°−W	598/504	20.85	47	735.725	北中央	粘	C	2	自	4	248〜328	B'	126〜146	8	周溝、出入口C	2
7	B	ⅧY−5	方	N−23°−W	440/420	18.49	25.5	736.147	なし				人			E	136〜145		覆り方のみ	2〜4
8	B	ⅧM−16	長方	N−6°−E	388/	3.76	8.5	732.700	なし				自			F				中世
9	B	ⅧS−12	方	N−70°−E	250/225	21.00	22.5	736.940	東中央	石	C	1	人			E	161〜196			3
10	B	ⅧN−23	長方	N−1°−W	378/500	18.34	39.5	732.100	北中央	石		3	自	4	192〜240	B'		5	周溝、出入口F	8
11	B	ⅧS−3	方	N−11°−E	422/455	17.85	34.5	731.785	北中央	石	C	1	自	4	184〜208	B'	114〜171	6	貯蔵穴1	7
12	B	ⅧS−18	長方	N−4°−E	632/568	33.06	36	731.640	北中央	粘	C	1	自			B'			(周溝)	9
13	B	ⅧX−3	方	N−95°−E	374/376	14.33	25.5	731.520	東・南寄り		C	2	自			A	147〜180			9
14	B	ⅧX−12	長方	N−4°−E	506/484	23.72	29	731.195	北中央	石	C	1	自	4	216〜248	D		7	周溝、出入口B貯蔵穴1	6
15	B	ⅧX−17	方	N−26°−W	456/432	13.93	30	731.035	北中央	粘	C	1	自	2	224	F	0〜5	3	貯蔵穴1、周溝	1
16	B	ⅧN−23	方	N−2°−E	284/344	9.6	50	731.790	北中央	粘	C	3	人	2		B	119〜157	2	貯蔵穴1、テラス	5
17	B	ⅧS−3	長方	N−9°−E	268/216	5.3	23.5	732.150	なし				自			F				中世
18	B	ⅧM−9	長方	N−3°−W	400/396	15.59	29.6	733.100	北中央	石	B	2	自	4	184〜268	F		4		7
19	B	ⅧM−14	方	N−11°−W	328/356	11.28	19	732.835	北中央	石	B	1	自			E	95〜74			5
20	B	ⅧM−19	長方	N−26°−W	268/220	6.66	12	731.625	なし		B		人			F			特殊遺構4	
21	B	ⅧM−24	方	N−5°−W	296/344	10.66	40	732.370	北中央				自	4	168〜240	D	63〜102	9	出入口A、建替え	6
22	B	ⅧR−4	長方	N−7°−W	348/312	10.33	28	732.365	北中央	粘	B	1	人			E	110〜95	1	貯蔵穴1	9
23	B	ⅧR−4	方	N−25°−W	422/430	17.33	25.5	732.405	北中央	粘	B'	5	人	3・石	200〜264 408	A	157〜181	5	出入口F	7
24	B	ⅧN−21	方・形	N−13°−W	368/386	13.17	56.5	731.815	北中央	石	C	2	人	2	366	E	132〜169	3	周溝、貯蔵穴1	6
25	B	ⅧS−11	方形	N−3°−E	240/164	2.31	98.5	730.549	なし				人			F			特殊遺構5	7
26	B	ⅧM−21	方形	N−2°−W	180/170	3.44	63	731.720	なし				自			F			特殊遺構6	8
27	B	ⅧX−9	長方	N−17°−W	236/396	8.66	59	731.075	北中央	粘	C	2	人			D				
28	B	ⅧY−8	方形	N−18°−W	418/400	16.86	3	735.630	北中央	粘	C	1	人	4	200〜237	B'	152〜182	5	出入口C	2

No.	位置		形態規模					カマド					柱		掘り方		ピット	その他の施設	時期
	地区	グリッド	平面形	主軸	規模	床面積	深さ	床面	位置	材	形	火床	埋没	数	柱間	平面形	深さ			
29	B	ⅧR－8	方形	N-87°-E	243／254	5.72	33	732.185	東南寄り	石	C	1	自	2	288	D	8.8～24	2	テラス	9
30	B	ⅧR-13	方形	N-92°-E	350／330	11.86	35.5	732.215	東中央	粘	C	1	自			F		5	貯蔵穴1	9
31	B	ⅧS-19	方形	0°	354／392	13.33	33.5	73.455	北中央	石	C	2	自			B′				6
32	B	VY－8	方形	N-23°-W	344／346	11.23		735.51	北中央	粘		3	人	4	184～256	D		5	出入口C	2
33	B	ⅧX-19	方形	N-4°-W	361／342	11.72	50	731.110	北中央	石	B	1	人			A	84～125			5
34	B	ⅧM－12	長方形	N-4°-W	340／320	11.83		932.940	不明				人	4	160～264	A′	55～66	5		
35	B	ⅧN-24	方形	N-10°-E	548／528	31.04	31	732.075	東南隅				自	4	248～392	E	111～95	4		15
36	B	ⅧN-24	長方形	0°	360／336	9.14	12.5	732.210	北·西寄り	石	A	4	自	2	208	E	96～84	3		6
37	B	ⅧS－5	方形	N-1°-E	364／400	15.23	57	731.885	北中央	石	C	1	人	4	160～240	A	120～107	7	出入口C，貯蔵穴1	5
38	B	ⅧS－4	長方形	N-5°-E	540／244	15.22	24	732.040	な し				自	22	656～360				掘立柱2×3軒，23m²	中世
39	B	ⅧX－10	方形	N-58°-W	424／446	18.91	88	730.975	西中央	粘	C	2	自	4	208～240	D	110～96	6	周溝	1
40	B	ⅧS－9	方形	N-3°-E	336／308	9.8	16	731.745	不明		C		自					3		9
41	B	ⅧS－19	方形	N-3°-W	320／372	12.15	17.5	731.280	北中央		C	3	人			A	108～132			5
42	B	ⅧS－3	方形	N-2°-E	300／290	8.35		731.615	北中央		C	3	人	4	152～224	D		4		6
43	B	ⅧN－23	方形	0°	296／344	9.82	4	731.925	北中央		A	5	人	2	264	D		2		7
44	B	ⅧS－6	方形	N－2°－E	360／364	12.89	18	732.170	北中央		C	1	自			E	98～82	3	貯蔵穴2	9
45	B	ⅧS－18	長方形	N－2°-E	656／532	33.28	48	731.475	北中央		C	1	人	4	224～296	E	97～141	10	周溝，出入口B ピット内礎石2	8
101	B	ⅩB－6	長方形	N-105°-E	568／500	28.22	28	728.210	東·南寄り	粘	B	3	自	4	272～376			6		14
102	B	ⅩG－13	方形	N-5°-E	312／344	10.07	22	727.135	北中央	石	C	1								10
103	B	ⅩG－22	長方形	N-92°-E	392／366	14.04	36	727.025	東中央	石	C	3	自				98～91			8
104	B	ⅩG－23	方形	N-3°-W	408／404	16.66	32.5	726.765	北·東寄り	石	C	2	自	4	232～264		98～118	6	出入口A	6
105	B	ⅩL－3	方形	N-1°-E	548／532	27.13	52.5	726.315	北中央	石	C	1	自	4	256～296			5	貯蔵穴1	8
106	B	ⅩG－14	方形	0°	420／400	16.45	67.5	726.475	北中央	粘	C	3	自	4	176～208			4		0
107	B	ⅩIF－10		N-11°-E	315／256	7.32	19.5	729.930	北·西寄り	石	C	2	自							0
108	B	ⅩG－16	方形	N-3°-E	374／410	15.16	45	728.460	北中央	粘	C		自	4	184～200		56～30	8	出入口E，(テラス)	0
109	B	ⅩG－2	方形	N-55°-E	400／360	8.33	43	727.185	北·西寄り			1	自				97～91			11
110	B	ⅩG－7	長方形	N-7°-W	564／488	25.36	23.5	727.205	北中央	石		2	自					1		10
111	B	ⅩG－3	長方形	N-3°-E	322／288	8.73	45	726.700	北·西寄り		C	4	人							5
112	B	ⅩG－2	方形	N-4°-E	810／800	64.00	46	726.595	北中央	粘	C	1	自	4	464～488	A′	88～128	6	出入口B，貯蔵穴1	0

No.	位置		形態規模					カマド						柱		掘り方		ピット	その他の施設	時期
	地区	グリッド	平面形	主軸	規模	床面積	深さ	床面	位置	材	形	火床	煙道	数	柱間	平面形	深さ			
113	B	ⅩⅢG−13	方形	N-8°-E	560/528	28.76	43	726.765	炉				自	4	240～360	B	182～205	6	古墳面	
114	B	ⅨXU−16	方形	N−82°-E	337/368	12.31	28	731.515	東南隅	石	C	3	人					2		13
115	B	ⅨXU−16	方形	N-2°-W	324/355	13.15	47	731.575	北中央	粘	C	2	自	4	208～296		203～196	6	出入口A，周溝	0
116	B	ⅦY−19	長方形	N-7°-W	265/	5.24	16	732.275	北中央	石	B		自					2	貯蔵穴1	9
117	B	ⅨXU−1	方形	N-13°-W	342/350	12.28	48.5	731.975	北中央	粘	C	1	自	4	184～224		166～146	4	周溝	0
118	B	ⅩⅢB−23	長方形	N-92°-E	450/514	21.35	25	727.015	東南隅	石	C	3	自					4		12
119	B	ⅩⅢB−23	長方形	N-6°-W	424/441	22.28	25.5	726.875	北中央	石	C	2	自					3		6
120	B	ⅨXU−1	方形	N-1°-W	650/668	39.49	112	731.730	北中央	石	C	1	人	4	256～280		195～172	8	周溝,出入口B,貯蔵穴1	9
121	B	ⅩⅢB−8	方形	N-68°-E	390/360	13.32	14	727.540	東・南寄り		B′	1	不明							15
122	B	ⅩⅢB−19	長方形	N-110°-E	288/356	10.16	15.5	727.120	東・南寄り		C	1	不明				67～90			9
123	B	ⅩⅢB−14				2.17	9	727.441			C									
124	B	ⅩⅢB−14	方形	N-7°-W	408/400	18.03	24	726.995			C		自	4	220～256		118～109	5		5
125	B	ⅦY−4	方形	N-2°-W	520/526	27.2	32.5	731.785	北・西寄り		C	1	人	4	248～312	A	169～263	5		6
126	B	ⅩⅢB−23		N-5°-W	382/331	12.73		726.745	北・西寄り	石	C	3	人			B′				5
127	B	ⅩⅢA−1	方形	N-84°-E	282/346	10.44	35	731.985	東・南寄り	粘		4	人				172～146			9
128	B	ⅩⅢA−12	方形	N-4°-W	471/436	23.87	46.5	732.115	北中央		C	1	自				103～127	1	貯蔵穴1，周溝	0
129	B	ⅩⅢA−17	方形	N-8°-E	308/296	8.41	31	732.225	北中央		C	1	自							8
130	B	ⅩⅢA−21	方形	N-105°-E	568/626	34.56	76.5	731.525	北中央	粘	C	1	自	4	312～368			5	周溝,出入口F,貯蔵穴1	0
131	B	ⅩⅢA−6	方形	N-3°-W	350/354	12.83	31	732.085	北中央		A		人			A	143～164			
132	B	ⅩE−4	方形	N-8°-E	368/304	12.84	27	731.730	北中央	石	C	4	自			B′	135～144			9
133	B	ⅩE−25	方形	N-2°-E	350/370	13.11	27	732.080	北中央	石	C		自			A	140～169	2	周溝，貯蔵穴1	8
134	B	ⅩE−24		N-4°-E	184/180	2.44	22	731.995	北中央			5	人						特殊遺構7	9
135	B	ⅩE−21	長方形	N-4°-W	328/384	12.99	34	732.150	北中央			1	自			A	84～99	1	周溝	8
136	B	ⅦY−2	長方形	N-86°-E	323/258	8.24	17.5	732.020	東・南端	石	CA	1	自					1		9
137	B	ⅩⅢA−16	方形	0°	378/420	14.69	37	732.045	北中央	石	C	1	自							9
138	B	ⅩⅢA−17	長方形	N-70°-E	306/468	14.31	14.5	732.335	東南隅		C	3	自			A	74～91	5		15
139	B	ⅦY−2		0°	348/208	7.65	51	731.620	北中央	石	C		自		256			2		8
140	B	ⅨXU−13	長方形	N-79°-W	408/500	19.75	15	732.045	東・南寄り	石	A	2	不明	4	152～216		151～142	5		14
141	B	ⅨXU−12	長方形	N-17°-W	372/327	11.06	28	732.120	北中央	石		4	自	4	144～224	A′	88～100	5	周溝，出入口B	8
142	B	ⅩⅢA−1				8.66	50	731.795			C		自		224	A	182～201	2		7

No.	位置		形態規模						カマド					柱		掘り方		ピット	その他の施設	時期
	地区	グリッド	平面形	主軸	規模	床面積	深さ	床面	位置	材	形	火床	埋没	数	柱間	平面形	深さ			
143	B	XE-20		N-1°-W	328/336	10.92	9.5	731.885	北中央			1	人				105~145			8
144	B	XE-4		N-8°-W	290/244	7.04		731.660	北中央		C	1	人							8
145	B	XIB-22		N-104°-W	377/463	16.82	27.0	727.360	東・南寄り	石		1	不明					3	貯蔵穴1	14
146	B	XIB-22		N-1°-E	328/300	9.66	33.5	727.145	北・西寄り		B	1	自					5	周溝	7
147	B	XIB-16		N-109°-E	410/423	15.66	17.5	727.640	東南隅		C	1	不明							
148	B	XIB-17		N-8°-W	408/424	16.11	52.5	727.195	北中央	石	C	1	自			A	103~119	2	出入口C	7
149	B	XI-17		N-74°-E	358/418	13.79	35.5	727.140	東・南寄り	石	C	2	自					3	貯蔵穴1，テラス	13
150	B	XIB-18		N-2°-E	368/438	15.92	49.0	726.905	北中央	石	C		自				116~128			5
151	B	XIB-19		0°	400/286	12.04	14.0	727.115	北中央				自	4			94~98	8	貯蔵穴1	11
152	B	XIB-3				4.51	56.0	727.640			C'		自	1				1		7
153	B	XIB-8		N-128°-E	350/	3.92	13.0	727.660		石			自					1		16
154	B	XIB-25				3.79	39.5	726.160					自							
155	欠番																			
156	B	XIB-2				1.45	6.0	728.13					自							13
157	B	XIB-1		N-2°-W	396/420	16.21	27.0	727.915	北中央	粘		1	自	4	136~168	A	69~89	8	周溝	0
158	B	XIB-8		N-5°-W	379/345	12.01	36.0	727.245	北・東寄り	粘	C	2	自	4	120~168		93~87	5	貯蔵穴1，周溝	0
159	B	XI-2		N-18°-E	268/214	5.64	25.0	727.605	炉				自					2		弥生
160	B	VIIIA-9		N-9°-E	428/352	15.74	17.5	733.950	なし				自	7				7		
1	C	IIII-20		N-14°-W	384/395	15.07	32.5	741.943	北中央		B	1	自			B	163~200	7	出入口A，テラス	5
2	C	IVP-8		N-38°-W	180/180	3.77	8.0	741.035	不明					2						6
3	C	IIIJ-11		N-23°-W		10.06	40.0	741.878	北中央	石	B'		自			B	197~176	4	出入口A	7
4	C	IIIJ-13		N-22°-W	420/390	16.53	23.5	742.078	北中央	石	B	1	自	4	168~288		146~204	9	出入口A	8
5	C	IIIJ-18		N-75°-W	486/450	22.53	5.5	742.238	北中央				不明	4	176~280		132~157	13	出入口A	8
6	C	IVA-11		N-119°-E	410/452	17.63	10.0	741.690	東・南寄り				自							15
7	C	IIIE-24		N-33°-W	460/482	20.94	42.5	741.820	北・西寄り	粘	C	3	自	6	200~224			13	出入口B，建替え	6
8	C	IIIJ-5		N-29°-W	480/406	20.96	60.0	741.630	北中央		C'	5	人	8 (4)	216~304 (184~220)		160~140	9	出入口A，周溝，建替え	5
9	C	IIIJ-3		N-21°-W	382/412	15.12	41.0	741.770	北中央	石	C	2	自	8 (4)	160~192 (132~340)		122~155	8		7
10	C	IIIJ-23		N-61°-E	424/400	16.35	50.5	741.695	東・南寄り	石	C	3	人	4	176~264	B	90~85	4		8
11	C	IIIE-24		N-33°-W	443/446	18.67	47.0	741.700	北中央	石	C	4	人				137~162			7

No.	位置		形態規模						カマド					柱		掘り方		ピット	その他の施設	時期
	地区	グリッド	平面形	主軸	規模	床面積	深さ	床面	位置	材	形	火床	埋役	数	柱間	平面形	深さ			
12	C	ⅢE−17		N-27°-W	516／524	26.26	47.0	741.475	北中央	石	B	2	人	6	208−256		201−245	9	出入口C，周溝	6
13	C	ⅠS−22		N-90°-E	／450	3.34	59.0	740.905	東・南寄り	石	C	3	人			A		1		8
14	C	ⅠY−4		N-1°-E	290／378	10.48	28.5	742.025	北・東寄り	石	C	1	自					4		7
15	C	ⅠY−5		N-92°-E	400／344	13.33	34.0	742.180	東中央	石	C		不明				190−204	2	周溝，貯蔵穴1	8
16	C	ⅡU−1		N-1°-W	482／505	23.54	24.0	742.410	北中央		B		自	5	216−232		80−92	9		6
17	C	ⅠS−13		N−73°-E	396／375	13.89	65.0	740.780					人				119−134			1
18	C	ⅠX−3		N-81°-E	380／500	20.29	46.5	741.305	東中央	石	C		自	4	160−328		135−159	7	周溝，貯蔵穴1	8
19	C	ⅠS−24		N-10°-W	465／424	17.62	21.0	741.615	北中央	石	C		自	4	176−288			8	出入口F	9
20	C	ⅠX−5		N-86°-E	440／530	23.04	73.0	741.220	東中央		C	1	自	4	80−272	C	102−120	7	周溝	8
21	C	ⅠX−5		N-1°-W		1.85	31.0	741.525	北中央		C'		人→自				64−81			5
22	C	ⅠX−4		N-2°-W	352／292	6.47	6.0	741.325	北中央	石	C	1	人→自				94−98			6
23	C	ⅠX−5		N-3°-E		8.80	37.5	741.545		石		4	不明							2
24	C	ⅠY−2		N-88°-E	350／332	11.6	48.5	741.720	東中央		C	1	人	4	144−224	B	89−99	10	周溝	9
25	C	ⅠY−2		N-2°-E	300／310	9.26	49.5	741.685	北・東寄り		C		人				137−115			7
26	C	ⅠY−9		N-1°-W		6.93	29.0	742.005	北中央	石	C	1	自				75−96			6
27	C	ⅠY−7		N-8°-E	／440	4.04	34.5	741.65	北中央		B	1	自							6
28	C	ⅠY−10		0°	／380	4.0	40.0	742.105	北中央	石	C	1	自			B	186−217			6
29	C	ⅠX−4		N-5°-N		8.27	34.7	741.305					自	2	184			2	周溝	7
30	C	ⅠX−5		N-4°-W		1.41	52.5	741.335	北・東寄り			4	不明							6
31	C	ⅠY−9		N-2°-W	／360	1.13	9.5	741.910			A		不明					4		7
32	C	Ⅲ J−1		N-19°-W	341／330	10.01	30.0	741.615	北・東寄り		A		自			B	95−116			5
33	C	Ⅲ J−2		N-24°-W	384／352	10.75	27.5	741.690	北・西寄り		A		自				187−213	1	出入口C	6
34	C	ⅢE−22		N-70°-E	330／352	10.76	33.0	741.640	東中央	石	B'	3	人	4	80−152		193−206	4	礎石2	8
35	C	ⅢE−22		N-15°-W	408／390	15.37	35.0	741.470	北中央	石		1	自	4	192−272		205−230	5		5
36	C	ⅢE−21		N-17°-W		2.05	26.5	741.630	北・西寄り				不明	1			185−200	1		4
37−39は欠番																				
40	C	ⅢD−25		N-17°-W	400／412	16.18	40.0	741.525	北中央			1	自	4	160−200		97−133	10	出入口B，貯蔵穴1	6
41	C	ⅢD−14		N-4°-E	456／386	16.94	23.5	741.615	北中央	石	B'	4	自	4	200−272	A'	93−122	4	周溝	7
42	C	ⅢD−10		N-96°-E	405／370	13.88	54.5	741.290	東・南寄り	石	C	2	自	2		A'	112−149			8
43	C	ⅢI−10		N-12°-W	358／352	13.18	25.5	740.978	不明				自					1		

表2 B・C地区掘立柱建物址一覧

番号	位置		遺構					柱間 cm		面積 m²	柱穴形	柱痕形	備考
	地区	グリッド	主軸	形態	種別	規模(間)	一辺 cm (桁行/梁行)	(東西/南北)					
1	B	VII-L-17	E-6°-S	側柱	坪掘	1×2 東 西 南面庇	370.0 270.0	90~230 170~210		11.1	方 形	—	中世
2	B	VII-L-14・19	E-3°-S		坪掘	3×? 東 西	910 560			50.96	方 形 円 形	円 形	竪穴状遺跡を伴う建て直し，中世
3	B	VII-B-6・11	E-5°-S	側柱	坪掘	2×3 東 西	520.0 320.0	158~190 154~318		16.3	円 形	—	中世
4	B	VII-A-9	N-1°-W	側柱	坪掘	1×2 東 西	271.0 249.5	122~129 261~281		6.7	方 形	—	中世
5	B	VII-A-11・12・17	E-1°-N	総柱	坪掘	2×3 南 北 2面庇 (東西)	750.0 549.0	202 258~292		41.2	円 形	—	中世
6	B	VII-A-12・13・17・18	N-1°-E	側柱	坪掘	1×5 南 北	103 340.0	180~218 334~346		34.3	円 形	—	中世
7	B	VII-A-13・14・18・19	E-2°-S	総柱	坪掘	2×3 4面庇	身舎 775×460 庇 655×1025	64~175 92~254 83~225 100~316	身舎 31.1 庇 64.2	方 形 円 形	円 形	中世
8	B	V-N-17・18	E-23°-N	側柱	坪掘	2×4 東 西	700 490	161~182 236~254		34.2	円 形	四 角	
9	B	V-X-4	N-12°-W	総柱	坪掘	1×1 南 北		248~258 280~282		6.5	円 形	円 形	
10	B	V-S-25・X-5	N-15°-W	側柱	溝持	1×2 南 北	221 375.5	140~226 214~228		8.5	円 形	円 形	
11	B	V-T-21・Y-1	E-21°-N	側柱	坪掘	2×3 東 西	524 377	176~206 170~180		19.8	円 形	円 形	
12	B	V-S-25・T-21・X-5・Y-1	E-15°-N	側柱	坪掘	2×2 東 西	365 293	190~200 180~200		10.1	円 形	円 形	
13	B	V-T-21・Y-1	N-13°-W	側柱	坪掘	1×3 南 北	573.5 193.5	174~213 176~206		10.3	円 形	円 形	
14	B	V-X-14	N-20°-W	側柱	坪掘	1×1 南 北		189~190 194~217		4.1	円 形	円 形	
15	B	V-Y-6・7・11・12	E-22°-N	側柱	坪掘	2×3 東 西	388 370	50~151 174~204		15.0	円 形 方 形	円 形	
16	B	V-T-24・25	E-15°-N	側柱	坪掘	1×3 東 西	475 372	170~404 142~320		16.8	不整形	円 形	
17	B	V-Y-9・14	N-24°-W	側柱	坪掘	2×3 南 北	556 371	180~193 145~229		20.7	円 形	円 形	
18	B	VII-A-19	N-4°-E	総柱	坪掘	3×2 南 北	679 365	179~192 204~250		25.2	円 形 方 形	—	中世
19	B	VII-A-13・14・18・19	E-2°-S	総柱	坪掘	2×3 4面庇	身舎 839×331 庇 601×1077	235~333 162~164 130~131 242~333	身舎 27.7 庇 54.68	方 形	—	中世	
20	B	VII-N-24・S-4	N-1°-E	側柱	坪掘	1×1 南 北		201~202 214~224		4.3	円 形		
21	B	VII-A-18・19	E-5°-S	総柱	坪掘	2×3 3面庇 (東西北)	身舎 798×405 庇 677×919	232~286 398~412 96~120 232~286	身舎 32.24 庇 61.6	円 形	—	中世	
22	欠番												
23	B	VII-S-23・X-3	E-10°-S	側柱	併用	2×3 東 西	512 411	206~400 154~180		21.0	楕円形 楕円形	円 形	
24	B	VII-X-2・3	E-3°-S	側柱	併用	2×3 東 西	573 410	145~234 178~202		24.3	円 形 楕円形		
25	B	VII-X-6・7	N-10°-W	側柱	坪掘	2×2 南 北	430 311	144~168 182~234		13.3	円 形	四 角 円 形	
26	B	VII-W-10	N-1°-E	側柱	坪掘	2×4 南 北	670 520	148~184 150~300		40.0	不整形	—	
27	B	VII-X-6・11	N-7°-W	側柱	坪掘	2×3? 南 北	650 170	170 160~260			不整形	四 角	
28	B	VII-X-6・W-10	N-1°-E	側柱	坪掘	2×3 南 北	438 277	111~170 52~212		12.0	不整形	四 角	
29	B	VII-N-11	E-2°-S	側柱	併用	2×3 東 西	490 336.5	136~186 134~176		17.0	長方形	等方形	礎盤 2
30	B	VII-N-17	E-2°-S	側柱	坪掘	1×3 東 西	390 283	130 270~280		11.0	円 形	円 形	
31	B	VII-M-25・N-21・R-5・S-1	E-1°-N	側柱	併用	2×2 東 西	360 315	174~194 144~170		11.3	円 形 楕円形	四 角	
32	B	VII-N-18・19・23・24	E-10°-N	側柱	溝持	2×3 東 西	469 355	158~196 140~174		16.6	—	円 形	
33	B	VII-X-3・4	E-5°-S	総柱	併用	2×3 東 西	590 360	200~280 170~190		23.41	不整形	円 形	補助穴 3
34	B	VII-W-5・10	N-40°-W	側柱	坪掘	2×2 南 北	450 380	200~216 48~248		16.2	円 形	楕方形	
35	B	VII-W-5・10	N-2°-E	側柱	坪掘	2×2 南 北	423 359	41~180 136~192		14.6	円 形	円 形	
36	B	VII-N-12	E-3°-N	側柱	坪掘	1×1 東 西		248~330 252~264		7.4	円 形 楕円形	円 形	
37	B	VII-S-7・8・12・13	E-1°-S	総柱	併用	2×2 東 西	483 436	180~308 148~284		22.1	円 形	円 形	
38	B	VII-S-17・18	N-6°-E	側柱	併用	1×2 南 北	296 250	134~164 244~256		7.4		円 形	
39	欠番												
40	B	VII-N-18	E-6°-N	側柱	溝持	1×3 東 西	240 200	206~216 192~136		4.7		円 形	礎盤 1

番号	位置		遺構概要									備考
	地区	グリッド	主軸	形態	配方	規模(間)	一辺 cm (柱行 桁行)	柱間 cm (梁間 南北)	高床m	柱穴形	柱痕形	
41	B	Ⅷ-N-17・18	E-11°-N	側柱	弁掘	1×2 東 西	361 259	244～274 142～180	9.35	円 形	円 形	
42	B	Ⅷ-N-17・22	E-15°-N	側柱	併用	1×2 東 西	350 290	292～324 138～186	9.7	不整形	角 角 円 形	
43	B	Ⅷ-N-22・N-23・S-2・S-3	E-3°-S	側柱	坪掘	2×3 東 西	680 410	180～290 180～220	27.54	円 形 方 形	円 形 円 形	
44	B	Ⅷ-N-21・22	N-1°-E	側柱	溝持	1×2 南 北	385 284	132～154 284	7.8	—	円 形	
45	B	Ⅷ-B-17・22・18・23・19・24	E-9°-S	総柱	坪掘	2×3 3廂北 (張出部) 4廂北	身舎 748× 375 3 廂北 571× 830 4 廂北 638× 954	196～332 160～215 80～114 195～338 104～193 76～325	28.0 47.28 61.53	方 形 円 形	円 形	中世
46	B	Ⅷ-M-15・20	N-1°-E	側柱	坪掘	1×3 南 北	406 395	124～156 380～390	14.6	円 形 方 形	—	鋼石 1
47	B	Ⅷ-M-15・20	N-1°-E	側柱	坪掘	1×2 西 北	375 286	206 112～376	8.4	円 形	四 角	礎盤 1
48	B	Ⅷ-S-19・20・24・25	N-3°-E	側柱	併用	2×3 南 北	601 348	162～192 160～224	21.0	円 形	円 形	棟持穴 1
49	B	Ⅷ-S-9・10・14・15	E-1°-S	側柱	併用	2×2？ 東 西	430 350	74～222 78～220	12.0	円 形	円 形	
50	B	Ⅷ-S-9・10・14・15	E-1°-S	側柱	併用	2×2？ 東 西	560 325	164～560 130～202	18.2	円 形 不整形	円 形	
51	欠番											
52	B	Ⅷ-S-14・19・20	N-3°-E	総柱	坪掘	2×2 南 北	435 402	200～230 134～284	17.6	円 形	円 形	
53	B	Ⅷ-S-15・T-11	E-9°-S	総柱	坪掘	1×3 東 西	444 217	202～232 213～158	9.6	円 形	円 形	棟持穴 1
54	B	Ⅷ-N-15・T-11	E-7°-S	総柱	坪掘	2×2 東 西	459 209	220～238 84～114	9.6	円 形	円 形	
55	B	Ⅷ-S-20・T-16	E-5°-S	総柱	坪掘	2×2 東 西	480 200	220～476 86～110	9.3	円 形	円 形 四 角	礎盤 1
56	B	Ⅷ-O-11	N-6°-E	側柱	坪掘	2×2？ 南 北	497 182	182 92～182	7.5	円 形	—	補助穴 3
57	B	Ⅷ-X-4・5・9・10	N-4°-E	総柱	坪掘	2×2 南 北	463 375	168～220 224～248	17.3	不 整 長方形	円 形 円 形	
58	B	Ⅷ-M-9・14	E-8°-N	総柱	坪掘	2×2 東 西	570 360	240～340 170～240	21.2	円 形 楕円形	円 形	
59	B	Ⅷ-S-9・10	E-12°-S	側柱	坪掘	1×2 東 西	430 352	214～430 352	14.2	円 形	円 形	
60	B	Ⅷ-S-14・15	E-4°-S	側柱	坪掘	2×2 東 西	396 359	161～218 172～196	13.1	円 形	—	
61	B	Ⅷ-X-7・12・13	N-15°-W	側柱	坪掘	2×2 南 北	340 308	152～172 128～213	10.4	円 形	—	
62	B	Ⅷ-S-21・22・X-2	N-15°-E	側柱	坪掘	1×1 南 北		180 170	3.1	不整形	—	
101	B	XI-G-19	E-19°-S	側柱	坪掘	1×2 東 西	455 220	216～339 218～251	10.1	円 形	円 形	
102	B	XI-G-19・23・24	N-22°-E	側柱	坪掘	2×2 南 北	463 308	104～286 454～472	12.3	不整形	円 形	礎盤 2
103	B	XI-B-11	N-2°-W	側柱	坪掘	1×1 南 北		250 230	5.7	円 形	円 形	
104	B	XI-G-11・12・16・17	N-5°-W	総柱	坪掘	2×2 南 北	329 320	158～168 156～176	10.8	方 形	円 形 四 角	
105	B	XI-G-12・13・17・18	E-6°-S	側柱	併用	2×3 東 西	552 470	550～470 120～240	25.9	楕円形	？	
106	B	XI-G-12	E-3°-S	側柱	併用	2×3 東 西	616 464	224～240 52～228	28.6	不整形	—	
107	B	XI-G-1	N-2°-W	総柱	坪掘	2×2 南 北	512 319	134～172 232～280	16.3	円 形	—	
108	B	XI-G-16・17	E-29°-N	側柱	坪掘	2×3 東 西	483 310	130～186 142～166	15.3	円 形	円 形	
109	B	XI-G-9・13・14	N-12°-W	側柱	坪掘	1×2 南 北	370 189	72～116 84～138	7.0	円 形		
110	B	XI-G-13・14・18・19	N-6°-E	側柱	坪掘	2×3 南 北	415 340	140～200 114～202	14.0	円 形 楕円形	円 形	
111	B	Ⅷ-T-24	N-10°-E	側柱	併用	1×2 南 北	284 249	90～190 268～300	7.14	不 整 円 形	円 形	
112	B	Ⅷ-T-19・20	N-9°-W	—	溝？ (掘)	南 北				—	円 形	
113	B	Ⅷ-T-19	N-15°-W	—	併用	南 北				—	—	
114	欠番											
115	B	Ⅷ-T-18・19	N-7°-W	側柱	併用	2×2 南 北	336 280	124～156 158～185	9.5	不 整 楕円形	円 形	
116	B	XI-B-23・24	N-15°-E	側柱	坪掘	2×2 東 西	377 329	168～310 156～220	12.6	円 形	—	
117	B	Ⅷ-T-18	N-2°-E	側柱	溝持	1×2 南 北	290 280	280 144～290	8.0	—	円 形	
118	B	Ⅷ-Y-3・4	N-2°-E	側柱	坪掘	3×2 南 北	380 190	70～120 80～140	6.96	方 形 楕円形	円 形 四 角	
119	B	Ⅷ-T-23・Y-3	N-2°-E	側柱	坪掘	2×2 南 北	414 346	160～184 194～239	14.3	不整形 方 形	四 角 円 形	
120	B	Ⅷ-T-23・24	N-1°-W	側柱	溝持	1×2 南 北	210 120	102～124 206	4.7	—	—	

番号	位置		遺構概要									備考
	地区	グリッド	主軸	形態	掘方	炭鱗(間)	一辺 cm (桁行)(梁行)	柱間 cm (東西)(南北)	面積 m^2	柱穴形	柱痕形	
121	B	VIII-T-17	N-1°-E	側柱	坪掘	1×2	284	132~158	6.7	不整	円 形	
						南 北	237	236~238		円 形		
122	B	VIII-T-17・18	N-1°-E	側柱	併用	2×2?	398	130~170	8.1	楕円形	円 形	
						南 北	292	236~260				
123	B	X-E-19	N-6°-E	側柱	溝持	1×2	299	134~168	8.4	—	円 形	
						南 北	255	254~256				
124	B	XI-F-11・12	E-2°-N	側柱	坪掘	2×3	610	134~216	23.1	円 形	円 形	
						東 西	390	186~194				
125	B	XI-G-4	N-2°-E	総柱		2×3	510	220~260	31.3	円 形		7世紀
						南 北	520	210~240				
126	B	XI-G-9	N-1°-E	総柱		2×3	700	220~280	37.08	円 形		7世紀
						南 北	520	180~200				
127	B	XI-A-11	N-1°-W	側柱	坪掘	2×2	454	172~194	18.1	円 形	—	補助穴 3~4
						南 北	366	210~244				
128	B	X-E-10・15	N-3°-E	側柱	坪掘	1×2	416		17.1	円 形	—	
						南 北	410	200				
129	B	VII-Y-24・25	E-2°-S	側柱	坪掘	2×3	490	140~180		不整形	—	
						東 西		160~200				
130~134	欠番											
135	B	XI-B-7・12	E-5°-N	側柱	坪掘	1×2	354	156~188	10.2	長方形	—	
						南 北	288	288				
136	B	XI-G-3・4	N-10°-W	側柱	坪掘	2×2	346	120~130	8.4	円 形	—	
						南 北	344	164~180				
137	欠番											
138	B	IX-U-25・V-21	E-17°-N	側柱	坪掘	2×2	310	240	8.0	円 形	—	
						東 西	260	110~150				
139	B	IX-V-21・22	E-1°-N	側柱	坪掘	1×2	256	236	6.0	円 形	—	
						東 西	236	110~145				
140	欠番											
141	B	X-E-3・4	E-9°-S	側柱	溝持	1×2	240	220	5.3	—	—	
						東 西	220	93~121				
142	B	XI-B-1・2	E-5°-N	側柱	坪掘	2×2	472	150~260	14.8	不整形	—	
						東 西	312	150~170		円 形		
143	B	XI-B-13・14・18・19	E-2°-S	側柱		3×5	640	100~140	30.2	円 形		7世紀
						東 西	590	140~220				
144	B	XI-B-12・13・17・18	E-4°-N	側柱		2×5	900	140~220	38.72	円 形		7世紀
						東 西	510	140~180		不整形		
145	B	X-E-19	N-1°-E	側柱	併用	2×3	469	138~170	20.6	円 形	円 形	
						南 北	443	215~229		方 形		
146	B	VII-Y-4・5	N-10°-W	側柱	坪掘	2×2	488	166~190	16.1	円 形	—	
						南 北	342	229~230				
147	欠番											
148	B	VII-Y-14・19	N-5°-W	側柱	坪掘	1×2	362	150~214	7.1	円 形	—	補助穴 1
						南 北	226	224~228		不整形		
149	B	VII-Y-15・20	N-4°-E	側柱	坪掘	1×1		250	6.2	円 形	—	
						南 北		240				
150	B	IX-U-11	N-4°-W	側柱	坪掘	2×2	318	154~164	9.8	円 形	—	
						南 北	308	140~150				
151	B	VII-Y-14	E-17°-N	側柱	坪掘	2×2	332	152~230	12.8	円 形	—	
						東 西	298	132~154		不整形		
152	B	XI-B-13・14		側柱		2×2	580	160~210		円 形		
						東 西		260		方 形		
153	B	VII-R-1	E-17°-N	側柱		2×2	350	156~230	12.84	円 形		
						東 西	300	130~150		不整形		
154	B	XI-B-23	E-17°-N	側柱		1×2	330	200		方 形		
						東 西	200	180				
1	C	III-I-14	N-23°-W	総柱	併用	2×2	330	96~156	9.9	不整形	円 形	
						南 北	292	154~163				
2	C	III-I-24	E-24°-N	側柱	坪掘	1×2	388	274	10.6	方 形	--	
						東 西	274	190~198		円 形		
3	C	III-J-10	E-4°-N	側柱	坪掘	1×2	616	393	20.6	円 形	—	
						東 西	400	227~277				
4	C	III-I-10・15	E-15°-N	側柱	坪掘	2×2	372	175~185	12.2	円 形	—	
						東 西	328	160~169				
5	C	III-J-17・18・23	E-22°-N	側柱	併用	1×2	315	151~167	8.7	円 形	—	
						南 北	280	277~283				
6	C	III-N-4・5	W-25°-S	側柱	坪掘	2×3		122~160	—	楕円形	円 形	
						東 西						
7	C	III-J-22・23	E-21°-N	側柱	坪掘	2×3		158~174	—	小整形	—	
						東 西				円 形		
8	C	III-J-14・15・20	E-20°-N	側柱	併用	2×3	486	190~215	19.6	不整形	—	
						東 西	405	149~176				
9	C	III-P-21・22	N-2°-E	側柱	溝持	1×2	232	182~201	4.5	—	円 形	
						南 北	208	231~234				
10	C	I-S-2・3	E-4°-N	側柱	坪掘	2×3	596	179~250	24.3	円 形	—	35歳に切られる
						東 西	409	187~222				
11	C	I-S-19・24	N-1°-E	側柱	坪掘	2×2	402	162~202	14.8	楕円形	—	36歳に切られる
						南 北	366	390~415				29歳を切る
12	C	I-S-25・T-21・X-5・Y-1	E-1°-S	側柱	坪掘	2×2	457	230~440	17.5	円 形	—	
						東 西	370	180~218				
13	C	I-S-18・19・23・24	E-2°-S	総柱	坪掘	2×2	480	186~282	15.3	円 形	—	36歳に切られる
						東 西	321	144~164				25歳を切る
14	C	I-T-25・Q-5	E-1°-S	側柱	併用	2×3	509	170~180	18.1	円 形	—	
						東 西	356	158~176				
15	C	I-T-21・Y-1	N-1°-W	側柱	坪掘	2×3	410	120~145	15.6	円 形	—	
						南 北	335	153~330				
16	C	I-T-21・22	N-0°-E	側柱	坪掘	2×2	310	148~162	9.2	円 形	—	
						南 北	296	132~164				

番号	位置		遺構概要										備考
	地区	グリッド	主軸	形態	墓方	規模(間)	一辺cm(桁行・梁行)	柱間cm(長軸・短軸)	面積㎡	柱穴形	柱痕形		
17	C	I-T-22・23	E-3'-N	側柱	坪掘	2×2 東 西	398 398	198～398 148～160	6.0	円 形	円 形		
18	C	I-T-23・24	E-9'-N	側柱	坪掘	1×2 東 西	440 330	129～238 330	14.5	円 形	—		21建に切られる
19	C	II-P-22・23・U-2・3	E-2'-N	側柱	溝持	2×3 東 西	482 384	163～212 142～174	18.5	—	円 形		
20	C	II-P-24・U-4	N-3'-W	側柱	溝持	2×3 南 北	460 355	168～175 154～392	16.4	—	?		
21	C	I-T-24	E-1'-S	側柱	坪掘	1×2 東 西	258 234	229～239 123～135	6.0	円 形	—		18建を切る
22	C	I-T-19・20	E-5'-N	側柱	併用	1×2 東 西	258 240	240～250 105～151	6.19	円 形	—		
23	C	I-T-23・24・Y-3・4	E-2'-S	側柱	坪掘	2×3 東 西	437 380	180～190 102～178	16.6	円 形	—		
24	C	II-P-16・17・21・22	E-1'-S	側柱	溝持	1×2 東 西	250 242	230～254 108～136	5.8	—	—		
25	C	I-S-23・24	E-10'-N	側柱	坪掘	1×2 東 西	355 209	143～367 208～210	7.3	不整形	円 形		13建・138坑に切られる
26	C	II-D-18・19	E-9'-N	側柱	坪掘	1×2 東 西	265 245	245 128～137	6.5	円 形 方 形	—		
27	C	II-P-19・20	N-9'-W	側柱	坪掘	1×1 南 北		250～260 262～264	6.9	円 形	—		
28	C	I-S-19・20・24・25	E-1'-S	側柱	坪掘	2×3 東 西	443 342	128～443 164～184	15.1	円 形	—		37建に切られる 197坑を切る
29	C	I-S-19・24	0°	側柱	併用	2×2 東 西	420 324	164～256 147～169	13.6	円 形	円 形		11建・142坑・13建に切られる
30	C	I-Y-5・10 II-U-1・6	N-2'-E	側柱		1×2 南 北	340 300	310 170	10.2				15・28住に切られる
31	C	I-S-25・T-21	E-4'-S	側柱	併用	2×3 東 西	528 372	166～198 179～193	19.6	不整形 丸	円 形		37建・19住・191坑に切られる
32	C	III-E-22・J-2	E-25'-N	側柱	併用	2×3 東 西	441 281	130～155 128～154	12.4	—	円 形		31建に切られ272・276・268坑を切る
33	C	III-E-21・22・J-1・2	N-20'-W	側柱	併用	2×(2) 南 北	325 268	147～337 90～148	9.6	円 形	円 形		288坑に切られ287坑を切る
34	C	III-E-11・16	E-12'-N	総柱	溝持	2×2 東 西	290 340	120～200 120～180	9.86	円 形	円 形		
35	欠番												
36	C	III-E-22	E-30'-N	側柱	併用	2×2 東 西	561 275	130～227 130～144	9.9	不整形	—		31建・273坑に切られ34住を切る
37	C	III-J-2・3・7・8	N-30'W	側柱	坪掘	1×1 南 北		361～370 374～375	13.7	方 形 不整形	—		
38	C	III-E-6	N-75'-E	側柱	坪掘	1×2 東 西	247 240	250 115～137	6.2	円 形	円 形		
37	C	III-E-22	N-27'-W	側柱	坪掘	1×2 南 北	300 150	140～189	5.7	円 形	—		37建に切られる
40	C	III-E-23	E-58'-S	側柱	坪掘	1×2 南 北	150 330	96～230	4.9	円 形	—		10住に切られる
41	C	III-E-23・J-3	N-28'-W	—	坪掘	2×2 東 西	300 340	160～180 140～160	10.0	不整形	—		10住・97坑に切られる
42	C	III-E-23	N-37'-W	側柱	坪掘	1×1 南 北		220 240	—	円 形	円 形		SB11に切られる
43	C	III-I-5	E-23'-N	側柱	併用	2×3 東 西	435 328	153～184 127～138	14.2	円 形 不整形	円 形		
44	C	III-D-15・20・E-11・16	E-12'-N	側柱	坪掘	3×3 2×2 東 西	(39 47 (35 43	120～200 50～224 172～226 160～210	15.82	円 形 楕円形	—		越て替え
45	欠番												
46	C	III-D-9	E-3'-S	側柱	坪掘	1×2 東 西	315 274	268～280 104～212	8.6	円 形	—		
47	C	III-D-9	E-3'-S	側柱	併用	1×2 東 西	440 232	223～242 36～261	10.2	楕円形	—		
48	C	III-D-19・20・24	N-6'-W	側柱	坪掘	2×1 南 北	270 210	210 124～145	5.8	円 形 楕 円	—		
49	C	III-D-10	E-5'-N		併用	1×2 東 西 西側北	360 210	190～230 100～220	8.2 (+0.5)	不整形			
50	C	III-D-9		?	坪掘	2×? 東 西		— 280	—	不整形	—		
51	C	III-D-9	E-26'-S	側柱	坪掘	1×2 東 西	490 430	468～491 152～240	20.1	円 形	—		
52	C	III-E-21・22	N-18'-W	側柱	併用	2×2 南 北	348 332	160～190 140～322	11.4	不 整 円 形	—		
53	C	I-T-21	N-75'-E			1×1		180～220 210	4.03				
54	C	I-S-23	E-4'-S	側柱		1×2 東 西	560 370	170～200	20.06	円 形			
55	C	III-J-7	N-75'-E	側柱		1×2	250 240	230 230	6.18	円 形			
56	C	III-E-11		側柱		1×2 東 西		380 150～180		方 形			

第19節　西赤座遺跡（にしあかざ）

1　遺跡の概観

西赤座遺跡は佐久市大字岩村田字大馬久保129－２番地ほかに所在する。浅間山の南麓末端部、田切り地形に挟まれた台地上に立地し、最大の田切り地形である湯川右岸の台地上となる。湯川河床からの比高は約40ｍ、標高は平均740ｍである。

当台地上は佐久地方を代表する弥生時代から平安時代にかけての遺跡密集地として周知され、各遺跡は大小の田切り地形によって区分されている。本遺跡範囲は北に栗毛坂遺跡群、東に東赤座遺跡と接し、西は旧田切り地形と思われる低地を境とし、南は田切り地形で区切られる南北約400ｍ東西約200ｍの範囲である。なお、西に近接して中久保田遺跡、枇杷坂遺跡群などがある。(図1)

2　調査の経過と概要

調査は残件部、上信越自動車道の設計変更による追加分などの関係から３年次にわたった。

調査対象区域は上信越自動車道の佐久インターチェンジ部分にあたり、面積は総計9,200 m²、遺跡の北端にあたる。調査以前一帯は水田、畑、宅地であった。

調査期間は昭和62年４月13日～６月25日、昭和63年10月13～26日、同年11月22～12月5日、平成２年５月17日～６月11日である。以下年度ごとに調査の概要を記す。

昭和62年度：栗毛坂遺跡群Ｃ地区の調査と並行して行い、調査研究員８名があたった。調査対象面積は5,700 m²である。

調査は層序、遺構・遺物の分布状況把握を目的として、調査区全域にトレンチを設定することから開始し、人力にて掘り下げに入った。その結果、調査区北端で埋没した旧田切り地形と思われる砂礫層を確認し、中央でⅡＡ２層面にピット状の落ち込みと広い範囲にわたる手あぜ状の高まりを確認した。このため北端部を除いて全面調査を行い、掘立柱建物址、溝址、土坑、耕地整理址を検出した。

昭和63年度：残件となっていた面積1,000 m²がその対象となった。調査は栗毛坂遺跡群、枇杷坂遺跡群、中久保田遺跡と並行して実施し、調査研究員４名があたった。

結果、調査区が宅地となっていたために攪乱がひどく検出の状況はよくなかった。前年度の遺構の続きを捉えることができなかったが、新たにピット状の土坑、溝を検出した。

平成２年度：上信越自動車道用地拡張にともない執り行われたものであり、本来なら平成元年度に実施されるはずであったが、諸事情から次年度に調査変更となった。調査対象面積は2,500 m²で、調査研究員２名があたった。

調査は水田造成によって約１ｍの段差ができるほど削平されている西側を除いて、62年度の調査区地表面と地続きになる東側で溝址が検出された。

なお、測量は中久保田遺跡、枇杷坂遺跡群と並行して、第１章第４節で前記した方法に沿って、大々地区を設定した。また、２・３次の調査に際してはそれぞれ前回の調査で利用した大地区杭を再利用し、そこを起点として光波測距儀を用いて測量を行った。

整理作業は62年度より、図面整理を中心に断続的に行った。遺物整理、実測、図版作成、原稿執筆などの本格的な整理作業を平成元年４月より開始し、その間、発掘調査と並行かつ、断続的に行うなどして本報告に至った。

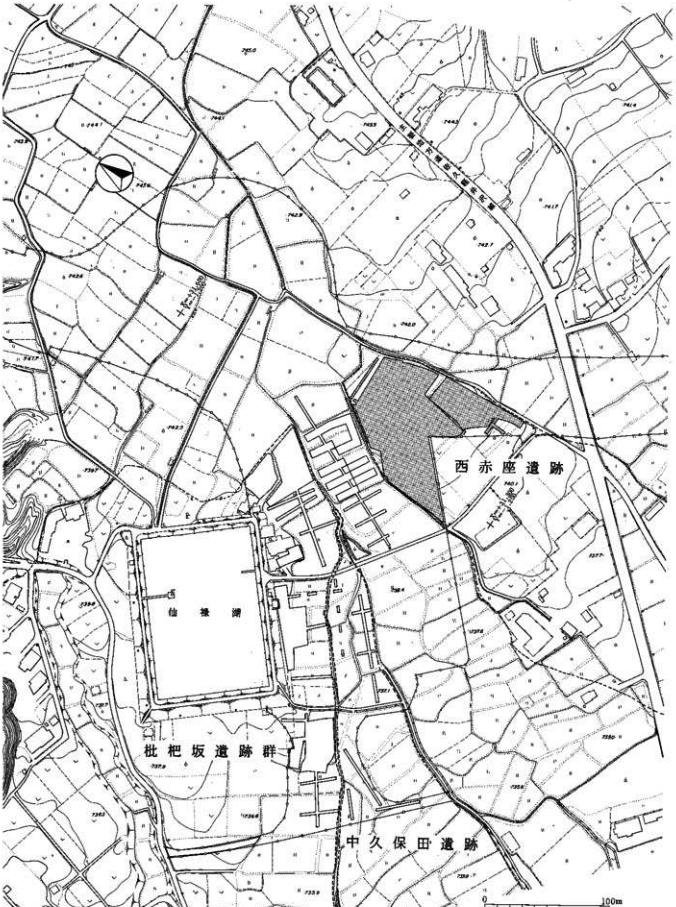


図１　地形図（1：3,000）

調査日誌抄

昭和62年度

4月13日　トレンチ設定。人力による掘り下げ開始。

20日　基準杭設定。トレンチ内精査。並行して墨毛堀遺跡群C地区調査を開始。

21日　周辺用地境の畦畔作り。トレンチ土層観察。

30日　北端部を除き重機による表土除去開始。遺構検出作業。土坑、溝址を検出。

5月6日　北端部で手あぜ状に伸びる高まりを検出。周辺の聞き取り調査を行う。土坑調査開始。

7日　手あぜ状の遺構を畦畔状遺構と仮名し検出に努力する。区内に残る土層観察用のベルト壊し。

28日　畦畔状遺構の精査、写真撮影。

6月4日　畦畔状遺構の実測開始。

19日　畦畔状遺構ドトレンチ断面に約10本の溝状の立ち上りを確認したためさらにトレンチをふやし掘り下げ。断面観察。

25日　残骨部を残し調査終了。

昭和63年度

10月14日　重機により残骨部分の表土除去開始。家屋解体の際、かなり攪乱を受けている状態を確認。

17日　検出開始。

19日　中地区杭設定作業。

21日　検出された土坑・溝址の調査開始。

26日　一旦、調査を凍結。

11月22日　調査再開。溝址の掘り下げ継続。

12月2日　調査区遠景写真撮影。コンタ図作成、機材撤収をもって調査終了。

平成2年度

5月17日　重機による表土除去開始。

18日　表土除去終了。

28日　機材搬入。遺構検出。

6月11日　写真撮影。機材撤収をもって調査終了。

3　基本土層

周辺一帯は、水田造成にともない、大小の田切り地形が埋め立てられ、または水田造成により削平されるなどして土層堆積の環境は悪い。このため基本的には、基盤となる軽石流層(ⅡA2)とⅠA各層とで、層序は構成される。また、ⅡA2層の腐食層であるⅡA1層は見られず、ⅠA層との関係から、調査区一帯は水田造成などによる削平を受けていると判断される（図2）。

ⅠA1層：現耕作土（水田、畑）

ⅠA2層：褐色土。黒褐色土を混入し、パミス3％を含み、鉄分の集積がみられる。しまりは良くない。調査区内に点在する。

ⅠA3層：褐色土。パミス3％含み、上部に鉄分の集積がみられる。しまりは比較的悪い。砂質である。調査区中央に分布する。

ⅠA4層：黒褐色土。パミス3％含み、径3 cmの軽石を含む。ⅡA2を混入し、淘汰が悪い。調査区南に分布する。

ⅠA5層：黄褐色土。パミスを多量に含み、淘汰が悪い。畑作などによる攪乱土の可能性がある。

ⅡA2層：明褐色土（浅間軽石流堆積物）。

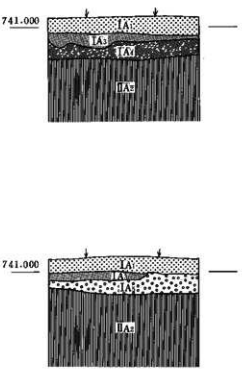


図2　基本土層

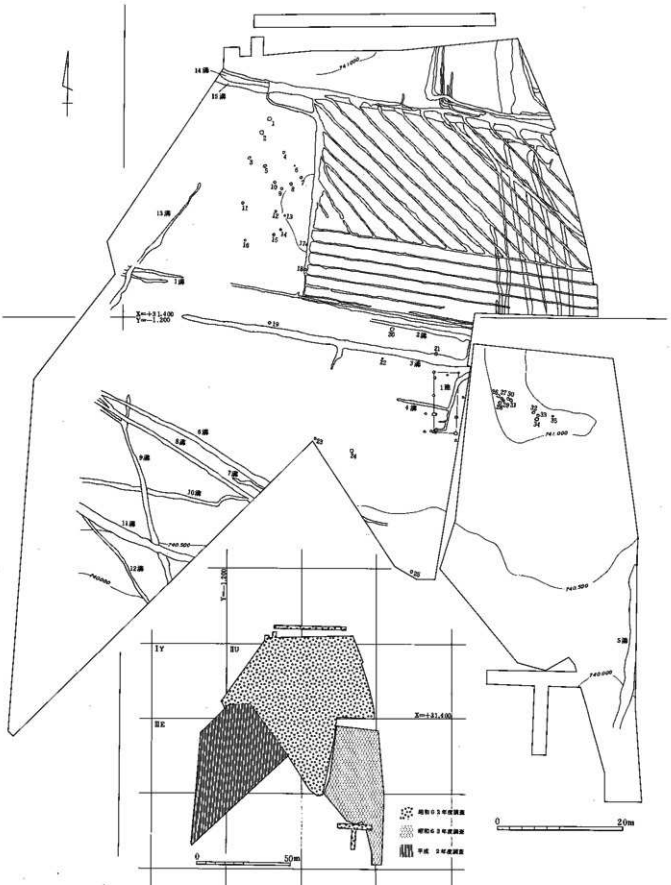

14溝
15溝
13溝
1溝
X=+31,400
Y=-1,300
2溝
3溝
4溝
5溝
6溝
7溝
8溝
9溝
10溝
11溝
12溝
741.000
740.500
740.000
740.500
740.000
IY
IU
IX
X=+31,400
0
50m
0
20m

図３　遺構配置

4　遺構と遺物

検出された遺構は、掘立柱建物址１棟、土坑35基、溝址38本(内23本が流路群)、耕地整理址１址であり、すべてのものについてその時期を確定できない。土坑についてはすべてピット状のもので、集中して見られることから一括して報告する。また、溝址としたものに自然流路、暗渠排水の可能性の高いものが調査区北東一帯に集中して存在するため、流路群として一括して扱った。耕地整理址については調査時、形状が手あぜ状であるため畦畔状遺構と仮称したが、検討を重ねた結果、耕地の整備に関係した遺構と捉えこの名称を採用した。

遺物は、溝址、耕作土中から出土しているが僅少であり、平安時代から中世にかけての土器、陶磁器がその主なものである。これらはすべて小片であった。その他金属器、石器なども若干得られている。

(1)　遺構と遺物

ア　掘立柱建物址

１号掘立柱建物址 (図４、PL263)

本址はⅣB－12グリッド周辺に位置する。検出面はⅡA2層である。発掘調査段階では建物址、柵列の可能性を考慮し調査を進めたが、明確に捉えられず、整理段階で検討を加え、建物址とした。

平面プランは、１間×３間を基本とした南北棟、側柱式である。西側に庇が付き、東側は南に外れて自重により深く沈んだとも思える柱痕を持つP8がある。規模は桁行9.6 m, 梁行3.8 m、面積37.77 m²をはかる。主軸はN－0°－Eを指す。柱間は桁行でP1～17間が短く、そのほかは、2.7～2.9 mをはかりほぼ均一である。柱穴は径20 cm強の円形を基本とし、不整形のものもみられる。柱痕は桁行に５本みられ、径は18 cm前後、P8のみ８ cmと小さい。P14は沈み込みが、P16には礎石が見られた。またP7は柱痕は確認できなかったものの柱痕と考えられる落ち込みがみられる。支柱穴はP5・10・14にみられ南側に集中している。

支柱穴と沈み込みをみせる柱痕との配置状況を考えあわせると地盤の安定性か、重すぎる上屋構造によるものか判断し難いが何らかの要因があったと思われる。覆土は柱痕が黒褐色土を主体としたⅡA２粒子の混じる、締まりの悪い土である。掘り方埋土は、極暗褐色土を主体としⅡA２粒子の混じるやや締まった土である。出土遺物はなかった。

イ　土坑

ⅡU区土坑群 (図５、PL263)

ⅡU区に18基のピット状の土坑が集中してみられた。検出面はⅡA２層である。平面形から、方形と円形・楕円形とを呈するものの２つに分けられる。方形を呈するものは一辺が20 cm前後、深さ17 cmほどをはかるもので P11～15がそれにあたる。円形・楕円形を呈するものは径25 cm前後をはかるものが多くを占め、60 cm弱のものもみられる。両者とも断面はU字状を呈するものが多い。P11・16・18は柱の据え方と思われる段がみられた。深さは平均25 cm前後にまとまる。覆土は、黒褐色土を主体とした比較的淘汰のよい土がみられ、各土坑における差異はみられなかった。

なお、整理段階で再検討し、P4～10にみられるように建物址としてグルーピングできそうなものもあるが、本報告では土坑として扱っておきたい。

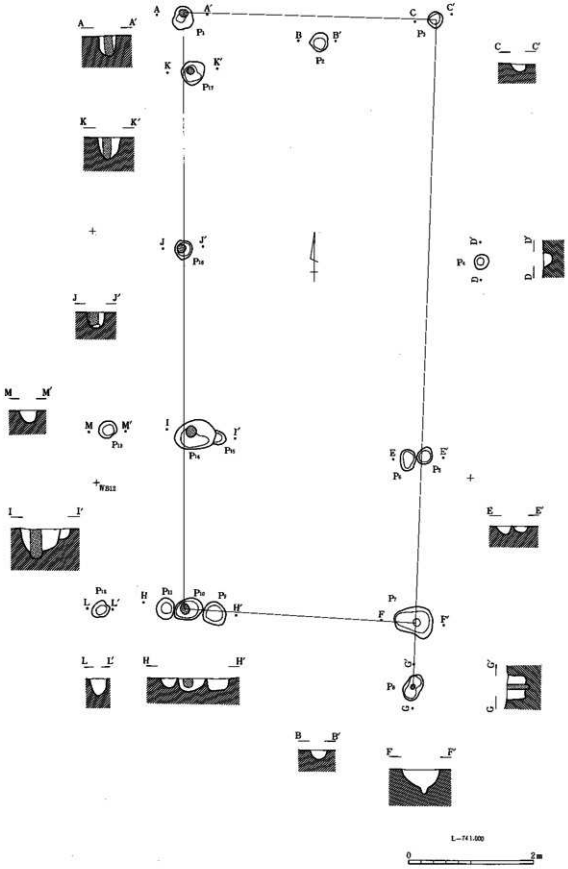

A
A'
C
C'
B
B'
K
K'
J
J'
D
D'
M
M'
I
I'
E
E'
L
L'
H
H'
F
F'
G
G'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
WELL
L=741.000
0
2m

図4　1号掘立柱建物址

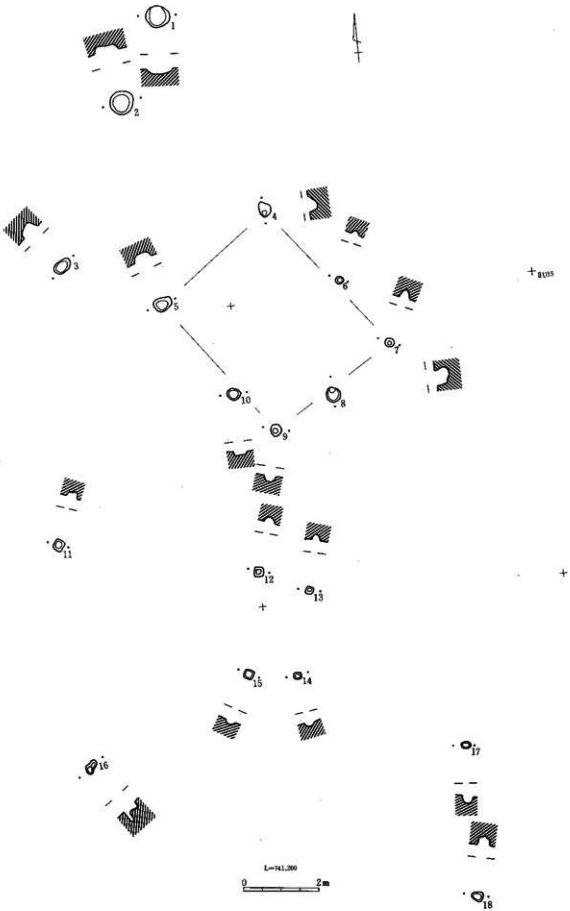


図5　ⅡU区土坑群

ⅣB区土坑群（図6）

ⅣB区には13基のピット状の土坑がみられた。そのうち26～35号土坑が集中し、20～22・25号土坑が散在した状況であった。検出面はⅡA2層である。20～22・25号土坑は径20～50 cm、深さ20 cm 前後で、覆土はⅡU区にみられたものに類似する。

26～35号土坑は、宅地造成による攪乱を受け、検出状況はよくなかった。宅地にともなうピット状の落ち込みもみられたが、本土坑群との覆土の差異は明確であった。平面形は円形を主なものとし、径40 cm前後で、断面は柱の据え方と思える段を持つものが3基みられている。覆土は黒褐色細粒砂土を主体とした土でⅡU区のものと大して変わりはなく、締りのないものであった。

ウ　溝址

1～4号溝址（図7・8、PL263・265）

ⅡA—01グリッド周辺、ⅡA2層で4本の溝址を検出した。西側では表土除去時に削平を受けたため全貌はつかめなかったが、1・2号溝址はその続きが調査区西端で検出されている。

1号溝址はⅠA3層下部まで立ち上がりをみせ、耕地整理址を切っている。規模は全長約57 m，幅約40 cm、深さ10 cm をはかる。断面はU字状を呈し、底の比高差はほとんどない。覆土は黒褐色土主体で、ⅡA2粒、パミスを若干含んでいる。

2号溝址はⅠA3層上面まで立ち上がりをみせ、3号溝址を切る。規模は全長約18 m、幅約80 cm、深さ15 cm 前後をはかる。断面は弓状を呈し、底は東側で若干低くなり比高差は10 cm ほどである。覆土は1号溝址と類似する。遺物は土師器甕片、内耳土器片、近・現代の磁器片が出土している。

3号溝址はⅠA5層を切り、ⅠA3層に被われる。規模は全長約36 m、幅約0.8～1.6 m、深さ25～40 cm をはかる。断面は弓状を呈し、底は東側に傾斜している。中央で南に分岐し東調査区境で北に分岐する。覆土は暗褐色主体の締りのない土で、下部にⅡA2ブロックを含む。遺物は、カワラケ（1）、内耳土器片・擂り鉢片などが出土した。1は口径7 cm、底径5.45 cm、器高1.9 cm、右回転、胎土はやや荒く砂粒をわずかに含む。焼成は良好で橙色を呈し、器厚から佐久市大井城で分類されているA3型に相当する。

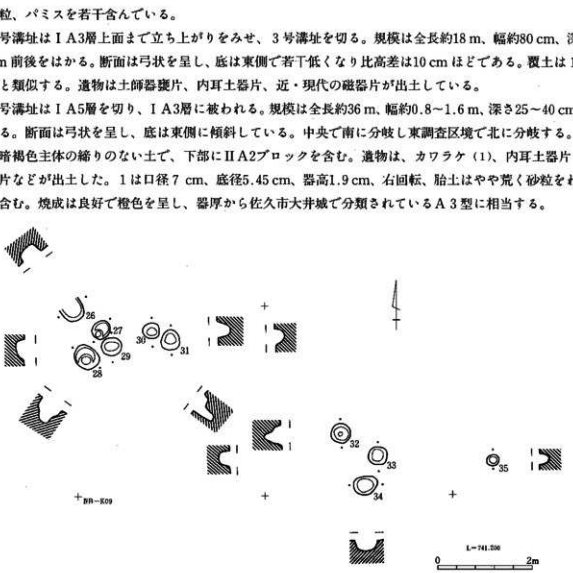


図6　ⅣB区土坑群

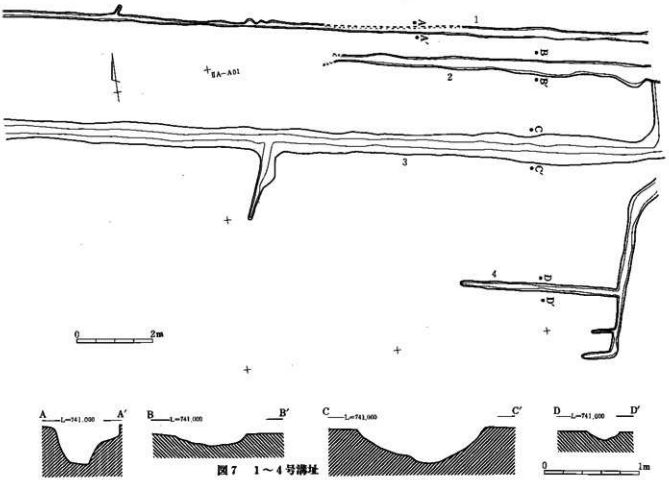


図7　1～4号溝址

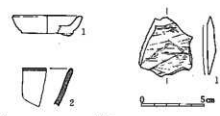


図8　1・3・4号溝址出土遺物

4号溝址はⅠA3層上面まで立ち上がりをみせる。南北を軸に東へ3分岐し、全長南北約20m、東へ約2～8m、幅約30～80cm、深さは5～10cmをはかる。断面は弓状を呈し、底は東から北へ傾斜をみせる。覆土は黒褐色土で淘汰が悪い。

遺物は口唇部外側に浅い沈線が施されている青磁碗片（2）・須恵器片・天目茶碗片が出土している。2は14世紀後半と思われる。

5号溝址（図9、PL264・265）

本址はⅣH—06グリッド周辺に位置する。検出面はⅡA2層である。全長約24m、幅約1～1.9mをはかり、南側で幅が狭くなる。深さは約1～1.2mをはかる。底の比高差は90cm前後で北から南へ傾く。断面はU字からV字状をへて底が削り取られ突出したようになる。覆土は10分層される。1層：黒褐色土、（締まり良い）。2層：暗褐色土、（ⅡA2ブロック混入）。3層：暗褐色土、（ⅡA2ブロック若干混入）。4層：黄褐色土、（ⅡA2崩落土）。5層：暗褐色土、（2・3の混成土）。6層：黄褐色土、（ⅡA2崩落土）。7層：黄褐色土、（ⅡA2崩落土）。8～10層：砂礫層、（上部に薄い砂層がみられる）。以上のことから、少なくとも北から南へかなり激しい水流があったことがうかがえる。

遺物はすべて7層以下にみられ、須恵器坏・甕・長頸瓶片、土師器甕片・内面黒色坏・皿片、山茶碗片（1）、カワラケ片（2）が出土した。2は胎土が高熱をうけて発泡し、灰が溶解して厚く割れ目まで付着している。また、付着物の中には1～2mm位の銅と思われる緑色の粒状物がかなり付着している。

６～12号溝址（図10、PL265）

ⅣA－16グリッド周辺、ⅡA2層で７本の溝址を検出した。なお、調査区西側は水田造成に伴って１ｍ近い削平をうけ段をもって落ち込むため、溝の続きは確認できていない。なお、ほとんどの場所で現耕作土下にⅡA2層が表れているため、12号溝址を除いて、各遺構立ち上がりの観察はできなかった。

６号溝址は９号溝址を切り、全長約16ｍ、幅約40～60 cm、深さ80 cm前後をはかる。断面は擂り鉢状を呈し、底は平坦でなく、比高差23 cmをはかり東に傾斜する。覆土は４分層される。１層：細粒砂土。２層：中粒砂土。３層：粗粒砂土、砂礫混じり。４層：ⅡA2と砂礫の混成土。

７号溝址は全長約2.5ｍ、幅約35 cm、深さ20 cm前後をはかる。覆土は砂礫である。

８号溝址は10号溝址に切られ、９号溝址を切り、全長約15ｍ、幅約40 cm、深さ80 cm前後をはかる。断面は擂り鉢状を呈し、底の比高差23 cmをはかり東に傾斜する。覆土は３分層され、各層は６号溝址と対応する。９号溝址は６・８・10・11号溝址に切られ、全長約16ｍ、幅約30～50 cm、深さ60 cm前後をはかり、北で分岐する。断面は擂り鉢状を呈し、底の比高差30 cmをはかり南に傾斜する。覆土は中粒砂土、粗粒砂土の互層状で、５mm強の軽石を含む。

10号溝址は８・９号溝址を切り、全長約14ｍ、幅約40 cm、深さ30 cm前後をはかる。覆土は３分層される。１層：暗褐色土、砂質分に富む。２層：ⅡA2に暗褐色土が若干混じる。３層：暗褐色土にⅡA2ブロックが若干混じる。なお、用地外を挟んで東側でその続きが検出されている。断面は鍋底状を呈し、底の比高差はほとんどない。

11号溝址は９・12号溝址を切り、全長約10ｍ、幅約50～70 cm、深さ50 cm前後をはかる。断面は擂り鉢状を呈し、底は平坦でない。比高差はほとんどない。

12号溝址は11号溝址に切られ、全長約10ｍ、幅約20～30 cm、深さ25 cm前後をはかる。断面はＵ字状を呈し、底は比高差15 cmをはかり、東に傾斜をみせる。

13～15号溝址（図11）

13号溝址はⅡU－21グリッド周辺に位置する。検出面はⅡＡ２層である。全長約12ｍ、幅約50～70 cm、深さ１ｍ前後をはかる。断面Ｖ字状を呈し、底は南側で低く、比高差約30 cmをはかる。覆土は砂礫主体である。

14号溝址はⅡU－03グリッド周辺に位置する。15号溝址中で検出。耕地整理址に切られる。全長約８ｍ、

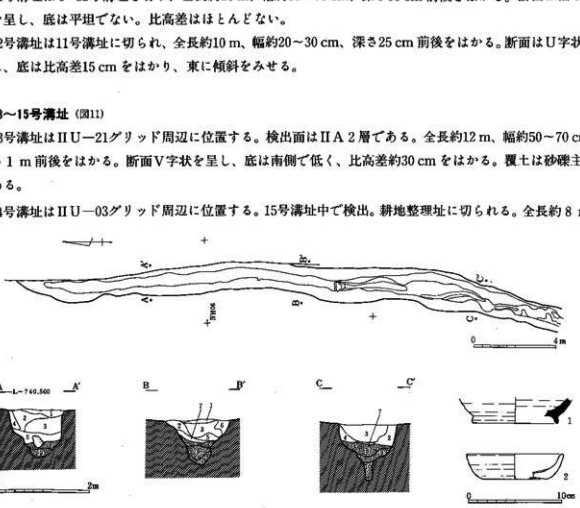


図９　５号溝址

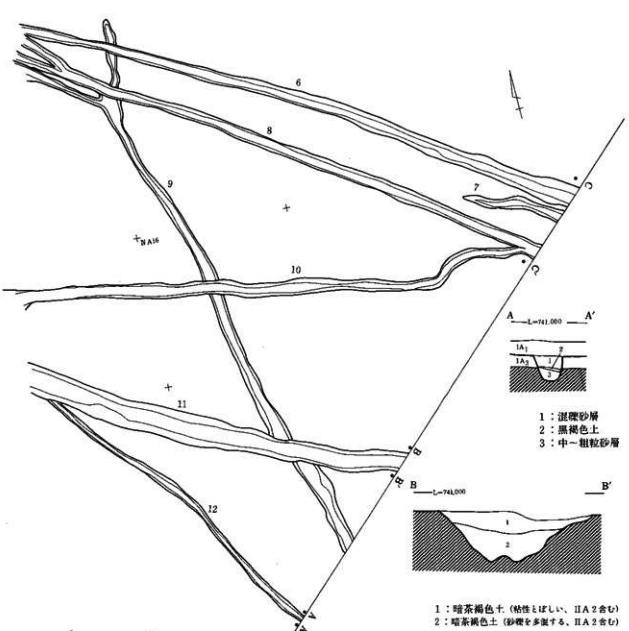


図10　6～12号溝址

幅約50 cm、深さ約15 cmである。断面はU字状を呈し、底は平坦で比高差はほとんどない。覆土は暗褐色土。

15号溝址はⅡU—03グリッド周辺に位置する。検出面は西端で田切り内砂礫層とⅡA２層とである。14号溝址、耕地整理址に切られる。東側流路群と重複する部分では、本址が流路を切る。立ち上がりはⅠA５層上面でⅠA３層に覆われる。このため耕地整理址下では底の部分が検出されたにすぎなかった。全長約55 m、幅は１ｍほど、深さ20 cm前後をはかる。断面は鍋底を呈し、底の比高差は52 cmをはかり西側へ傾く。覆土は黒褐色砂質土を主体とし、砂がブロック状に入り、上部でⅡA２ブロックが混じる。

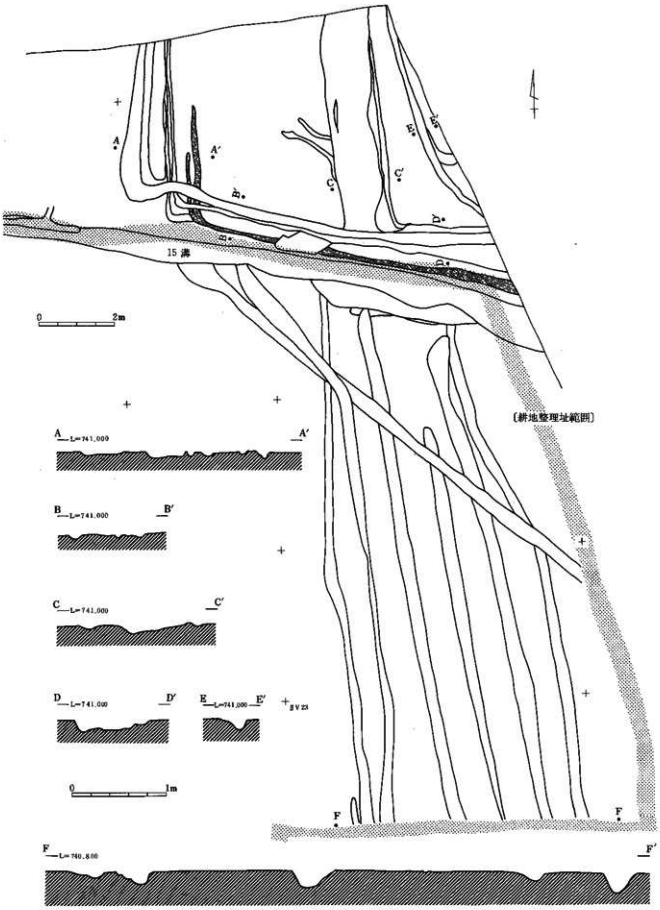

A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
15 溝
0
2m
[耕地整理址範囲]
A L=741.000
A′
B L=741.000
B′
C L=741.000
C′
D L=741.000
D′
E L=741.000
E′
0
1m
F L=740.800
F′

図11　流路群

流路群（図11、PL263）

調査区北東ⅡU区、ⅡV区にまたがって、24本の溝址が検出された。西から東に走る15号溝址を境として、そのあり方が異なるため北部、南部に分けて記す。またそのあり方から、溝址というより回地状といってよいものもみられるが、調査時の名称に従って本報告では流路群の一部として扱っておく。北部には14本の溝址がみられた。検出面はⅡA２層である。ほとんどの溝址は何回か重なり合いながら北から南、そして東へとL字状に伸びている。規模は最大全長約27 m、幅約1.4 m 深さ48 cm 前後をはかり、多くのものは幅20 cm 前後、深さ15～25 cm 前後に納まる。断面はU字状のが主体となり、幅の広いものは弓状の立ち上がりをみせる。底の比高差は東側で低く５～28 cmほどをはかる。覆土は砂層、砂礫、ⅡA２ブロック、黒色砂質土の互層状態を基本として各溝址間で特徴的な差異はない。なお、底に礫を埋め込んだような溝址がみられている。(スクリーントーン部分)その他に15号溝址に近接するところで歪んだ長方形のものと、15号溝址を切る浅い溝址も認められた。

南部には10本の溝址がみられた。検出面は耕地整理址２層中である。耕地整理址、15号溝址に切られる。なお、検出は北側の一部で行い、その他はトレンチによる断面観察によりその方向を推定復元したにすぎないことを断っておく。全体の配置は、７本が南北に、１本が北西から南東に伸び、その他のものは15号溝址に接するようにある。南北に伸びる溝址については、長さを除けば、規模はほぼ均一である。長さは最大で30 m 弱、幅は70 cm 前後を平均に、深さは４～40 cm をはかる。断面はU字状を呈し、底の比高差は３～38 cm をはかり、多少の差異はあるものの全体に北側へ傾斜している。覆土は砂層、砂礫、ⅡA２ブロック、暗褐色砂質土の互層状態を基本として各溝址間で特徴的な違いはない。また、北西から南東に伸びる溝址は底の比高差10 cm ほどで南東に傾斜する点を除けば、南北に伸びる溝址と基本的な差異はなかった。その他15号溝址に接するようにある２本は南北に伸びる溝址を切る回地状の溝址であった。

エ　耕地整理址（図12、PL264）

本址はⅡU、ⅤV区とⅣA・B区とにまたがって位置する。トレンチ調査時、ⅡA２層上面が周辺より50 cm ほど低く下がった一定の範囲を確認した。この下がった一帯の土層堆積は以下のごとく、本遺跡一般にみられるものとは異なったあり方を示していた。

ⅠA１層：現耕作土、水田

１層：黒褐色砂質土、砂礫、ⅡA２ブロックからなる層。埋め立て土の様相を呈す。２ m 前後の間隔で縦に細分層される。ⅠA３層を切っている。層厚は70 cm 前後である。

２層：酸化鉄の集積が若干みられるグライ土状の灰白色土層。細分すれば３分層できるところもあるが部分的である。水田土壌と思われる。高さ５ cm、幅20 cm ほどの高まりが２ m 前後の間隔でみられ、１層の細分層線と一致した立ち上がりをみせる。

３層：暗褐色砂質土で、ⅡA２層が立ち上がる部分にみられる。

ⅡA２層：明褐色土層

以上のようなあり方から、水田耕作に関する何らかの遺構の可能性があると判断し、１層を除去し水田土壌と思われる２層を全面検出する方針で調査を進めた結果、本址を確認した。本址の規模は南北約32 m、東西約47 m、面積約1,500㎡をはかる。断面に見えていた２層の高まりが帯状に縞模様を作って1.8 m 前後とほぼ等間隔で東西６列、北西から南東に17列確認された。それぞれの列間は２層面でほぼ一様に平らであった。北西隅には幅約2.4 mの突出部がある。一見手あぜ状に見えるこれらの列は断面観察により、次のような所見が得られた。

１層の細分層線は一定方向に傾いて並んでいて、連続性がうかがえること。また、帯状の列の高まりは

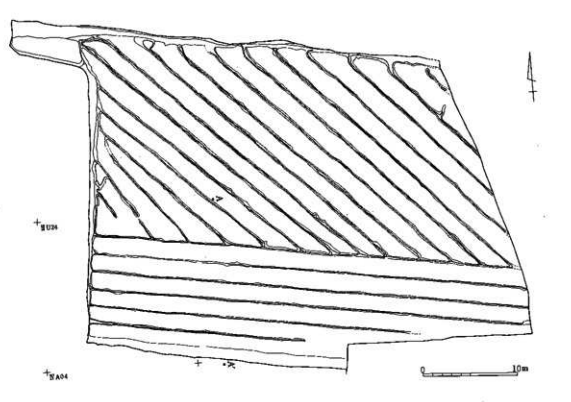


図12　耕地整理址

三角形状を呈し、その一辺と1層の細分層線とは連続し、もう一辺は1層に切られるような状態を示していること。このような特徴を考慮すると、帯状の列は1層によってかたち作られたと考えられる。

そこで東西6列を例として復元してみると、まず南側から掘り込み、掘り跡を埋める。続いて約2 mの間隔を持って同じように掘り込み、掘り跡を埋める。このような作業を繰り返した結果の所産と思われる。したがって、掘り込みの幅、深さが一定であれば、この繰り返しの中で一定の高さと幅とを持つ掘り残しが生まれ、その掘り残しが帯状の高まりとして列状をなしたと思われる。また、北側の17列も同様の過程の中で形成され、掘り下げは東から連続して行われたであろうことが土層断面から推測される。

このような掘り返しと埋め立ての連続というあり方はそれが一定の規則性を持っていることも含めて、特殊な耕地整理の結果によるものではないかと思われる。参考になるものとして、周辺農家の方からの聞き取り調査のなかに、昭和37年頃、幅6尺ずつ短冊状に耕作土をはぎ取り床土をならし9枚の小水田を広くしたという話があり、この際使用した道具は鍬、シャベル、一輪車で、一人で冬場行ったという。また、これに似たようなものとして「天地返し」と呼ばれるものが知られるが、これは幅広く掘り返さず深さも20～30 cm程度と聞く。本址のような幅広でしかも深いものについてはその労力を考えればやや性格を異にしよう。さらに長野県北信地方では「送りぼり」と呼ばれる先と同様の方法があると聞く(注1)。確証はないので何とも言えないが、このような範疇の中に本址も入る可能性があるということにとどめたい。

また本址に見られる耕地整理の跡がなぜここに残っていたかについて、次のように推測もできる。

明治22年(1889)の地籍図を見ると周辺は畑が多くみられ、水田は西側の田切り地形による窪地、用水路周辺にある。本調査区域は現在と変わらず、田切り地形による窪地寄りの北側のみ水田として利用され

ている(注2)。このことは田切り地形に挟まれた台地における土地利用のあり方をかい間見せている。台地の水田開発がいつどのように行われたか明らかでないが、本址下の水田土壌（2層）はこのような環境条件下で用水、排水を考慮して、この一帯のみ低く掘り下げ水田化したのではなかろうか。その後、用水路などの整備が進むにつれ、耕作面を一定の高さにする必要から、低い水田が埋められ周辺と同じように平らにし、本址にみられる耕地整理が行われたのではなかろうか。2層のうえのみに本址がみられるということはこの考えに反するものではないと考える。

このような所見と土層断面から本址は現耕作土形成にかかわるものと考えられよう。よって時期はあまり古くなく、近・現代の所産と考えたい。

明治32年（1899）耕地整理法が施行され、それをうけ同40年長野県告示が出ている。同42年には暗渠法が施行され、国の施策として土地の改良と整備がおし進められた。そのような開発の中で本址も位置づけられるかも知れない。

オ　遺構外出土遺物（図13、PL265）

遺物の出土量は少ない。すべてＩＡ層中より出土している。土器類については平安時代と思われるものはほとんど摩滅し、カワラケ・山茶碗・輸入陶磁器類は摩滅が少ないのが特徴的であった。

1・2は須恵器の蓋である。1は使用された痕跡が認められない。2は脚部のみであり1に類似すると推測される。1が全面ロクロ撫でによる整形であるのに対し、2の脚部内側には手持ちヘラケズリが施されている。3は龍泉窯系の青磁で13～14世紀頃の蓮弁文碗である。4は内底部輪はげの白磁碗で12世紀前半に比定される。5は鉄鎌で残存部は篦被から茎にかけである。6は棒状で種別不明だが紡錘車の軸棒ではなかろうか。7は残存部が「L」字状に残るのみで、種別は不明である。8・9は康熙通宝・寛永通宝である。出土した石器は図示したものに限られ、2は黒曜石製の石鏃である。3は安山岩製の打製石斧で、

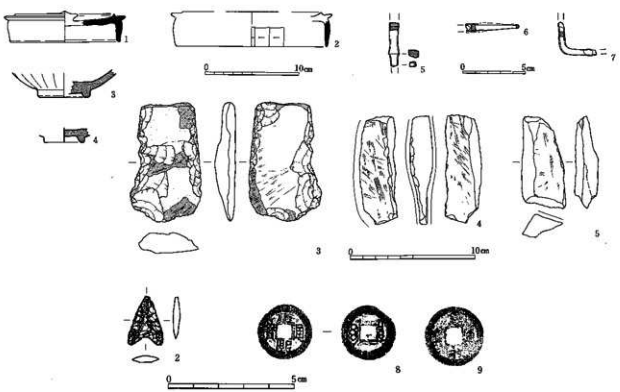


図13　遺構外出土遺物

再利用により研磨の後が顕著である。4、5は砥石で、安山岩製である。

5　まとめ

調査の結果は、前述したとおりである。ここでは遺構について若干の補足をしつつ、まとめにかえたい。

掘立柱建物址については、栗毛坂遺跡群などでみられる平安時代のものと異なり、柱穴の規模が小さく、またその配置のあり方はどちらかというと中世以降の掘立柱建物址に近いと思われる。

溝址は、流路群北部については、耕地整理址に規制されるようにL字状に曲がることから、耕地整理址下の旧水田の時期の流路跡であろうと推測される。南部の流路についても旧水田下にあるところから旧水田にかかわる排水のための施設などが考えられる。1～4・10号溝址は現畦畔と同方向もしくは同位置にあることから、ほぼ現耕作土に伴う流路であったといってよかろう。14～15溝址もその方向、切り合い関係などから旧水田に伴う用水路などの施設だったと推察される。なお、13号溝址は自然流路であろう。

本遺跡の位置する台地上は、周辺遺跡から平安時代の遺構が多数検出されている。本調査区域のほとんどが水田造成により削平を受けてはいるものの、出土遺物の僅少さを考慮すれば、該期の遺構の空白域であった可能性が高いといえよう。

また、耕地整理址の調査によって、田切り地形で特徴づけられる当地域の近・現代における土地の開発と農業土木技術の一例を提示できたことは大きな成果であった。

(注1) 森島稔氏の御教示による。

(注2) 佐久市役所収蔵の資料を利用させて頂いた。

参考文献

北佐久郡志編纂会　1957　『北佐久郡志』第三巻

佐久教育会　1980　『佐久の歴史年表』

佐久埋蔵文化財調査センター　1989　『荒田・上金井・東赤座II』

長野県史刊行会　1983　『長野県史』近代史資料編第五巻（二）

農山漁村文化協会　1985　『明治農業全書』11巻

第20節　中久保田遺跡

1　遺跡の概観

中久保田遺跡は佐久市大字岩村田字中久保田を中心とした一帯に所在する。浅間山の南麓、田切り地形に挟まれた台地上に立地し、西赤座遺跡、枇杷坂遺跡群に連続する。これらの遺跡に近接して北には栗毛坂遺跡群があり、ここは田切り地形により区分される南北に細長い遺跡である。遺跡外東側は田切り地形の跡と思われる低地が南に向かって広がりをみせ、遺跡の現地形も周辺と比べ２ｍほど窪んでいる。標高は736～738ｍをはかる。本遺跡の立地する台地上は弥生時代から平安時代にかけての遺跡の密集地として知られ、長野県埋蔵文化財センターが実施した昭和61～62年の調査で周辺遺跡に平安時代の遺構が多数発見されている。さらに、旧田切り地形が存在することも明らかになり、その所見と現地形の状況とを考えわせると、遺跡のかなりの部分が田切り地形の影響を受け現況に至っていると予想された。

図１　地形および調査範囲（１：3,000）

2　調査の経過と概要

調査対象面積は7,800 m²で、遺跡の北端部にあたる。調査区域周辺は水田であった。調査期間は昭和63年10月13日・26日・11月14日の延３日間で、調査研究員３名が調査にあたった。調査は遺構・遺物の有無と土層堆積状況を確認する目的で、地形を考慮し、幅２ｍ延べ150ｍにわたってトレンチ設定した（第１図）。結果は調査区全域にわたり耕作土下２～30 cmで礫、砂、黒褐色砂質土の混じり合う土層堆積が観察され、遺構・遺物ともに皆無で、１ｍも掘り下げると水が湧きだす状況であった。このためそれ以上の掘り下げを止めたため、この層厚は未確認である。さらに本遺跡北、栗毛坂遺跡群と隣接する用地内一帯を試掘したが前所の結果を得たのみとなった。これらの調査結果から調査区内は北東から南西に流れた田切り地形凹部にあたり、田切り地形による侵食と流入堆積によって遺構の存在は確認できないと判断し、面的調査に移行せず調査を終了した。

調査日誌抄

昭和63年10月14日　全域で重機によるトレンチ調査開始。一部トレンチ埋め戻し。
10月26日　写真撮影、土層観察記録、遺跡外試掘。
11月14日　土層柱状図作成、調査終了。

3　まとめ

今回の調査で、調査対象地のほとんどが田切り地形凹部にあたることがわかった。さらに、佐久市教育委員会がその後実施した本遺跡南部の調査でも同様の所見が得られており、同様のことが遺跡全体に言えそうである。また、田切り地形の影響を免れた周辺の台地上では、平安時代の遺構が多数検出され、田切り地形の影響を受ける以前において本遺跡も居住域、生産域としての可能性を考えることもできようが、推測の域を出ない。

第21節　枇杷坂（びわざか）遺跡群

1　遺跡の概観

枇杷坂遺跡群は佐久市大字岩村田字上久保田（かみくぼた）尚251－1、2番地ほかに所在する。田切り地形に挟まれた台地に立地し、中久保田遺跡、新城遺跡などの遺跡がこれに続く。標高は約740mである。本遺跡群を含めた台地上は佐久地方を代表する弥生時代から平安時代にかけての遺跡密集地として知られ、田切り地形により区分されたうちのひとつとして本遺跡群が存在する。範囲は仙禄湖を北端として南北約2km、東西250mにおよぶ。昭和53年度から佐久市教育委員会は本遺跡群中央部で5年次にわたる発掘調査を行い、弥生時代後期前半の住居址2軒、古墳時代の住居址3軒などを検出している。

2　調査の経過と概要

調査は用地買収の関係から2年にわたり、調査期間は昭和62年10月5日～11月19日、昭和63年10月8日～25日、11月4日～30日である。調査対象区は本遺跡群の北端にあたり、これを大別して仙禄湖の南東インター部分と南西アクセス道路部分とし、面積は16,000m²である。調査前の状況は水田および畑地が中心で、一部が宅地となっていた。年度ごとに調査の概要を記す。

昭和62年度：8,330m²を調査対象とし、調査研究員5名が調査にあたった。遺構・遺物の有無、土層堆積状況など遺跡の性格を把握することを目的として、調査区全域にトレンチを設定することから開始し、状況によって随時拡張する方針で臨んだ。掘り下げは重機によった。結果は南東部の仙禄湖寄りは水田造成の際に基盤となる火山灰層まで削平を受けていた。東側では田切り地形の影響と思われる礫、砂、黒褐色砂質土の混じる土層堆積の上に現耕作土がのっていた。遺物はローリングを受け著しく摩滅した須恵器、土師器などの土器片が耕作土中に若干散在しているのみであった。確認のため火山灰層の面で面調査したが、遺構は検出されなかった。南西部は、その東側で田切り地形の影響と思われる土層堆積を観察し、北側のやや微高地状を呈する狭い範囲で遺構と思われる落ち込みを検出した。その広がりを確認するため周辺を面的に拡張し本格的な調査をし、平安時代の竪穴住居址3軒、溝址3本、土坑6基を検出した。

昭和63年度：調査区北端の残件部ほか、調査面積は7,670m²である。調査は栗毛坂遺跡群、枇杷坂遺跡群と並行して行い、調査研究員4名があたった。前年度の調査結果を踏まえ、遺構の広がりと田切り地形との関係を主眼にトレンチ調査後面的拡張をする方針をとった。結果、調査区北端の栗毛坂遺跡群と接する微高地状の狭い範囲で、平安時代のものと思われる掘立柱建物址5棟、土坑1基を検出した。遺構配置の状況から周辺に広がる可能性が充分考えられたため、田切り地形と推測されるところまで調査したが、遺構はみられず、田切り地形を確認したにとどまった。また昨年度遺構が検出された南西部でも田切り地形と判断された部分の調査を行い、遺構が田切り地形に侵食されて存在しないことを確認した。

調査日誌抄

昭和62年度

10月5日　調査区全域にトレンチ設定。
6日　重機によるトレンチ掘り下げ開始。
8日　トレンチ内精査、仙禄湖南東部で耕作土下、田切り地形と思われる砂礫層を確認。
14日　仙禄湖南西部アクセス道路部分で竪穴住居址と思われる落ち込みを確認。この地点での面的調査が必要と判断。
15日　南西部、重機による表土除去。遺構検出作業。住居址、溝址などを検出。
21日　遺構調査開始。
11月6日　南西部全景写真撮影。
10日　確認のため、田切りの影響を受けていない南東部仙禄湖脇の面的拡張調査開始。遺構検出作業。

12日　南東部遺構検出されず、トレンチ範囲の測量、柱状図の作成。
19日　写真撮影、測量の完了をもって今年度の調査を終了。
1月～昭和63年度
10月8日　昨年度の所見を踏まえ、トレンチ設定。仙禄湖南東部より重機による掘り下げ開始。溝状の落ち込みを確認。
11日　調査区北端の微高地部表土除去。掘立柱建物址検出。遺構の広がりを確認するため周辺部の拡張を決定。
12日　重機により周辺部の表土除去。南側は1mばかりの客土層があり、東側は田切り地形内となるため遺構なし。遺構検出作業。
17日　昨年度調査に使用したIN23杭を基準として杭打ち作業。
11月4日　遺構調査開始。
9日　全体図、土層柱状図作成。
21日　栗毛坂遺跡群C地区と同時に航空写真撮影。
30日　コンタ図作成。調査終了。
1月～平成元年度
図面整理、遺物洗浄作業。
4月　本格的な整理作業開始。

3　基本土層

調査区内の基本層序は大きく分けて二つに分けられる。

ひとつはⅠA層：表土、耕土と、礫、砂、黒褐色砂質土の混じり合う田切り地形内堆積層とで構成されるもの。ⅠA層は細かくみれば少なくとも3枚の水田面が確認でき北端部で約50cm、南端部で約30cmの層厚がある。調査区東側にみられる。田切り地形内堆積層についてはその底面の確認をしていない。

ひとつは仙禄湖よりの部分と南西部にみられるⅠA層とⅡA層とで構成されるもの。ⅠA層は約20－30cmの層厚を示す。ⅡA層は基盤となる軽石流層で構成されるⅡA2層とその腐食層ⅡA1層がある。本調査では、ⅡA2層のみがみられた。遺構の存在する微高地部ではこのⅡA2層が遺構検出面となる。

4　遺構と遺物

先に述べたように、調査区のほとんどが田切り地形による侵食と水田造成による削平を受けていたため遺構の分布はそれらを免れた狭い場所に限られている。このため古代における全体像は看取できず、北端部で平安時代に帰属すると考えられる掘立柱建物址5棟、土坑1基、仙禄湖南西部のアクセス道路部分で平安時代の竪穴住居址3軒、溝址4本、土坑6基が検出された遺構のすべてであった(第1図)。遺物は耕作土中でおもに平安時代に伴う土器片が若干出土したほか、石鏃が一点出土している。

(1)　遺構と遺物

ア　住居址

1号住居址 (図2、PL.267・269)

本址は調査区南西ⅡG－07グリッドを中心に位置する。ⅡA層で検出。検出段階でプランに凹凸がみられた。他の遺構との重複も考えて掘り下げた結果、覆土観察から重複はないと判断する。凹凸は南東隅はカマドに、西壁、南壁は壁柱穴になった。平面形態は長方形を呈し、南東隅で張り出す。規模は南北3.7m東西3.1mをはかる。床面積は10.87㎡で、主軸はN-98°－Eを指す。覆土はレンズ状堆積を示し、カマド破壊後、自然堆積したものであろう。遺物量は少なく、2層中より鉄製品が出土している。床面は、カマド部からピットに囲まれた部分が特に堅緻である。掘り方は一部ピット状の落ち込みがみられるが、全体に浅く、暗褐色土を基調とした貼床を施している。壁高は30～50cmをはかる。ピットは特異で、カマド位置を意識するように南東部に偏って7基、床面および壁面を穿つようにして存在する。P2は床面から39cmの深さをもち、底に少量の炭化物がみられたことから貯蔵穴であろう。その他のピットは柱穴として利用されたと思われる。特にP1・3・5・7は床面より平均40cmの深さを持ち断面が円筒状を呈することから主柱穴と考えられ、P4・6は床面から5～10cmと浅く、支柱穴と判断した。カマドは南東隅にあり、住居より張り出し、煙道の左右にテラスを持つ。袖は左袖の形跡をわずかにとどめ軽石を芯に据え、灰褐

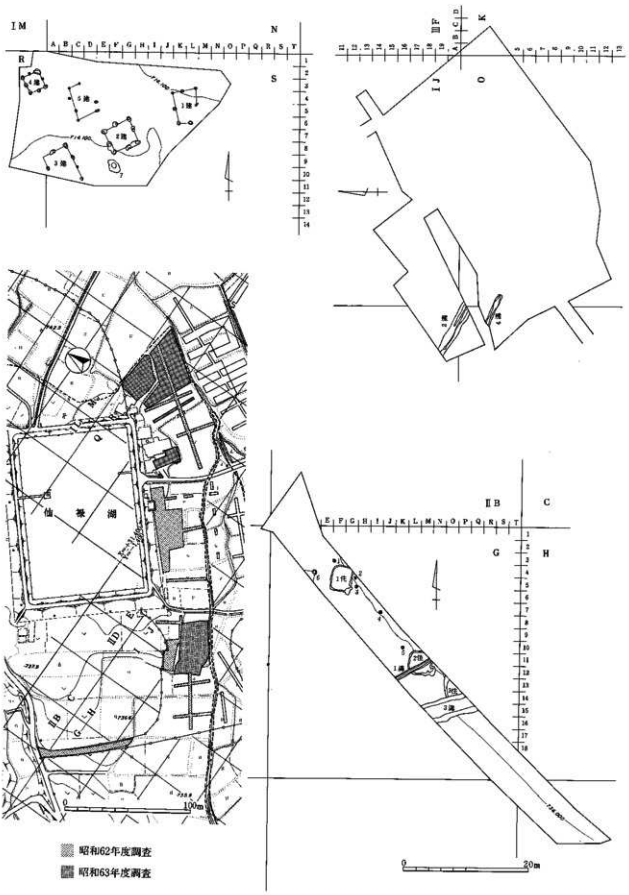


図1　地形・発掘範囲・遺構配置

色粘質土で固めていた。この灰褐色粘質土は火床部から煙道部にかけて貼られており内壁面を構成している。構築に際しては掘り方段階でカマドの位置が決定されていて、後に灰褐色粘質土、貼床を施している。支脚石は遺存せず、抜き取り痕が火床部中央からはずれて見つかった。その他袖石の抜き取り痕が3穴確認されている。テラスは黒褐色粘質土を貼り、堅緻であった。

遺物　遺物の出土量は少ない。1～3は須恵器坏、ロクロは全て右回転で、外底部は回転糸切り痕を残す。

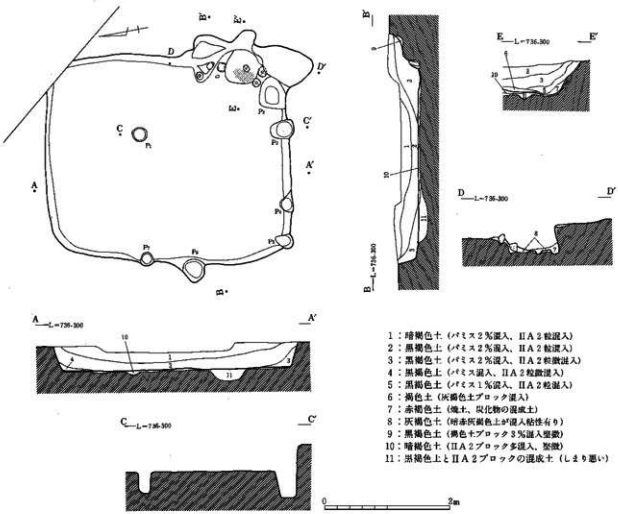


図2　1号住居址

1・3は生焼け。4・5は土師器甕A8で口頸部は「コ」の字状を呈する。内面黒色は口縁部のみで坏・碗不明のものが3片出土している。金属器は刀子（6）、鎹状の鉄器（7）が出土している。時期は甕A8の形態から8段階に相当する。

2号住居址（図3、PL267・269）

本址は調査区南西ⅡG－M12グリッドを中心に位置する。ⅡA層で検出。1号溝と重複し、本址が切ら

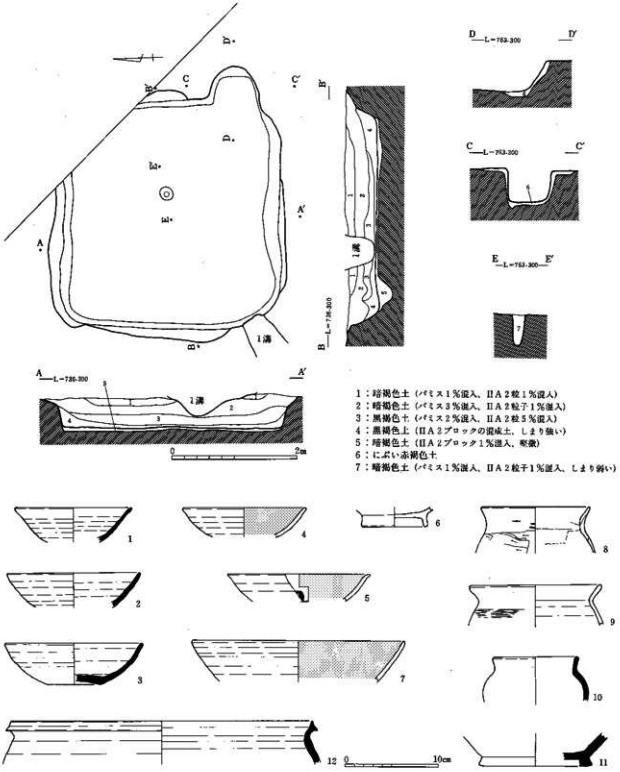


図3　2号住居址

れる。本址北東隅は用地外にかかるため調査に至らなかった。平面形態は方形を呈し、南東隅が張り出す。規模は南北3.2 m、東西3.4 m をはかる。床面積は10.57m²、主軸はN－94°－Eを指す。覆土は４分層される。各層とも淘汰が良く自然堆積と思われる。床は暗褐色土を基調とした貼床が施され、ほぼ床面全域が堅緻であった。掘り方は全体に浅い。壁は本址埋没に伴って崩落したもので、段を持って開くように立ち上がる。壁高は50 cm 前後である。ピットが本址中央部で見つかったため本址の外域も含めピットの検出に努力したが、新たに検出されず、柱穴になるか判断し難い。南西隅の張り出しをカマドと推測したが、焼土はみられなかった。カマドを持たない住居址の可能性がある。

遺物　出土土器の全体量は須恵器坏６以上（１～３）壺・瓶類１（11）、四耳壺1（酸化）、広口甕１（12）、小形短頸壺１（10）。土師器甕４、小形甕２（８）、ロクロ小形甕２（９）、内面黒色坏５以上、碗３（６）以上、碗・坏不明２（４・５）、皿2、鉢（７）個体分出土している。土師器甕はＡ７の形態に属し、小形甕には台付がみられる。ロクロ小形甕は胴部外面にはカキ目が明瞭なものと不明瞭なものとがある（９）。須恵器坏は焼成が悪く低還元または酸化焼成されているものがある。内面黒色坏類は丁寧にミガキが施されるが、４にはミガキが施されていない。５は墨書土器で、栗毛坂遺跡群で多く出土している「臾」に類似しようか。

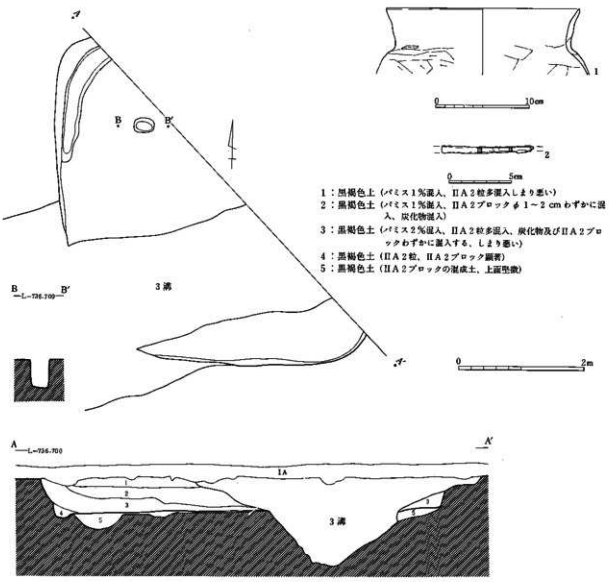


図４　３号住居址

時期　土師器甕の口頸部が「コ」の字化の徴候が認められ、８段階に相当する。１号住居址に先行する。

３号住居址（図４、PL267・269）

本址はⅡＧ－Ｐ14グリッドを中心に位置する。ⅡＡ層で検出。３号溝址と重複し、本址が切られる。本址のほぼ半分を占める北東部は用地外のため調査に至らず、本址の全体的な構造を知り得ない。平面形態は方形を呈し、規模は一辺約５mはあると推定される。覆土は３分層され、各層は淘汰が良く自然堆積と考えられる。床面は、地山の上に黒褐色土とⅡＡ層軽石流土を数センチ敷きつめた状態で、堅緻である。壁高は50 cm 前後をはかる。北西隅に主柱穴と思われるピットがひとつと周溝の一部とが検出されている。
遺物　出土量は少ない。須恵器坏８片、ロクロは全て右回転で、外底部は回転糸切り痕を残す。土師器甕２（1）、小形甕1個体分が出土し、金属器は棒状の鉄製品（2）が出土している。甕はＡ６の形態に属する。
時期　甕の形態から７段階に相当する。

イ　掘立柱建物址

１号掘立柱建物址（図５、PL268）

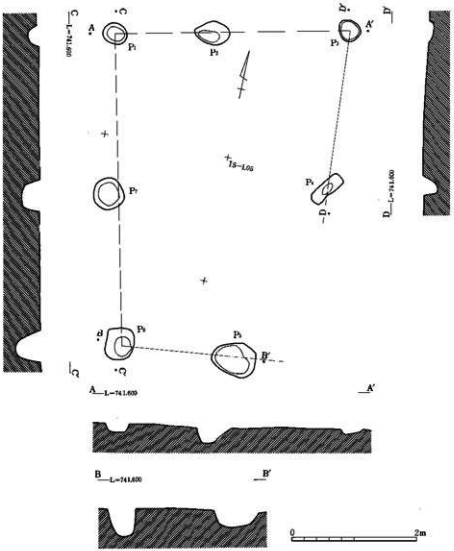
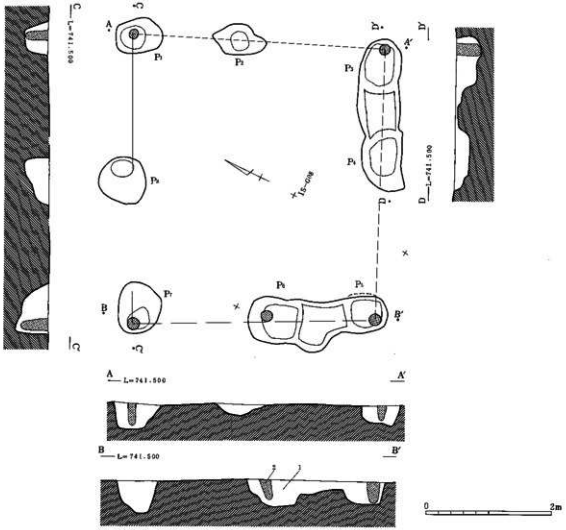


図５　１号掘立柱建物址

本址は調査区北端ＩＳ－Ｌ05を中心に位置する。ⅡＡ層で検出。北東隅の柱穴は確認できなかった。平面プラン、規模は推定復元となるが、２間×２間南北棟の側柱式で、桁行５ｍ、梁行3.8ｍ、面積17.21㎡をはかる。主軸はＮ－4°－Ｗを指す。柱間は、桁行2.44～2.56ｍ、梁行1.50～2.24ｍをはかる。柱穴の形は楕円形、長方形を呈す。深度は８～46 cm とまちまちである。覆土は黒褐色土を基調とするものであった。
遺物　P5から須恵器甕片が出土している。



1：褐色土（ⅡＡ２ブロック20%混入、しまり悪い）
2：黒褐色土とⅡＡ２の互相状況を示す。
（礫石粒多混入、しまり悪い）

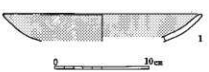


図6　2号掘立柱建物址

2号掘立柱建物址（図6、PL268）

本址は調査区北端ＩＳ－Ｇ08グリッドを中心に位置する。ⅡＡ層で検出。平面プランは２間×２間溝持ち東西棟の側柱式である。規模は桁行4.3ｍ、梁行4.1ｍで、面積17.68㎡をはかる。主軸はＮ－64°－Ｅを指す。柱間は1.7～2.6ｍをはかる。柱穴の形は円形を基本とするが歪んだものもある。溝は２列あり、段を持っている。柱痕は、P1・3・5・7・8にみられ、その径は18cmほどである。隅柱穴の柱は掘り方の隅に寄るように配されている。据え方はP1・2・5のものがはっきりしている。覆土は掘り方埋土、柱痕土ともに締まりが悪く、特に柱痕土はサクサクした状態であった。掘り方埋土は黒褐色土とⅡＡ２ブロックの混入したものであるが、溝持ち部では両者の互層状態がみられた。

遺物　P3から内面黒色皿（1）、P2から須恵器甕片が出土している。

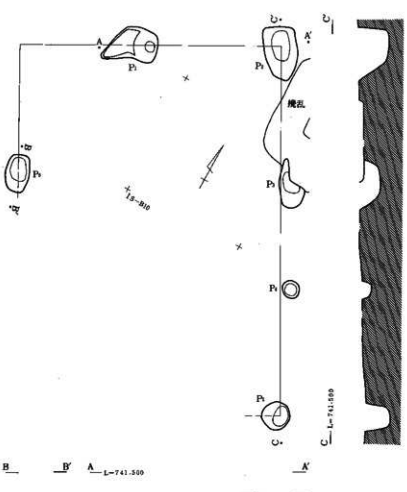


図7　3号掘立柱建物址

3号掘立柱建物址(図7,PL268)

本址は調査区北端ＩＳ－B10グリッドを中心に位置する。ⅡＡ層で検出。周辺は撹乱を受けているところが多くすべての柱穴を検出できなかった。平面プラン、規模は推定復元となるが、２間×２間南北棟の側柱式で、桁行6m、梁行4.3m、面積24.66m²をはかる。主軸はN－27°－Wを指す。柱間は1.72～2.14mをはかる。柱穴の形は円、楕円形を基本とする。柱痕は見つからなかったが、P1に据え方がみられる。覆土は黒褐色土の単層である。

遺物　P1から須恵器甕片が出土した。

4号掘立柱建物址

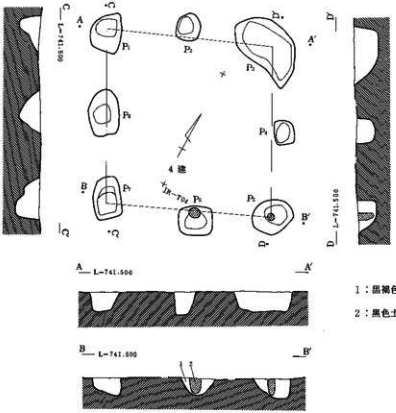
(図8、PL268)

本址は調査区北端ＩＲ－T04グリッドを中心に位置する。ⅡＡ層で検出。平面プランは方形の２間×２間の側柱式である。規模は桁行2.9m、梁行２間2.7m、面積7.26m²をはかる。主軸はN－28°－Wを指す。柱間は1.2～1.4mをはかり、ほぼ統一されている。柱穴の形は方形を意識しているものが主であり、P3にみられるように不整形なものもある。柱痕はP5・6に、径は14～18cmである。据え方が隅柱穴のP1・7にみられ、底は外に開くように掘られている。覆土は掘り方埋土、柱痕土ともに締まりが悪く、特に柱痕上はサクサクした状態であった。掘り方埋土は黒褐色土とⅡＡ２ブロックの混入したものであるが、溝持ち部では両者の互層状態がみられた。２、３号掘立柱建物址と主軸方向がほぼ一致する。

遺物　P6柱穴から、土師器坏底部片が出土している。

5号掘立柱建物址(図8、PL268)

本址は調査区北端ＩＳ－D05グリッドを中心に位置する。ⅡＡ層で検出。北東部の柱穴は確認できなかった。平面プラン、規模は推定復元となるが、２間×３間南北棟の側柱式と判断した。桁行5.3m、梁行3.4mで、面積17.19m²をはかる。主軸はN－19°－Wを指す。柱間は南側でP1に対応する柱穴がなく、梁行は不揃いである。桁行は、P6～7が2.2mと長く、そのほかは1.3～1.5mである。覆土は黒褐色土の単層で締まりは良くなかった。１号掘立柱建物址と主軸方向が近い可能性がある。



1：褐色土（ⅡＡ２粒子がブロック状に１～２割混じる、しまり悪く、粘性なし）
2：黒色土（ⅡＡ２がブロック状（４～５cm）又は、黒色土とⅡＡ２が縞状に重り合っている、しまりが悪く粘性なし）

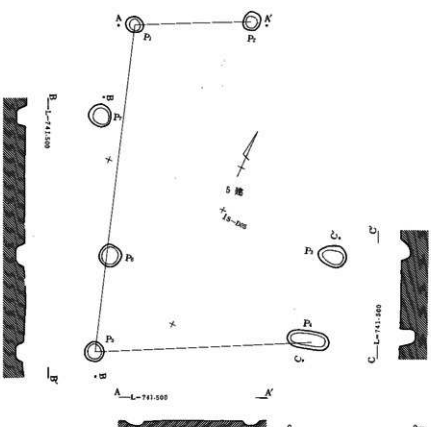


図８　４・５号掘立柱建物址

ウ　溝址

1号溝址（図9、PL267）

本址は調査区南西ⅡG－L12グリッド付近に位置する。ⅡA層で検出。2号住居と重複し、本址が切る。規模は調査範囲で全長6ｍ強，幅38～65cm、深さ50cm前後をはかる。断面U字形で、底は凹凸がみられ、北東から南西方向に若干傾斜している。覆土は下層に砂礫層の堆積がみられることから水流のあったことが予想される。

遺物は2層から、通称「カワラケ」2片が出土している。1は左回転で成形され、胎土は粗く・石英・褐鉄・角閃石などの砂粒が多量に含まれている。焼成はあまり良くなく明赤褐色を呈する。口径11.5cm、底径7.5cm、器高2.5cmである。器厚で大井城で分類されているB2型に相当する。その他、図化できないが、土師器甕片・内面黒色坏、須恵器坏・甕片が数点出土した。これらは2号住居址からの流れ込みの可能性が高い。本址の時期は中世以降としておきたい。

2号溝址（図9、PL267）

本址は調査区南西ⅡI－S20グリッド付近に位置する。ⅡA層で検出。東側は田切りに切られている。規模は検出範囲で全長9ｍ弱、幅1.3～2.7ｍ、深さは37～46cmをはかる。断面は凹凸のある弓形で、北側に段を持ち、底を2面持つ。南東から北西方向へ傾斜し、底における比高差は25cmある。覆土は5分層され、水流の形跡はみられない。遺物は皆無であった。

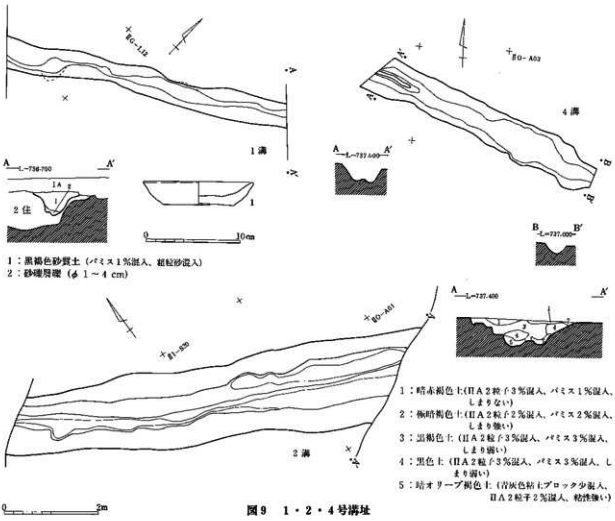


図9　1・2・4号溝址

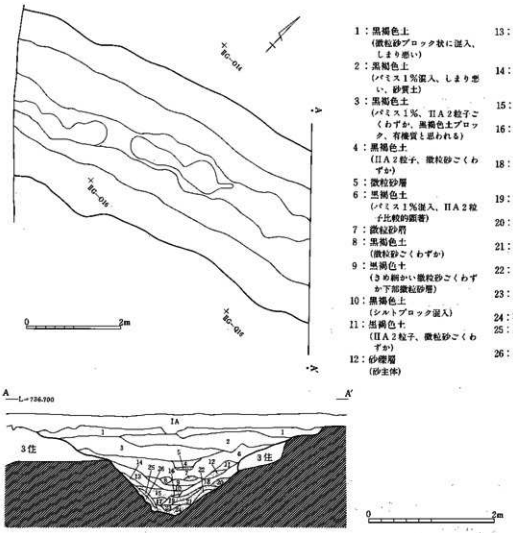


図10　3号溝址

3号溝址（図10、PL.268）

本址は調査区南西ⅡG－O16グリッド付近に位置する。ⅡA層で検出。3号住居址と重複し、本址が切る。規模は調査範囲で全長8 m弱、幅3～3.5 m、深さは底面の窪んだ面で1.5 m前後をはかる。断面V字形で、底は20 cmほどの窪みがみられ凸凹している。北東から南西方向に傾斜をもち、底の比高差は10 cm弱ある。覆土は26分層され、大きく2段階に分けられる。7層～26層は砂層、砂礫層が底部にみられ、数回以上の水流があったと思われる。1～6層は黒褐色土を主体とし、3号住居址とほぼ同時期の遺物を多く包含していた。3号住居址との遺物の接合関係は捉えられなかったが、後者の状況は、本址構築時に掘り上げた住居址覆土を、後にそのまま埋め戻したのか、あるいは自然に流れ込んだ状況が推測できる。また、出土した遺物はローリングを受けたような形跡はみられず、あまり動いていないことがうかがえる。本址を掘り上げた際、その土を周辺に盛った可能性も考えられよう。出土した遺物から本址の時期を位置づけることは遺物の出土状況を考えると困難である。人工的な溝と判断したい。

4号溝址（図9）

本址は調査区南西ⅡO－A03グリッド付近に位置する。ⅡA層で検出。南東側は田切り地形によって存

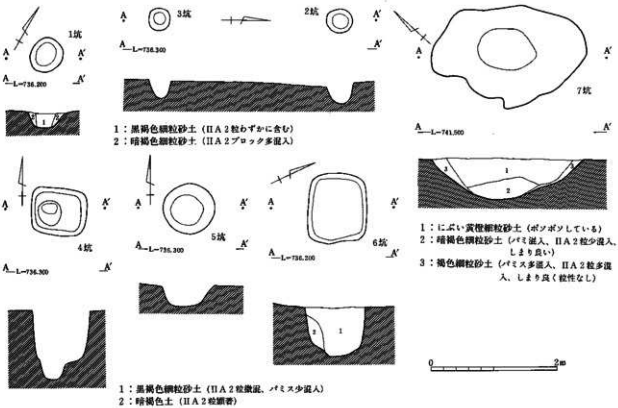


図11　土坑

在しない。規模は7 m弱、幅1.5～1.7 m、深さは30 cm前後をはかる。断面は基本的にU字形で底は平坦であった。南東から北西方向に傾斜している。覆土は黒色土、砂が混じったものである。水流があったと推察される。遺物はみられなかった。

エ　土坑（図11）

1号土坑

本址はⅡG－F03グリッドに位置する。30×25 cmの楕円形を呈し、深さ12 cmをはかる。覆土は2分層され、柱痕を持つ。掘立柱建物址の一部の可能性がある。

2号土坑（PL268）

本址はⅡG－H05グリッドに位置する。径16 cmの円形を呈し、深さ15 cmをはかる。覆土はパミス、ⅡA2粒子を少量含む黒褐色土である。

3号土坑（PL268）

本址はⅡG－H06グリッドに位置する。径20 cmの円形を呈し、深さ17 cmをはかる。覆土はパミス、ⅡA2粒子を少量含む黒褐色土である。なお、位置、形状などから2号土坑と組み合って、柵列または掘立柱建物址の一部を構成するとも考えられ、調査区外に掘立柱建物址が存在する可能性がある。

4号土坑

本址はⅡG－I07グリッドに位置する。45×37 cmの長方形を呈し、テラスを持って南西側で円形に落ち

込む。深さ54 cm をはかる。断面は柱の据え方と思われる段を持つ円筒状で、覆土はパミス、ⅡＡ２粒子を少量含む黒褐色土である。

5号土坑

本址はⅡＧ－Ｋ10グリッドに位置する。径40 cm の円形を呈し、深さ15 cm をはかる。覆土はパミス、ⅡＡ２粒子を少量含む黒褐色土である。

6号土坑

本址はⅡＧ－Ｄ03グリッドに位置する。55×45 cm の長方形を呈し、深さ40 cm をはかる。本址は後に、佐久市教育委員会で本調査区西に接する一帯を、調査した結果、２間×３間の東西棟、側柱式掘立柱建物址の北東隅柱穴にあたることがわかった。(注1)

7号土坑 (PL268)

本址はⅡＧ－Ｄ03グリッドに位置する。2.5×1.6 m の不整形な楕円形を呈し、深さ65 cm をはかる。断面は擂り鉢状を呈す。覆土は３分層された。性格は不明である。

オ　遺構外出土遺物 (図12)

遺物はそのほとんどが現耕作土中から出土している。石鏃(1)、少量の土器片のみである。図示できるものはなかった。土器の内訳は赤色塗彩の壺片、須恵器ヘラオコシ坏・糸切り底坏・甕、土師器甕・内面黒色坏・碗・皿、土師質碗、カワラケ、常滑甕などで時期は幅を持っている。

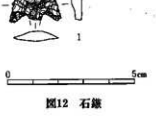


図12　石鏃

5　まとめ

田切り地形に挟まれたひとつの台地の過去における土地利用のあり方(集落の広がり)をより明確に捉えるといった視点からみれば、栗毛坂遺跡群における発掘調査のように田切り地形に挟まれた台地を横断するのではなく、田切り地形に平行するように台地上を調査できたことは今回の調査の優位点であった。実際には今回の調査で検出された遺構は前記したとおりで、田切り地形による浸食などで遺構検出が可能であった範囲が限られてしまった。しかしながら、その狭い範囲に遺構が検出されたことは先の視点を考えるにあたり貴重な成果となった。

遺構が検出された地点は調査範囲の北端と南端にあたる部分である。

北端部で検出された掘立柱建物址５棟はその性格上遺物による時期決定はできないものの、栗毛坂遺跡群の平安期集落と近接するなど周辺の状況から考えて、それとほぼ同時期の所産とみてよいと判断している。一方南端部のアクセス道路部分では栗毛坂遺跡群Ｃ地区で検出された住居址と平行する時期の平安時期住居址が３軒検出することができた。これによって、遺跡名は異なるとはいえ本調査区に限っていえば、今回検出された遺構は栗毛坂遺跡群Ｃ地区と結び付きをもって集落を形づくっていたと推察することが可能となった。この視点から絶対数ははなはだ異なるが、両遺跡の遺構の比較をとおして所見を記す。

住居址は時期的に７段階－３号住居址、８段階－１・２号住居址に比定される。面積・軸方向・掘り方などについては特徴的なものは見出せないが、カマドの位置が明確な１号住居址は東壁隅寄りにカマドを構築、栗毛坂遺跡群Ｃ地区における同時期カマドのあり方と合致する。さらに１号住居址の主柱穴は栗毛坂遺跡群のⅠ類に相当し、同遺跡群ではこの手のものは８段階にしか認められず、さらに同Ｂ地区では検

出されていない同Ｃ地区の特徴的なものである。

掘立柱建物址は単独群で検出され、１号掘立柱建物址を例外にほぼ軸を同じくし近接した配置をみせている。このような配置は棟方向は異なるものＣ地区北でみることができる。軸方向は、棟方向を考慮せず北に対する傾きでみるならば、Ｃ地区南のものと同様である。２・３号掘立柱建物址は北面がほぼ一直線上にのり、３号掘立柱建物址は棟方向を南北に取り、不整形とはいえ１・５号掘立柱建物址も同様である。Ｃ地区は南と北で極端に棟方向が異なり、全体に東西棟のものが多いことが指摘されるが、配置も含め、強いて似たようなものを挙げるならばＣ地区15・16・17号掘立柱建物址などである。

住居址と掘立柱建物址の関係については資料がないので比較できないが、おそらく両者はＣ地区にみられるような配置であったと思われる。

住居址でみたようなＣ地区と結び付きの強いことが挙げられる一方で、掘立柱建物址にみられるような違いがあるということはどう理解されるのか。おそらく、この違いは各遺構が所属する「集団」の相違を推測させるとともに、柱穴にみられるような住居址構築に関して同時期存在の集団間においては許容範囲内のことであるということを示しているのであろう。いずれにせよ、本遺跡と栗毛坂遺跡群Ｃ地区とは同時期に同台地上に集落を営んでいたことは想像に難くない。

本調査区周辺は大小の田切り地形が認められる。現在残っているものはもとより、埋没している田切り地形がかなりあるだろう。弥生時代の人々はこの田切り地形が幅を広げた本調査区より下方・南方に居を構えた。やがて時代がたつとともに人々は社会的な諸事情を背景に生産域を広げ、いまだ開拓していなかったより上方へ、田切り地形の幅のより狭くなった当地までやって来たのであろう。

註１　佐久市教育委員会　　須藤隆司氏より御教示を得た。

参考文献

佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター　1984　『佐久市遺跡分布詳細報告書』
佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター　1989　『瘤沢Ⅱ・琵琶坂Ⅵ・梨の木Ⅱ・宮の上Ⅱ』

第22節　土器・石器類以外の遺物

土質と遺物の保存

この報告書で扱った諸遺跡の土質は、最上層部表土を除き少なからず火山性土質である。特に栗毛坂遺跡のそれは浅間火山の泥流によって成立しているため、酸性度が高いうえ透水性に富むとともに土層中の空気含有量も多い。栗毛坂遺跡外の遺跡は傾斜地であり、低湿地状の保水性の高いところに恵まれず、動植物関係遺物の保存に適さずこれらの出土量は少ない。また全体に深層中に保存され出土した遺物より浅層中から出土した遺物の方が多い傾向にあるが、これはかなりの速度で分解が進んでいることを示すものである。以下に各遺跡で記述した中の表題遺物の重複をさけ総括的に記す。

骨　（表1）

種別ではウマの出土が多く全般に浅層のものである。ウマは骨が厚く太いことや、埋没年数の少ないことによると考えられるが、それでも肢骨や強硬な歯の部位が多く他の部位がみられなかったり、歯も欠損部があったり破損していることや、浅層にあってもなおかなりもろい状態になっていることなどから、保存の悪い土質であることをうかがうことができる。まして小形動物の残存量の少ないことがうなずける。

種子　（表2）

種子類は小形であるのに比較的多数の出土個体があった。これは焼かれたり自然炭化したためで、この条件外の状態に近いものは1～2個体に止まり、出土位地も浅層のものであった。

栗毛坂遺跡出土のシリブカガシ・ツブラジイなどの広葉常緑樹は、現在佐久地方では自然分布しない樹種であるため、当時の気候考察の上で注目されるものであろう。オニグルミは種皮破片が多く細部検討はし難いが、完形の数個体はコシボソグルミの形質を示すものであり、現生分布によくにている。モモは現在野生種の種子と比較し、比較的果肉の厚い大形種と果肉の乏しい小形種の2種に類別できることなど、現生種と差異のない点に興味を引く。イネは米粒を指す。栗毛坂遺跡出土の個体は水・陸稲の別は判別不

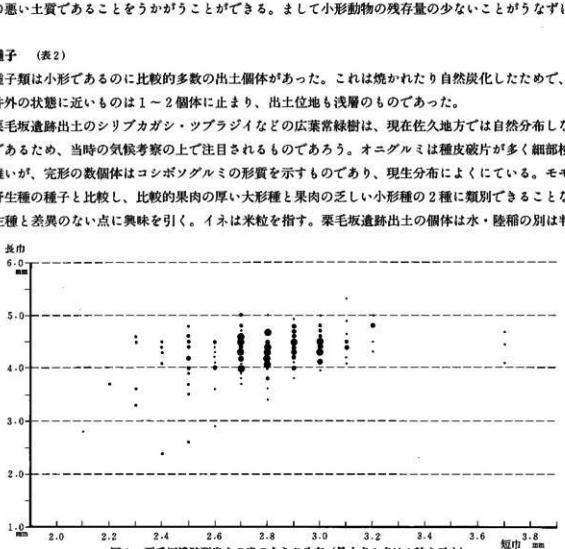


図1　栗毛坂遺跡群出土の米の大きさ分布（最小点1点は1粒を示す）

可能であったが、火熱を受けた形跡が観察され変形していたり、エイ(モミがら)の付着したものもあったが、これらの不要部を除き、玄米状態での大きさとし各粒の長巾と短巾長を計測集計した結果が図1である。この表でみる限り栗毛坂遺跡のコメはずんぐり形に近い。

炭　(表3)

他の遺物と異なり炭は分解することが少なく小塊も残存していた。樹種同定のできる大きさのものに限って記した。表中、アラカシを除く全ての樹種は、成育時枯枝ができたり、林内で立枯れることの多い種であるためこれらを多く燃料とし利用したであろうが、炭の観察中、材に穿孔した昆虫(主に甲虫類)の孔道・糞・時に遺体が観察されたことも枯木であった裏付けとなる。アラカシは生育時枯枝の比較的少ない樹種であるがこれのみられたことは、種子の項で記した常緑広葉樹現生分布の裏付けとなり比較の上で興味深い。

木本　(表4)

木本類は分解がはげしく、残存はほとんどなかったが、アラカシの含まれていたことに注目したい。別に栗毛坂遺跡出土のナラ及びスギがあるが、クヌギ・ナラ類は栗毛坂遺跡群一帯の優位分布樹木であったようであり、現在も残存点在している。

草本　(表5)

草本類は最も早期に分解するものであるが、表中のものは炭化していたがため残存したものである。SB—08のものは、湿地に保存されていたため例外的に保存よく出土したものである。ヨシ・ツルヨシ・ススキなどは現在も佐久地方に広く分布する植物であるが、ススキについては観察できなかったことに疑問を感ずる。またイネはエイ及びわらが羽口をつくるための粘土中に混入されていたのは興味深かった。

表1　骨

遺跡名	出土地	種名	部位・点数( )	出土状況・補説
吹付(DFT)	5号住居址	シカ	部位不明・脚骨の直部片(1)	長芋栽培跡のトレンチ内より出土。
	II—Z	ウマ	腦骨(1)　股骨(2)　脛骨(2) 跗前骨(2)ほか	覆土の上部層より後脚2足分重なって出土。
大星尻(DOB)	SM-01	ウマ	後脚脛骨近部片(1)	覆土中より出土、全長約21cm。
北山寺(DKY)	1号土坑	鳥類	部位不明の直骨片(1)	II層上部より出土、全長18cm。
栗毛坂(DKG)	B-12住居址	不明	海綿骨の塊(1)	外骨質部は消失直径2cm位の塊、ウマの関節部位か？
	B-18住居址	ウマ	歯破片(22)	臼歯と思われる破片、復元不可能の状態
	B-24住居址	不明	部位不明の直骨片	カマド部分V層中より一部は粉状化し土に混入し出土。
BはB地区 CはC地区	B-38住居址	ウマ	臼歯(2)	完形1、他は一部欠損して出土。
	B-38住居址	不明	小獣骨の直骨片(1)	南ベルト付近より出土、長さ約2cm。
	B-43住居址	ウマ	股骨遠部片(1)	II層上部より出土、長さ約18cm。
	B-130住居址	ウマ	臼歯(4)	覆土III層中より出土、1歯は完形他は一部欠損部あり。
	B-43溝	ウマ	臼歯(2)	欠損部あり。
	B-48土坑	不明	脚骨、関節部に近い直骨片(1)	分解が進み細片化状態、長さ約6cm。
	B-48土坑	シカ	脚骨・直骨片(1)	
	B-554土坑	不明	頭蓋骨片	約18cm²
	B-Z	シカ	角上段又部片(1)、付随破片(5)	分解が進み判定困難と思われたものを復元し判別。
	C-20住居址	不明	部位不明、半割された直骨片(1) ほか	カマド左袖より出土、焼成により灰白・白色化している義長骨片約6cm
	IIU-Z	ウマ	臼歯(3)	田切地形の黒色土層中より出土、一部欠損部あり。
	IIU-Z	ウマ	臼歯(1)	ID層より出土、半割片。

表2　種子

遺跡名	出土地	種名個数（ ）	出土状況・補説
吹付 (DFT)	RH-19	モモ（1）	II層中より出土、大粒の種。
大星尻 (DOB)	MS-02	オオムギ（2）	古墳の木棺内より出土。
栗毛坂 (DKG)	B-38住居址	スモモ（6） コウメ（4） モモ（4） オオムギ（少量）	種皮片3と果仁3個 種皮片3と完形1個 種皮片3と完形1個　小粒種 破損
	B-120住居址	オニグルミ（2）	種皮$\frac{1}{2}$片と$\frac{1}{2}$片。
	B-126住居址	オニグルミ（1）	完形
	B-145住居址	シリブカガシ（3） ツブラジイ（12） クヌギ（24） コナラ（3） カシワ（1）	種皮剝落 種皮剝落 3個は$\frac{1}{2}$片地は完形、いずれも種皮剝落 種皮剝落 種皮剝落
	B-147住居址	イネ（米）（200）	焼かれているため変形したものあり、一部種皮付着。
	B-693土坑	イネ（米）（?）	径約4 cmの塊。
	C-09住居址	オニグルミ（2）	種皮小片。
	C-15住居址	モモ（1）	果仁完形。
	C-18住居址	モモ（9） オニグルミ（1）	種皮小片 種皮小片
	C-24住居址	サクラの1種 モモ（1） イネ（米）（7） オニグルミ（3）	完形。 種皮小片。 焼かれているため変形、種皮欠損。 種皮$\frac{1}{2}$片1、小片2個。
	VIIIS-21	オニグルミ（1）	種皮小片。

表3　炭

遺跡名	出土地	種名個数
干草場 (DHK)	SM-01 Z	ケヤキ ケヤキ
腰巻 (DKM)	01住居址 02住居址	コナラ ケヤキ・コナラ
栗毛坂 (DKG)	A- 08住居址 B- 10住居址 B- 11住居址 B- 38住居址 B- 64住居址 B- 65住居址 B-149住居址 B-159住居址 B-189住居址 B- 25土坑 C- 18住居址 C- 19住居址 C- III E06 Z	コナラ コナラ コナラ アカマツ・コナラ アラカシ アラカシ クヌギ・ケヤキ コナラ・ケヤキ・クヌギ ケヤキ ケヤキ コナラ クヌギ アカマツ クリ

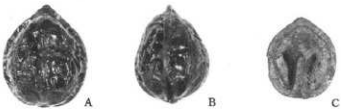
表4　木本

遺跡名	出土地	種名・補説
栗毛坂 (DKG)	A XIR-01 B C IVA-14	ケヤキ ケヤキ：炭化傾向の小片 アラカシ

表5　草本

遺跡名	出土地	種名	補説
栗毛坂 (DKG)	A- 08住居址	エノコログサ・イネ	逆置にされた土器の中にうず巻きにつめられていたもの。
	B- 05住居址	イネ・ムギ	焼土直下の土層中より出土。
	B- 35住居址	イネ	炭化したもの少量。
	B- 37住居址	ツルヨシ	半炭化したもの。
	B- 38住居址	ヨシ	炭化したもの少量。
	B-145住居址	ヨシ	炭化したもの少量。
	C- 24住居址	ヨシ	炭化したもの少量。
	C- 02住居址	ヨシ・イネ	たたき床とされていた炭化物。

ウマの臼歯：×0.56
（栗毛坂Ｂ-38住）



オニグルミ：Ａ―正面・Ｂ―側面・Ｃ―半割内面×１
（Ａ・Ｂ栗毛坂Ｂ-126住、Ｃ栗毛坂Ｃ-24住）

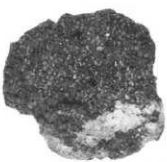
シリブカガシ：×１
（栗毛坂Ｂ-145住）

カシワ：×≒1.0
（栗毛坂Ｂ-145住）

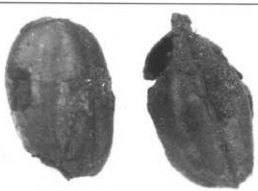
ツブラジイ：≒1.0
（栗毛坂Ｂ-145住）

コナラ：×0.9
（栗毛坂Ｂ-145住）

コウメ：左種皮×１　　右果仁×１
（栗毛坂Ｂ-38住）



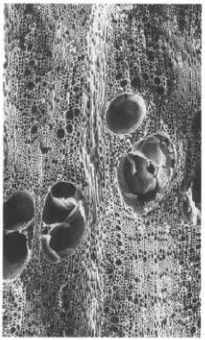
左　ヒエの塊　　右　同粒拡大×≒33
（栗毛坂Ｂ-693坑）

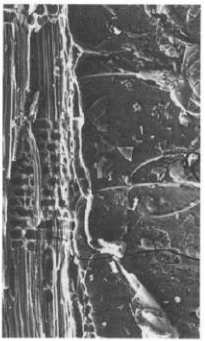


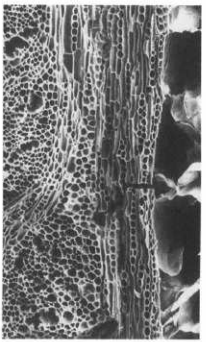
イネ(コメ)、エイの付着したもの：×≒13
（栗毛坂Ｂ-147住）

ヨシ片×１
（栗毛坂Ｂ-145住）

ツルヨシ：×0.85（栗毛板B-37住）



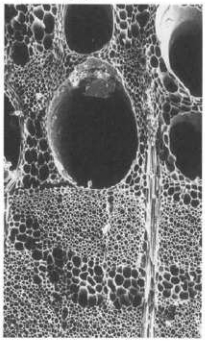




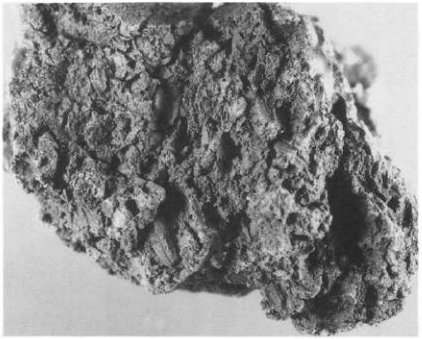
上―コナラ属（腰巻―2住）

下―ケヤキ属（腰巻―2住）

木口　　柾目　　板目

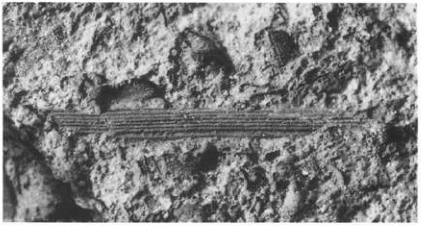


栗毛坂B-35住居址の
床面に敷きつめられた
炭化ワラ（イネ）



栗毛坂B-43溝出土の
羽口の粘土に混入され
たエイ

左：エイ



左：ワラ（イネ）の茎部

第4章　結　語

これまで、上信越自動車道建設に伴って緊急発掘調査を実施した各遺跡の調査成果について述べてきた。各遺跡の総括は第3章各節の「まとめ」に記したとおりであるが、最後に時代別に成果を総合して結語に変えたい。

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構や遺物を確認した遺跡は18遺跡を数え、調査した総遺跡数の8割を占める。山間地での調査が主体であったとはいえ、従来縄文時代遺跡の調査例に乏しかった当地域にあっては、貴重な資料を提供する機会となった。各遺跡の詳細については各節での記述に譲るとして、ここで特記されてよい遺跡を列挙するならば、早期前半の押型文土器を出土した西栁ぶた遺跡や早期後葉のキャンプ址的な生活痕跡を確認した東栁ぶた遺跡、さらには前期末葉～中期前葉にいたる集落外墓域とその遷移を示す丸山遺跡と大星尻古墳群（遺跡）でのあり方、そして何よりも、2軒の柄鏡形敷石住居址を含む中期末葉の集落址を明らかにした吹付遺跡、早期末葉から前期初頭における小形石器製作の様相を明らかにした栗毛坂遺跡A地区がある。また、中期初頃における各種系統土器群が混在する地域的要素を明らかにしえたことや中期後葉における在地土器の抽出とその消長、ならびに、関東地方から流入した土器を加えた本地域での土器群変遷の概要を把握できたことなど遺物についても興味深い内容を提示できたと考えられる。

このほか枚挙にいとまはないが、今回の調査が高速道建設に伴う緊急発掘であったがゆえにさまざまな制約がつきまとい、これら遺構・遺物にはその資料的側面において多くの課題を残している点は否めない。しかしながら、今後各遺跡周辺の学術的意図による調査の拡充や問題意識をもった資料操作がはかられるならば、これら3遺構と遺物もより光り輝くものとなろう。

最後に縄文時代各期の延べ遺跡数を記すならば、早期9遺跡・前期2遺跡・中期12遺跡・後期8遺跡・晩期2遺跡であった。

早期：木戸平A・吹付・上中原・鵜ヲネ・東林・東栁ぶた・西栁ぶた・腰巻・栗毛坂A前期：丸山・栗毛坂A

中期：吹付・上中原・西林・千草場・城の口・東栁ぶた・西栁ぶた・大星尻・丸山II・丸山・腰巻・栗毛坂B

後期：木戸平A・吹付・鵜ヲネ・西林・東栁ぶた・西大久保・腰巻・栗毛坂A・B

晩期：腰巻・栗毛坂A

(2) 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代については、高速道路に絡む調査が山間部、および平地部でも標高700mを越える地点であったため、佐久平で隆盛を誇った該期集落に直面することがなかった。しかしながら、香坂谷北縁一帯の調査によって、断片的資料ながらも多数の遺跡で後期の遺物が採集できたことは、弥生時代人の生活舞台がけっして平地部だけに展開したのではないことを教えてくれた。また、佐久平を東から見下ろす丸山II遺跡の調査では、後期末～古墳時代初頭の住居址2軒を確認することとなり、新たな集落立地を知ることとなった。報分では、世に言う「高地性集落」の可能性を示唆しているが果たしてどうか。正当な評価を下すために、ひたすら類例を期待する。

古墳時代は、湯川沿岸の低位段丘上に営まれた腰巻遺跡と栗毛坂遺跡群A地区で前期集落を、湯川を臨

む高位段丘上の栗毛坂遺跡群B地区で後期後半の集落を発見したことで大きな成果を得た。前者は、前期でも後半から末葉にかけてのものが中心であったが、当地方では遅れがちであった該期土器編年や土器でみる地域色を考える上で、果たす役割は大きいといえる。さらに、佐久平における開発の様子を少なからず指示しているとも取れる状況であった。群しくは、腰巻遺跡の報文（第17節）を参照されたい。後者の調査結果が付与するものとしては、とにもかくにも以後10世紀前半まで存続する、いわば「計画村落」、あるいは「新型集落」とも表現可能な高燥地帯に展開した大規模集落の初現形態が露になったことをまず筆頭に挙げねばなるまい。ただし、歴史学の一分野とされる考古学に従事する立場の者にとって、その成因を究明するのが第一義であるわけだが、これについての考察が、資料的制約から充分押し進められなかった点を最初に反省しておこう。しかし、具体事象によって、古代社会から律令社会へ転換した様相を、集落立地の在り方から推察しえる内容を具備した報告であったと信じて止まない。当然ながら、土器から得る情報も多大であり、佐久平での土器製作技術的「範型」が群馬側のそれに近い状況であったことを見逃すわけにはいかず、首長間レベルでの地域的つながり、あるいは単なる流通機構の問題かも知れないけれども、群馬側との深い関わりを想定せざるを得ない様式内容であったことを付言しておこう。

大星尻古墳群として登録された遺跡からは、古墳時代後期の群集墳と捉えたものであったが、思いもよらず古墳1基を検出するにとどまった。しかも、奈良時代に下る公算が大きいものであった。数々の調査所見を総合すると、風水思想に基づく奈良時代の単独墳であったとみるべきらしい。妥当なら、都の貴人層に受け入れられた葬制が、思いのほか早期の内に地方にも波及していたことになろう。その当否は別としても、佐久地方で古墳を築造しようとする終焉の姿を垣間見ることのできる貴重な調査例であった。佐久地方では初例ということもあり、埋葬観念以外にもいくつかの考察を試みたが、今後の評価の在り方に注目している。

(3) 古墳後期から平安時代

古墳後期から平安時代に相当する遺構や遺物を確認した遺跡は、香坂東地地区の山間部および平根・岩村田地区の平地部（主に台地部）から16遺跡を発見することができた。特に香坂東地・平根地区においては該期遺跡の調査例に乏しかったことから貴重な資料を提供する機会となった。各遺跡の詳細については各説での記述に譲る。ここで時代を通して遺跡を列挙するならば、7世紀後半から、栗毛坂A地区とB地区南端部では従来からの水田耕作を基盤としたと思われる居住形態が認められ、7世紀終わり頃からは新たに台地内に「計画村落」が形成され、奈良時代から平安時代前半（10世紀初め）まで継続された。このことは佐久平北東部の浅間火山の火砕流によって形成されたこの高燥な軽石流堆積物の台地であり、水田経営は困難で畑作を中心とした新たな開発と生産意欲を知ることができる。この開発に乗り出した背後には律令体制の影響が反映されていただろうことも推測させる。

10世紀初め頃それらの集落は終焉を迎え突如としてその姿を消してゆくことが分かった。そして、時を同じくしそれまで営まれた以上の広範な地域に小規模集落が営まれるようになる。香坂東地・平根地区の東祢ぶた・西祢ぶた・丸山・北山寺・腰巻遺跡などは特徴的で、現在でも居住地に適さない山間部や狭小な段丘上に短期小規模集落が形成され始める。この契機となる10世紀初め頃は、従来の国家的土地・人民支配の体制が崩壊してゆく過程で、中央権力から離れた在地勢力・個人による自主的な開発や新たな農民支配の形成に向かう過渡的な社会の様相を反映しているものと解釈された。そうした短期的な小規模集落が中心の中、北山寺遺跡のように9世紀後半から12世紀初めまで継続された、当地方でも類例の少ない遺跡であった。

土器から得る情報も縄文・弥生時代と同様多大であり、古代をとおして在地で使用される甕を群馬県側

と同様なものを使用したり、搬入品なども持ち込まれ、密接な関わりあいがあったことを想定せざるを得ない。また、掘立柱建物址の柱穴の掘り方には、ほかの地方では検出されない「溝持ち」の形態をもつものが存在することからも、いっそう関東との関係をうかがうことができる。社会的には中央の流れに影響され、在地では信濃でありながら関東地方との強い文化的つながりもっていたものと思われる。

(4) 中世

該期の遺構や遺物を確認した遺跡は11遺跡を数え、調査した総遺跡の5割を占める。山間地では遺物がわずかに出土したのみで遺構が検出されたのは4遺跡であった。従来該期の調査例に乏しかった当地域にあっては、貴重な資料を提供する機会となった。貴重な資料を各遺跡の詳細については各節での記述に譲るとして、13～14世紀以降詳細な時期は不確定だが遺構・遺物が検出された栗毛坂遺跡群では古代までの生活空間とは異なり、遺構から一つの屋敷を意識した配置がなされていることが分かり、また、溝によって土地が区画されていた様子が。佐久インターチェンジが建設予定される仙禄湖周辺の栗毛坂遺跡群C地区・西赤座遺跡・枇杷坂遺跡群からは13～14世紀の遺物が広範囲に出土し鎌倉時代頃にこの付近が集落域であったことが予想された。15・16世紀では腰巻・北山寺遺跡など平根地区に所在した該期の白岩城・平尾城との関連が予想される堀や足軽程度の住居址が検出された。

(5) 近世

近世関連では、干草場遺跡と大星尻古墳群内に築かれた墳墓2基を検出した。霊場として知られる開伽流山の麓に位置するためか、ともに修行僧にまつわる可能性が高い内容を示す埋蔵物であったが、類例が少ない今、ことさら重要視されるべき調査であったといえよう。

本書の刊行をもって下茂内遺跡を除く第8次施行命令区間（群馬県境～佐久I・C）の22遺跡すべてを調査終了することができ、遺跡は佐久市北東部の歴史と生活を知るうえで、貴重な資料をわたくしたちに提示してくれた。発掘調査・整理作業をとうし充分な調査・評価を下せたのか不安と反省は尽きないし、22遺跡を合本にしたため用語統一をはかったが、言い回しなど多少異なる点があるかと思われるが、各々筆者の努力と思いがあるため詳細については御了承願いたい。

今回の整理作業では中途に並行して新たな発掘調査や他事務所への応援派遣発掘など、発掘調査を優先する機運があり一部で大幅に停滞した。今まで中央自動車道・長野自動車道など近代交通網化と引き換えに多くの遺跡を発掘調査し、そして、今後も新幹線建設が決定されようとしていることから、調査面積の大幅な増大が予想されている。今後は今までの成果を生かし、充分な発掘・整理を考慮した調査体制が必須と思われることから、今後もより努力してゆきたい。

文末ながら発掘調査において、酷暑・酷寒の日々真摯な姿勢で調査に当たって下さった地域の方々と膨大な資料の整理にあたって下さった方々の力があったからこそ本報告書は刊行できたものと、改めて感謝するしだいである。

発掘調査・整理作業担当者一覧

遺跡名		整理担当者	発掘調査者 (◎ 現場担当者)
木戸平A		百瀬忠幸	◎河西克造・伊藤隆之・奥水太仲・新海節生
欽付		百瀬忠幸	◎河西克造・伊藤隆之・宇賀神誠司・奥水太仲・新海節生・百瀬忠幸
上中原		新海節生	◎河西克造・伊藤隆之・奥水太仲・新海節生
鵜ヲ木		新海節生	◎河西克造・伊藤隆之・奥水太仲・新海節生
東林		新海節生	◎河西克造・伊藤隆之・奥水太仲・新海節生
西林		宇賀神誠司	◎宇賀神誠司・伊藤隆之・近藤尚義・新海節生
千草場		宇賀神誠司	◎白田武正・木内行雄・小平恵一・小林秀行・中野亮一・中浜 徹・二木 明・和田文人
城の口		宇賀神誠司	◎白田武正・木内行雄・小平恵一・小林秀行・中野亮一・中浜 徹・二木 明・和田文人 ◎宇賀神誠司・伊藤隆之・近藤尚義・新海節生
東裏ぶた		百瀬忠幸	◎百瀬忠幸・黒岩龍也・高田 実・寺島俊郎・馬場長光・降旗史敬・山上秀樹
西裏ぶた		岡村秀雄	◎河西克造・井上城典・岡村秀雄・豊田伸一・吉沢信幸
大星尻古墳群		百瀬忠幸	◎百瀬忠幸・宇賀神誠司・三石俊司・山上秀樹
丸山古墳群・II		宇賀神誠司	◎宇賀神誠司・伊藤隆之・近藤尚義・新海節生
丸山		寺島俊郎	◎寺島俊郎・下島章裕・中野亮一・降旗史敬
北山寺		寺島俊郎	◎寺島俊郎・下島章裕・中野亮一・降旗史敬
東大久保		寺島俊郎	◎寺島俊郎・下島章裕・中野亮一・降旗史敬
西大久保		寺島俊郎	◎寺島俊郎・小平恵一・小林秀行・高田 実
腰巻		寺島俊郎	◎寺島俊郎・小平恵一・小林秀行・高田 実（1次） ◎寺島俊郎・下島章裕・中野亮一・降旗史敬（2次）
栗毛坂	A	宇賀神誠司	◎宇賀神誠司・伊藤隆之・近藤尚義・新海節生
	B	岡村秀雄 寺島俊郎	◎寺島俊郎・井上城典・岡村秀雄・河西克造・黒岩龍也・豊田伸一・馬場長光・降旗史敬・百瀬忠幸・山上秀樹・吉沢信幸（1次） ◎河西克造・井上城典・岡村秀雄・木内行雄・黒岩龍也・豊田伸一・馬場長光・二木 明・中浜 徹・降旗史敬・百瀬忠幸・山上秀樹・吉沢信幸・和田文人（2次） ◎岡村秀雄・井上城典・木内行雄・高田 実（3次）
	C	岡村秀雄 寺島俊郎	◎白田武正・寺島俊郎・馬場長光・二木 明・山上秀樹（1次） ◎白田武正・木内行雄・小平恵一・小林秀行・中野亮一・中浜 徹・二木 明・和田文人（2次） ◎岡村秀雄・井上城典・木内行雄・高田 実（3次）
西赤座		岡村秀雄	◎白田武正・木内行雄・和田文人・中浜 徹・二木 明・中野亮一・小林秀行・小平恵一（1次） ◎岡村秀雄・井上城典・木内行雄・高田 実（2次） ◎岡村秀雄・百瀬忠幸（3次）
中久保田		岡村秀雄	◎岡村秀雄・井上城典・木内行雄・高田 実（2次）
枇杷板		岡村秀雄	◎白田武正・中浜 徹・二木 明・中野亮一・和田文人（1次） ◎岡村秀雄・井上城典・木内行雄・高田 実（2次）

（五十音順）

整理および執筆等の分担一覧（五十音順）

1　執筆担当一覧

宇賀神誠司　第３章第６～８節、
　〃　第11節４(2)～(5)、５(3)・(4)
　〃　第12節
　〃　第17節４(2)ア（遺物・時期）・エ、５
　〃　第18節ⅰ(1)・(2)ア・イ、(3)、ⅱ(3)（遺物の時期）、(4)（古墳時代の遺物・時期）

岡村秀雄　第１章第３節４(1)・(2)、(3)イ
　第３章第２節４ⅰ(1)（石器）、キ3)、４ⅱ(2)ウ
　〃　第８節３（石器）
　〃　第10節（寺島執筆分を除く）
　〃　第12節４ウ（大形石器）、
　〃　第13節４(1)（大形石器）
　〃　第14節４(2)・(3)（石製品）
　〃　第15節４ウ（石器）
　〃　第17節４イ石器（打製石斧～）
　〃　第18節４（A地区を除く）、ⅰ(2)エ石器（大形剥片石器～礫器）、ⅱ(1)～(3)、(4)・(5)（遺構）、ⅲ(1)・(2)（遺構）、５(3)・(4)
　〃　第19節（寺島の執筆分を除く）
　〃　第20節
　〃　第21節（寺島の執筆分を除く）

小口　徹　第２章第１節

小林秀行　第１章第２節

興水太伸　第３章第22節

近藤義尚　第３章第18節４（A地区）
　〃　第18節ⅰ(2)エ土器（前期後半～前期末から中期初頭）

新海節生　第２章第２節
　第３章第３～５節
　〃　第９節４(1)・(2)（石器）
　〃　第11節４(1)（石器）
　〃　第13節４(1)（小形石器）
　〃　第14節４(1)
　〃　第17節４(1)イ石器（石鏃～ピエス・エスキーユ）
　〃　第18節ⅰ(2)ウ・エ石器（岡村執筆分を除く）

田中正治郎　第３章第18節５(2)

寺島俊郎　第１章第１節、
　〃　第３節１～３、４(3)ウ・エ
　第３章第２節４ⅰ(1)ク
　〃　第９節４(3)ア（遺物・時期）
　〃　第10節４ア（遺物・時期）
　〃　第13節（岡村・新海・石瀬の執筆分を除く）
　〃　第14節（岡村・新海の執筆分を除く）
　〃　第15節（岡村の執筆分を除く）
　〃　第16節（石瀬の執筆分を除く）
　〃　第17節（宇賀神・岡村・新海・西瀬の執筆分を除く）
　〃　第18節Ⅰ～３、ⅱ(4)・(5)（奈良時代以降の遺物・時期）、ⅲ(2)（遺物・時期）、５(1)、６
　〃　第19節４(1)（土器・鉄器）
　〃　第21節４(1)ア（遺物・時期）
　第４章

百瀬忠幸　第1章第3節4(3)ア
第3章第1節
〃　第2節（岡村・寺島・執筆分を除く）
〃　第9節（岡村・新海・寺島の執筆分を除く）
〃　第11節（宇賀神の執筆分を除く）
〃　第13節4(1)（土器）
〃　第16節4（縄文土器）
〃　第17節4(1)イ（土器・土製品）
〃　第18節i(2)エ土器（早期後半～前期前半・中期後葉・晩期末葉）

2　その他
遺物写真撮影・焼き付け、遺構写真焼き付け　奥水太仲
木製品・金属製品保存処理　奥水太仲
編　集　寺島俊郎

（財）長野県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書12

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2

―佐久市内その2―

木戸平A・吹付・東林・鶏ヲネ・上中原・干草場
城の口・西林・東祢ぶた・西祢ぶた・大星尻古墳群
丸山古墳群・丸山II・丸山・北山寺・東大久保
西大久保・腰巻・栗毛坂・西赤座・中久保田・枇杷坂

本　文　編

発　行　平成3年3月31日発行
発行者　日本道路公団東京第二建設局
長野県教育委員会
（財）長野県埋蔵文化財センター
印刷　電算印刷株式会社